

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 440 集

上ノ平 I 遺跡(1)

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1. 調査区空撮写真



2. 31号住居



3. 13号住居



1. 31号住居出土土器



2. 18号住居出土土器



3. 遺跡内出土土器

序

ハツ場ダムは、首都圏の利水および治水を主な目的とし、群馬県と長野県との境を源とする吾妻川の中流に建設される多目的ダムです。

このハツ場ダム建設事業に伴う発掘調査は平成6年度から開始されました。現在までに、長野原町の川原畑・川原湯・横壁・林・長野原の5地区、および東吾妻町の三島地区内において、先人達の連綿たる営みの痕跡が確認されております。

本報告書では、平成18年度に発掘調査された上ノ平Ⅰ遺跡を扱います。今回の遺跡の調査により、縄文時代中期を中心とした竪穴住居跡、弥生時代の包含層、平安時代の竪穴住居跡と古代を中心時期とする陥し穴、近世の墓坑群など、それぞれの時代で特徴的な資料を得ることができました。

このことにより、本遺跡は、吾妻川の左岸上位段丘面の山間地にありながらも、数千年も前から現在に至るまで、湧水に恵まれた居住適地であることがわかりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省はもとより、群馬県教育委員会、長野原町教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆様から多大なるご尽力とご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げますとともに、本報告書が広く歴史資料として活用されることを願い、序といたします。

平成20年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

- 1 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴う上ノ平Ⅰ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
調査原因は川原畑地区代替地造成工に伴う発掘調査である。
- 2 遺跡の呼称及び所在地
上ノ平Ⅰ遺跡（うへのたいらいちいせき）
群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑278番地ほか
- 3 事業主体
国土交通省
- 4 調査主体
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査及び整理作業の期間・組織
発掘調査 〈平成18年度〉
期 間 平成18年4月1日～平成18年12月28日
管理・指導 高橋勇夫 木村裕紀 津金澤吉茂 西田健彦 萩原 勉 巾 隆之 佐藤明人
事務担当 吉田有光 笠原秀樹 須田朋子 今泉大作 栗原幸代
石井 清 斉藤恵利子 佐藤聖行 柳岡良宏
若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 内山佳子 狩野真子 鈴木理佐
調査担当 中沢 悟（4～12月） 瀧川仲男（4～8月） 篠原正洋（9～12月）
整理作業 〈平成19年度〉
期 間 平成19年4月1日～平成20年3月31日
管理・指導 高橋勇夫 木村裕紀 津金澤吉茂 萩原 勉 佐藤明人 中東耕志
事務担当 笠原秀樹 須田朋子 矢島一美 斉藤陽子
石井 清 斉藤恵利子 柳岡良宏 吉田有光 若林正人 鈴木理佐
若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 狩野真子 武藤秀典
整理担当 瀧川仲男
整理補助 鹿沼敏子 渡部あい子 大塚とし子 矢島三枝子 小金澤たみ子
遺物写真撮影 佐藤元彦
金属器保存処理 関 邦一 小村浩一 森田智子 津久井桂一 多田ひさ子
機械実測 田中精子 福島瑞希 田所順子 伊藤博子 岸 弘子
- 6 報告書作成関係者
本書編集 瀧川仲男
本文執筆 篠原正洋（第1章 瀧川仲男との共著）
中沢 悟（第2章5節1項の1号住居、9号住居、13号住居）
橋崎修一郎（第2章6節1項、付編：自然科学分析）
神谷佳明（第3章1節）
高島英之（第3章2節）
麻生敏隆（第3章3節）
上記以外は、瀧川仲男が執筆した。
遺物観察・計測 縄文土器観察表作成 小野和之、原 雅信、瀧川仲男
弥生土器観察表作成 大木紳一郎、瀧川仲男
土師器・須恵器観察表作成 神谷佳明、瀧川仲男
石器観察表作成 麻生敏隆、瀧川仲男
上記以外は、瀧川仲男が作成した。
石材鑑定 飯島静男 麻生敏隆
人骨写真撮影 橋崎修一郎
その他 1. 遺物分類及び選定等に際しては、藤巻幸男、原 雅信、小野和之、大木紳一郎、飯田陽一、神谷佳明、高島英之、大西雅広、徳江秀夫、麻生敏隆、笹澤泰史に指導・助言を頂いた。
2. 第1章については、隣接した遺跡地であることと同一機関での調査であることから、既刊の2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』第401集をベースにして執筆した。

7 発掘調査及び整理事業での委託関係

埋蔵文化財遺跡掘削工事 株式会社 歴史の社
遺構測量及び空中写真撮影 株式会社 測研
土器実測・トレースの一部 有限会社 毛野考古学研究所
石器実測・トレースの一部 株式会社 測研

8 出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

9 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご指示・ご指導を頂いた。

記して感謝の意を表したい。(敬称略)

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所 群馬県教育委員会文化課 長野原町教育委員会
白石光男 富田孝彦 福田貫之

凡 例

1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

本書で使用する測量図の座標はすべて2002年4月改正前の日本測地系を用いている。

2 遺構図及び遺物図には該当箇所にスケールを、或いは()で縮尺を掲載した。原則下記の通りである。

また、遺物写真と遺物図とは同縮率を原則とした。

〈遺構〉	トレンチ配置図	1:800	遺構全体図	1:1200	調査区別全体図	1:400
	住居跡	1:60	炉・カマド	1:30	埋設土器	1:60
	土坑	1:60	墓坑	1:20		
〈遺物〉	打製石鏃・銭貨等					1:1
	石匙・石核・砥石・刀子・キセル・釘等					1:2
	打製石斧・磨製石斧・すり石・たたき石					1:3
	くぼみ石・羽口・土器片等					1:3
	縄文土器個体・甕・羽釜・石皿					1:4
	大型縄文土器個体					1:6 1:8

3 遺構図中のスクリーントーンは図中に説明があるので、それを参照していただきたい。

遺物図中のスクリーントーンは、以下の通りである。



灰核陶器地輪範囲



縄文土器断面に織線

4 遺構図中及び遺物写真における遺物番号は、遺物実測図と一致する。

また、遺構平面図及び断面図内の・は土器の出土位置を表している。

5 計測値は、欠損品の数値の場合には推定値には()を、実残存値には<>を付して完形品と区別した。

また、土器の計測値では、口径を口; 底径を底; 器高を高; と省略して記載した。

6 原稿中のビットなどの規模は、(長径×短径×深さ×厚さ)を表し、断りがない限り単位はcmである。

7 色調は、『新版標準土色帖』を参考に色名を決定した。

目 次

口絵	
序	
例言	
凡例	
目次・挿図目次・表目次・写真図版目次	
抄録	
第1章 上ノ平Ⅰ遺跡の発掘調査	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の方法	2
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 地理的環境	3
第5節 歴史的環境	4
第2章 検出された遺構と遺物	
第1節 基本土層	10
第2節 遺構・遺物の概要	11
第3節 縄文時代	17
第1項 竪穴住居跡	23
第2項 埋設土器	58
第3項 土坑	59
第4項 遺構外出土遺物	61
第4節 弥生時代	72
第5節 平安時代	73
第1項 竪穴住居跡	73
第2項 土坑	105
第3項 遺構外出土遺物	128
第6節 中・近世	130
第1項 土坑(墓坑)	130
第2項 土坑	140
第3項 遺構外出土遺物	141
第3章 調査の成果とまとめ	
第1節 上ノ平Ⅰ遺跡出土の灰軸陶器について	142
第2節 上ノ平Ⅰ遺跡出土の黒書土器について	146
第3節 上ノ平Ⅰ遺跡の縄文時代の石器について	148
第4節 まとめと今後の課題	150
付編 自然科学分析	
上ノ平Ⅰ遺跡出土人骨	151
遺物観察表	181
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 周辺道線図及び地形図	5	第57図 縄文遺構外出土遺物(5)	65
第2図 道路位置図	9	第58図 縄文遺構外出土遺物(6)	66
第3図 基本土層	10	第59図 縄文遺構外出土遺物(7)	67
第4図 上ノ平1遺跡調査区トレンチ配置図	11	第60図 縄文遺構外出土遺物(8)	68
第5図 上ノ平1遺跡調査区全体図	12	第61図 縄文遺構外出土遺物(9)	69
第6図 B区全体図	12	第62図 縄文遺構外出土遺物(10)	70
第7図 A区全体図	13	第63図 縄文遺構外出土遺物(11)	71
第8図 C区全体図	14	第64図 弥生土器	72
第9図 遺物展間図(1)	17	第65図 1号住居跡	74
第10図 遺物展間図(2)	18	第66図 1号住居跡出土遺物(1)	75
第11図 遺物展間図(3)	19	第67図 1号住居跡出土遺物(2)	76
第12図 遺物展間図(4)	20	第68図 2号住居跡・出土遺物	77
第13図 遺物展間図(5)	21	第69図 4号住居跡(1)	78
第14図 遺物展間図(6)	22	第70図 4号住居跡(2)・出土遺物	79
第15図 3号住居跡	23	第71図 5号住居跡・出土遺物	80
第16図 3号住居跡出土遺物(1)	24	第72図 6号住居跡・出土遺物	81
第17図 3号住居跡出土遺物(2)	25	第73図 8号住居跡(1)	82
第18図 7号住居跡出土遺物	25	第74図 8号住居跡(2)	83
第19図 7号住居跡	26	第75図 8号住居跡(3)・出土遺物	84
第20図 10号住居跡	27	第76図 9号住居跡	86
第21図 10号住居跡出土遺物(1)	28	第77図 9号住居跡遺物出土状態	87
第22図 10号住居跡出土遺物(2)	29	第78図 9号住居跡出土遺物	88
第23図 18号住居跡	30	第79図 11号住居跡・出土遺物	89
第24図 18号住居跡遺物出土状態・出土遺物(1)	31	第80図 12号住居跡	90
第25図 18号住居跡出土遺物(2)	32	第81図 12号住居跡出土遺物	91
第26図 18号住居跡出土遺物(3)	33	第82図 13号住居跡(1)・炭化材出土状態	92
第27図 24号住居跡	34	第83図 13号住居跡(2)	93
第28図 24号住居跡出土遺物	35	第84図 13号住居跡(3)・遺物出土状態	94
第29図 26号住居跡	36	第85図 13号住居跡出土遺物(1)	95
第30図 26号住居跡出土遺物	37	第86図 13号住居跡出土遺物(2)	96
第31図 28号住居跡遺物出土状態	38	第87図 14号住居跡(1)	96
第32図 28号住居跡	39	第88図 14号住居跡(2)・出土遺物	97
第33図 28号住居跡出土遺物(1)	40	第89図 15号住居跡・出土遺物	98
第34図 28号住居跡出土遺物(2)	41	第90図 16号住居跡出土遺物	99
第35図 31号住居跡遺物出土状態	43	第91図 16号住居跡	100
第36図 31号住居跡	44	第92図 22号住居跡(1)	101
第37図 31号住居跡出土遺物(1)	45	第93図 22号住居跡(2)・遺物出土状態	102
第38図 31号住居跡出土遺物(2)	46	第94図 22号住居跡出土遺物	103
第39図 31号住居跡出土遺物(3)	47	第95図 20号住居跡・出土遺物	104
第40図 31号住居跡出土遺物(4)	48	第96図 平安時代の土坑(1)	106
第41図 31号住居跡出土遺物(5)	49	第97図 平安時代の土坑(2)	107
第42図 31号住居跡出土遺物(6)	50	第98図 平安時代の土坑(3)	108
第43図 31号住居跡出土遺物(7)	51	第99図 平安時代の土坑(4)	109
第44図 31号住居跡出土遺物(8)	52	第100図 平安時代の土坑(5)	110
第45図 34号住居跡・出土遺物	53	第101図 平安時代の土坑(6)	111
第46図 36号住居跡遺物出土状態	54	第102図 平安時代の土坑(7)	112
第47図 36号住居跡	55	第103図 平安時代の土坑(8)	113
第48図 36号住居跡出土遺物(1)	56	第104図 平安時代の土坑(9)	114
第49図 36号住居跡出土遺物(2)	57	第105図 平安時代の土坑(10)	115
第50図 1～3号埋設土器	58	第106図 平安時代の土坑(11)	116
第51図 縄文時代の土坑	59	第107図 平安時代の土坑(12)	117
第52図 縄文時代の土坑出土遺物	60	第108図 平安時代の土坑(13)	118
第53図 縄文遺構外出土遺物(1)	61	第109図 平安時代の土坑(14)	119
第54図 縄文遺構外出土遺物(2)	62	第110図 平安時代の土坑(15)	120
第55図 縄文遺構外出土遺物(3)	63	第111図 平安時代の土坑(16)	121
第56図 縄文遺構外出土遺物(4)	64	第112図 平安時代の土坑(17)	122

第113図 平安時代の土坑 (18).....	123	第122図 土坑(墓坑) (2).....	134
第114図 平安時代の土坑 (19).....	124	第123図 土坑(墓坑) (3).....	135
第115図 平安時代の土坑 (20).....	125	第124図 土坑(墓坑) (4).....	136
第116図 平安時代の土坑 (21).....	126	第125図 土坑(墓坑)出土遺物 (1).....	137
第117図 平安時代の土坑 (22).....	127	第126図 土坑(墓坑)出土遺物 (2).....	138
第118図 平安時代の土坑出土遺物.....	127	第127図 土坑(墓坑)出土遺物 (3).....	139
第119図 平安時代遺構外出土遺物 (1).....	128	第128図 中・近世土坑 (1).....	140
第120図 平安時代遺構外出土遺物 (2).....	129	第129図 中・近世土坑 (2).....	141
第121図 土坑(墓坑) (1).....	133	第130図 中・近世以降遺構外出土遺物.....	141

表 目 次

第1表 周辺道路一覧.....	8
第2表 住居一覧.....	15
第3表 土坑一覧.....	15

写 真 図 版 目 次

口絵 1

1. 調査区空撮写真
2. 31号住居
3. 13号住居

口絵 2

1. 31号住居出土土器
2. 18号住居出土土器
3. 遺跡内出土土器

P L 1

1. 遺跡遠景(対岸から)
2. 調査区全景(南西から)
3. 調査区全景(北東から)
4. A区全景(北西から)
5. B区全景(南西から)
6. C区全景(南から)
7. 旧石器試掘トレンチ(南から)
8. 2次調査部分(西から)

P L 2

1. 3号住居遺物出土状態(南から)
2. 3号住居床礎化範囲(東から)
3. 3号住居跡全景(南から)
4. 3号住居跡掘り方断面
5. 7号住居遺物出土状態(南から)
6. 7号住居全景(南から)
7. 10号住居断面(北西から)
8. 10号住居北側全景(北東から)

P L 3

1. 10号住居南側遺物出土状態
2. 10号住居全景(南東から)
3. 10号住居跡全景(南東から)
4. 10号住居掘り方全景

P L 4

1. 24号住居遺物出土状態
2. 24号住居跡断面(北東から)
3. 26号住居遺物出土状態
4. 26号住居全景(南東から)
5. 26号住居跡掘り方断面
6. 28号住居断面(南西から)
7. 28号住居遺物出土状態
8. 28号住居作業風景

P L 5

1. 28号住居ピット7断面
2. 28号住居全景(南東から)
3. 28号住居石囲い施設
4. 28号住居跡全景
5. 28号住居掘り方全景(南東から)
6. 28号住居の玉石
7. 31号住居断面(南西から)
8. 31号住居遺物出土状態(1)

P L 6

1. 31号住居遺物近探(1)
2. 31号住居遺物近探(2)
3. 31号住居遺物出土状態(2)
4. 31号住居全景(南東から)
5. 31号住居跡全景(南東から)
6. 34号住居遺物出土状態
7. 34号住居全景(南東から)
8. 34号住居跡断面(北東から)

P L 7

1. 34号住居跡全景(南東から)
2. 36号住居上面遺物出土状態
3. 36号住居遺物出土状態(南東から)
4. 36号住居全景(南東から)
5. 36号住居跡全景(南東から)
6. 1号埋設土器断面(南から)
7. 2号埋設土器全景(南から)
8. 3号埋設土器断面(南から)

P L 8

1. 82号土坑遺物出土状態
2. 81号土坑遺物出土状態
3. 98号土坑遺物出土状態
4. 101号土坑全景(南から)
5. 176号土坑全景(南東から)
6. 187号土坑全景(南東から)
7. 102号土坑全景・断面
8. 109号土坑全景・断面
9. 170号土坑全景・断面
10. 188号土坑全景・断面
11. 190号土坑全景・断面
12. 191号土坑全景・断面

P L 9

1. 1号住居遺物出土状態(西から)
2. 1号住居竈座状態
3. 1号住居遺物出土状態
4. 1号住居全景(西から)
5. 1号住居カマド全景
6. 1号住居カマド掘り方断面
7. 2号住居断面(南から)
8. 2号住居遺物出土状態(南から)

P L 10

1. 2号住居全景(南から)
2. 2号住居カマド断面(南から)
3. 4号住居断面(南東から)
4. 4号住居遺物出土状態(南から)
5. 4号住居全景(南から)
6. 4号住居カマド(南から)
7. 5号住居検出状態(南東から)
8. 5号住居カマド全景

P L 11

1. 5号住居カマドと52号土坑断面
2. 5号住居と47号土坑の新旧関係
3. 5号住居カマド遺物出土状態
4. 5号住居掘り方全景(南東から)
5. 6号住居断面(東から)
6. 6号住居全景(南から)
7. 6号住居と40号土坑の新旧関係
8. 6号住居貯蔵穴断面

P L 12

1. 6号住居カマド全景(西から)
2. 8号住居全景(南西から)
3. 8号住居カマド遺物出土状態
4. 8号住居カマド全景(南西から)
5. 8号住居貯蔵穴全景(南西から)
6. 8号住居掘り方全景(南西から)
7. 9号住居遺物出土状態
8. 9号住居遺物出土状態(掘り口)

P L 13

1. 9号住居遺物出土状態(鎌)
2. 9号住居カマド部材崩落状態
3. 9号住居カマド全景(南西から)
4. 9号住居貯蔵穴遺物出土状態
5. 11号住居遺物出土状態
6. 11号住居カマド遺物出土状態
7. 11号住居カマド前遺物出土状態
8. 11号住居床断面

P L 14

1. 11号住居掘り方全景(北西から)
2. 12号住居遺物出土状態
3. 12号住居全景(南西から)
4. 12号住居カマド遺物出土状態
5. 12号住居カマド全景(南西から)
6. 13号住居遺物出土状態
7. 13号住居炭化材出土状態
8. 13号住居全景(南西から)

P L 15

1. 13号住居ベット1断面
2. 13号住居カマド遺物出土状態
3. 13号住居カマド掘り方全景
4. 14号住居全景(南西から)
5. 14号住居カマド断面
6. 15号住居遺物出土状態
7. 15号住居カマド全景(南西から)

8. 16号住居遺物出土状態

P L 16

1. 16号住居全景(南東から)
2. 16号住居カマド全景(南東から)
3. 22号住居全景(南東から)
4. 22号住居カマド遺物出土状態
5. 22号住居貯蔵穴全景(南から)
6. 22号住居カマド全景(南東から)
7. 30号住居遺物出土状態
8. 30号住居全景(南東から)

P L 17

1. 10号土坑全景・断面
2. 15号土坑全景・断面
3. 17号土坑全景・断面
4. 18号土坑全景・断面
5. 19号土坑全景・断面
6. 21号土坑全景・断面
7. 22号土坑全景・断面
8. 23号土坑全景・断面
9. 24号土坑全景・断面

P L 18

1. 25号土坑全景・断面
2. 26号土坑全景・断面
3. 27号土坑全景・断面
4. 28号土坑全景・断面
5. 29号土坑全景・断面
6. 30号土坑全景・断面
7. 32号土坑全景・断面
8. 33号土坑全景・断面
9. 34号土坑全景・断面

P L 19

1. 35号土坑全景・断面
2. 37号土坑全景・断面
3. 38号土坑全景・断面
4. 39号土坑全景・断面
5. 40号土坑全景・断面
6. 47号土坑全景・断面
7. 48号土坑全景・断面
8. 49号土坑全景・断面
9. 50号土坑全景・断面

P L 20

1. 51号土坑全景・断面
2. 52号土坑全景・断面
3. 53号土坑全景・断面
4. 54号土坑全景・断面
5. 55号土坑全景・断面
6. 58度土坑全景・断面
7. 59号土坑全景・断面
8. 60号土坑全景・断面
9. 62号土坑全景・断面

P L 21

1. 64号土坑全景・断面

2. 65号土坑全景・断面
3. 66号土坑全景・断面
4. 67号土坑全景・断面
5. 68号土坑全景・断面
6. 69号土坑全景・断面
7. 70号土坑全景・断面
8. 71号土坑全景・断面
9. 75号土坑全景・断面

P L 22

1. 76号土坑全景・断面
2. 78号土坑全景・断面
3. 79号土坑全景・断面
4. 80号土坑全景・断面
5. 84号土坑全景・断面
6. 85号土坑全景・断面
7. 86号土坑全景・断面
8. 88号土坑全景・断面
9. 89号土坑全景・断面

P L 23

1. 90号土坑全景・断面
2. 91号土坑全景・断面
3. 94号土坑全景・断面
4. 95号土坑全景・断面
5. 96号土坑全景・断面
6. 97号土坑全景・断面
7. 99号土坑全景・断面
8. 100号土坑全景・断面
9. 105号土坑全景・断面

P L 24

1. 106号土坑全景・断面
2. 107号土坑全景・断面
3. 108号土坑全景・断面
4. 122号土坑遺物・断面
5. 125号土坑全景・断面
6. 129号土坑全景・断面
7. 130号土坑全景・断面
8. 131号土坑全景・断面
9. 132号土坑全景・断面

P L 25

1. 133号土坑全景・断面
2. 134号土坑全景・断面
3. 136号土坑全景・断面
4. 139号土坑全景・断面
5. 140号土坑全景・断面
6. 141号土坑全景・断面
7. 142号土坑全景・断面
8. 143号土坑全景・断面
9. 144号土坑全景・断面

P L 26

1. 145号土坑全景・断面
2. 146号土坑全景・断面
3. 148号土坑全景・断面
4. 149号土坑全景・断面

5. 150号土坑全景・断面
6. 151号土坑全景・断面
7. 152号土坑全景・断面
8. 153号土坑全景・断面
9. 154号土坑全景・断面
- P L 27
1. 156号土坑全景・断面
2. 157号土坑全景・断面
3. 158号土坑全景・断面
4. 159号土坑全景・断面
5. 160号土坑全景・断面
6. 161号土坑全景・断面
7. 162号土坑全景・断面
8. 163号土坑全景・断面
9. 164号土坑全景・断面
- P L 28
1. 165号土坑全景・断面
2. 166号土坑全景・断面
3. 167号土坑全景・断面
4. 168号土坑全景・断面
5. 169号土坑全景・断面
6. 172号土坑全景・断面
7. 173号土坑全景・断面
8. 174号土坑全景・断面
9. 175号土坑全景・断面
- P L 29
1. 179号土坑全景・断面
2. 180号土坑全景・断面
3. 181号土坑全景・断面
4. 182号土坑全景・断面
5. 183号土坑全景・断面
6. 184号土坑全景・断面
7. 185号土坑全景・断面
8. 186号土坑全景・断面
9. 189号土坑全景・断面
- P L 30
1. 61号土坑全景・断面
2. 77号土坑全景・断面
3. 92号土坑全景・断面
4. 93号土坑全景・断面
5. 104号土坑全景・断面
6. 123号土坑全景・断面
7. 124号土坑全景・断面
8. 126号土坑全景・断面
9. 127号土坑全景・断面
10. 128号土坑全景・断面
11. 31号土坑断面
12. 57号土坑断面
13. 56号土坑断面
- P L 31
1. 192号土坑全景・断面
2. 193号土坑全景・断面
3. 194号土坑全景・断面
4. 3号土坑全景
5. 2号土坑・3号土坑断面
6. 73号土坑断面
7. 調査風景(南西から)
8. C区畑境列石
9. A区土坑(墓坑)群
10. C区隔し穴群
- P L 32
1. 13号土坑全景・断面
2. 16号土坑全景・断面
3. 36号土坑全景・断面
4. 41号土坑全景・断面
5. 42号土坑全景・断面
6. 83号土坑全景・断面
7. 43号土坑全景・断面
8. 44号土坑全景・断面
9. 45号土坑全景・断面
10. 46号土坑全景・断面
- P L 33
- 3号住居・7号住居出土遺物
10号住居出土遺物(1)
- P L 34
- 10号住居出土遺物(2)
18号住居出土遺物(1)
- P L 35
- 18号住居出土遺物(2)
24号住居出土遺物(1)
- P L 36
- 24号住居出土遺物(2)
26号住居出土遺物
28号住居出土遺物(1)
- P L 37
- 28号住居出土遺物(2)
31号住居出土遺物(1)
- P L 38
- 31号住居出土遺物(2)
- P L 39
- 31号住居出土遺物(3)
- P L 40
- 31号住居出土遺物(4)
- P L 41
- 31号住居出土遺物(5)
34号住居出土遺物
- P L 42
- 36号住居出土遺物(1)
- P L 43
- 36号住居出土遺物(2)
埋設土器・縄文時代の土坑出土遺物
- P L 44
- 縄文遺構外出土遺物(1)
- P L 45
- 縄文遺構外出土遺物(2)
- P L 46
- 縄文遺構外出土遺物(3)
- P L 47
- 縄文遺構外出土遺物(4)
- P L 48
- 縄文遺構外出土遺物(5)
- P L 49
- 縄文遺構外出土遺物(6)
- P L 50
- 縄文遺構外出土遺物(7)
弥生出土遺物
- P L 51
- 1号住居出土遺物
- P L 52
- 1号・2号・4～6号住居出土遺物
8号住居出土遺物(1)
- P L 53
- 8号住居出土遺物(2)
9号住居・11号住居出土遺物
- P L 54
- 12号住居・13号住居出土遺物
- P L 55
- 14～16号住居出土遺物
22号住居出土遺物(1)
- P L 56
- 22号住居出土遺物(2)
30号住居出土遺物
平安時代の土坑出土遺物
平安遺構外出土遺物(1)
- P L 57
- 平安遺構外出土遺物(2)
- P L 58
- 中・近世の土坑(墓坑)出土遺物(1)
- P L 59
- 中・近世の土坑(墓坑)出土遺物(2)
- P L 60
- 中・近世の土坑(墓坑)出土遺物(3)
中・近世遺構外出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	うえのたいらいちいせき かっこいち
書名	上ノ平I遺跡(1)
副書名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	440
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	23
編著者名	藏川仲男 中沢 信 神谷佳明 麻生敏隆 楢崎修一郎 高島英之 篠原正洋
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080325
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	うえのたいらいちいせき
遺跡名	上ノ平I遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんがのはらまちおおざかわらはた
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑
市町村コード	10424
遺跡番号	0005
北緯(日本測地系)	373302
東経(日本測地系)	1394211
北緯(世界測地系)	373313
東経(世界測地系)	1394159
調査期間	20060401-20061228
調査面積	6900
調査原因	ハッ場ダム建設工事
種別	集落
主な時代	縄文/弥生/平安/中・近世
遺跡概要	集落-縄文-住居10+土器+石器-埋設土器3-土坑12/包含層-弥生/集落-平安-住居15+土器+石器-土坑(陥し穴)134/その他-中・近世-墓坑17-土坑11+金属器
特記事項	縄文時代中期中葉~後期の集落。平安時代の集落と古代の陥し穴。近世の墓坑群。
要約	<p>本遺跡は、吾妻川左岸の最上位段丘上の比較的急な南向き傾斜地に位置する。標高は600m前後で、二筋の沢に挟まれ、遺跡内には湧水点も存在する。</p> <p>縄文時代中期の竪穴住居跡の他に、平安時代の集落とそのエリア内にある陥し穴、様々な年齢構成からなる近世の墓坑群が検出された。</p> <p>今回の報告は、調査の途中段階のものである。よって、縄文時代の住居10軒と埋設土器3基、平安時代の住居15軒、墓塚を含んだ土坑174基の報告となる。</p>

第1章 上ノ平I遺跡の発掘調査

第1節 発掘調査に至る経緯

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の鳥居峠に発し、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支川を合わせ、途中、那馬溪凌ぐ吾妻峡と上毛カルタに詠まれるほどの美観をつくりながら、さらに温川・四方川・名久田川等の支川を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する一級河川である。

ハッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③都市用水の補給（水道用水・工業用水）などを目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高131m、流域面積3.04km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑ハッ場、右岸が同大字川原湯字金花山、吾妻渓谷の上流側の入口部に本体が建設されることになる。

ハッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手後、平成4年7月、「ハッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

文化財関連では、昭和62年12月、「ハッ場ダム建設に係る現地調査に関する協定書」の調印が長野原町長と関東地方建設局長との間で締結されるに先立ち、昭和61年7月からダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定に基づく民俗、石造文化財、自然、移設予定文化財、昔話、古文書、併せて埋蔵文化財の詳細分布調査が、国土交通省（建設省）からの委託事業として長野原町教育委員会の手により行われ、以下の報告書等が刊行されている。

上毛民俗学会編 1987『長野原町の民俗』

上毛民俗学会編 1989『長野原町の石造文化財』

長野原町教育委員会 1990

『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－』

ハッ場ダム地域自然調査会編 1993『長野原町の自然』

ハッ場ダム地域文化財調査会移設文化部 1995

『ハッ場ダム地域移設予定文化財調査報告書』

ハッ場ダム地域文化財調査会昔話部編 1997

『長野原町の昔話』

ハッ場ダム地域文化財調査会古文書調査部編 2001

『長野原町の古文書』

このうち、文化庁補助事業として、昭和62年度より3ヶ年計画で、群馬県教育委員会文化財保護課の指導の下、長野原町教育委員会が実施した遺跡分布調査の報告（『長野原町の遺跡－町内遺跡詳細分布調査報告書－』）によれば、確認された埋蔵文化財包蔵地は182、これに石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物を含めた文化財総数は199を数える。当初ハッ場ダム建設に関係する5地区（川原畑・川原湯・林・横壁・長野原）の埋蔵文化財調査対象面積は約57万m²であった。その後、平成14年に11遺跡、平成16年に2遺跡、平成17年に1遺跡を加え、調査対象遺跡は61遺跡で面積は約110万m²となった。

また下流の東吾妻町松谷、三島地区などでもダム建設の関連工事が進展しつつある。この周辺も群馬県教育委員会の『群馬県遺跡地図』（昭和48年）で遺跡の存在が確認されている。

このような状況の中、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議が行われ、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査を実施することが決定した。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路開

第1章 上ノ平1遺跡の発掘調査

連遺跡を調査箇所とするハツ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書（第1回変更）」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。また平成17年4月1日に同協定書（第2回変更）が締結され、発掘調査の業務完了期日が「平成18年3月31日」から「平成23年3月31日」まで延長された。

上ノ平1遺跡は平成17年度に先行発掘調査が行われ、その後、今回報告で扱う平成18年度の発掘調査が行われた。調査原因は、川原畑地区代替地造成工に伴う発掘調査である。

第2節 発掘調査の方法

上ノ平1遺跡の発掘調査においては、バックホーによる表土掘削を行い、作業員による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。本遺跡は、その西側の「松葉沢」と呼ばれる小河川と東側には「境沢」が流れ、谷地形に挟まれた場所に位置する。また、ほぼ北方向を斜面上位とする南向き傾斜面に位置するため、台地上や傾斜面は黒色土の堆積は薄く、場合によっては一度堆積した黒色土層が地滑り状に崩落して失われた場合もある。一方、斜面下位の扇状部分や旧谷地形部には、黒色土やローム質土等の厚い2次堆積層が確認されている。このような状況から、バックホーによる表土掘削において、厚さ15～25cm程度で地山のローム層面やAs-YPk純堆積層面が露出する台地上や尾根部或いは斜面部では、1面のみの調査を行い、一方、谷地形部及び平坦部では1面だけでなく、2面あるいは3面調査を行う必要に迫られた。

堅穴住居跡や土坑などの調査は、埋没土層堆積状

況の観察用ベルトを任意に設定し、平安以降遺物包含層及び縄文遺物包含層はグリッド設定線を使用して適宜観察用ベルトを残し、移植ゴテ等により掘削を行った。

旧石器試掘調査は、5グリッド（62区T-22、R-22、V-20、T-20、U-18グリッド）において、トレンチを設定し、調査を実施した。

遺物取り上げについては、分布範囲の地点的な集約を想定し、4mグリッド一括取り上げ、及び地点別取り上げを適宜行った。

遺構平面測量・遺構断面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル平板測量を基本として、縮率1/20を基準に、任意に1/10・1/40・1/100・1/200を選択して行った。

遺構写真については、地上写真は現場担当者が、航空写真撮影は測量委託業者が行った。撮影にはデジタルカメラ（Canon EOS Kiss Digital N）と6×7版白黒フィルムを使用した。

平成6年度からは始まったハツ場ダム建設に伴う発掘調査における調査区の設定は、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「ハツ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠する。また、特に必要と思われる部分について以下に記す。

①調査における遺跡番号は、ハツ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）に番号を付し、ハツ場ダムの略号（YD）に続ける。ハイファン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。上ノ平1遺跡は「YD1-07」に該当する。

②基準座標は、国家座標（2002年4月改正前の日本測地系）に基づく日本平面直角座標第IX系を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点（座標値X=+58000.0、Y=97000.0）とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo35地区に所在する。

③1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画

し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。既に発刊されたハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のほとんどは、それぞれの遺跡の区毎に遺構名称・番号が付けられている。

しかし、本遺跡は遺跡範囲と今後の調査範囲が限定されているので62区・63区・71区・72区・73区に跨っているが、遺跡全体で遺構名称・番号を付したので留意されたい。

「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

第3節 発掘調査の経過

ハツ場地区の掘削調査は、厳冬期を避けるため4月に開始され通常12月で一旦終了となる。本調査は、およそ800㎡が継続調査となり、新たに調査が展開される部分とともに次年度の調査を待つこととなった。

以下に調査の概略に替えて、発掘調査日誌抄を記す。

発掘調査日誌抄

平成18年度(2006年)

- 4/1 調査開始
- 4/13 文化課による試掘調査
(A区部分) → 要全面調査
- 4/25 A区表土掘削開始
- 5/8 5号トレンチ掘削・分層
- 5/9 B区表土掘削開始
- 5/17 墓坑群検出
- 5/25 1号住居セクション写真撮影
- 5/26 墓坑群全景写真・人骨取り上げ
- 6/2 1号住居遺物出土状態写真撮影
- 6/12 1号住居全景写真撮影

- 6/14 C区東側部分表土掘削開始
- 6/20 高所作業車による全景写真撮影
- 6/23 1号住居掘り方全景写真撮影、調査終了
- 6/30 B区調査終了
- 7/4 土砂搬出路付け替え
- 7/19 大雨で調査区及び周辺地に被害発生
- 7/25 午後から調査再開
- 8/2 9号住居セクション写真撮影
- 8/4 9号住居遺物出土状態写真撮影
- 8/18 9号住居全景写真撮影
- 8/31 9号住居掘り方全景写真撮影、調査終了
- 9/4 13号住居セクション写真撮影
- 9/15 13号住居遺物出土状態①写真撮影
- 9/22 地元向け現地説明会実施
午後、空撮実施
- 9/26 13号住居遺物出土状態②写真撮影
- 10/18 旧石器試掘トレンチ掘削調査
- 10/27 文化課による試掘調査
(C区よりさらに西側) → 要調査
- 11/7 31号住居セクション写真撮影
- 11/9 31号住居遺物出土状態①写真撮影
- 11/22 31号住居遺物出土状態②写真撮影
- 11/27 野口茂四郎邸跡、一部トレンチ調査
- 11/30 13号住居炭化材出土状態写真撮影
31号住居遺物出土状態③写真撮影
- 12/12 13号住居全景写真撮影
- 12/13 31号住居全景写真撮影
- 12/14 カマド焼土化実験を実施
- 12/19 遺物搬出作業
- 12/22 年度内の掘削作業終了
- 12/28 年度内の調査終了

第4節 地理的環境

長野原町は群馬県北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。町城の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1341.7m)や王城山(1123.2m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰

(1473.5m)、浅間隠山(1756.7m)、鼻曲山(1655m)などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を發して東流し、町城のほぼ中央では川幅をやや広くするもの、東端では第3紀層を刻んで吾妻溪谷を形成している。その支流は、兩岸の山地から發する河川や溪流が多く、左岸には草津白根山麓から發する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から發する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から發する小宿川や、鼻曲山麓から發する熊川などが北流する。流長76.2kmの吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322kmの利根川に合流する。

長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100万～90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を留めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが「丸岩」である。丸岩は南側を除いた3方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑のハッ場ダム関連の5地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川兩岸には、吾妻川からの比高差を基準に、最上位・上位・中位・下位の4段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高差は、最上位段丘で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘で約30m、下位段丘で約10～15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町城の北西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約21

万年前の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を埋めており、その後の浸食によって吾妻川兩岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町城では浅間草津黄色軽石(As-YPk:1.3～1.4万年前)の堆積が顕著である。また浅間Bテフラ(1108年)や浅間柏川テフラ(1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認できる。さらに天明三年(1783年)の噴火により発生した泥流は下位段丘面や中位段丘面を覆っている。

本遺跡は、標高約600mの吾妻川左岸最上位段丘面状の大字川原畑字上ノ平に所在し、高間山の南東麓に位置する。高間山頂からは吾妻川左岸に露出する川原湯岩脈(国指定天然記念物)の方向へは、南に延びる細長い尾根が張り出しており、尾根の東、川原畑地区内を流れる戸倉沢・ミョウガ沢・境沢・松葉沢・ハツ場沢・穴山沢、その支流の鈴沢と温井沢等の溪流は、すべて高間山及びこの尾根に源を發している。従って、川原畑地区内の溪流は、源流付近では東流し、中・下流から吾妻川へ流れ込む付近にかけて、次第に南流する傾向がある。本遺跡は東の松葉沢、西の境沢に挟まれた最上位段丘面に位置する。段丘面は水平ではなく、吾妻川に向かって南東方向へと低くなる傾斜面になっている。この傾斜面の形成には、斜面上部方向からの度重なる土砂崩落が起因しているものと考えられる。崩落土層は、北西部の山寄りでは比較的厚く、南東部の吾妻川寄りでは薄く、水平に堆積が確認できた下層の黒色土層上に堆積している。本遺跡の遺構のなかには、この度重なる崩落土層により真空パック状に保護され、良好な状態で残存していたものもある。

第5節 歴史的環境

長野原町内周辺の埋蔵文化財包蔵地や付近の歴史的環境をはじめ、周辺遺跡や近隣町村に分布する遺跡等については、既刊「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡報告書」第1集(財団法人

第1章 上ノ平I遺跡の発掘調査

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第287集)、第2集(同303集)、第8集(同375集)及び「林宮原遺跡II」(長野原町教育委員会2004)などが詳しいので、参照して頂きたい。ここではこれら既刊の報告を頼りに、長野原町における近年の調査動向及び本遺跡に関わる時代・時期の事例を中心として概観しておきたい。

ただし、記載した遺跡には、整理作業中あるいは未報告、発掘調査中の遺跡も多く、時期や遺構数等については不確定な部分もあるので留意されたい。

旧石器時代 長野原町において該期の遺跡は依然確認されていないが、柳沢城跡の調査において細石器文化期に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパー1点が出土する。

縄文時代

草創期・早期 吾妻渓谷西側入口部の吾妻川左岸に位置する石畑岩陰では、表裏縄文・回転縄文・撚糸文・押型文などの土器群や獣骨などが出土している。本遺跡と同じく川原畑地区に所在し、段丘面は異なるものの、出土土器の帰属時期や型式・様式等、その様相には共通点がある。平成12・13年調査の榎木II遺跡では、撚糸文期の堅穴住居31軒が確認され、県内はもとより全国でも希少な調査例である。また平成14年調査の立馬I遺跡でも早期の住居2軒が確認されている。

前期 坪井遺跡で前期初頭花積下層式期の住居1軒、暮坪遺跡で前期前葉二ツ木式期の住居2軒、長畝II遺跡で関山～黒浜式期の住居2軒、平成12・13年調査の榎木II遺跡では黒浜式・有尾式～諸磯式期の住居12軒、平成16・17年調査の三平I・II遺跡では諸磯式期の住居2軒が確認されている。

中期～後期 中期前半の調査例は少なく、平成12・13・17年調査の榎木II遺跡で五領ヶ台式・阿玉台式期住居4軒が確認され、幸神遺跡で完形の阿玉台式土器を出土した円形土坑1基が発見されている。平成14年調査の立馬II遺跡で五領ヶ台式～阿玉台式

期の住居9軒が確認された。中期後半以降になると、大規模集落遺跡として著名な横壁中村遺跡と長野原一本松遺跡が挙げられる。どちらも中期後半加曾利E式期から後期中葉加曾利B式期にわたる住居250軒以上が確認されている。

晩期 石畑I岩陰では水I式や安行式、千網式土器などが採集されている。平成16年調査の川原湯沼遺跡では水I式併行の浮線文系の甕と在地型突帯文壺型土器が2基並立して埋設されており、再葬墓の可能性が高い。平成14年調査の立馬I遺跡では中部高地における晩期終末女島羽川式期の住居1軒が確認されている。また平成15年調査の横壁中村遺跡でも晩期終末に帰属する可能性のある住居2軒も調査されている。

弥生時代 調査例は少ないが、横壁中村遺跡では東海西部系土器樞王式の甕を埋設する土坑1基が確認されている。また平成14年調査の立馬I遺跡では中期前半～中葉の住居1軒、中期後半の住居1軒と土器棺墓2基が検出されている。

古墳時代 調査例は少ないが、平成15年調査の林宮原II遺跡では5世紀末～6世紀初頭の住居1軒、平成16年調査の下原遺跡でも同時期の住居1軒が確認されている。平成16年調査の川原湯沼遺跡でも同時期の土器を伴う土坑1基、遺構外からは剣形石製模造品が出土している。

奈良・平安時代 奈良時代に該当する遺跡は羽根尾II遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに原始古代の中心を形成する時期である。平成12・13・16・17年調査の榎木II遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居34軒が検出され、「長」「三家」の墨書土器や「称」と刻字された紡錘車も出土している。平成14・15・17年度調査の横壁中村遺跡では9世紀中葉～10世紀初頭の住居18軒を確認し、1軒は焼失住居であるとともに床面の一部が板敷きである

ことが確認されている。平成13年調査の長野原一本松遺跡では5軒、平成14年調査の立馬1遺跡では4軒、平成16年調査の川原湯勝沼遺跡では9世紀の住居3軒、平成18年調査の上ノ平1遺跡では9世紀～10世紀の住居21軒が確認されている。

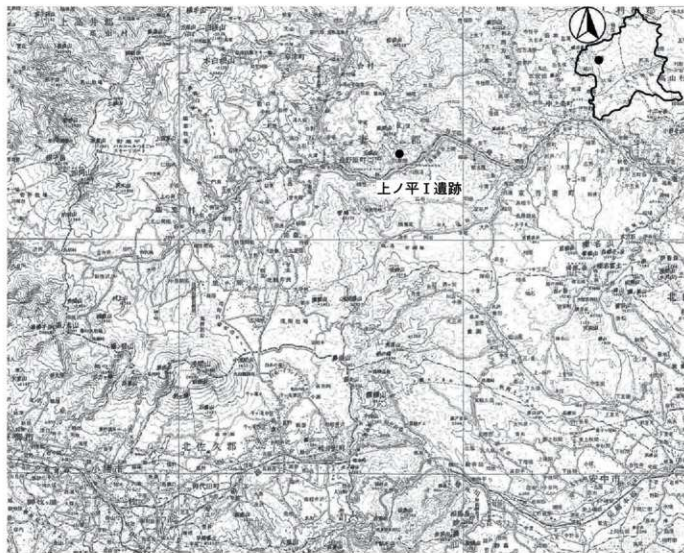
中世 吾妻川流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城、長野原城跡、丸岩城跡、柳沢城跡、金光山砦跡などがあり、その他に林城跡、林の烽火台などといわれる箇所も存在する。金光山砦跡は、平成12年に町教委と群馬県埋蔵文化財調査事業団により堀切などが確認されている。掘立柱建物の検出も近年増加しており、平成11・12・13・17年調査の横壁中村遺跡では18棟、平成12・15・17年調査の榎木Ⅱ遺跡では石垣区画されたテラスを伴う掘立柱建物が十数棟、平成15年調査の長野原一本松遺跡では2棟、16・17年度調査の三平Ⅰ遺跡では3棟、16年度調査の三平Ⅱ遺跡では7棟の掘立柱建物確認されている。また、平成19年度調査の林中原Ⅰ遺跡では林城の一部が調査されている。

近世 近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により下位・中位段丘面で天明三年浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見されている。これらの遺跡では畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出され、天明泥流に埋まった畑景観の復元や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造などに関して詳細な検討がなされている。

本遺跡周辺の民俗や墓制に関わる資料として、両墓制がある。両墓制とは死者の遺骸を埋葬する第1

次墓地と、別の場所に靈魂を祀るための石塔を建てる第2次墓地とを併せもつ墓制をいう。遺体を埋葬する第1次墓地をボチ・ハカバ・ウメバカ・タッチョウバ、石塔を建てる第2次墓地をヒキハカ・マイリバカ・オガミバカ・ラントウバ・オハカなどと一般的に呼ぶ。群馬県内では北毛の利根郡片品村、吾妻郡六合村・長野原町・嬬恋村・東吾妻町・中之条町・渋川市、東毛の邑楽郡板倉町・明和村、西毛の甘楽郡南牧村10ヶ市町村に残る風習であり、長野原町では横壁・川原畑・林の3地区が該当する。本遺跡が所在する川原畑地区では、第1次墓地であるウメバカは三平地内の「ハナツピラ」と呼ばれる段丘崖にあり、村中の共同墓地となっている。ここでは空いている場所なら基本的にどこに埋葬してもよいことになっており、埋葬後は塔婆を立てる。一方、第2次墓地であるヒキハカは本遺跡の南東に位置する「三ツ堂」の敷地内に石塔を建てる。両墓制成立の背景には、遺体を穢れているものとして忌む観念と、淨らかな靈魂を別の場所に祀る靈魂分離の観念から生まれたものとの説があるから、語り方から考えると、本来的にはヒキハカが作られればウメバカには語る必要はないはずである。しかし現実には両墓を語るのが普通であり、逆にウメバカを語る頻度の方が高いとさえいえる。ここには両墓制の本来の意義はすでに消失しており、両墓制成立時期が不明であるという問題もあるが、その定着時に何らかの不安定な要素・要因があったことが想像できる。川原畑地区では両墓ともダム水没による代替地移転が数年後には行われる予定である。

また、本遺跡内には明治23年に私財を投じ、吾妻溪谷を開削した郷土の偉人である野口茂四郎氏の邸宅跡が含まれている。



第2図 遺跡位置図 1:300,000(国土地理院 1:200,000「長野」使用)

参考文献

- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2002
 「長野原一本松遺跡(1)」第287集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2002
 「ハッ場ダム発掘調査集成(1)」第303集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2003
 「入々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」第319集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2005
 「川原湯勝沼遺跡(2)」第356集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2006
 「立馬Ⅱ遺跡」第375集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2007
 「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」第401集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団2006
 「立馬Ⅰ遺跡」第388集

- 長野原町 1976 「長野原町誌」上巻
 長野原町 ハッ場ダム地域自然調査会編 1993
 「長野原町の自然」
 上毛民俗学会編 1987 「長野原町の民俗」
 新井房夫編 1993 「火山考古学」
 長野原町教育委員会 2004 「林宮原遺跡Ⅱ」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 「年報19」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 「年報20」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「年報21」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 「年報22」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 「年報23」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 「年報24」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 「年報25」
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 「年報26」

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 基本土層

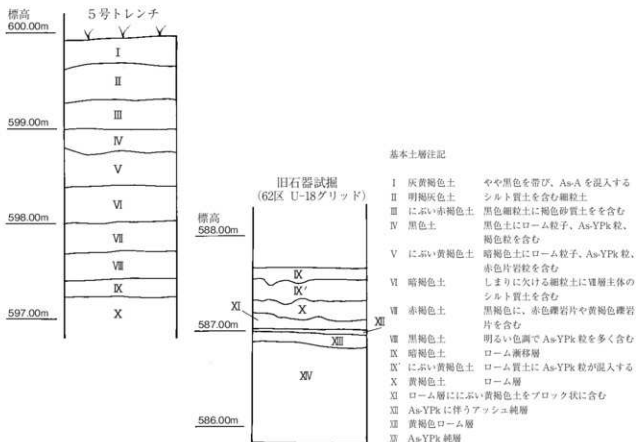
上ノ平I遺跡は、吾妻川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。基盤層については山塊の部分が多とんであると考えられるが、標高の低い場所では浅間山を起源とする泥流堆積物（応桑泥流）を基盤層にしている可能性もある。現段階では詳細は不明であるので、今後の調査に期待したい。第3図で示しているように、本遺跡の調査において肉眼で観察できた最下位層は基本土層XIV層のAs-YPkであった。

本遺跡地は、山岳傾斜地を起源とする扇状地状の地形の端部に位置するため、たび重なる崩落により現地地形が形成されている。そのため、傾斜地の上部から崩れた下位層土が上面で観察されている。したがって、基本土層I～Ⅷにはローム粒子やAs-YPk

が含まれている。また、傾斜面以外でも谷地や沢地などの地形的な要因から、各層位が均一には確認できなかった。遺構断面の注記で「V相当土」などの表現が出てくるが、「基本土層Vと同じ様相を示す土」という意味で使用しているので必ずしも時代を表していないので留意されたい。

以下に主要土層の概要を示すが、詳細については第3図及び基本土層注記を参照していただきたい。

- I層 耕作土及び表土で10～20cmである。
- II層 中・近世相当土、10～20cmである。
- III層 中世に発生したと思われる崩落土層。
- IV層 平安時代相当土、厚いところで40cm。
- V層 古代前半に発生したと思われる崩落土層。
- VI層 縄文時代相当の暗褐色土。
- VII層 縄文時代に発生したと思われる崩落土層。
- VIII層 縄文時代相当の黒褐色土。



第3図 基本土層

第2節 遺構・遺物の概要

本遺跡の平成18年度調査の結果、縄文時代・平安時代の竪穴住居跡を35軒、陥し穴を含む多数の土坑、墓坑群など広範に及ぶ多数の遺構を検出した。ここでは、今回の報告部分を中心に検出された遺構及び遺物について、それぞれの時代ごとにその概要を記す。

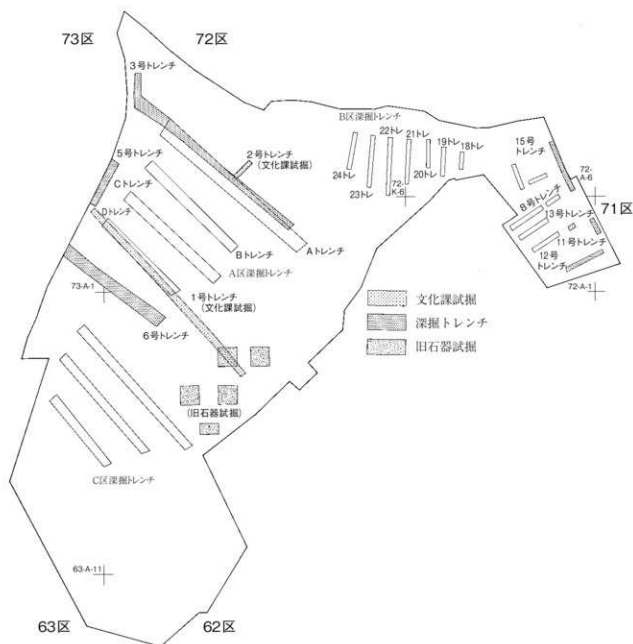
旧石器時代

ロームの堆積の状態が良好な部分に第4図のようにグリッドを設定して調査したが、遺構・遺物は出

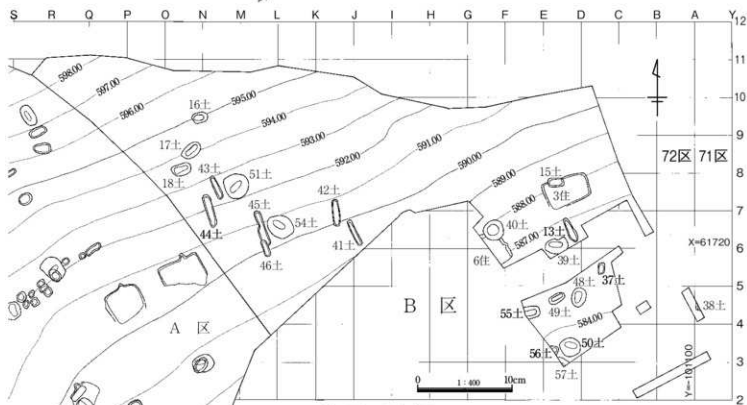
土しなかった。

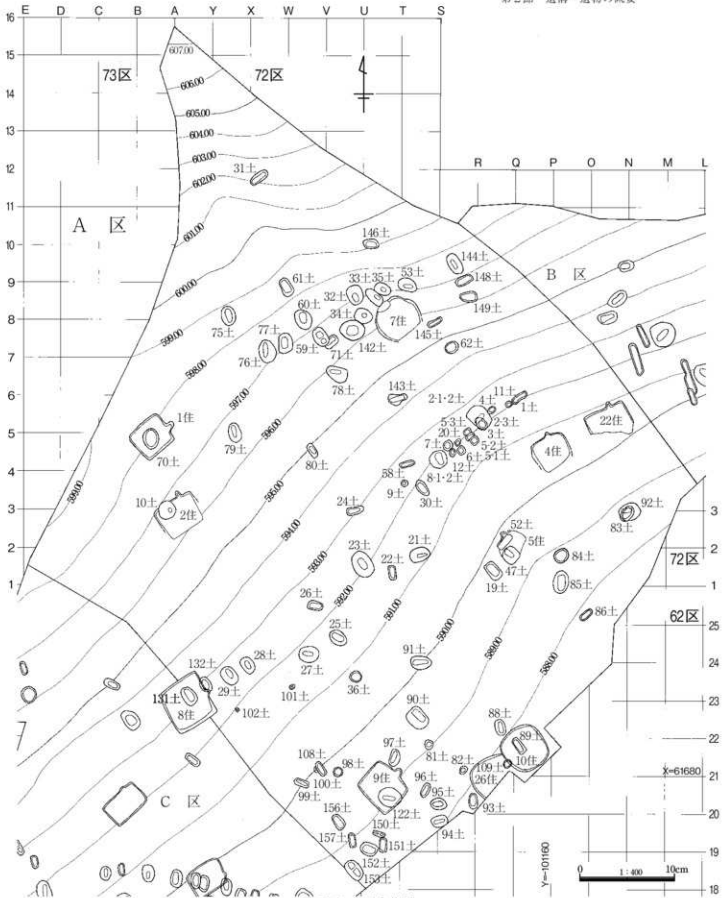
縄文時代

竪穴住居15軒を検出、今回は10軒を報告する。ほとんどは中期中葉の焼町土器や三原田式土器などを伴うもので、八ッ場地域において、横壁中村遺跡や長野原一本松遺跡などに代表される中期後半の集落が形成される前、この地に集落が営まれていたことを示す。他は、称名寺式土器を伴う住居で床面に平石を敷き、壁際に小さな礫を帯状に巡らす敷石住居であった。

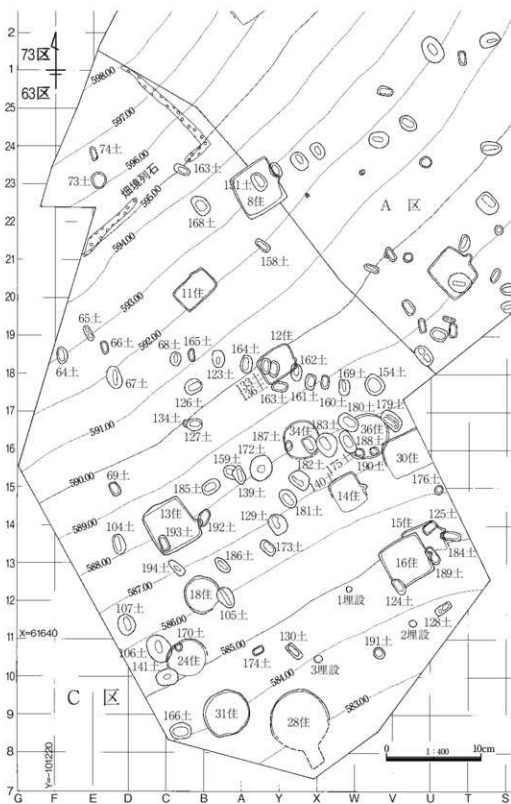


第4図 上ノ平1遺跡調査区トレンチ配置図 1:800





第7図 A区全体図



第8図 C区全体図

第2表 住居一覧

番号	主グリッド	およその形状	時期	重複関係	備考
1	73-A-5	長方形	10世紀前半代	70土坑	カマド竪穴状を示す
2	73-A-3	長方形	10世紀前半代	10土坑	
3	72-D-7	隅丸長方形	縄文時代中期中葉	15土坑	
4	72-P-4	隅丸正方形	10世紀初頭	なし	
5	72-Q-2	長方形か	10世紀初頭	47・52土坑	
6	72-F-6	不明	10世紀初頭	40土坑	部分的な調査
7	72-F-8	円形	縄文時代中期中葉	なし	
8	63-A-23	ほぼ正方形	9世紀末	131・132土坑	
9	62-T-20	長方形	9世紀後半代	122土坑	鉄に関連した遺物出土(引1)
10	62-Q-22	円形	縄文時代中期中葉	26号住居、89・109土坑	2回にわたる調査
11	63-B-20	長方形	9世紀末	なし	南壁に竈を据えた住居
12	62-Y-18	長方形	10世紀初頭	133・136・162・163土坑	焼失住居か
13	63-B-14	ほぼ正方形	10世紀前半代	192・193土坑	焼失住居
14	62-W-15	ほぼ正方形	10世紀初頭	なし	
15	62-U-13	長方形	10世紀後半代	16号住居、125・184・189土坑	焼失住居か
16	62-V-13	ほぼ正方形	10世紀初頭	15号住居、124土坑	
18	63-B-12	円形	縄文時代中期中葉	106土坑	
22	72-O-5	長方形	10世紀初頭	なし	
24	63-B-10	円形か	縄文時代中期中葉	106・141・170土坑	
26	62-R-20	円形か	縄文時代中期中葉	10号住居、109土坑	部分的な調査
28	62-X-8	楕圓形	縄文時代後期	なし	楕圓形敷石住居
30	62-U-16	方形	10世紀前半代	なし	部分的な調査
31	63-A-9	円形	縄文時代中期中葉	なし	
34	62-X-16	円形	縄文時代中期中葉	182・183・187土坑	多量の縄文時代中期の土器出土
36	62-V-16	円形	縄文時代中期中葉	175・179・180・188・190土坑	

第3表 土坑一覧

番号	グリッド	規模			時期	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
1	72-P-5	*	*	*	近世	墓坑
2	72-Q-5	0.95	0.65	0.30	近世	墓坑
3	72-Q-5 (2.42)	2.05	2.23		平安	陥し穴
4	72-Q-5	0.95	0.65	0.30	近世	墓坑
5	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
6	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
7	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
8	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
9	72-S-3	*	*	*	近世	墓坑
10	73-A-3	1.98	1.88	2.33	平安	陥し穴
11	72-Q-5	*	*	*	近世	墓坑
12	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
13	72-D-6	2.70	0.46	0.38	中・近世	集石
15	72-D-7 (1.65)	0.94	1.06		平安	陥し穴
16	72-N-9	1.62	1.03	0.44	近世以降	不明
17	72-N-8	2.18	1.34	2.22	平安	陥し穴
18	72-N-8	1.95	1.18	1.92	平安	陥し穴
19	72-Q-1	1.95	1.35	1.34	平安	陥し穴
20	72-R-4	*	*	*	近世	墓坑
21	72-S-1	2.10	1.40	1.52	平安	陥し穴
22	72-T-1	1.40	0.71	0.82	平安	陥し穴
23	72-U-1	2.70	2.04	1.83	平安	陥し穴
24	72-U-3	1.79	0.80	1.00	平安	陥し穴
25	62-U-24	1.87	1.43	2.15	平安	陥し穴
26	62-V-25	1.51	0.92	1.06	平安	陥し穴
27	62-V-24	2.26	1.68	2.07	平安	陥し穴
28	62-X-24	1.90	1.28	1.92	平安	陥し穴
29	62-X-23	2.08	1.60	2.37	平安	陥し穴
30	72-S-3	1.70	0.98	1.54	平安	陥し穴
31	72-W-11 (2.04)	0.91	1.45		平安	陥し穴
32	72-U-8	2.12	1.65	1.77	平安	陥し穴
33	72-T-8	2.16	1.04	1.83	平安	陥し穴
34	72-U-8	1.87	1.50	1.90	平安	陥し穴
35	72-T-8	1.80	1.25	1.46	平安	陥し穴
36	62-U-23	1.20	1.20	0.30	近世以降	不明
37	72-C-5	1.19	0.63	0.83	平安	陥し穴
38	71-Y-4 (0.47)	(1.18)	1.80		平安	陥し穴
39	72-D-6	2.42	1.50	2.45	平安	陥し穴

番号	グリッド	規模			時期	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
40	72-F-6	2.15	2.04	2.60	平安	陥し穴
41	72-J-6	2.86	0.58	0.50	近世以降	手穴か
42	72-J-7	2.68	0.68	0.17	近世以降	手穴か
43	72-M-7	2.64	0.52	0.34	近世以降	手穴か
44	72-M-7	3.50	0.82	0.48	近世以降	手穴か
45	72-L-6	3.86	0.60	0.47	近世以降	手穴か
46	72-L-6	1.24	0.60	0.14	近世以降	手穴か
47	72-Q-1	1.98	1.76	1.23	平安	陥し穴
48	72-D-4	2.00	1.49	1.74	平安	陥し穴
49	72-D-4 (1.70)	0.90	0.90	0.90	平安	陥し穴
50	72-D-3	2.18	1.96	1.91	平安	陥し穴
51	72-M-7	2.66	2.50	2.50	平安	陥し穴
52	72-Q-2	1.96	0.68	0.44	平安	陥し穴
53	72-S-8 (1.94)	(1.54)	2.02		平安	陥し穴
54	72-L-6	2.85	2.47	2.24	平安	陥し穴
55	72-E-4 (1.60)	1.22	1.26		平安	陥し穴
56	72-D-3 (1.52)	(0.81)	1.76		平安	陥し穴
57	72-D-3 (1.24)	(0.80)	1.62		平安	陥し穴
58	72-S-4	1.64	0.68	1.62	平安	陥し穴
59	72-V-7	2.04	1.40	1.84	平安	陥し穴
60	72-V-8	1.93	1.72	1.74	平安	陥し穴
61	72-W-9	1.74	1.20	1.40	平安	陥し穴
62	72-R-7	1.32	1.20	0.96	平安	陥し穴
64	63-E-18	1.62	1.09	1.22	平安	陥し穴
65	63-E-19	1.76	0.68	1.46	平安	陥し穴
66	63-D-18	1.36	0.65	1.34	平安	陥し穴
67	63-D-18	2.35	1.52	1.24	平安	陥し穴
68	63-B-18	1.35	1.12	0.84	平安	陥し穴
69	63-D-15	1.43	0.83	0.68	平安	陥し穴
70	73-A-4	2.10	1.64	1.10	平安	陥し穴
71	72-U-7	1.47	0.87	1.00	平安	陥し穴
73	63-D-23	1.73	1.55	2.91	近世	井戸か
74	63-E-23	*	*	*	中世	墓坑
75	72-X-8	1.96	(1.48)	1.49	平安	陥し穴
76	72-W-7	2.37	1.78	2.00	平安	陥し穴
77	72-W-7	2.15	1.40	2.00	平安	陥し穴
78	72-U-6 (2.23)	1.40	2.50		平安	陥し穴
79	72-X-5	2.03	1.33	2.20	平安	陥し穴

第2章 検出された遺構と遺物

弥生時代

包合層の存在が認められ、若干の土器が出土した。

平安時代

9～10世紀にかけての堅穴住居20軒を検出し、今回は15軒を報告する。平安時代の集落跡としては、この地域では、楡木Ⅱ遺跡に次ぐ規模である。また、陥し穴の検出が多数に及んだ。その多くは、上面形状が楕円形で下面形状が長方形であった。住居との切り合い関係や埋設土の観察から古代に帰属するものと考えられる。

番号	グリッド	規模			時期	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
80	72-V-4	1.58	0.81	1.72	平安	陥し穴
81	62-S-21	1.05	0.97	0.18	縄文	
82	62-R-21	0.93	0.70	0.08	縄文	
83	72-N-3	1.82	1.27	0.70	近世	不明
84	72-O-1	1.66	1.43	1.62	平安	陥し穴
85	72-O-1	2.28	1.65	1.43	平安	陥し穴
86	62-Q-25	1.32	0.75	1.48	平安	陥し穴
88	62-Q-22	1.60	1.22	1.56	平安	陥し穴
89	62-P-21	(1.75)	0.82	0.84	平安	陥し穴
90	62-S-22	2.51	(2.02)	1.88	平安	陥し穴
91	62-S-24	2.10	1.54	1.82	平安	陥し穴
92	72M-2	2.38	1.82	2.13	平安	陥し穴
93	62-R-20	1.57	0.86	1.22	平安	陥し穴
94	62-R-19	1.69	1.20	1.74	平安	陥し穴
95	62-S-20	1.55	1.23	1.61	平安	陥し穴
96	62-S-20	1.51	0.86	1.13	平安	陥し穴
97	62-T-21	1.79	1.22	1.28	平安	陥し穴
98	62-U-21	1.05	1.00	0.40	縄文	
99	62-V-20	1.58	0.74	1.22	平安	陥し穴
100	62-V-21	1.63	0.79	1.05	平安	陥し穴
101	62-V-23	0.62	0.44	0.18	縄文	
102	62-X-22	0.43	0.33	0.28	縄文	
104	63-D-13	1.97	1.22	1.36	平安	陥し穴
105	63-A-12	2.56	1.50	1.72	平安	陥し穴
106	63-C-10	2.94	2.46	2.25	平安	陥し穴
107	63-D-11	2.56	1.92	1.67	平安	陥し穴
108	62-V-21	0.86	—	0.52	平安	陥し穴
109	62-Q-21	0.80	0.68	0.72	縄文	
122	62-T-20	2.52	2.05	2.17	平安	陥し穴
123	63-A-18	1.80	1.33	1.77	平安	陥し穴
124	62-U-12	1.85	1.00	0.78	平安	陥し穴
125	62-U-14	1.54	0.88	0.84	平安	陥し穴
126	63-B-17	1.98	1.58	1.28	平安	陥し穴
127	63-B-16	1.60	1.28	1.50	平安	陥し穴
128	62-T-11	1.70	0.78	0.90	平安	陥し穴
129	62-Y-14	2.18	1.94	1.60	平安	陥し穴
130	62-X-10	1.98	1.12	1.60	平安	陥し穴
131	62-Y-23	2.08	1.43	1.63	平安	陥し穴
132	62-Y-23	1.68	1.30	1.60	平安	陥し穴
133	62-Y-18	1.56	1.08	0.90	平安	陥し穴
134	63-B-16	0.68	—	1.12	平安	陥し穴
136	62-Y-18	1.70	1.12	0.90	平安	陥し穴
139	63-A-15	1.76	1.20	1.32	平安	陥し穴
140	62-X-15	2.10	1.76	1.98	平安	陥し穴
141	63-C-10	2.22	2.00	1.62	平安	陥し穴
142	72-U-7	2.34	2.12	1.66	平安	陥し穴
143	72-T-5	1.70	0.56	1.56	平安	陥し穴

中・近世

中世の墓1基と、東西方向に並んだ土葬による近世の墓を16基を検出した。

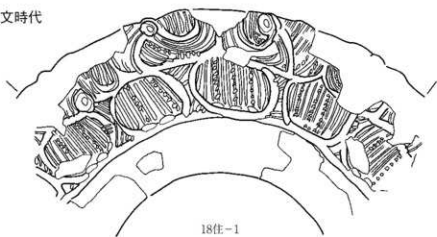
土坑として番号を付けてあるが、遺構名は「墓坑」とした。

発掘調査は継続中であり、さらに多くの遺構や遺物の検出が見込まれるところである。今回の報告は、調査が完了した部分についてのみである。遺構番号の欠落があるのはそのためである。

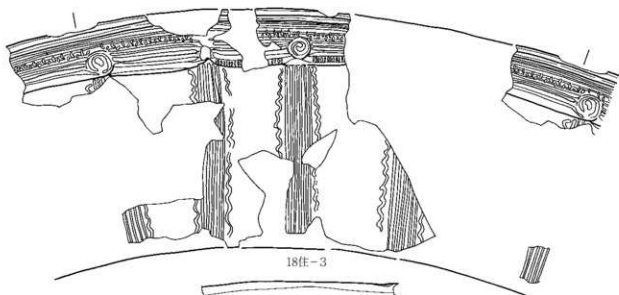
番号	グリッド	規模			時期	備考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)		
144	72-R-9	2.28	1.36	1.65	平安	陥し穴
145	72-S-7	1.58	0.56	1.43	平安	陥し穴
146	72-T-10	1.06	0.93	0.96	平安	陥し穴
148	72-R-9	1.23	0.90	0.84	平安	陥し穴
149	72-R-8	1.73	1.03	0.70	平安	陥し穴
150	62-T-19	1.22	0.48	0.50	平安	陥し穴
151	62-T-19	1.28	0.80	0.92	平安	陥し穴
152	62-T-19	1.68	1.32	0.96	平安	陥し穴
153	62-U-18	2.24	1.48	1.62	平安	陥し穴
154	62-V-17	2.14	1.85	1.83	平安	陥し穴
156	62-U-19	1.73	1.03	0.78	平安	陥し穴
157	62-U-19	1.28	0.72	0.83	平安	陥し穴
158	62-Y-21	1.63	0.90	0.88	平安	陥し穴
159	63-A-15	1.33	—	1.30	平安	陥し穴
160	62-W-17	1.26	0.87	0.86	平安	陥し穴
161	62-X-17	1.55	1.23	1.16	平安	陥し穴
162	63-X-18	1.70	1.26	1.38	平安	陥し穴
163	62-Y-17	1.63	1.15	1.18	平安	陥し穴
164	62-Y-18	1.66	1.32	0.98	平安	陥し穴
165	63-B-18	1.28	0.70	0.88	平安	陥し穴
166	63-B-8	2.18	1.82	1.75	平安	陥し穴
167	63-B-23	1.56	0.87	1.32	平安	陥し穴
168	63-B-22	2.18	1.60	1.33	平安	陥し穴
169	62-W-17	1.50	1.10	1.03	平安	陥し穴
170	63-B-10	0.73	0.71	0.74	縄文	
172	62-Y-15	2.71	2.40	1.75	平安	陥し穴
173	62-Y-13	1.83	1.13	1.72	平安	陥し穴
174	62-Y-10	1.05	0.80	0.57	平安	陥し穴
175	63-W-16	2.53	1.36	1.40	平安	陥し穴
176	62-T-14	0.90	—	0.20	縄文	
179	62-V-16	2.44	1.90	1.60	平安	陥し穴
180	62-W-16	2.27	1.72	1.36	平安	陥し穴
181	62-X-14	1.98	1.53	1.03	平安	陥し穴
182	62-X-16	1.63	1.45	1.18	平安	陥し穴
183	62-W-16	2.64	2.30	1.62	平安	陥し穴
184	62-T-13	2.08	0.80	0.83	平安	陥し穴
185	63-A-15	1.82	1.58	1.17	平安	陥し穴
186	63-A-13	1.73	1.18	1.13	平安	陥し穴
187	62-X-16	0.95	0.87	0.75	縄文	
188	62-V-15	1.00	0.90	0.62	縄文	
189	62-U-13	1.92	1.12	1.37	平安	陥し穴
190	62-V-15	1.13	0.90	0.63	縄文	
191	62-V-10	1.26	1.08	0.54	縄文	
192	63-B-14	1.73	1.18	0.97	平安	陥し穴
193	63-C-13	1.70	0.92	0.57	平安	陥し穴
194	63-B-12	1.97	—	1.17	平安	陥し穴

注1) 墓坑の計測値は、本文中に記載されている。

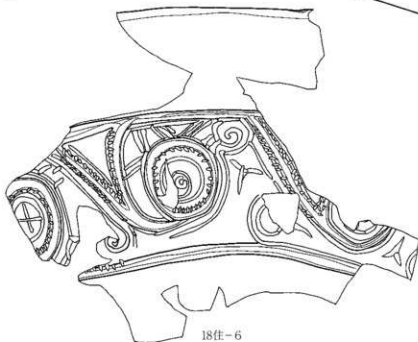
第3節 縄文時代



18住-1

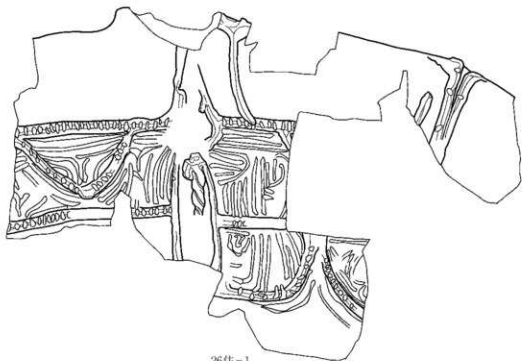


18住-3

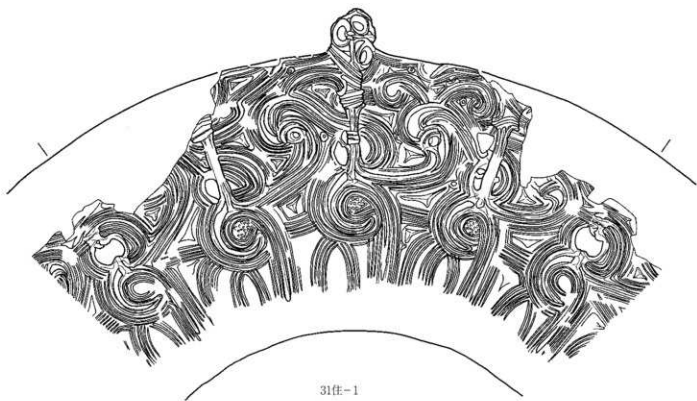


18住-6

第9図 遺物展開図(1)

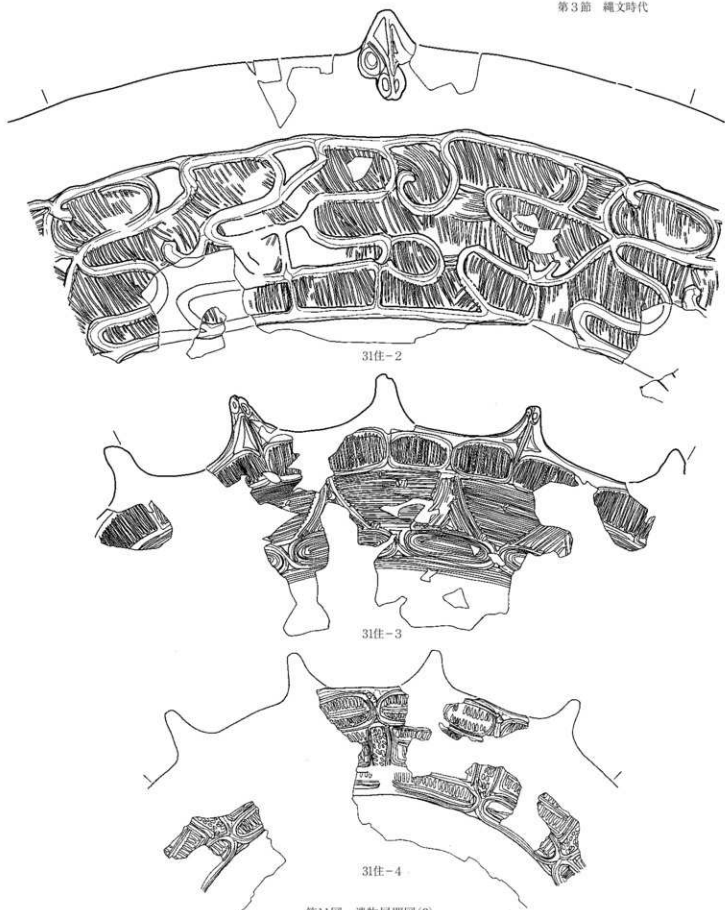


26住-1

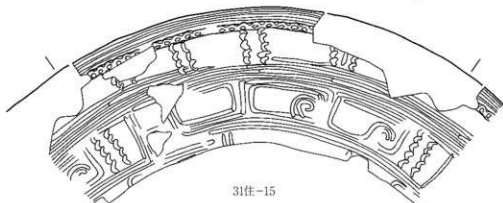
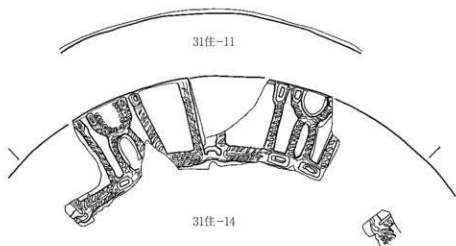
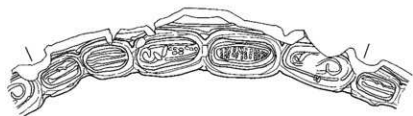
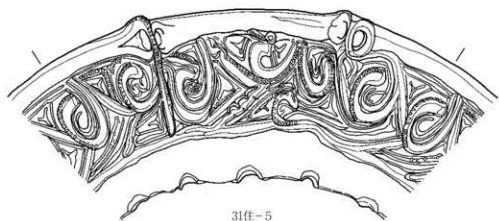


31住-1

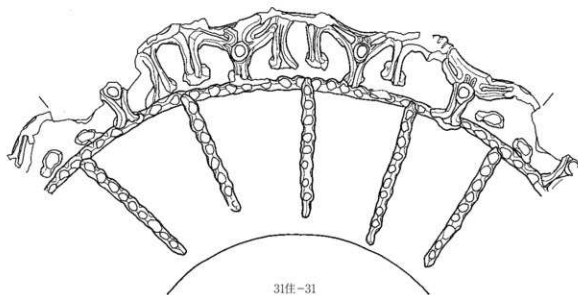
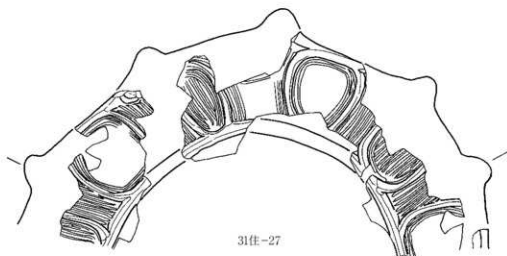
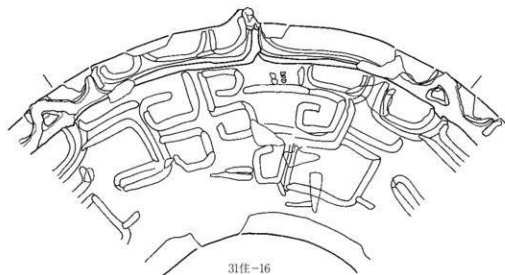
第10図 遺物展開図(2)



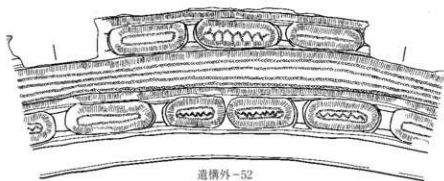
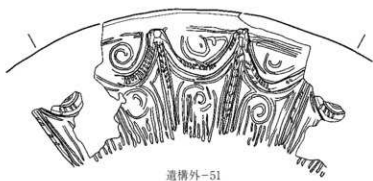
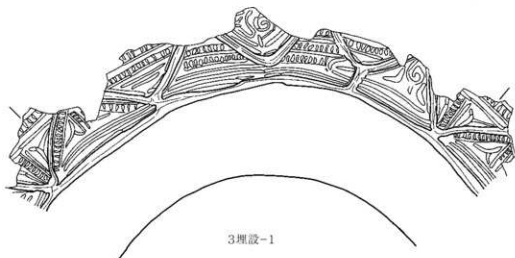
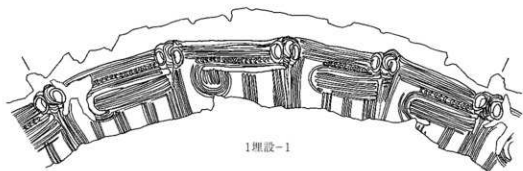
第11図 遺物展開図(3)



第12図 遺物展開図(4)



第13図 遺物展開図(5)



第14図 遺物展開図(6)

第1項 竪穴住居跡

3号住居

(図 15~17 PL 2・33)

位置 72区 C・D -7グリッド

形状 隅丸長方形

規模 長径 4.77m 短径 2.90m

深さ 45cm 面積 11.82㎡

壁 傾斜地に立地するため、崩れ等の影響からか南壁は明確に検出できなかった。西辺36cm、北辺63cmの壁高であった。

主軸方位 N-72°-E

炉 地床炉が中央部に位置し、焼土が残っていた。

規模は、(90×57×10)。

ピット 検出されなかった。

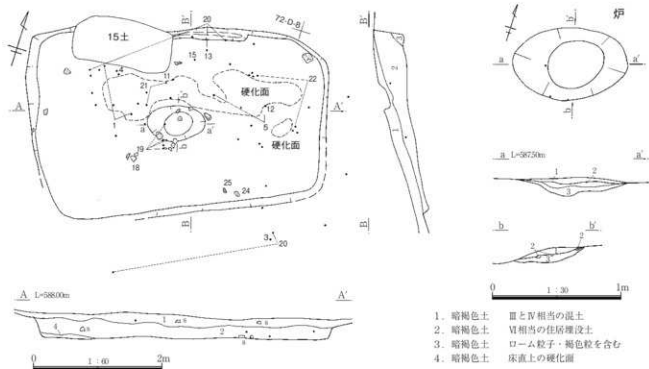
床面 炉周辺の斜面際に位置する北側部分で硬化面が明確に検出された。また、北壁際に一部であるが、上幅13cm、深さ20cm程度の周溝が検出された。

遺物出土状態 北部分で比較的多くの土器片が覆土から出土した。また、南部分では掘り方調査の際に打製石斧(No.25)と黒曜石の比較的大きな石核(No.24)が出土した。

概要と所見 当初、土器集中部としてベルトを設定し掘り下げて調査を進めた。その後の、15号土坑を調査する過程で北壁が明確に検出されたので、住居跡であることを想定して調査を行った。埋没状況は、自然埋没であるが、斜面の崩れの影響を多分に受けている。基本土層Ⅴまで掘り込んだ住居である。

炉周辺の床面から深鉢(No.19)が出土した。環状突起を備え、隆帯上にR.Lを施文後に沈線と連続刺穴を施していることから勝坂3式に比定される。

このことから本住居の年代は、縄文時代中期中葉の住居と考えられる。

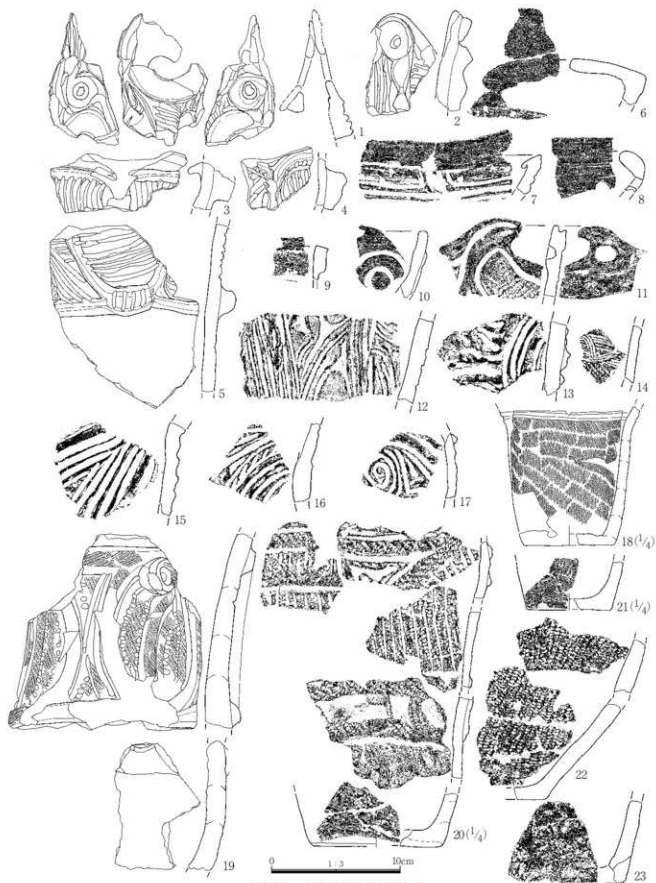


1. 暗褐色土 ⅢとⅣ相当の混土
2. 暗褐色土 Ⅴ相当の住居埋没土
3. 暗褐色土 ローム粒子・褐色粒を含む
4. 暗褐色土 床直上の硬化面

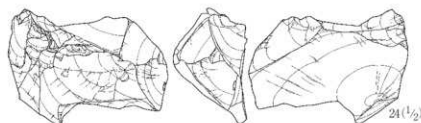
炉

1. 暗褐色土 Ⅴ相当、As-YPk粒を含む
2. にぶい-橙色土 黒褐色土を多く含む焼土
3. 黒褐色土 しまりに欠け、焼土粒を含む

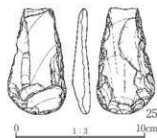
第15図 3号住居跡



第16図 3号住居跡出土遺物(1)



第17図 3号住居跡出土遺物(2)



7号住居

(図18・19 PL.2・33)

位置 72区 S・T-7・8グリッド

形状 円形

規模 長径 4.29m、短径(4.18)m

深さ 71.0cm、面積(14.72)㎡

壁 傾斜地に立地するため、崩れ等の影響からか南壁は明確に検出できなかった。また、北壁部は倒木等による攪乱を受けていた。

西辺31cm、東辺37cmの壁高であった。

主軸方位 N-35°-W

炉 検出されなかった。

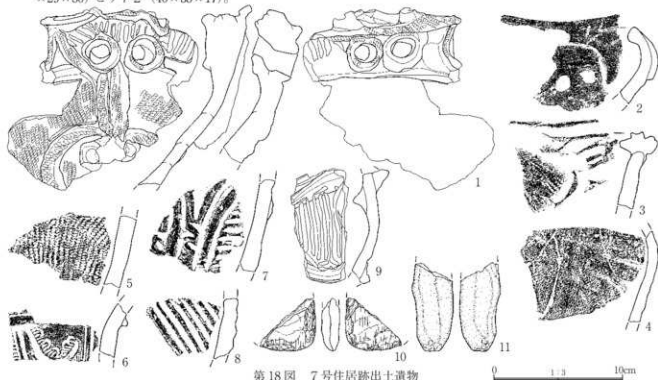
ピット 2基検出した。その規模は、ピット1 (34×29×50) ピット2 (40×35×17)。

床面 ピット2周辺では、硬化面が検出されたが、南側では床面が明確に検出できなかった。

遺物出土状態 北部分で比較的多くの土器片が覆土から出土した。また、住居範囲から僅かにずれずる東側からも、土器片が出土した。周辺に遺構がないことから、本住居の帰属遺物として取り扱った。

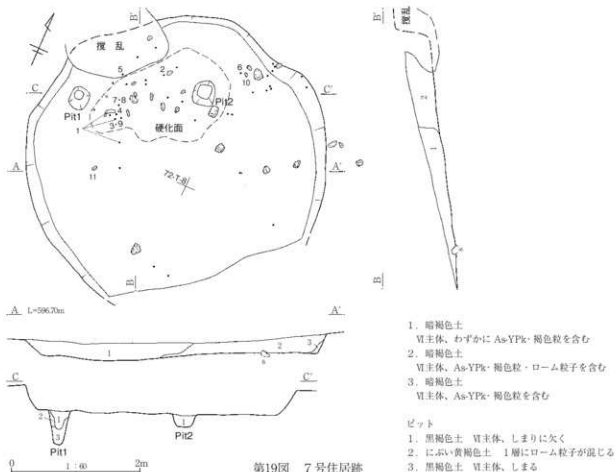
概要と所見 当初、土器集中部としてベルトを設定し掘り下げて調査を進めた。埋没状況は、自然埋没であるが、斜面の崩れの影響を多分に受けている。ピット2は柱穴としては掘り込みが浅い。

本住居は、出土遺物から縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



第18図 7号住居跡出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物



1. 暗褐色土
VI主体、わずかにAs-YPk・褐色粒を含む
2. 暗褐色土
VI主体、As-YPk・褐色粒・ローム粒子を含む
3. 暗褐色土
VI主体、As-YPk・褐色粒を含む

ピット

1. 黒褐色土 VI主体、しまりに欠く
2. にがい黄褐色土 1層にローム粒子が混じる
3. 黒褐色土 VI主体、しまる

10号住居

(図 20~22 PL 2・3・33・34)

位置 62区 P・Q-21・22グリッド 形状 円形

規模 長径 4.82m、短径 4.41m

深さ 72.0cm、面積 15.10㎡

壁 傾斜が終る地点に立地するためか、壁がしっかりとし残り。北辺42cm、南辺51cm、西辺56cm、東辺30cmの壁高であった。

主軸方位 N-36°-W

炉 径20cm前後の石で囲っているが、南側は石囲いが途切れる。炉内の掘り込みは浅く、焼土面が僅かに残っていた。規模は、(9.0×5.0×13.0)。

ピット 15基検出された。

その規模は、ピット1 (42×32×56) ピット2 (36×27×62) ピット3 (38×36×50) ピット4 (22×40×37) ピット5 (26×20×35) ピット6 (38×

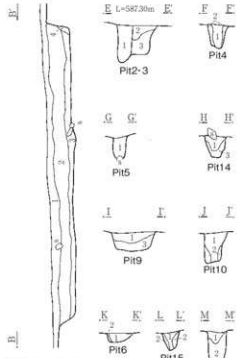
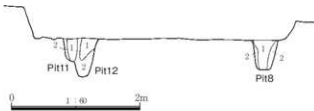
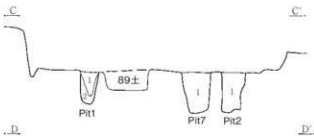
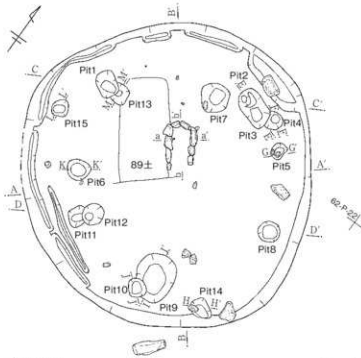
34×13) ピット7 (46×45×68) ピット8 (35×32×48) ピット9 (78×62×31) ピット10 (31×27×52) ピット11 (30×(22)×34) ピット12 (36×33×60) ピット13 ((18)×32×60) ピット14 (34×28×37) ピット15 (27×26×28)。

床面 部分的にはあるが周溝を検出し、南西部では二重に検出された。

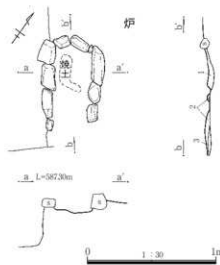
遺物出土状態 住居内から万遍なく土器片が出土した。また、北壁際の床面からは完形の石皿 (No.22) が出土した。

概要と所見 当初は北側のみの調査であったが、調査区を拡張しての全面調査となった。埋没状況は、自然埋没である。炉の石囲いが正面方向で途切れるのは、僅かな傾斜を考慮のことか。

本住居は、出土遺物から縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 V相当
2. 黒褐色土 Vとくずれた層の混土
3. 暗褐色土 V相当の住居埋設土
4. にぶい黄褐色土 Vにローム粒子を多量に含む
5. 黒褐色土 くずれた層



ピット 1

1. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒を含む
2. 褐色土 黒褐色土に褐色粒・ロームブロックを含む

ピット 2・3

1. 黒褐色土 黒褐色土に褐色粒をわずかに含む
2. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒を含む
3. 明黄褐色土 黒褐色土にローム粒子を多く含む

ピット 4～6

1. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒を含む
2. 黒褐色土 黒褐色土に褐色粒・ローム粒を含む

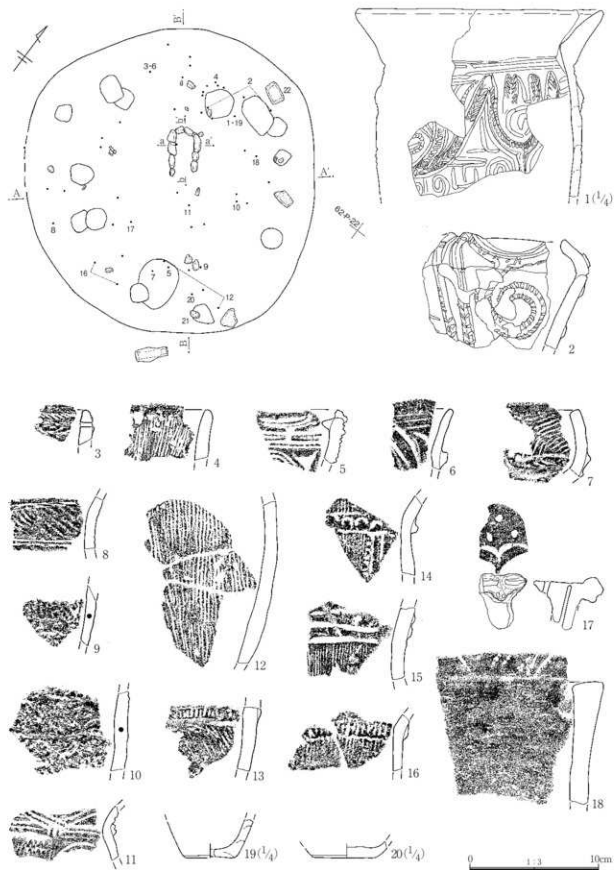
炉

1. 暗赤褐色土 堅くしまる焼土
2. 明黄褐色土 ローム粒子を主体とする
3. 黄褐色土 ローム

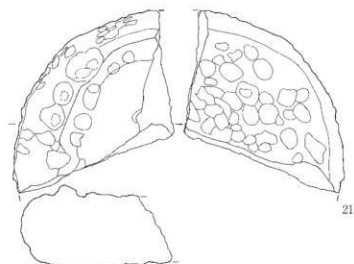
ピット 7～15

1. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒を含む
2. にぶい黄褐色土 黒褐色土に褐色粒・ローム粒を多く含む
3. 黒褐色土 黒褐色土に褐色粒をわずかに含む

第 20 図 10号住居跡



第21図 10号住居跡出土遺物(1)



第22図 10号住居跡出土遺物(2)

18号住居

(図9・23～26 PL.3・34・35)

位置 63区 A・B-11・12グリッド

形状 円形

規模 長さ(3.83)m、 短径 3.73m

深さ 47.0cm、 面積 9.83㎡

壁 基本土層Ⅶの縄文崩落土層まで掘り込んでいる。傾斜地に立地するため、崩れ等の影響からか南壁は明確に検出できなかった。また、東壁部は105号土坑によって切られていた。

北辺39cm、西辺45cmの壁高であった。

主軸方位 N-28°-W

炉 炉石として山石、川原石をそれぞれ1基ずつ使用しているが地床炉か。厚みに乏しいが、焼土面が確認された。規模は、(66×55×6)。

柱穴 検出されなかった。

床面 明確な床面は検出されなかったが、炉石及び焼土面の検出位置を根拠に床面を設定した。

遺物出土状態 上面の段階から勝取3式や焼町土器等の土器片が集中して出土した。床想定面からも同

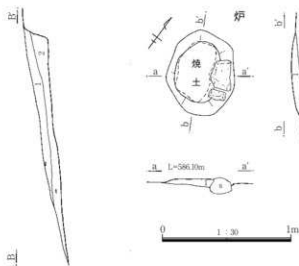
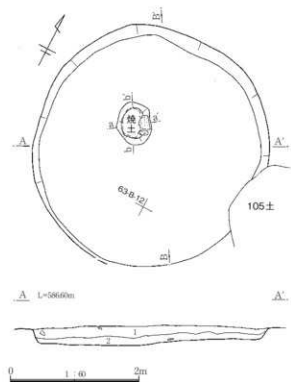
じような土器が出土している。

詳細な出土状態については、遺物出土状態図を参照していただきたい(第24図)。

概要と所見 埋没状況は、自然埋没であるが、斜面の崩れの影響を多分に受けている。出土遺物が豊富であることがこの住居跡の特徴と言える。

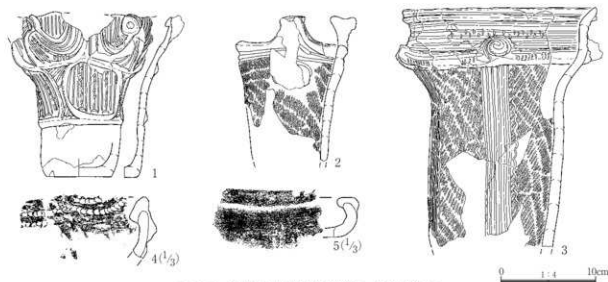
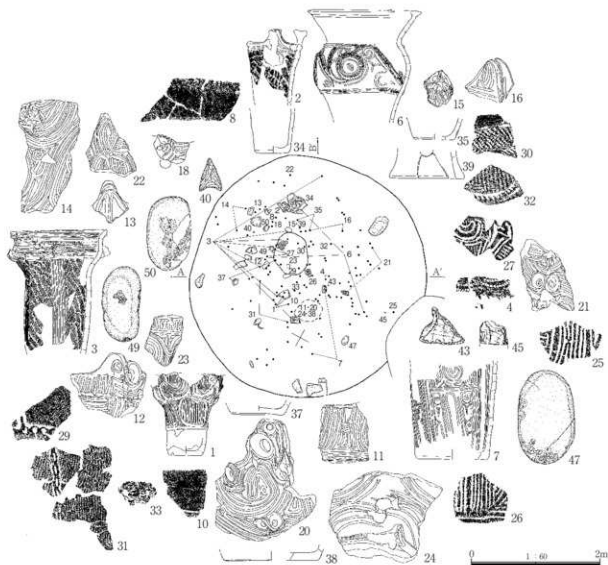
床面からは深鉢(No.1)が出土している。これは、単位波状口縁と想定され、口縁部文様帯は波頂部より垂下すると想定される隆帯と横位隆帯で区画され、区画内に環状突起を繋ぐ隆帯貼付後、半截竹管状工具による平行沈線を施した後、さらに沈線上に連続刺突を施している。また、胴部文様帯は横位隆帯・弧状に垂下する隆帯により楕円形に区画され、楕円形区画内に半截竹管状工具による縦位平行沈線後沈線上に連続刺突・沈先端部に筒状工具による幅広刺突を施しており、楕円形の区画間の空白部には半截竹管状工具による斜位平行沈線が施されている。

本住居は、出土遺物から縄文時代中期中葉の住居と考えられる。

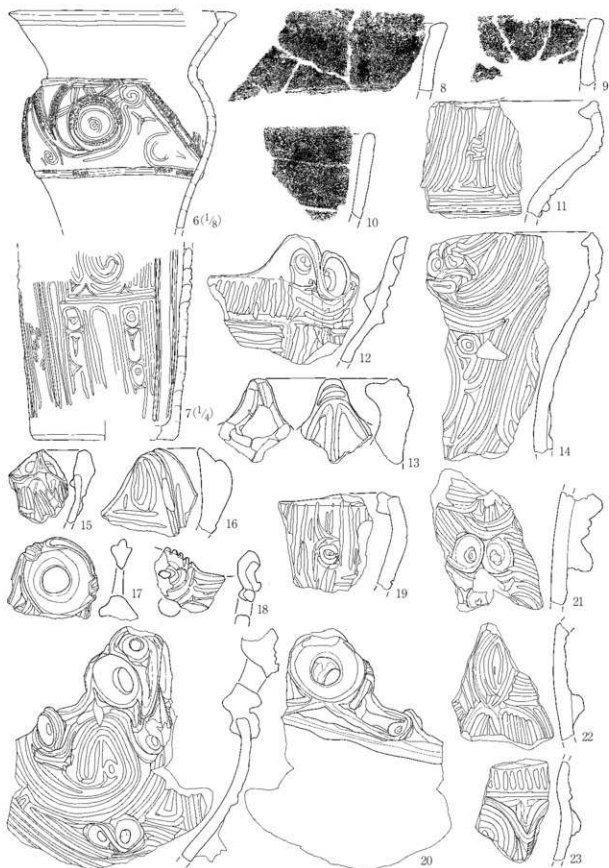


1. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒・ローム粒・As-YPk粒を含む
2. 暗褐色土 黒褐色土に褐色粒・ローム粒・As-YPk粒を含む焼土
1. におい・橙色土 黒褐色土を多く含む焼土

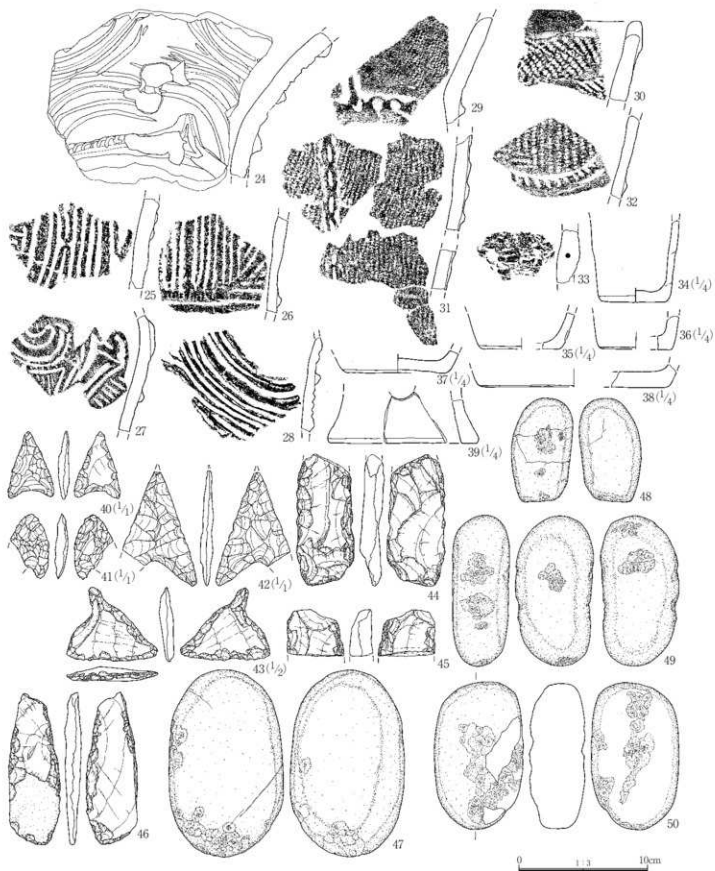
第23図 18号住居跡



第24図 18号住居跡遺物出土状態・出土遺物(1)



第25図 18号住居跡出土遺物(2)



第26図 18号住居跡出土遺物(3)

24号住居

(図27・28 PL.4・35・36)

位置 63区 B-10グリッド

形状 円形か

規模 長さ 4.16m、短径(3.84)m、
深さ 31.0cm、面積 11.60㎡

壁 北壁の一部以外は、明確に検出できなかった。
北辺31cmの壁高であった。

主軸方位 N-49°-E

炉 比較的大ぶりの山石3点で構築される。掘り込みはごく浅いが、炉内が焼けている。規模は、(61×54×5)。

ピット 2基検出した。その規模は、ピット1 (44×35×41) ピット2 (44×33×29)。

床面 北西部部分のローム面では若干の硬化面が検出された。

遺物出土状態 比較的多くの土器片が出土しているが、分層不能であったので覆土一括で取り上げた。

概要と所見 遺物集中部として住居を想定していたが、床面や壁の立ち上がりがはっきりしなかったの

で、遺物上げをして下面の調査に移行した。

埋没状況は、自然埋没と思われる。下面より170号土坑が検出された。106・141号土坑よりは後出である。

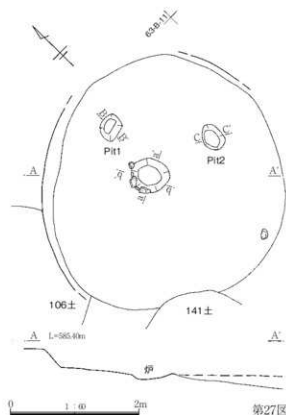
出土位置は覆土扱いであるが、次のような土器が出土している。

深鉢 (No.9) は、屈曲部による分帯がなされており、上位は2条隆線による円形あるいは渦巻状意匠を施すタイプであると考えられる。下位には同隆線による方形状区画文が構成されている。隆線には沈線が沿い、区画内は無文である。

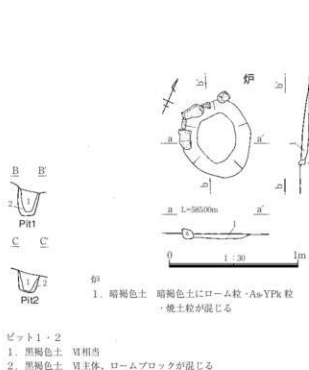
浅鉢 (No.1) は、隆帯により区画文が構成されており、縦位隆帯に楕円状意匠が、横位隆帯に短沈線が施される。区画内は縦位沈線が充填されている。

深鉢 (No.8) は、口唇部に隆線を巡らし、以下に横位沈線群を口縁部文様帯に充填する。沈線間を交互刺突文で「コ」の字文状効果としている。

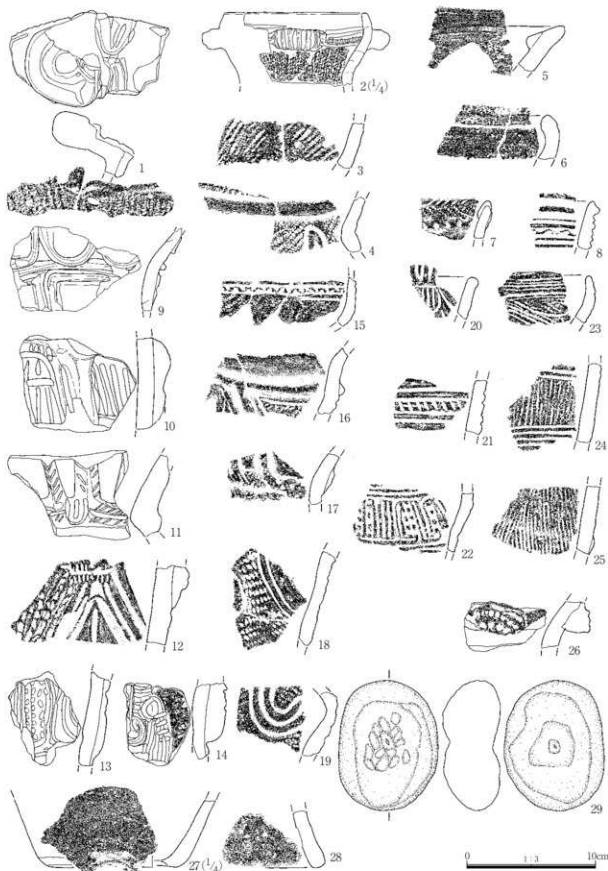
以上のような出土遺物から、本住居は、縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



第27図 24号住居跡



ピット1・2
1. 黒褐色土 Ⅴ相当
2. 黒褐色土 Ⅴ主体、ロームブロックが混じる



第28图 24号住居跡出土遺物

26号住居

(図10・29・30 PL.4・36)

位置 62区 Q・R-20・21グリッド

形状 円形 (北西側およそ半分を調査)

規模 長さ 5.00m、 短径(3.06)m

深さ 35.0cm、 面積(11.03)㎡

壁 北東部の壁は10号住居、109号土坑との重複で検出できず。西辺37cm、南西辺31cmの壁高であった。

主軸方位 N-53°-E

炉 現況は床面を掘り込んだ地床炉であった。しかし、掘り方調査の結果を検討すると石が敷かれた痕跡も見受けられるが、詳細は不明。底面は焼土化した範囲が確認できる。規模は、(<124> × 112 × 14)。

ピット 3基検出した。

その規模は、ピット1 (47×46×50) ピット2 (43×43×44) ピット3 (58×44×44)。

床面 基本土層Ⅶの縄文崩落土層を掘り込み面とし、その下層を掘り抜き、漸移層もしくはローム層

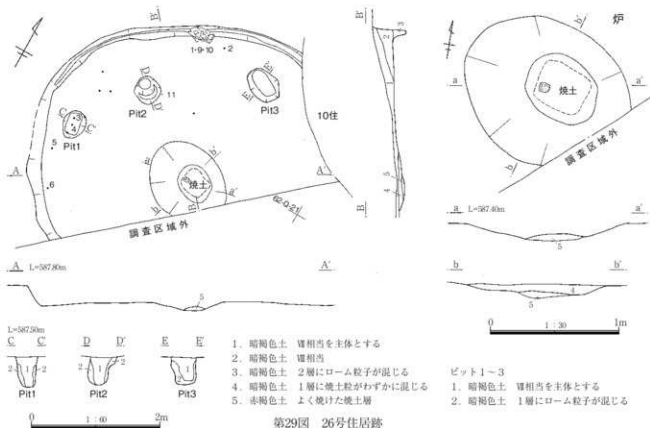
を床面とする。炉周辺では、若干の硬化面が観察できた。周溝は、奥手の壁際を中心に10cm程度の深さで明確に検出された。

遺物出土状態 奥手の北西部壁際でまとまった数の土器片が出土した。また、ピット1が検出された地点の住居覆土からは、前期相当の土器片が散見された。

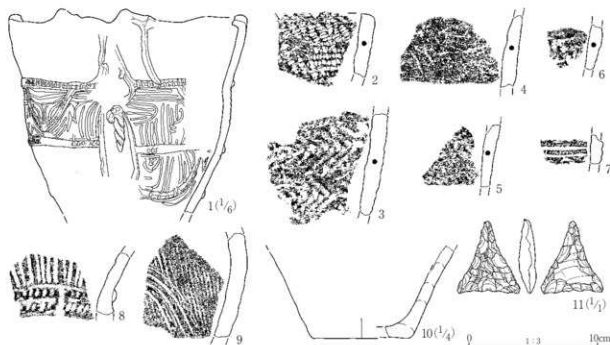
概要と所見 下面の調査でプランを検出した。セクション断面から三角堆積が観察でき、斜面の崩れの影響を多分に受けているが典型的な自然埋没である。南東側は今回調査区外であるため未調査である。

北西部壁際でまとまった数の土器片は、接合作業の結果、(No.1)として掲載されている。これは深鉢胴部片で、口縁部把手下位に横位の隆帯による胴部文様帯が区画されており、区画内は刻みを有すV字状文、沈線による横位、縦位沈線さらには三叉文等で充填されている。

以上のような出土遺物から、本住居は、縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



第29図 26号住居跡



第30図 26号住居跡出土遺物

28号住居

(図 31~34 PL 4・5・36・37)

位置 62区 W・X-7-9 Y-8・9グリッド

形状 柄鏡形敷石住居

規模 長さ(8.36)m、短径 6.24m

深さ 53.0cm、面積(321.3)m²

壁 円形部は、北辺57cm、西辺12cm、東辺3cmの壁高であった。南壁、張出部については明確に検出できなかった。

主軸方位 N-21°-W

炉 東側部分に比較的大ぶりの平石3点が、直線上に据え付けられる。掘り込みは浅いが、炉内が焼けている。規模は、(92×72×10)であった。

使用面下には、さらに焼土面が広がる。

ピット 11基検出した。

その規模は、ピット1 ((46)×62×92) ピット

2 (53×49×78) ピット3 (68×64×60) ピット

4 (51×44×72) ピット5 (48×40×70) ピット

6 (64×46×58) ピット7 (35×34×55) ピット

8 (64×54×41) ピット9 (69×60×41) ピット10

(82×58×50) ピット11 (32×26×41)。

床面 部分的にはあるが、北壁際を中心に床に平石が敷かれる。また、壁より10cmほど内側には、環礫部がある。礫は通常は「玉石」と呼ばれる川原石を用いるが、ここでは約半数を山石が占めた。また、対ピット9・10に接する位置で残存状態はよくないが、石囲い施設が検出された。

遺物出土状態 円形部を中心に多数の遺物が出土している。出土位置も床面付近からほとんどであり、本住居に伴う遺物と考えられる。

詳細な出土状態については、遺物出土状態図を参照していただきたい(第31図)。

概要と所見 埋没状況は、自然埋没であるが、斜面の崩れの影響を多分に受けている。また、重複する遺構はなかった。おもな出土土器とその様相を以下に示す。

深鉢 (No.1) は、口縁下に横位の隆帯、円形文を8箇所に付し、そこから隆帯を垂下させて胴部を区画している。区画内には櫛状工具による集合条線を帯状に2単位垂下させている。

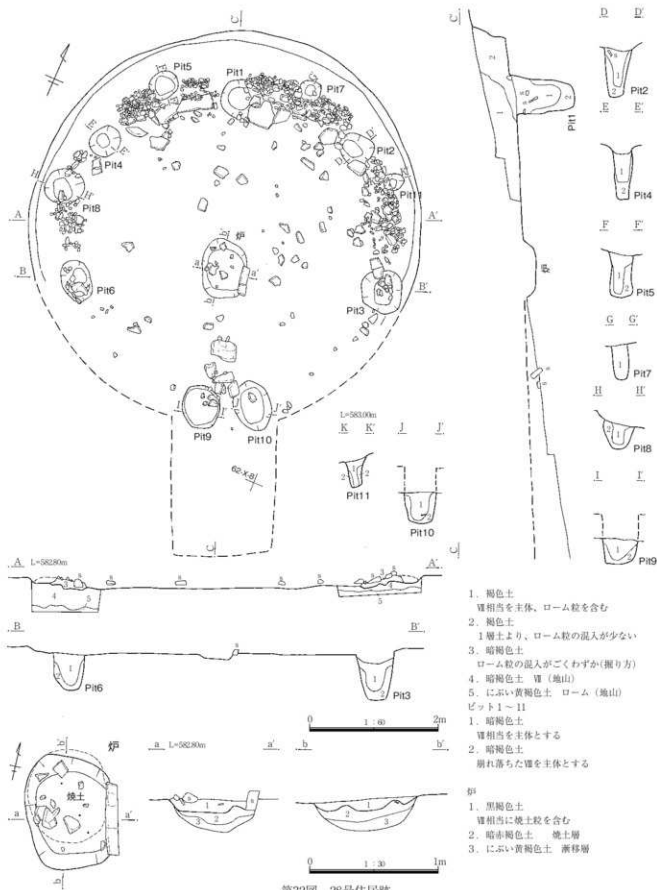
第2章 検出された遺構と遺物

また、深鉢 (No2) は、口縁部は直立し、以下に横位隆帯を巡らし、口縁部・体部ともに残存部に無文のタイプの土器と考えられる。

以上のような様相の出土遺物から、本住居は縄文時代後期 (称名寺期) の住居と考えられる。



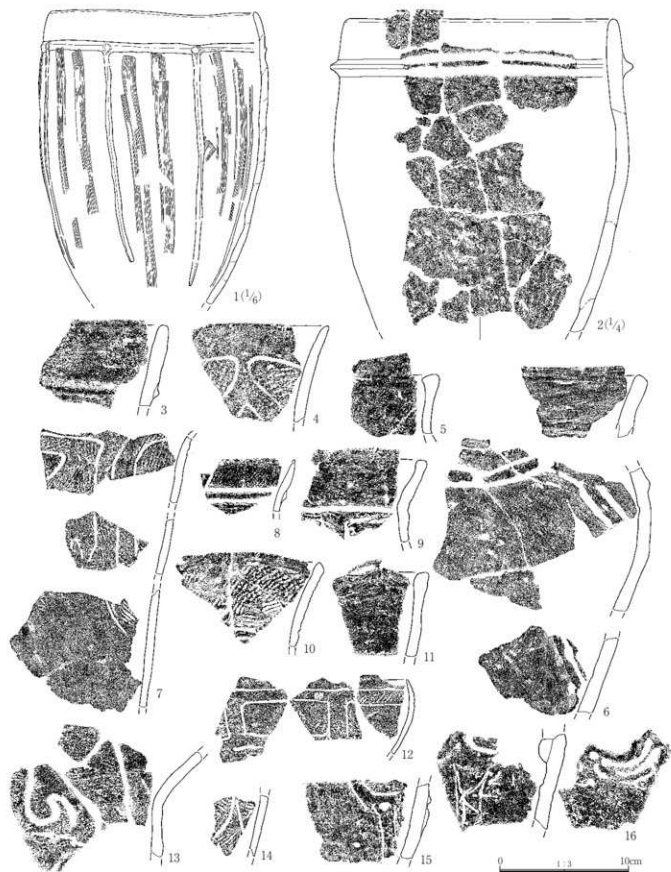
第31図 28号住居跡遺物出土状態



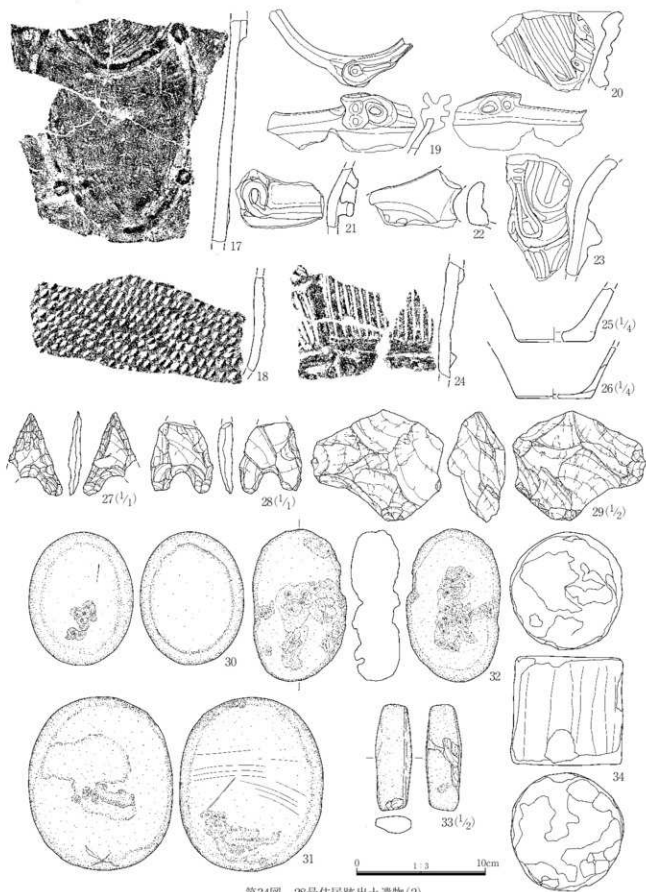
1. 褐色土
Ⅴ相当を主体、ローム粒を含む
2. 褐色土
Ⅰ層土より、ローム粒の混入が少ない
3. 暗褐色土
ローム粒の混入がごくわずか(振り方)
4. 暗褐色土 Ⅴ (地山)
5. にぶい黄褐色土 ローム (地山)
- ピット1~11
1. 暗褐色土
Ⅴ相当を主体とする
2. 暗褐色土
崩れ落ちたⅤを主体とする

- 炉
1. 黒褐色土
Ⅴ相当に焼土粒を含む
2. 暗赤褐色土 焼土層
3. にぶい黄褐色土 漸移層

第32図 28号住居跡



第33図 28号住居跡出土遺物(1)



第34图 28号住居跡出土遺物(2)

31号住居

(図 10-13、35-44 PL.5・6・37-41)

位置 62区 Y-8・9、63区 A-8・9グリッド

形状 円形

規模 長さ 5.00m、短径 4.12m、

深さ 79.0cm、面積 16.14㎡

壁 傾斜地に立地するため、崩れ等の影響からか南壁は明確に検出できなかった。北辺69cm、西辺42cm、東辺20cmの壁高であった。

主軸方位 N-30°-W

炉 地床炉が中央部に位置し、焼土面が残る。規模は、(96×59×9)。

ピット 3基検出した。

その規模は、ピット1 (33×31×56) ピット2 (26×24×33) ピット3 (30×27×22)。

床面 基本土層Ⅶの縄文崩落土層を掘り込み、その下層を床面としている。著しい硬化面は観察できなかったが、炉石及び焼土面の検出位置を根拠に床面を設定した。

遺物出土状態 非常に多くの遺物が検出され、床面近くでは完形に近い土器も多い。土器は、三原田式、焼町土器、勝坂3式を中心に出土している。石器についても打製石斧や打製石鏃を中心に出土している。

出土状態の詳細については、遺物出土状態図を参照していただきたい。

概要と所見 当初、土器集中部としてベルトを設定し掘り下げて調査を進めた。埋没状況は、自然埋没であるが、斜面の崩れの影響を多分に受けている。また、重複する遺構はなかった。おもな出土土器とその様相を以下に示す。

深鉢 (No.1) は、平縁口縁に突起が4単位付されるものと想定される。突起の先端は環状突起の集合で作られ、胴部中位までコイル状に飾られながらアーチ状に垂下する。文様は口縁部から底部まで一連の文様で描かれ、上半は環状突起を繋ぐ斜行する隆帯に沿って半載竹管状工具による平行沈線を施

し、空白部を三叉文・円形の印刻により飾る。下半は4単位の突起より垂下する橋状把手下に「9」の字状の隆帯を貼付し、空白部を三叉文・刺突文・半載竹管状工具による平行沈線を「ハ」の字状・横位・隆帯に沿って施されている。

深鉢 (No.2) は、平縁口縁に孔が穿たれた突起が付される。突起の内・外面は丸棒状工具による沈線により飾られ、口縁部と胴部は丸棒状工具による横位沈線・刻みが施された低い隆帯により隔されている。横位沈線は隆帯頂部とその脇に施され、口縁部文様帯には丸棒状工具による縦位沈線が施されている。また、胴部文様帯には単節L Rが縦位に施されるのが特徴である。

深鉢 (No.31) は、4単位波状口縁。口縁部と胴部は指頭押圧が施された横位隆帯により隔される。口縁部文様帯には連続する橋状把手が4単位付され、把手は環状突起・丸棒状工具による深い沈線により飾られる。胴部文様帯には波頂部下で垂下する指頭押圧が施された隆帯により区画され、区画内に無節Lが斜位に施されている。

上面からの出土であるが、深鉢 (No.28) は優勝カップのようなユニークな器形をした土器である。平縁口縁に2対の突起が付されるものと想定され、突起は中空状を呈し、丸棒状工具による沈線・刻みにより飾られている。口縁部文様帯には中空状の突起を繋ぐ突起が付され、突起はコイル状・渦巻状に飾られる。頸部から胴部文様帯は、単節L Rを斜位に施した後、丸棒状工具による2条1組の沈線により長方形の区画を多段に設けている。胴部と底部は横位隆帯により隔され、底部文様帯には単節L Rが斜位に施されている。

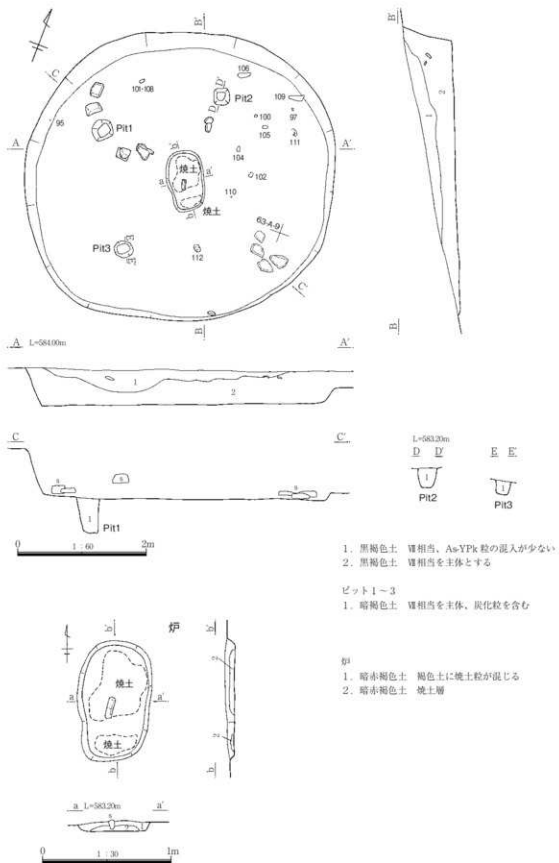
また、No.6-8のような台付深鉢と思われる土器も出土している。石器については、打製石斧を中心に多くの石器が出土し、他の住居に比べ、断然多い。

出土遺物から本住居跡は、縄文時代中期中葉の所産と考えられる。

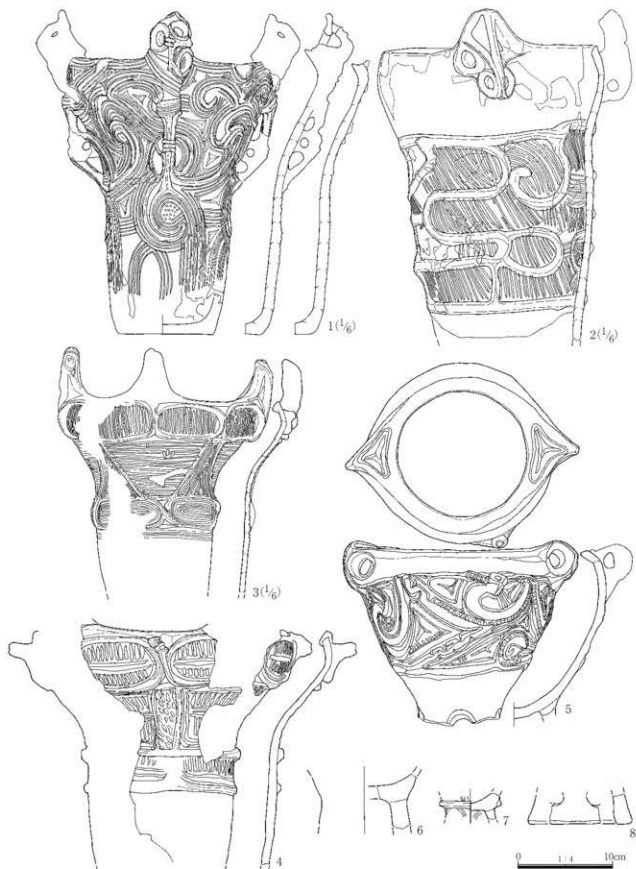


第35図 31号住居跡遺物出土状態

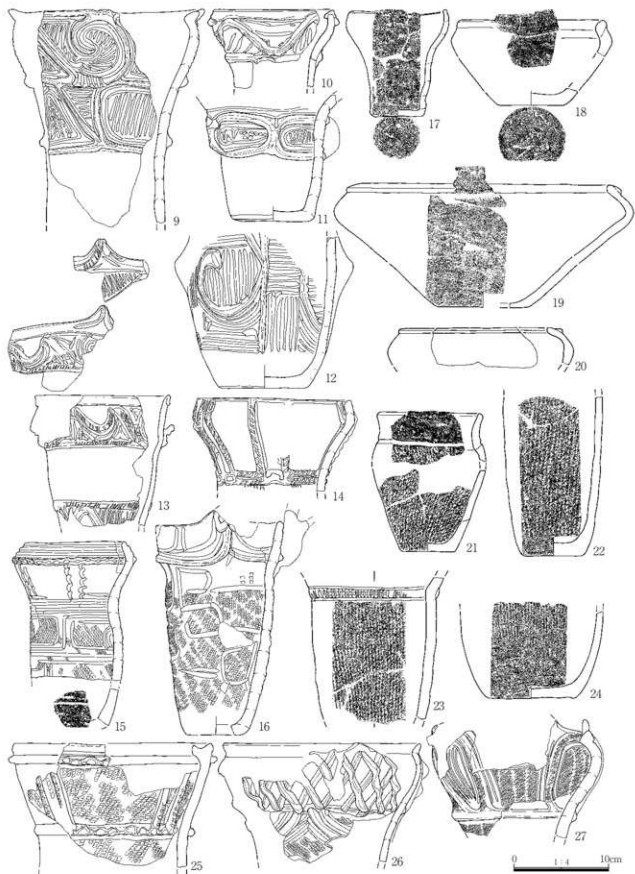
第2章 検出された遺構と遺物



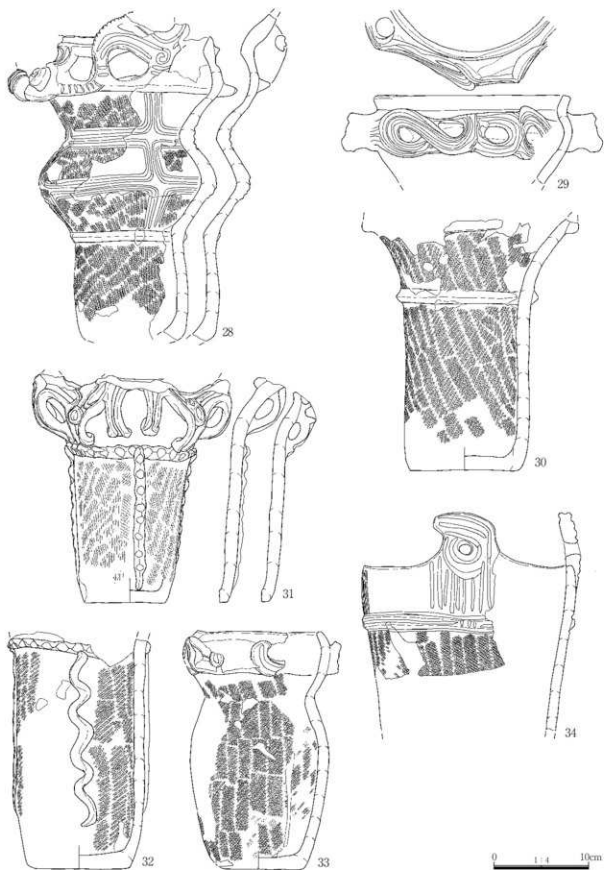
第36図 31号住居跡



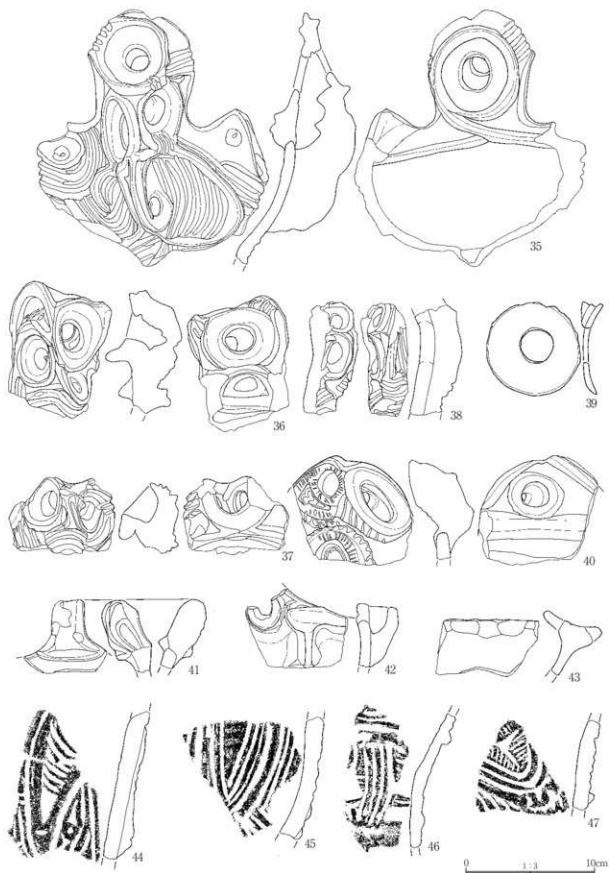
第37图 31号住居跡出土遺物(1)



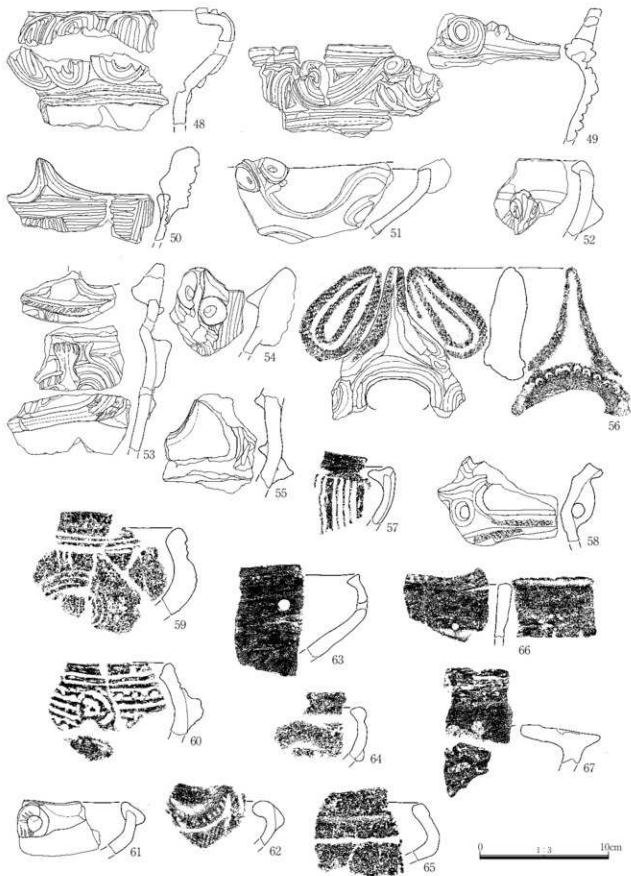
第38図 31号住居跡出土遺物(2)



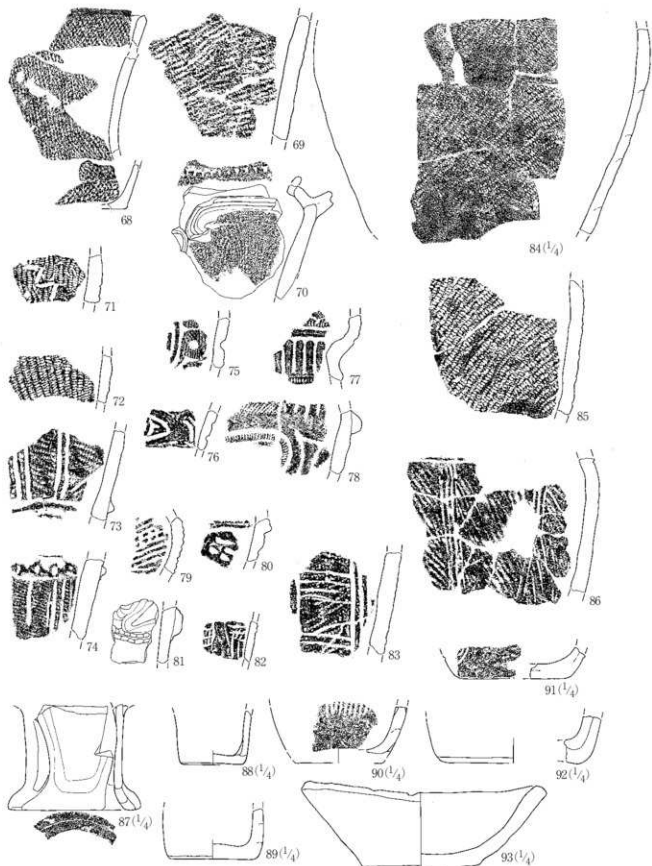
第39図 31号住居跡出土遺物(3)



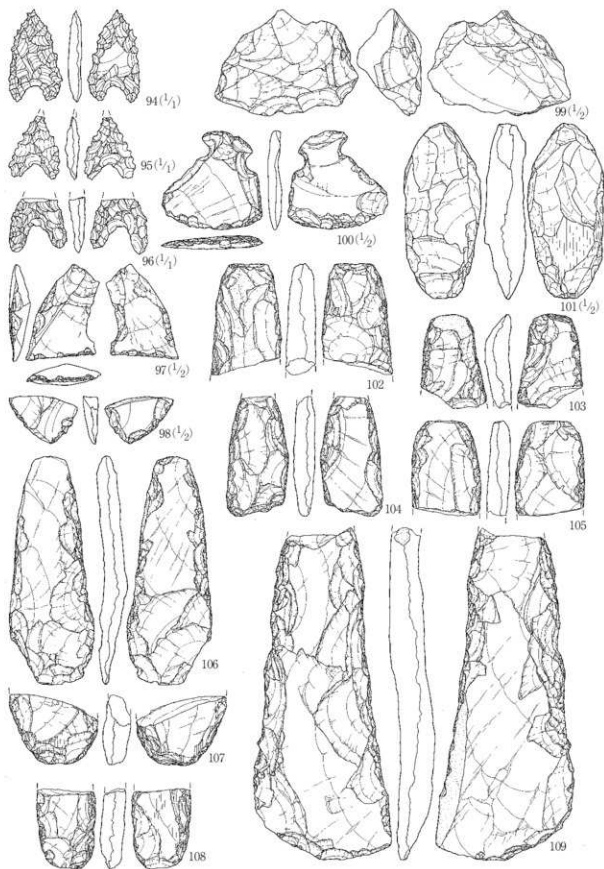
第40図 31号住居跡出土遺物(4)



第41图 31号住居跡出土遺物(5)

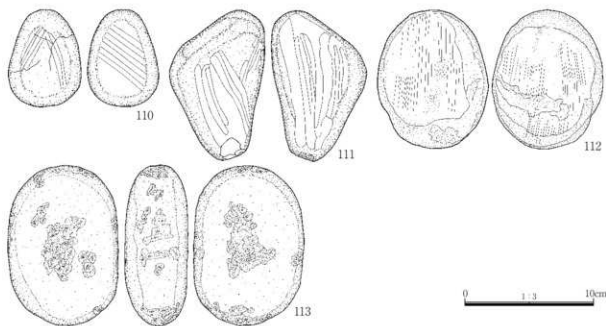


第42図 31号住居跡出土遺物(6)



第43図 31号住居跡出土遺物(7)

0 1 10cm



第44図 31号住居跡出土遺物(8)

34号住居

(図45 PL6・7・41)

位置 62区 X-15・16 W-16グリッド

形状 円形

規模 長径 4.18m、短径(3.96)m、
深さ 42.0cm、面積 11.40㎡

壁 北辺58cm、西辺28cm、東辺10cmの壁高であった。
なお、南壁については、調査の過程で削平された。

主軸方位 N-28°-W

炉 10cmに満たない掘り込みの石囲い炉。小振りの石10個を楕円形に列べている。底面は比較的良好に焼け、焼土化している。規模は、(74×50×9)。

ピット 3基を検出した。ピットの規模は、ピット1 (59×59×66) ピット2 (47×42×56) ピット3 (41×37×59)。

床面 基本土層Ⅶの縄文崩落土層を床面とする。硬化面は検出できなかったが、炉石及び焼土面の検出位置を根拠に床面を設定した。

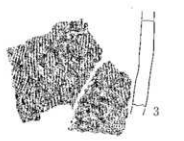
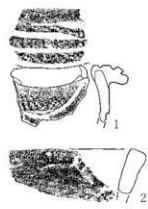
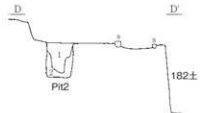
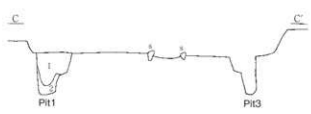
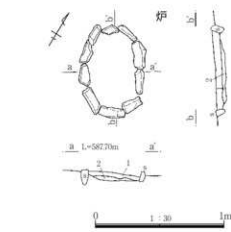
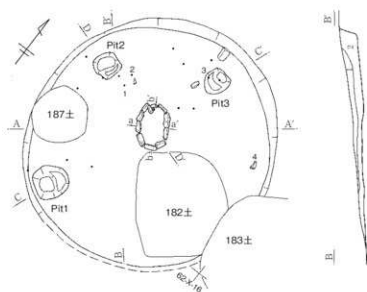
遺物出土状態 出土遺物は、少ないが、北部で数点の遺物が出土した。

概要と所見 183号土坑の調査過程で壁の立ち上がりが認められ、円形の住居プランについても確認された。柱を抜き取った痕跡がうかがえるような形状をしたピットをもつ住居であった。埋没状況は、斜面の崩れの影響を多分に受けたものである。また、重複関係は、182・183・187号土坑に切られており、それらより後出である。掘り方については不明瞭である。ピット3については、掘り上がりが他のピットと同様な形状であった。

深鉢 (No.1) は、口唇部の隆帯が強く突出し、中位に沈線が施されている。口縁部には平行沈線による連弧文が配され、地文及び隆帯上に横位にRLが施されている。

また、浅鉢 (No.2) は、強く開く口縁部を特徴とし、口唇部は僅かに肥厚する。内外面とも丁寧な研磨が施されている。

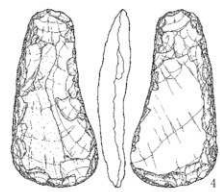
いずれもやや高い位置からの出土であるが、以上のような出土遺物から、本住居は縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



- 印
1. 暗褐色土 暗褐色土にローム粒がわずかに混じる
 2. 暗赤褐色土 焼きの悪い焼土

1. 暗褐色土 Ⅱ相当を主体、ローム粒が混じる
2. 暗赤褐色土 Ⅰ層より、ローム粒の混入が少ない

- ピット1・2
1. 暗褐色土 Ⅱ相当を主体とする
 2. 黒褐色土 ぐずれたⅡを主体とする



第45図 34号住居跡・出土遺物

36号住居

(図46~49 PL.7・42・43)

位置 62区 V・W-15・16グリッド

形状 円形

規模 長径 5.04m、短径 4.71m、
深さ 58.0cm、面積(15.98)㎡

壁 西側の壁は土坑との重複でほとんど検出できなかったが、土坑内面に壁の立ち上がりが辛うじて確認できた。北辺50cm、東辺20cmの壁高であった。なお、南壁については、削平されていた。

主軸方位 N-33°-W

炉 主軸方向に長い長方形の石囲い炉。手前に焼けた面が広がる。規模は、(72×47×13)。

ピット 3基検出した。規模は、ピット1(45×46×46)ピット2(50×44×42)ピット3(45×44×64)。

床面 基本土層Ⅶまでを僅かに掘り込み、床面としている。掘り方調査時に床下から190号土坑が検出された。

遺物出土状態 比較的多くの土器片が東壁付近から

出土したが、床面近くの高さからの遺物出土量はやや少ない。

概要と所見 円形の遺物集中範囲が確認でき、住居を想定し調査を始める。埋没状況は、自然埋没であると思われる。掘り方については明確に検出できなかった。

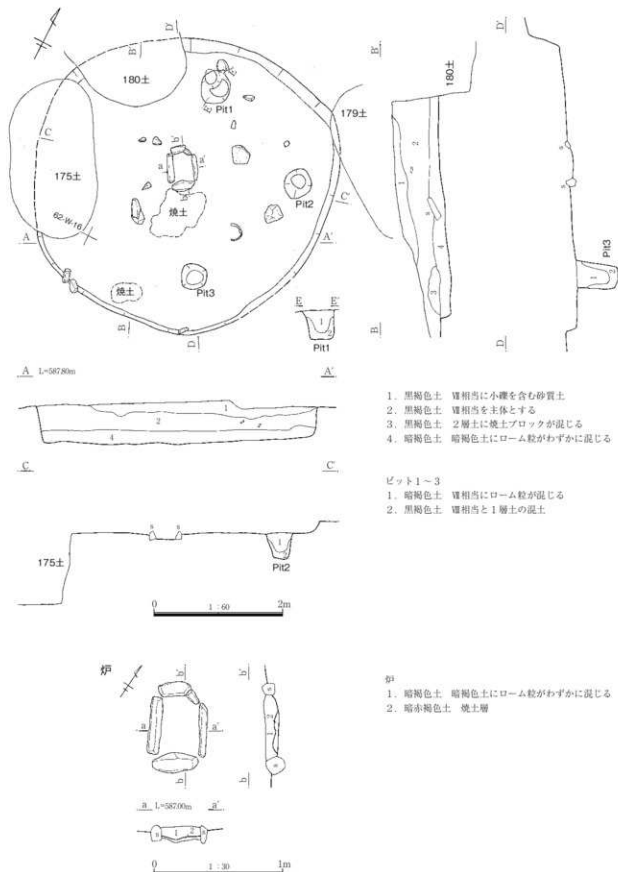
重複関係は、175・179・180号土坑に切られる。その他、36号住居ピット3に切られる188号土坑、36号住居床下から検出された190号土坑がある。

床面から出土した深鉢(No.1)は、平縁口縁と想定される。口縁部は無文で、口縁部と胴部を丸棒状工具による横位沈線で隔っている。胴部文様帯には単筋RLを斜位に施文後、丸棒状後部による横位・弧状沈線を施している。また、東壁付近から検出された大型の深鉢底部(No.37)は、比較的強く開く胴部下形状態。内外面とも器壁は被熱により荒れていて、残存部に限っては無文である。

本住居の年代は、出土遺物から縄文時代中期中葉の住居と考えられる。



第46図 36号住居跡遺物出土状態



1. 黒褐色土 竇相当に小礫を含む砂質土
2. 黒褐色土 竇相当を主体とする
3. 黒褐色土 2層上に焼土ブロックが混じる
4. 暗褐色土 暗褐色土にローム粒がわずかに混じる

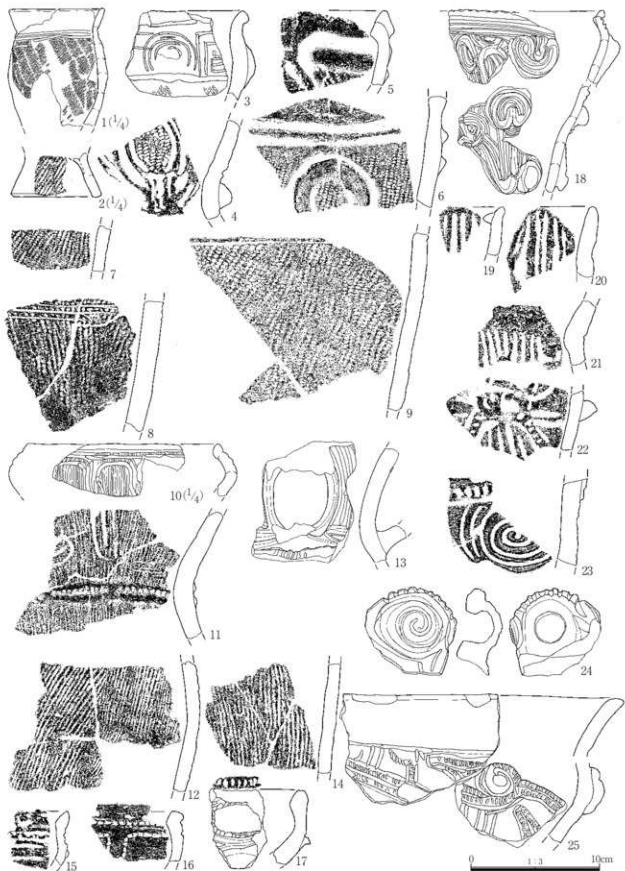
ピット1～3

1. 暗褐色土 竇相当にローム粒が混じる
2. 黒褐色土 竇相当と1層土の混土

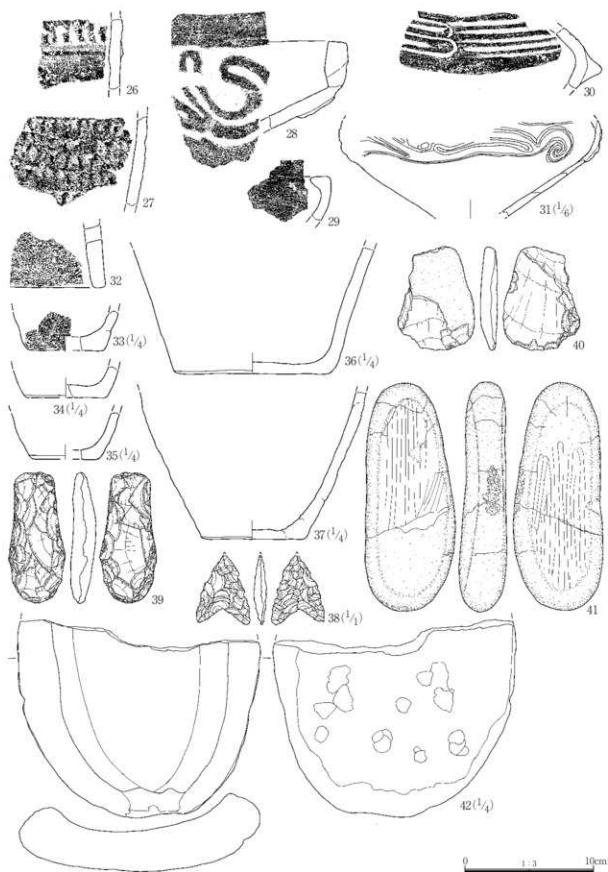
炉

1. 暗褐色土 暗褐色土にローム粒がわずかに混じる
2. 暗赤褐色土 焼土層

第47図 36号住居跡



第48図 36号住居跡出土遺物(1)



第49図 36号住居跡出土遺物(2)

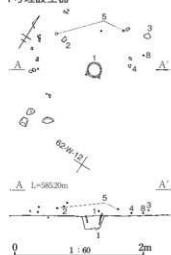
第2項 埋設土器

埋設土器は、調査区南側斜面尻のごく近い範囲で3基検出した。いずれも埋設土器に伴うような他の遺構は見受けられなかったが、周囲にはこの時期の住居が検出されている。埋設されていた土器の時期は、いずれも縄文時代中期中葉である。

1号埋設土器 (図14・50 PL7・43)

62区-W-12グリッドに位置する。深鉢 (No.1) を正位状態に埋設する。口縁部から胴部にかけてが一周し、正位に据えられていた。底部については出土しなかった。掘り方は広く深めに掘り込んであった。周辺からも比較的多くの遺物が出土した。

1号埋設土器



1号～3号埋設土器埋姿

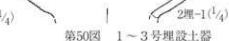
1: 暗褐色土 貫相当を主体、やや黒色を帯びる



2号埋設土器



3号埋設土器

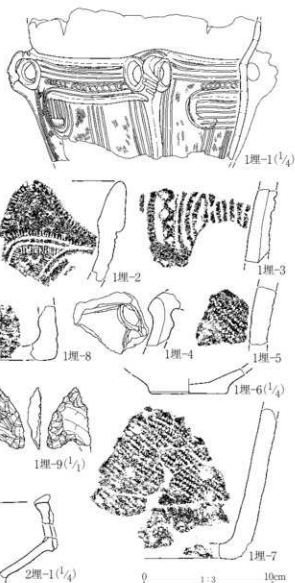


2号埋設土器 (図50 PL7・43)

62区-W-11グリッドに位置する。深鉢 (No.1) を正位状態に埋設する。同一個体の深鉢が、割れた状態で折り重るように出土し、正位に据えられていた。掘り方は土器の形状に掘り込んであった。

3号埋設土器 (図14・50 PL7・43)

62区-W-10グリッドに位置する。深鉢 (No.1) を正位状態に埋設する。深鉢の上半部を欠くが、一周した状態で正位に据えられていた。掘り方は土器の形状に掘り込んであった。



第50図 1～3号埋設土器

第3項 土坑

(図 51・52 PL 43)

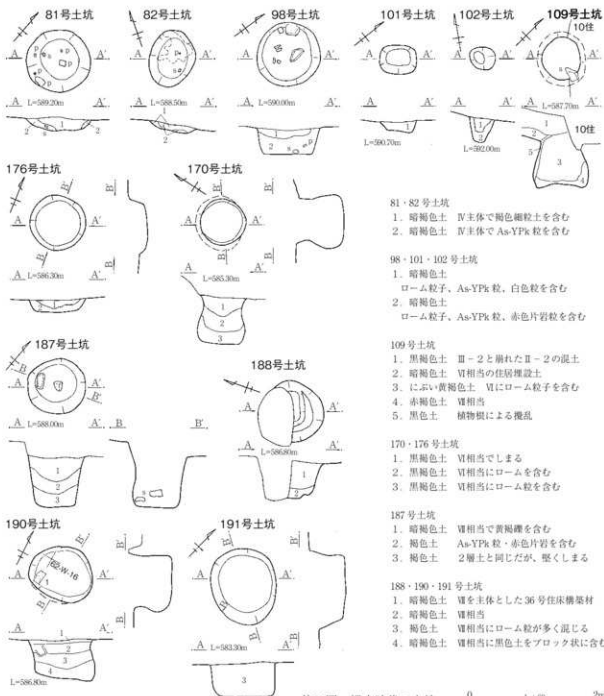
今回報告する土坑は、12基である。その中で明らかに縄文時代のものと考えられるのは、次の4基である。

170号土坑は、24号住居床下より検出され、縄文中期の土器片を多数出土する。187号土坑は、34号住居覆土から掘り込み、底面から石皿が出土した。

188号土坑は、36号住居ピット3に切られ、深鉢胴部を伴う。190号土坑は、36号住居床下より検出されたフラスコ状土坑で、摺糸土器底部を伴う。

その他の土坑は遺物を伴わなかったが、覆土等の観察から縄文時代の土坑として報告する。

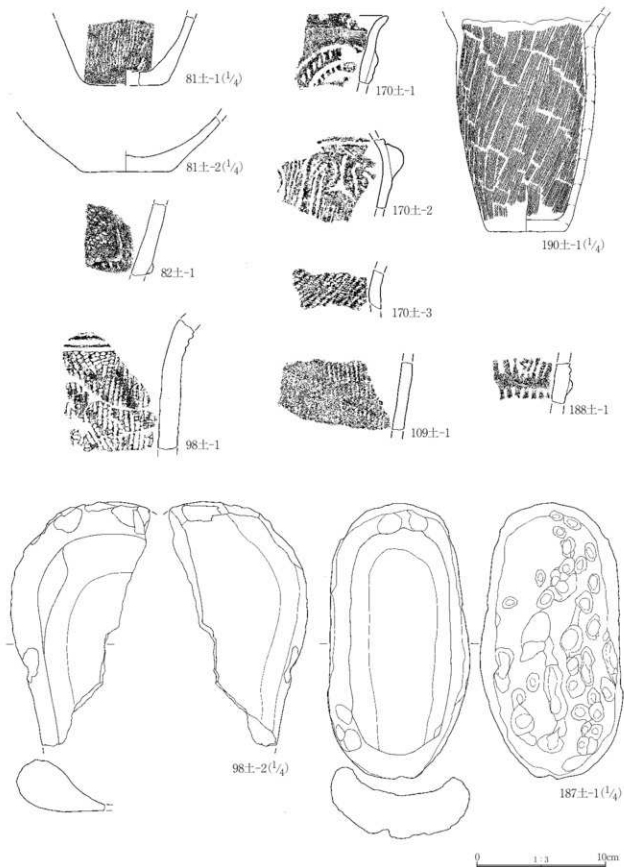
規模等については、第3表土坑一覧表を参考にさせていただきたい。



第51図 縄文時代の土坑

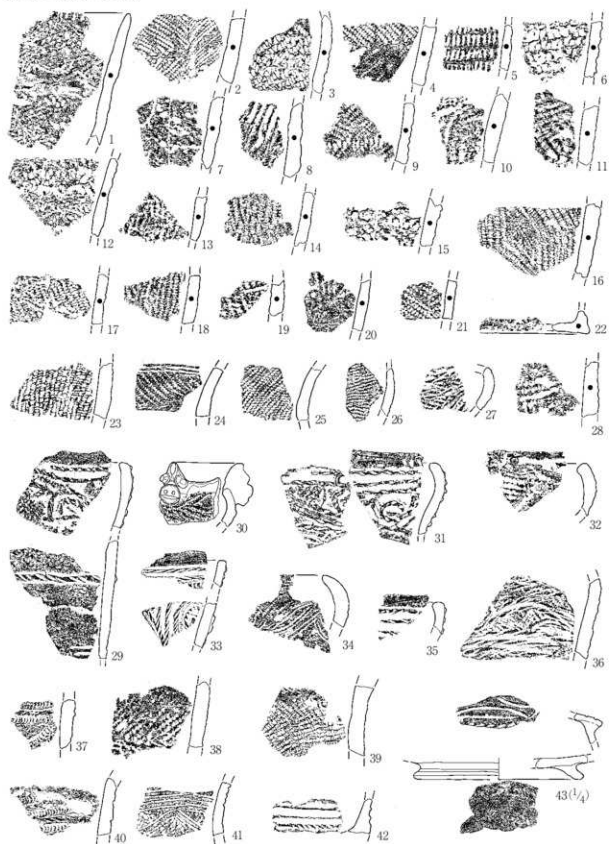
0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物



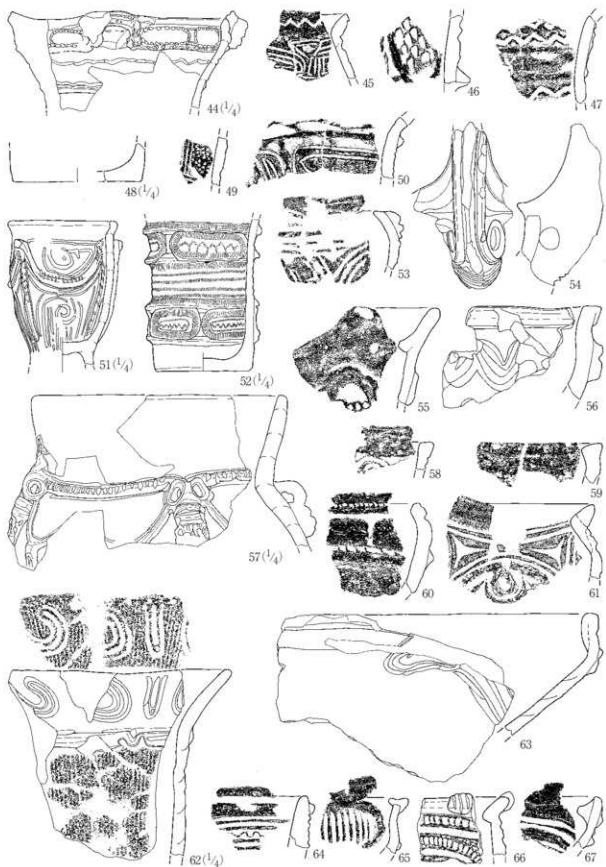
第52図 縄文時代の土坑出土遺物

第4項 遺構外出土遺物



第53図 縄文遺構外出土遺物(1)

0 1:1 10cm

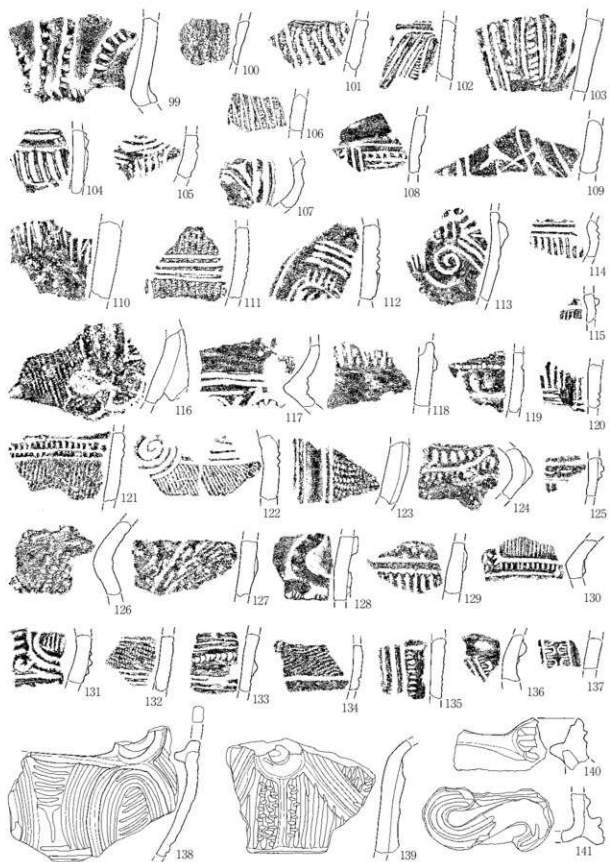


第54図 縄文遺構外出土遺物(2)

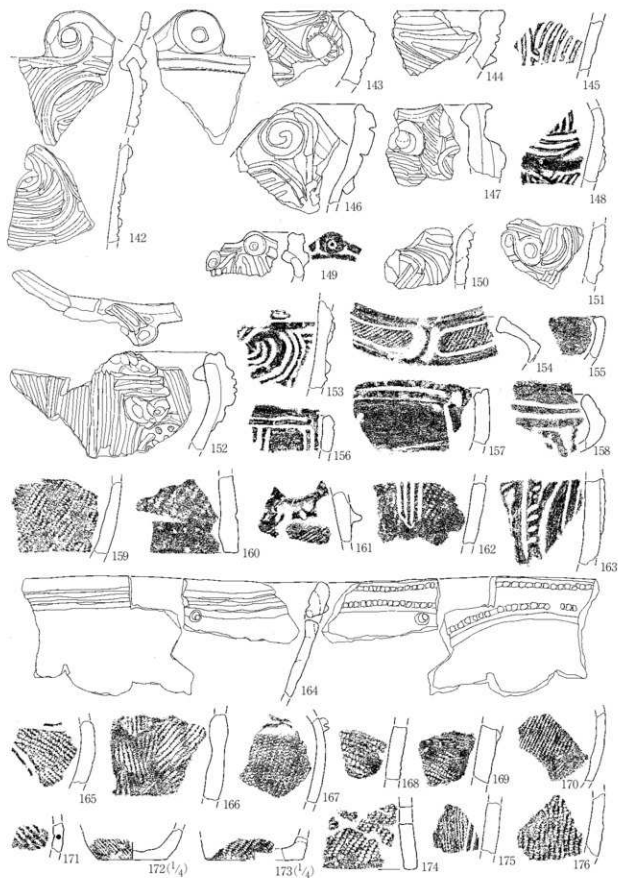


第55図 縄文遺構外出土遺物(3)

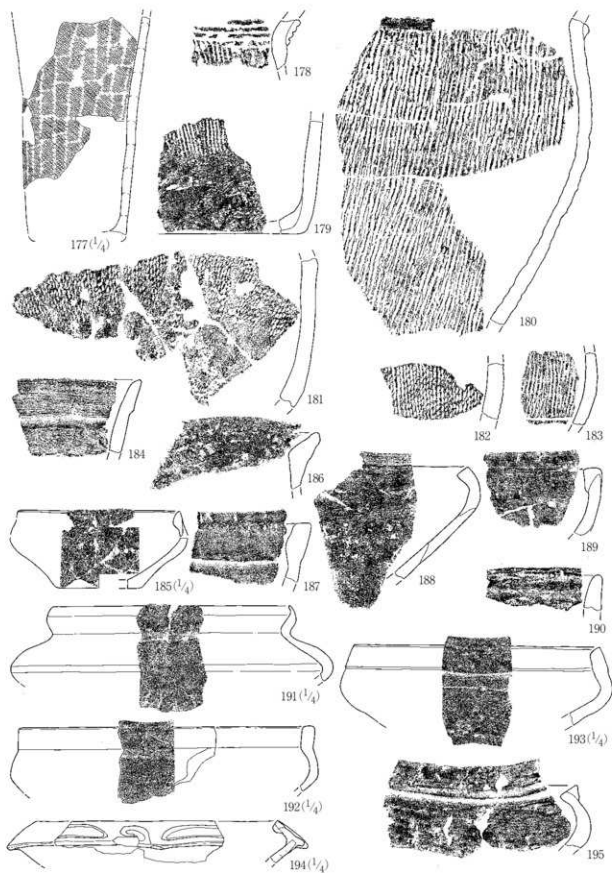
0 10cm



第56図 縄文遺構外出土遺物(4)

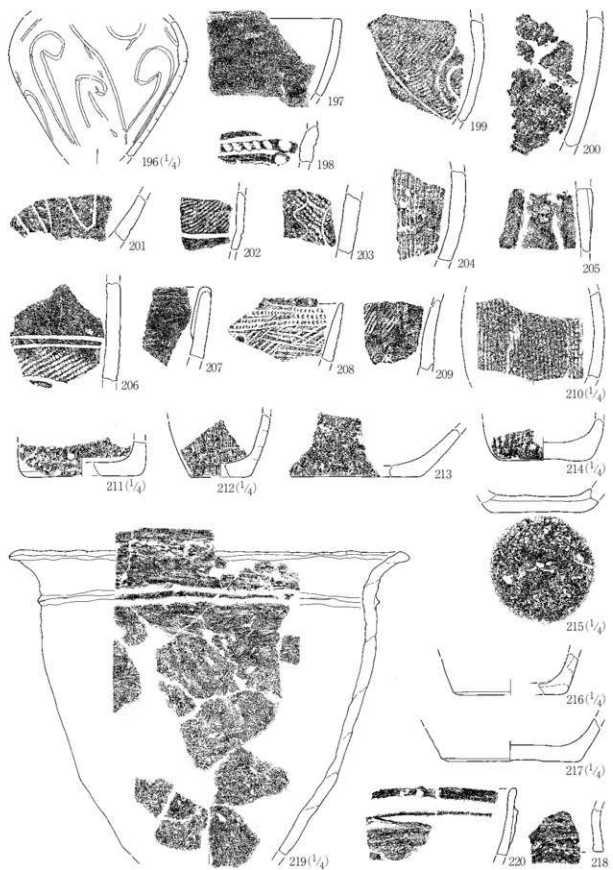


第57図 縄文遺構外出土遺物(5)



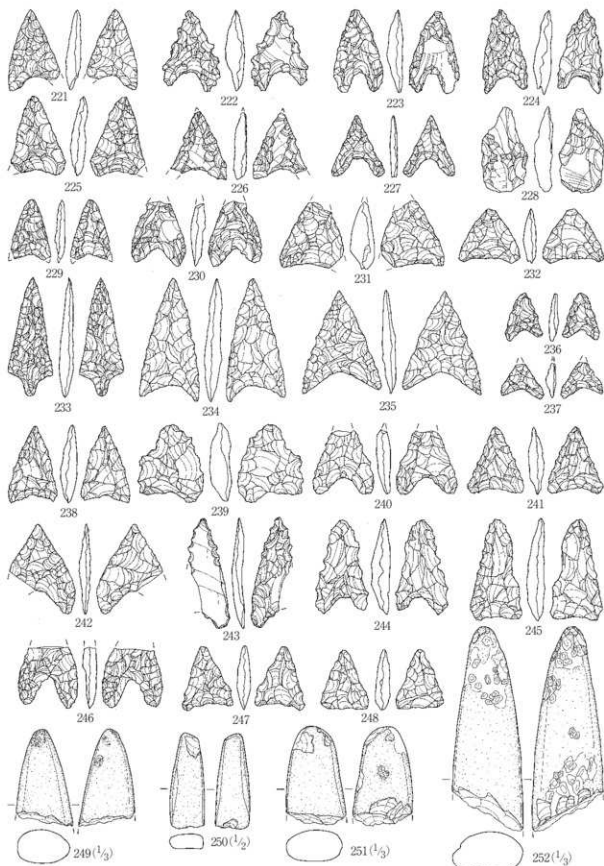
第58図 縄文遺構外出土遺物(6)

0 1.0 10cm

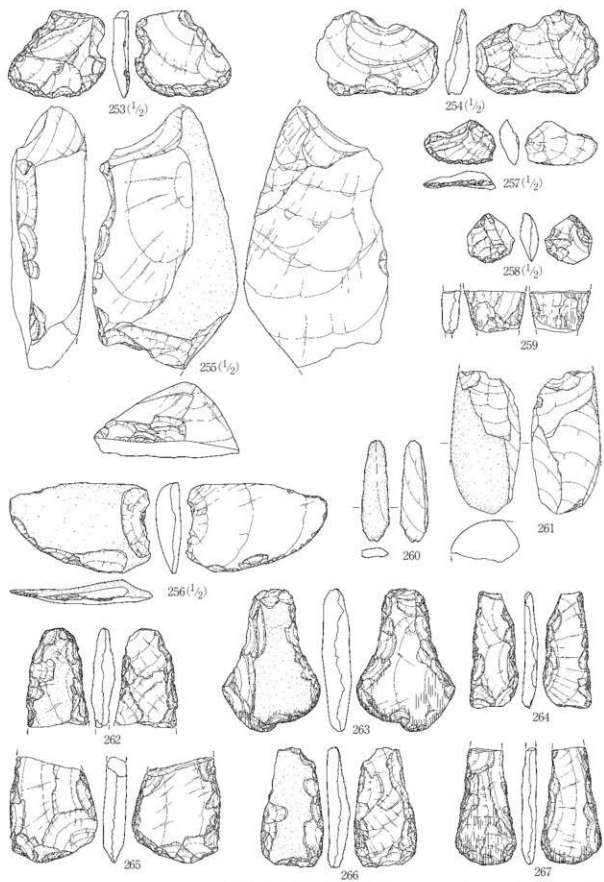


第59図 縄文遺構外出土遺物(7)

0 1 2 10cm

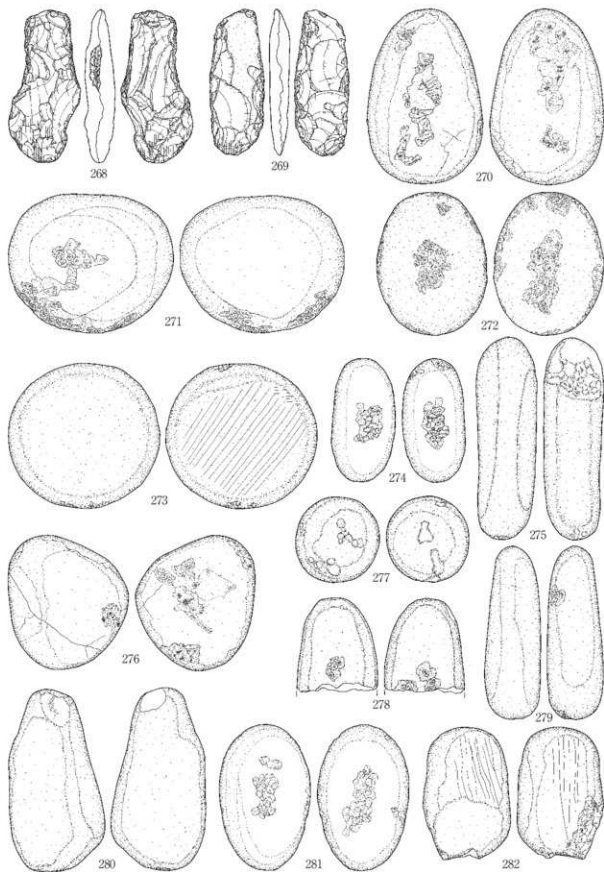


第60図 縄文遺構外出土遺物(8)

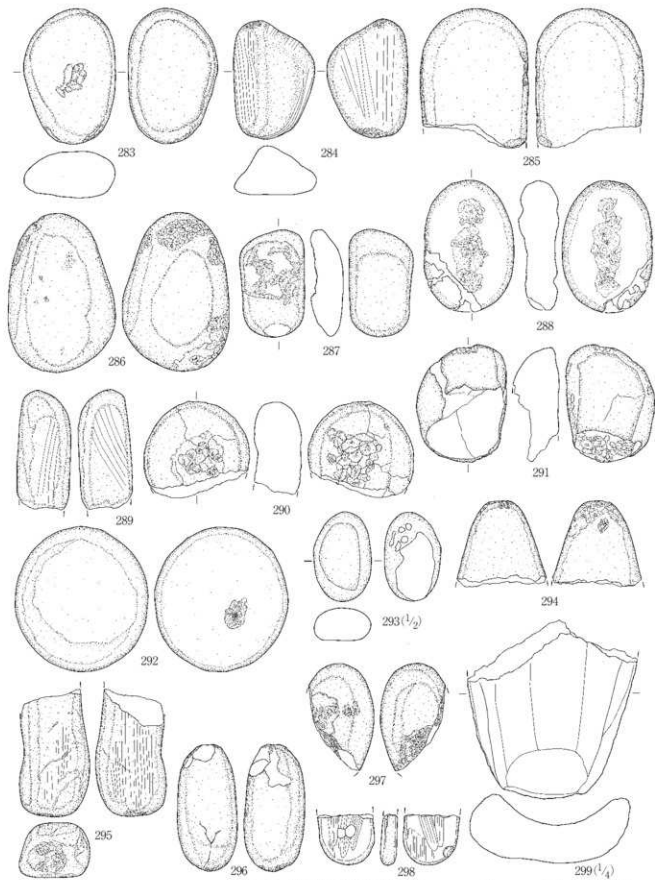


第61図 縄文遺構外出土遺物(9)

0 10cm



第62図 縄文遺構外出土遺物(10)



第63図 縄文遺構外出土遺物(11)

0 1 2 10cm

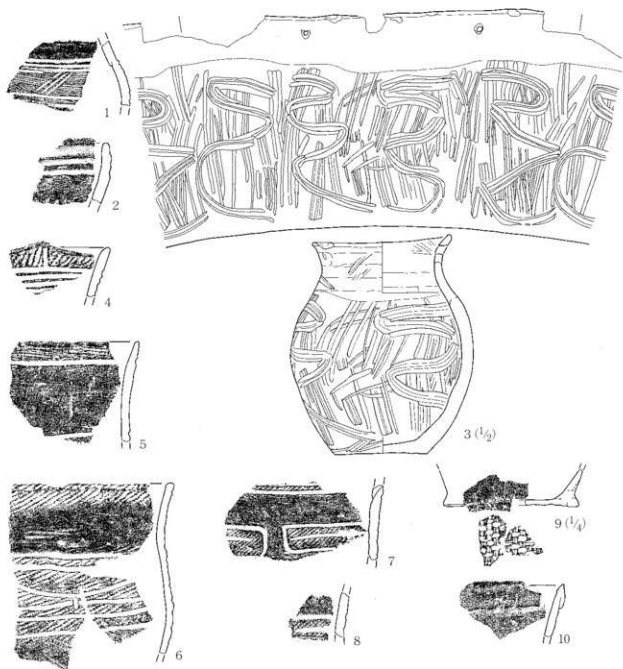
第4節 弥生時代

弥生・古墳時代の遺構は確認されなかったが、弥生時代中期前半の小型壺1点と縄文時代晩期末から弥生時代中期前半にかけての土器片が出土した。

ほぼ完形品の小型壺は、72区M-5グリッドか

ら出土している。土器片に関しては、集中地点や接合関係はなかった。

検出できなかったが、同時期の遺構の存在を想定できるので包含層として扱った。



第64図 弥生土器

第5節 平安時代

第1項 竪穴住居跡

1号住居

(図 65～67 PL.9・51・52)

位置 73区 A-4・5 B-4グリッド

重複関係 住居中央部分で70号土坑と重複していた。当住居は土坑の上に造られており、70号土坑より新しい。

形状 東西方向に少し長い長方形。

規模 長さ 4.04m、短径 3.57m、深さ 65cm

面積 13.90㎡

主軸方向 N-50°-E

竈 東壁面やや南寄りに造られていた。床面上には、焚き口部の一部のみが位置し、大部分は壁面を掘り込んでいた。竈内に袖石や燃焼部側面の石が残っていたが、天井部の石は全てははずされていた。竈内燃焼部床面が焼土化していたが、焼土の量や範囲は多くなかった。竈を断ち割ってみると、燃焼部床面焼土層の下にロームを多く含む層があり、その下の燃焼部床面から約8～12cm下に、竈使用時に前に焼かれて焼土化したと思われる厚い焼土層が確認された。この厚い焼土層を竈使用時の床面と考えることもできるが、焼土層の厚さが10cm前後と厚いこと、床下10cmと低いこと等不自然である。また、この厚い焼土は天井部の崩落も考えられるが、地山と密着して一体となっており、天井部の崩壊に見られるようなブロック状の焼土とはなっていない。

竈石袖手前の床面上に大量の石・焼土・土器片が絡み合った様な状態で、まとまって厚く堆積していた。これらを調査後除去して床面を観察してみると、床面は焼土化していない。これらは、おそらく竈が使用されなくなった段階で、竈内に据えられていた羽釜等を除去した後で、天井部の石・ローム・竈使用時に補強材として使用されていた土器片等をまと

めてはずして、竈手前の床面上に破棄したものと考えられる。このような竈廃棄例は、県内の多く遺跡で調査されている。竈内に支脚石も残っていなかったため、廃棄時に撤去したと思われる。

規模は煙道部方向115cm燃焼部幅約55cmで燃焼部の幅は広い。

柱穴 掘られていなかった。柱穴を想定させるようなピットも掘られていなかった。

床面・床下施設 床面は、ロームと白色粒を多く含む黒褐色土で造られていた。床面中央付近は踏み固められた堅い床面となっていた。70号土坑と重複している部分の床面は、土坑を埋めてその上に床が造られており、調査段階においては、70号土坑上の踏み固められた住居床面部分は、他の床面より5cm前後陥没して確認された。段差のある2つの床面の存在から、調査当初この段差が理解出来ずに、他の住居との重複があるのではないかと考えた。

床下に土坑等は掘られていなかった。

貯蔵穴 竈右側に掘られていた。規模は(61×60×24)である。また、貯蔵穴西側の床面に堤状の高まりが残っている。高まりは幅25cm、長さ74cm、高さ5cmである。

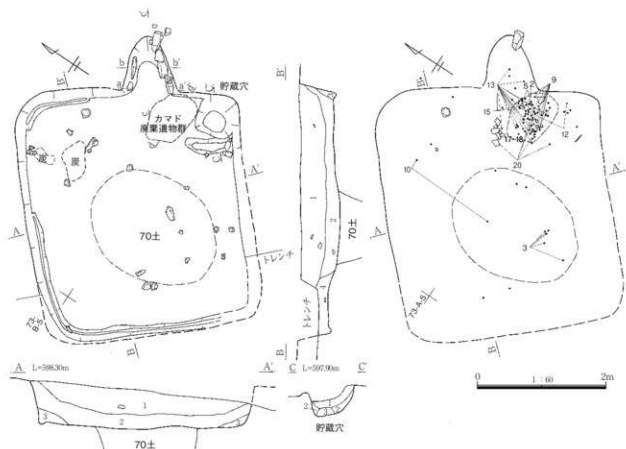
遺物出土状態 土師器の甕、須恵器椀・杯、羽釜等が多く出土している。羽釜はすべて月夜野地域で生産された特徴をもつものである。

所見 調査当初に手がけたこの住居は、住居北壁と南壁面で、掘り込まれている地山の土が異なり、さらに住居中央に70号土坑が掘られていた等複雑であったために、住居の範囲確認が困難であった。

時期については出土遺物から10世紀初頭に比定される。

(中沢 悟)

第2章 検出された遺構と遺物



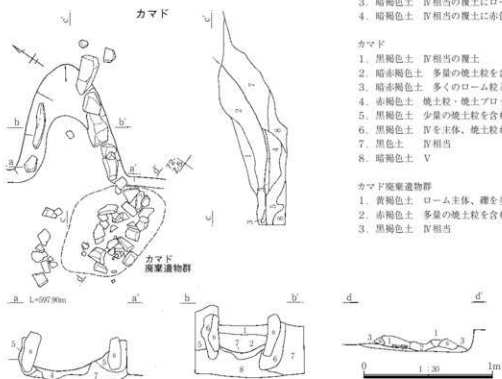
1. 黒褐色土 IV相当の覆土に小礫・As-YPKを含む
2. 暗褐色土 IV相当の覆土
3. 暗褐色土 IV相当の覆土にローム粒子混じる
4. 暗褐色土 IV相当の覆土に赤色片岩粒混じる

カマド

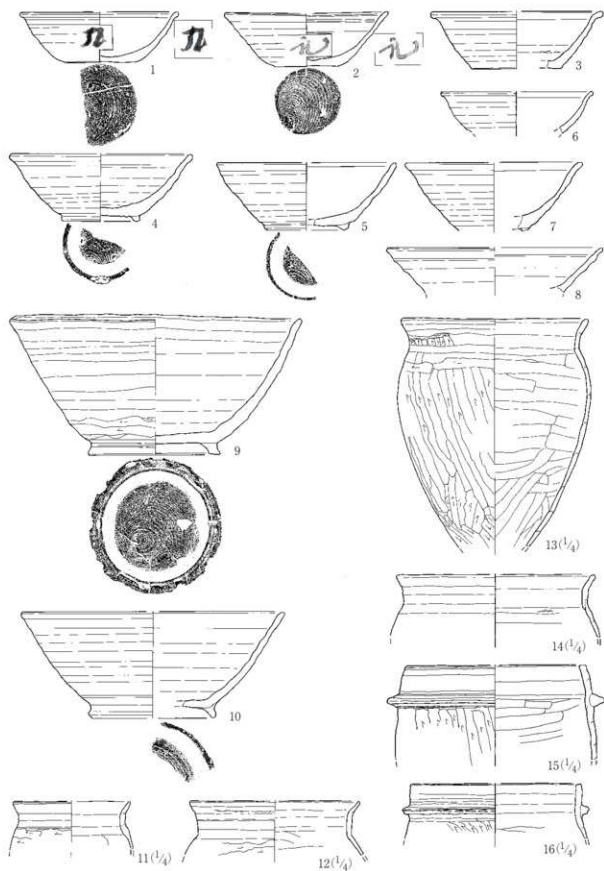
1. 黒褐色土 IV相当の覆土
2. 暗赤褐色土 多量の焼土粒を含む
3. 暗赤褐色土 多くのローム粒と焼土粒を含む
4. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロックを主体
5. 黒褐色土 少量の焼土粒を含む
6. 黒褐色土 IVを主体、焼土粒わずかに含む
7. 黒色土 IV相当
8. 暗褐色土 V

カマド廃棄物群

1. 黄褐色土 ローム主体、礫を多く含む
2. 赤褐色土 多量の焼土粒を含む
3. 黒褐色土 IV相当

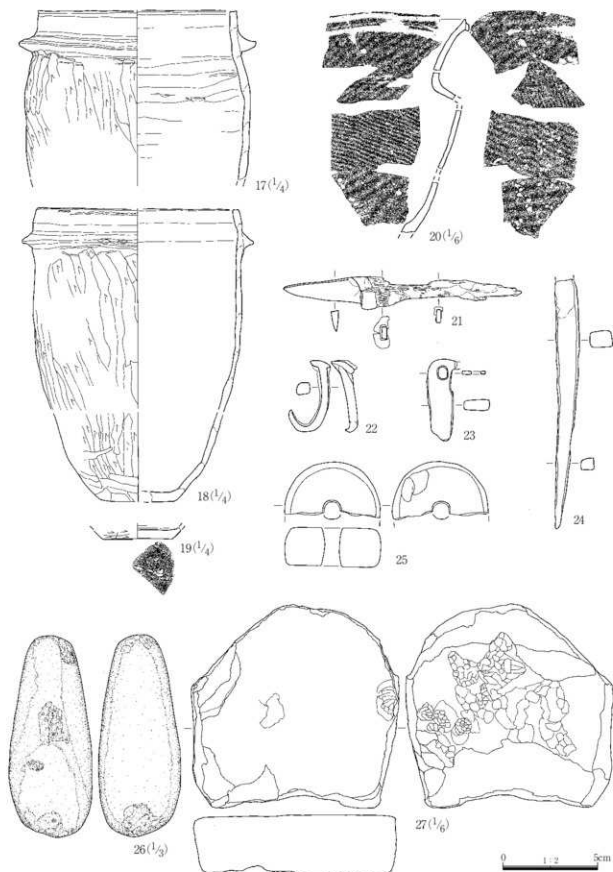


第65図 1号住居跡



第66図 1号住居跡出土遺物(1)

0 5 10cm



第67図 1号住居跡出土遺物(2)

0 1/2 5cm

2号住居

(図 68 PL.9・10・52)

位置 72区 Y-2・3, 73区 A-2・3グリッド

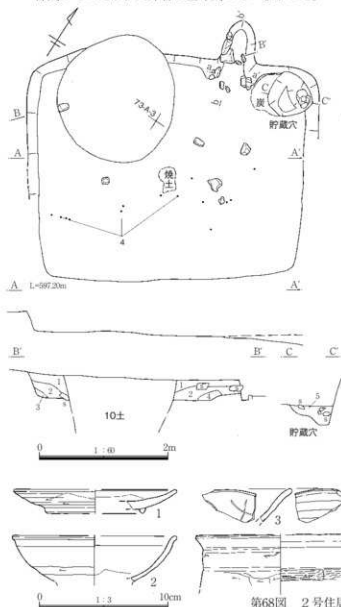
重複関係 住居北東部で10号土坑と重複。この土坑により、住居北壁の一部から北東床面部分が掘り込まれていた。本住居が、10号土坑より古いように観察できた。

形状 主軸方向に短い長方形

規模 長径 4.64m、短径(3.53)m、深さ 42cm

面積 14.09㎡ 主軸方位 N-28°-W

竈 北壁面東側を掘り込んで造られていた。竈の残りも悪く、左右の柚石の一部と煙道部左側の石が一部残っていたが、天井石は全く残っていないかった。



第68図 2号住居跡・出土遺物

竈手前の床面に大小の石が散在していたので壊された意材の一部と思われる。

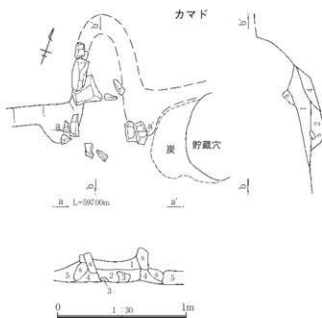
柱穴 掘られていなかった。

床面・床下施設 斜面下位にあたる南壁と床面の一部は削平されて残っていない。南側床面の一部が焼土化していた。

貯蔵穴 竈右手の北東コーナーに掘られていた。

遺物出土状態 遺物量は比較的少ないが、貯蔵穴から(No.1)の灰釉陶器が出土している。また、床面レベルから(No.4)の土師器の甕が出土している。

概要と所見 時期については、出土遺物から10世紀前半に比定される。10号土坑との新旧関係については、判断に迷った。



1. 暗褐色土 やや黒色が強く、As-YPk粒を含む
2. 黒褐色土 IV相当、住居層土
3. 暗褐色土 IV相当でVを粒状に含む
4. 黒褐色土 rome 粒子・As-YPk粒・褐色粒に少量の焼土粒を含む
5. 暗褐色土 IV相当でVを粒状に含む

カマド

1. 黒褐色土 IV相当に細かな炭化粒を含む
2. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロックを主体
3. 橙色土 よく焼けた焼土層
4. 黒褐色土 IVを主体、焼土粒をわずかに含む
5. 黒褐色土 IV相当でVを粒状に含む

4号住居

(図 69・70 PL 10・52)

位置 72区 O-4、P-4グリッド

重複関係 他の遺構と重複していない。

形状 歪んだ隅丸正方形

規模 長径 3.98m、短径(3.42)m、深さ 40cm

面積 10.25㎡ 主軸方位 N-28°-W

竈 北壁面東側を掘り込んで造られていた。両袖部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。右袖石と煙道部両側の石の多くは残っていたが、天井の石は残っていなかった。竈右手前の床面上に焼土と黄褐色粘土が堆積していた。壊された竈の天井部を含む部材と思われる。

柱穴 掘られていなかった。北壁面下部でピットが1基掘られていた。規模は(19×18×22)。

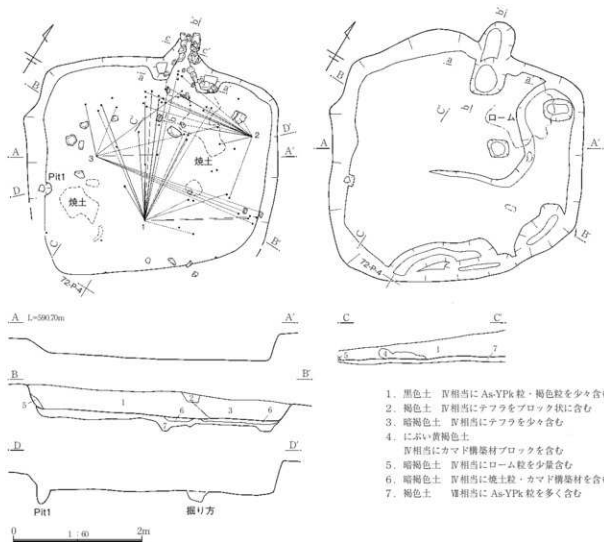
床面・床下施設 床面に硬化面は見られない。

貯蔵穴 竈右手の北東コーナーに掘られていた。

遺物出土状態 竈手前から羽釜を中心として比較的多くの遺物が出土した。

概要と所見 埋没状況は自然埋没である。掘り方は中央部に窪みがあったり周溝状の部分が見受けられるが明確なものではない。また、竈燃焼部から貯蔵穴にかけての下面に5mmほどの厚さでロームが貼られていた。

時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。



1. 黒色土 IV相当にAs-YPk粒・褐色粒を少々含む
2. 褐色土 IV相当にテフラをブロック状に含む
3. 暗褐色土 IV相当にテフラを少々含む
4. にぶい黄褐色土
IV相当にカマド構築材ブロックを含む
5. 暗褐色土 IV相当にローム粒を少量含む
6. 暗褐色土 IV相当に焼土粒・カマド構築材を含む
7. 褐色土 VII相当にAs-YPk粒を多く含む

第69図 4号住居跡(1)

カマド



1/20000

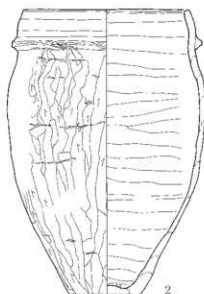
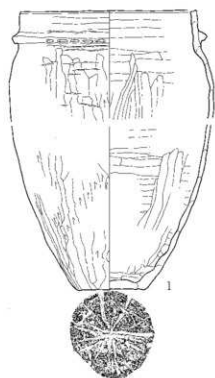


0 1:30 1m



カマド

- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 黄褐色土 | ローム粒と焼土粒が混じる |
| 2. 暗褐色土 | 黒褐色土にローム粒・焼土粒が混じる |
| 3. にぶい黄褐色土 | 黒色土にローム粒が多く混じる |
| 4. 黒褐色土 | 黒色土に焼土粒が僅かに混じる |
| 5. にぶい橙色土 | 被熱土に細かな焼土粒が混じる |
| 6. 黄褐色土 | ローム(カマド材) |
| 7. 赤褐色土 | よく焼けた焼土層 |
| 8. 褐灰色土 | IV相当の埋めた土(掘り方) |



0 1:4 10cm

第70図 4号住居跡(2)・出土遺物

5号住居

(図71 PL.10・11・52)

位置 72区P・Q-1・2グリッド

重複関係 竈手前を52号土坑に切られているように観察できた。また、当住居下に47号土坑が確認された。

形状 長方形と思われる。

規模 長径(3.27)m、短径(2.27)m、深さ - cm

面積 (7.02)㎡ 主軸方位 —

竈 北壁面を掘り込んで造られていた。袖部分と燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていた。両袖手前部分に52号土坑が掘られており、袖石や焼土の一部が土坑覆土に落ち込んでいた。燃焼部床面奥壁

寄りに支脚石が据えられていた。

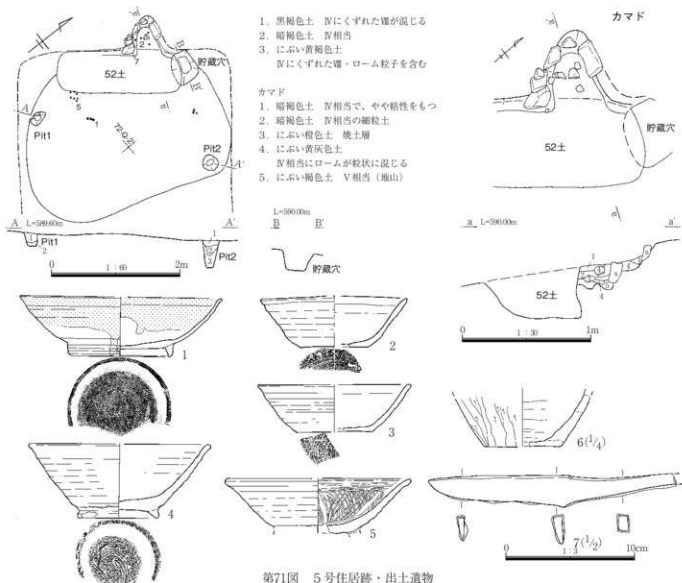
柱穴 ビットが2基掘られていたが、柱穴としては疑問である。規模はビット1 (26×16×26)、ビット2 (23×21×42)。

床面・床下施設 明瞭な床面はなかった。

貯蔵穴 竈右手の北西辺角に掘られていた。

遺物出土状態 床面直上から少量の遺物が出土した。竈左袖部から(No.7)の刀子が1点出土した。

概要と所見 時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。本住居を切ると思われる52号土坑の覆土中から出土した遺物は、接合関係から本住居の帰属遺物として扱う。



第71図 5号住居跡・出土遺物

6号住居

(図72 PL 11・12・52)

位置 72区 E・F・5・6グリッド

重複関係 40号土坑を切る。 形状 方形

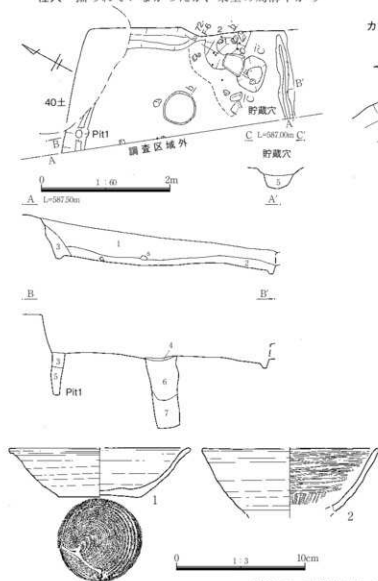
規模 長径(3.72)m、短径(1.80)m、深さ56cm

面積 4.16㎡ 主軸方位 N-57°-E

竈 竈の残りがよくないために不明点が多いが、東壁面南寄りを掘り込んで造られていた。

焼土と石の残存状態からみて、両袖部分と燃焼部分の多くは床面上に位置していたと思われる。竈手前に焼土と石が散在していたことから、竈は壊されていたと思われる。

柱穴 掘られていなかったが、東壁の周溝中から



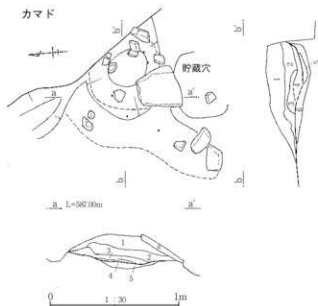
ピットを1基検出した。規模は(24×23×67)。

床面・床下施設 検出された床面に明らかな硬化面は見られなかった。壁沿いには幅10cm、深さ6cmの周溝が検出された。床下土坑が1基検出され、その規模は(53×52×110)。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物出土状態 竈燃焼部から少量の遺物が出土した。

概要と所見 調査区西壁面に焼土が確認され、それが住居の竈であることが判明した。そこで、部分的に人家近くまで拡張して調査を実施した。時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。



1. 暗褐色土 IV相当
2. 暗褐色土 IV相当(住居埋設土)
3. 暗褐色土 IV相当に目が混じる
4. 暗褐色土 床構築材
5. 暗褐色土
IV主体で小礫、灰・炭化物をわずかに含む
6. 暗褐色土 IV相当でやや粘る
7. 暗褐色土 IV相当にくずれた雫が混じる

カマド

1. にぶい褐色土
目を主体、焼土粒をわずかに含む
2. にぶい黄褐色土
カマド構築材に焼土粒を含む
3. 黒褐色土 IV相当に炭化粒・焼土粒を含む
4. 黄褐色土 くずれたカマド構築材
5. 橙色土 よく焼けた焼土層
6. 暗褐色土 VI相当の細粒土

第72図 6号住居跡・出土遺物

8号住居

(図 73-75 PL 12・52・53)

位置 62区 Y-22・23

63区 A-22・23グリッド

重複関係 131・132号土坑を切る。 形状 正方形

規模 長径 4.76m、短径(4.70)m、深さ 57cm

面積 19.40㎡ 主軸方位 N-55°-E

竈 東壁面のほぼ中央部分を掘り込んで造られていた。両袖部分と燃焼部の多くは床面上に位置する。竈の残りはよくなく、袖石や天井石は外され燃焼部に近い煙道部に僅かに石が残っていた。竈左袖手前部分に竈で使用されていたと思われる石が少量散在していた。この竈の北側部分は132号土坑を埋めた上に持ち込んだ多くのロームを踏み固めた後、重複していない部分を含めた竈基礎部分全体を焼き込んでいた。その後、袖石や煙道部の石とローム等を用いて竈が構築されたと考えられる。

柱穴 総数9基のピットが掘られていた。

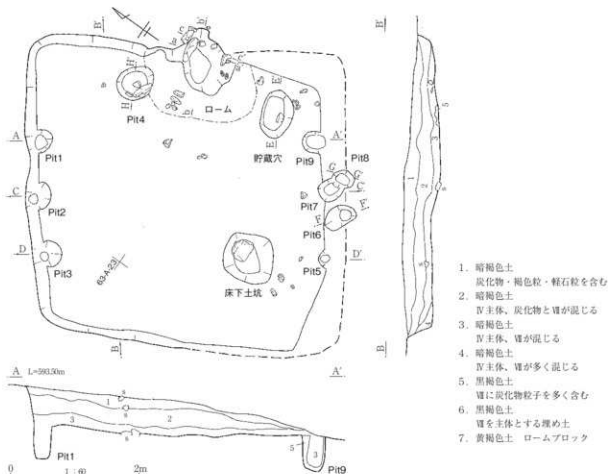
南北の壁面に接した部分に3本ずつ計6基のピットは、配置や規模がほぼ一致しているので柱穴と思われる。規模はエレベーションを参照していただきたい。9～10世紀の竈穴住居から柱穴が確認される例はほとんどないので、貴重な例である。

床面・床下施設 床面は斜面の上位から下位にかけて僅かに傾斜する。床下から土坑が1基検出された。その規模は(79×78×46)。

貯蔵穴 竈右手のコーナーに掘られていた。

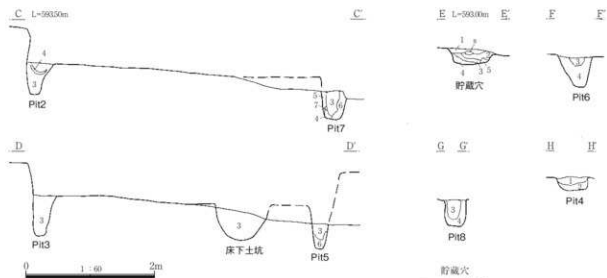
遺物出土状態 竈から南壁中央部付近にかけての床面に近い位置で、土師甕を中心にした多くの遺物が出土した。

概要と所見 斜面上位にあたる北辺壁高は56cmと残りがよかった。時期については、出土遺物から9世紀末に比定される。



第73図 8号住居跡(1)

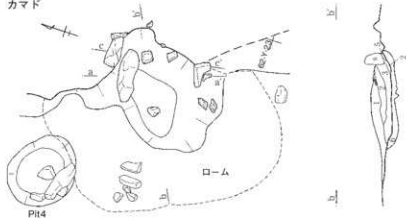
第5節 平安時代



貯蔵穴

1. 黒色土
炭化物・焼土粒を大量に含む
2. 黒色土
IV相当に砂礫を多量に含む
3. 黒色土
IV相当にAs-YPkをわずかに含む
4. 黒褐色土
IV相当にAs-YPkを多量に含む
5. 黄褐色土
Ⅲ相当のブロック

カマド



a L=983.00m a'



カマド

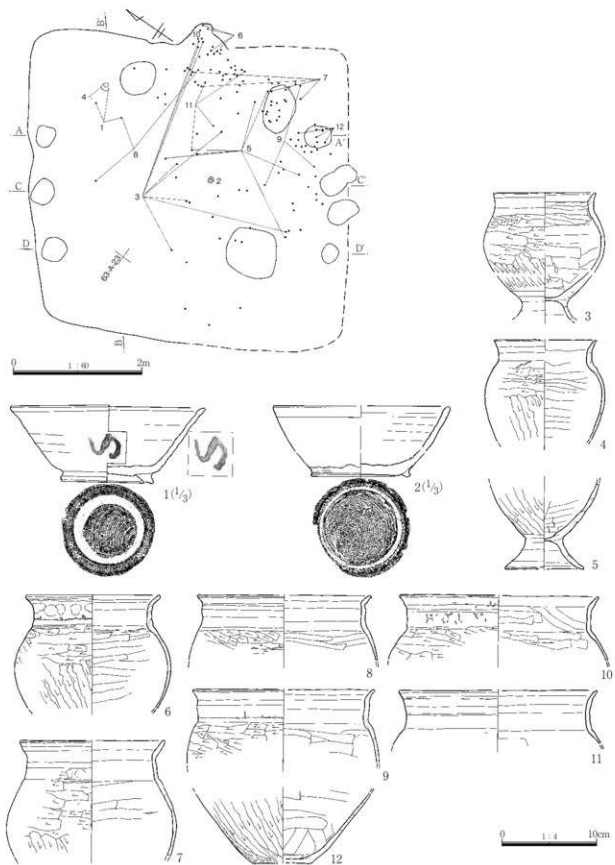
1. 黒褐色土 炭化物・褐色粒・軽石粒を含む
2. 暗褐色土 1層に焼土粒を含む
3. 赤褐色土 多くの焼土粒を含む
4. 黄褐色土 崩れたカマド材
5. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
6. 赤褐色土 よく焼けた焼土層

c c'



0 1/30 1m

第74図 8号住居跡(2)



第75図 8号住居跡(3)・出土遺物

9号住居

(図 76-78 PL 12・13・53)

位置 62区 S・T-20・21・U-20グリッド
重複関係 住居南壁中央部分で122号土坑と重複しており、当住居は土坑の上に造られていた。
形状 南北方向に少し長い長方形。
規模 長径 4.66m、短径 4.00m、深さ 47cm
面積 18.50㎡
主軸方向 N-47°-E

竈 東壁面やや南寄りや、掘り込んで造られていた。焚き口部分と燃焼部の多くは、壁面を掘りこんで造られていた。

竈内に多くの石が残っていたが、袖石の多くや、天井部の石は残っていなかった。竈内の多くの石は、竈廃棄時において、竈を壊して投げ込まれたものと思われる。残って据えられていた石は、右袖石と煙道部両側の石であった。

竈内はほぼ全面に焼けて焼土化していた。竈に近い右袖手前の床面上に少量の焼土とロームと焼けた石が出土している。竈使用時に使われていた石が竈廃棄段階に床面上に捨てられたものと思われる。

竈を断ち割ってみると、燃焼部床面焼土層の下にロームを多く含む層があり、その下の燃焼部床面から、約7～8cmに竈使用時以前に焼かれて焼土化したと思われる、厚い焼土層が確認された。竈を造る段階で一度基礎部分を焼き、焼土化させ、その上に新たにロームや石等を用いて、竈が築かれたことを示している。焼土は一部袖石の外側でも確認されている。この焼土は竈使用時に出来たものではないので、竈を築く前に一度基礎部分を焼き、焼土化させ

ることを示している。

規模は、煙道部方向115cm、燃焼部幅約55cm。

柱穴 深さが近い3基のビットが掘られていたが、柱穴としては疑問である。

規模はビット1 (30×24×69)、ビット2 (26×23×74)、ビット3 (30×30×52)。

床面・床下施設 床面は、ロームと白色粒を多く含む、黒褐色土で造られていた。踏み固められた堅い床面は確認されなかった。床下土坑は掘られていなかった。

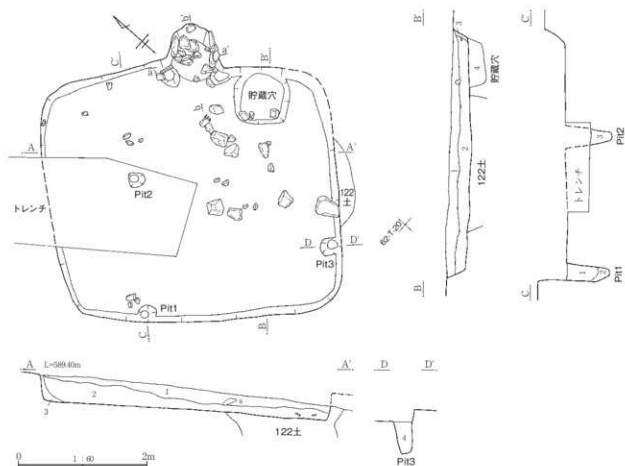
貯蔵穴 竈右側に掘られていた。その規模は、(90×88×28)である。

遺物出土状態 土師器の甕・須恵器杯・碗等が多く出土している。他に鉄製の鎌と鍛冶等で使用する羽口が出土しており、鉄に関連した遺物の多いことが注目される。しかし、床面上に特別な焼土面も無く、竈も特別な構造でなかったために、小鍛冶等の施設は確認できなかった。また住居内より鉄滓等は出土していない。

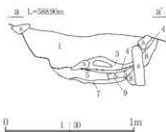
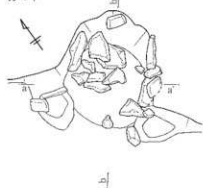
所見 調査段階における試掘調査によるトレンチで、住居北側の一部を削ってしまった。残りの良い北壁面付近は、崩壊して堆積したロームを掘り込んでいたので確認が容易であったが、南壁面付近は、同じロームの堆積が無く、覆土と地山との区別が難しく、さらに南壁面中央部で122号土坑と重複していたために、住居の南壁面の検出は困難であった。時期については出土遺物から9世紀末に比定される。

(中沢 悟)

第2章 検出された遺構と遺物



カマド



1. 暗褐色土 Ⅳにくずれたローム粒と少量の炭化物を含む
2. 暗褐色土 Ⅳ相当にローム粒を含む
3. にぶい黄褐色土 くずれたローム粒と少量の炭化物を含む
4. 黒褐色土 Ⅳ相当に炭化物を含む

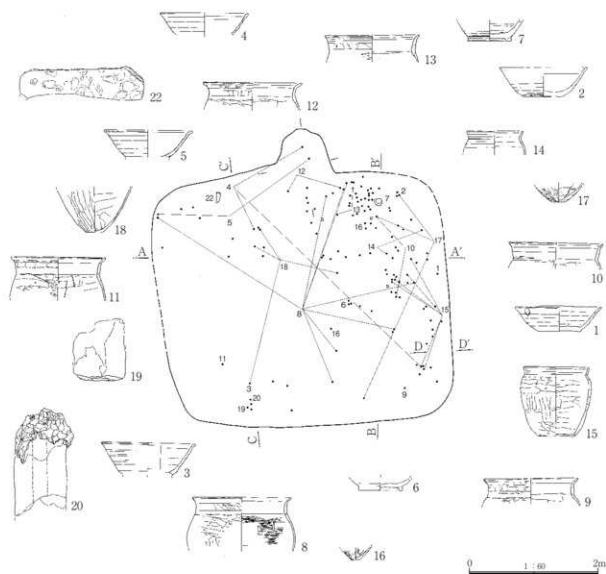
ビット1~3

1. 暗褐色土 炭化物を少量含み、柔らかい
2. 暗褐色土 ローム粒を含みしめる
3. 暗褐色土 ローム粒・砂礫を多く含む
4. 黒褐色土 炭化物が上面に入る

カマド

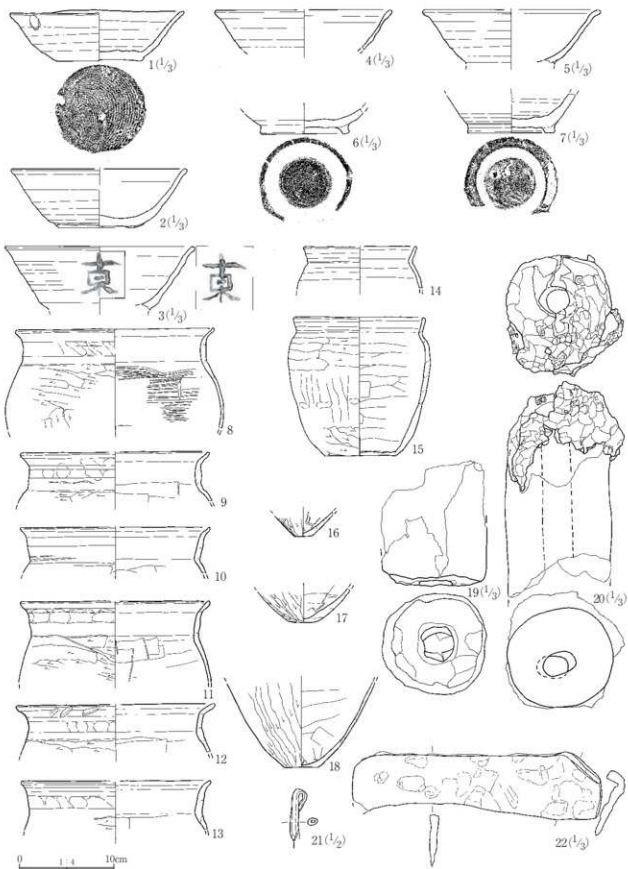
1. 暗褐色土 灰白色粒子、黄褐色粒子を多量に含む住居埋没土
2. 黄褐色土 ローム粒と灰黄褐色シルトの混土层に灰白色粒子を含む
3. 暗赤褐色土 粘性があり、しまりが良い
4. 黒褐色土 2層に類似するが、焼土粒を少量含む
5. 赤褐色土 焼土层
6. 赤褐色土 焼土と暗褐色シルトの混土层でしまりが悪くやわらかい
7. にぶい黄褐色土 焼土・黒色土・ローム粒の混土层
8. 橙色土 焼土层
9. 黒色土 ローム粒を僅かに含む

第76図 9号住居跡



第77図 9号住居跡遺物出土状態

第2章 検出された遺構と遺物



第78図 9号住居跡出土遺物

11号住居

(図 79 PL 13・14・53)

位置 63区 A-20、B-19・20グリッド

重複関係 他の遺構と重複していない。

形状 主軸方向の短い長方形

規模 長径 4.32m、短径(2.66)m、深さ 26cm

面積 10.30㎡ 主軸方位 S-40°-E

竈 南壁西寄りを掘り込んで造られていた。燃焼部下半を残すのみで、大部分が削平されていた。竈内に石と焼土が残っていたが、袖石等は残っていない。また、竈右手前の床面上に厚さ2~3mmの焼土と黒色土を含むロームが、またその外側に竈で使われていたと思われる石が散在していた。竈は廃棄されていたと考えられる。

柱穴 ビットが3基掘られていた。ビット2 (37×30×50)とビット3 (26×23×54)は住居の長軸方

向の中央部に位置し、ほぼ同じ深さで掘られていた。2本柱の可能性が考えられる。

ビット1の規模は(20×16×30)。

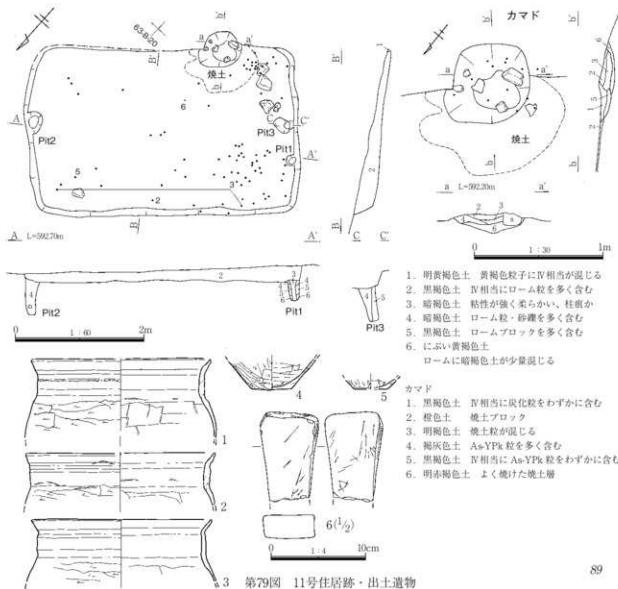
床面・床下施設 竈から東部分の床面の残りが悪かった。西側にはローム粒の混じる黒色土の床材が貼られていた。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物出土状態 竈周辺と住居北西辺部分に分布が集中する。器種は甕が主体で、竈付近の床面から(No.6)の砥石が出土した。

所見 斜面上位にあたる北西辺部の壁高は38cm。後世の掘削痕により、床面が一部壊されている。

より慎重に調査を進めたが、周囲に別な遺構の痕跡は認められず「南竈」を持つ住居として報告する。時期については、出土遺物から9世紀末に比定される。



12号住居

(図 80・81 PL 14・54)

位置 62区 X・Y-17・18グリッド

重複関係 133・136・162・63号土坑を切る。

形状 主軸方向の長い長方形

規模 長径 4.02m、短径 3.18m、深さ 46cm

面積 10.37㎡ 主軸方位 N-55°-E

竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られていた。住居を含めて残存状態がよくなく、不明な点が多い。残された袖部及び燃焼部左側の石2個と右側の石1個の配置や焼土の状態からみて、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていたようである。

柱穴 ピットが1基検出されたが、柱穴としては疑問である。規模は(20×19×15)。

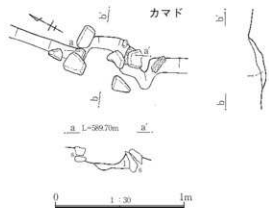
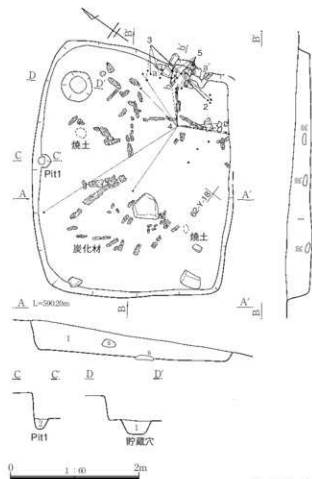
床面・床下施設 床面の残りはよくなかった。床面5cm前後の位置に建築材と思われる部材の炭化材が多数出土し、焼失住居と思われるが、太くしっかり

した材はなかった。

貯蔵穴 掘られていなかったが、北東コーナーに近い床面に径65cm、下端の径25cm、深さ20cmの円形の小穴が掘られていた。位置が不自然であるが、貯蔵穴の可能性も否定できない。

遺物出土状態 竈内から貯蔵用の堅く焼き締められた須恵器甕の破片が多数出土した。この破片は一定の大きさにそろえられていた。この時期に竈で使用する煮炊きに用いる器種は、羽釜と土師器甕である。この須恵器甕の破片は煮炊きに使用した物ではなく、羽釜や土師器甕を据えるときに竈の天井石や側石と羽釜の間にできる隙間を埋める部材として持ち込まれた破片と思われる。このような類例は、旧月夜野町・村主遺跡でも確認されている。

所見 時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。

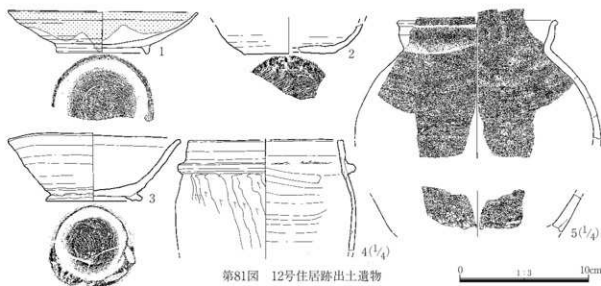


1. 暗褐色土
ローム粒子・As-YFk粒・褐色粒・炭化物等を含む
2. 暗褐色土
N相当にロームブロックをわずかに含む

カマド

1. にぶい橙色土 焼土層

第80図 12号住居跡



第81図 12号住居跡出土遺物

13号住居

(図 82~86 PL 14・15・54)

位置 63区 B・C-13・14グリッド

重複関係 他の遺構と重複していない。

形状 南北方向にやや長いが、ほぼ正方形である。

規模 長径 5.00m、短径 4.80m、深さ 96cm

面積 20.88㎡

主軸方位 N-58°-E

竈 東壁面の南端近くの壁面を掘り込んで造られていた。焚口部分と燃焼部の多くは壁面から外側に位置する。竈内に多くの石が残っていたが、使用時における位置を保っていたのは、両袖石と燃焼部及び煙道部の5個と支脚石であり、他は投げ込まれたような状態であった。天井部の石は全く残っていなかった。竈内の覆土に、少量の焼土が混じていたが、その量は僅かであり、使用時に天井部等にできたであろう焼土層は全く存在していなかった。竈を断り割ってみると、燃焼部の下約7~8cmに竈使用時以前と思われる幅広い焼土面が確認された。竈を造る段階で一度基礎部分を焼いて竈土化させ、その上に新たにロームや石等を用いて竈が築かれたことを示している。焼土は一部左袖石の外側でも確認されている。

規模は煙道部方向115cm 燃焼部幅約55cm。

柱穴 ビットが5基掘られていた。ビット1と3は位置から見て柱穴の可能性も考えられるが、他に柱穴と思われる掘り込みはなかった。

その規模は、ビット1 (34×30×36)、ビット2 (23×23×22)、ビット3 (43×39×42)、ビット4 (28×22×33)、ビット5 (17×16×27)。

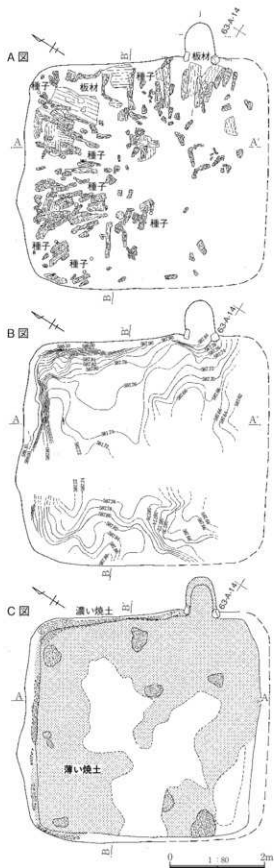
床面・床下施設 床面は、ロームと白色粒を多く含む黒褐色土で造られていた。住居中央部分が踏み固められて堅い床面となっていた。北側壁面に接して床下土坑が掘られていた。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物出土状態 須志器杯・碗や灰袖陶器の碗・羽釜等が多く出土している。住居内の焼土から下の覆土を採集して、一部を洗浄した。その結果炭化した桃の種・米・小麦・大麦等が確認された。全体の分析については、次の報告書の中で報告する。

所見 北側の残りは良好であったが、傾斜の低い南壁面部分では、住居床面の南端を限界とした。時期については出土遺物から10世紀前半に比定される。

住居焼失の状況は以下のことが考えられる。住居確認段階で、南側の床面付近から焼土と炭が出土しており、焼失住居であることが明らかとなった。調査の結果、残りの悪い南西部分以外の床面上から、住居の垂木と思われる上屋根材等がほぼ放射状に折

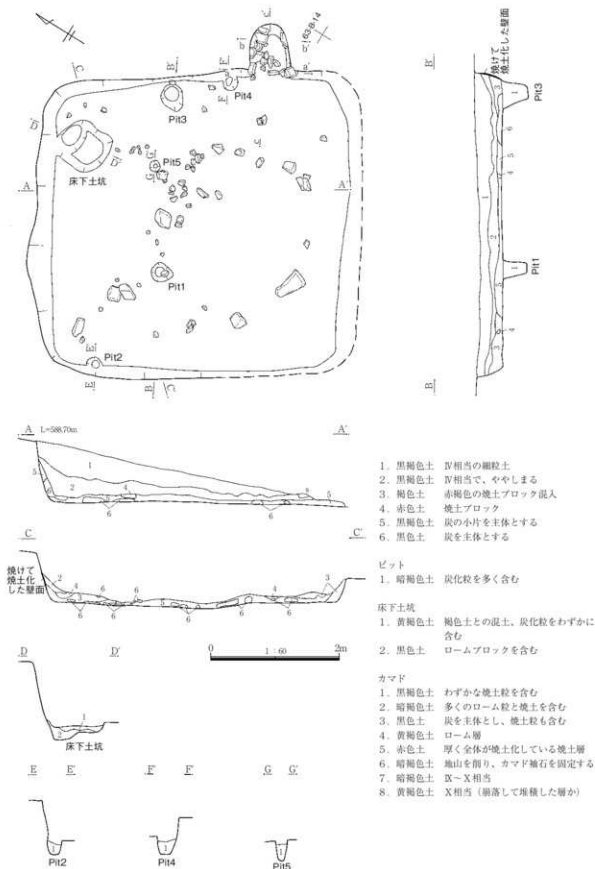


第82図 13号住居跡(1)・炭化材出土状態

り重なるように出土した。第82図(A図)その炭化材の上を焼土が覆っていた。これらを検出面に残して、等高線により堆積状況を調べてみた。第82図(B図)その結果、壁面部分では床面から30~40cmと厚いが、床面中央部になると5cmと浅くなっており、すり鉢状の堆積であった。炭化材と焼土の位置関係は、焼土の下に炭化材があり、焼土の上に炭化材がある例は、基本的に無かった。南に近接する同じ焼土住居である23号住居では、炭化材と焼土の位置関係が、場所により上下が逆転しており一定でなかったため、焼土の状況がやや異なっていたようである。焼土や炭化材を除去してみると、壁面の残りの良好な北と、東壁面が火を受けて部分的に焼土化していた。特に壁面の残りが良好であった北と東壁面の交差する部分から竈が築かれる部分までが厚く幅広い範囲で壁面が焼土化していた。焼土化している位置は、床面に近い場所から30cmの高さまで焼土化している場所が竈の付近であり、北と東壁面の交差する付近から北壁面では、床面付近の壁面は焼土化していない。床から20cm前後浮いた場所から、40cm前後までの高さの壁面が焼けていた。この違いは、おそらく焼失時の火の広がり方の違いによるものであろう。当然ながら壁面が床面付近から壁面高くまで焼土化している部分は強い火を受けた部分である。また床面も少し焼土化していた。壁面と床面の焼土化している状態を図で示した、第82図(C図)でわかるように、西と東壁面の残りはほぼ同じであるにもかかわらず、壁面の焼け方は全く異なっており、西壁面はほとんど焼土化していない。焼失時の炎は南西方向から北東方向に向かっていったようである。床面の焼土化は、中央部がほとんど焼けていないだけで、壁面周辺は焼土化していた。しかし、やはり壁面の焼けていない南西方向の床面の焼土化が少ないことを示している。

住居内から出土する炭は、柔らかく消し炭のようであり、炭窯から出した堅い炭ではない。このことは、焼土住居から出土する炭は、消し炭ができるのと同じような状況下で作られたことを意味する。

(中沢 悟)



第83図 13号住居跡(2)

1. 黒褐色土 IV相当の細粒土
2. 黒褐色土 IV相当で、ややしまる
3. 褐色土 赤褐色の焼土ブロック混入
4. 赤色土 焼土ブロック
5. 黒褐色土 炭の小片を主体とする
6. 黒色土 炭を主体とする

ビット

1. 暗褐色土 炭化粒を多く含む

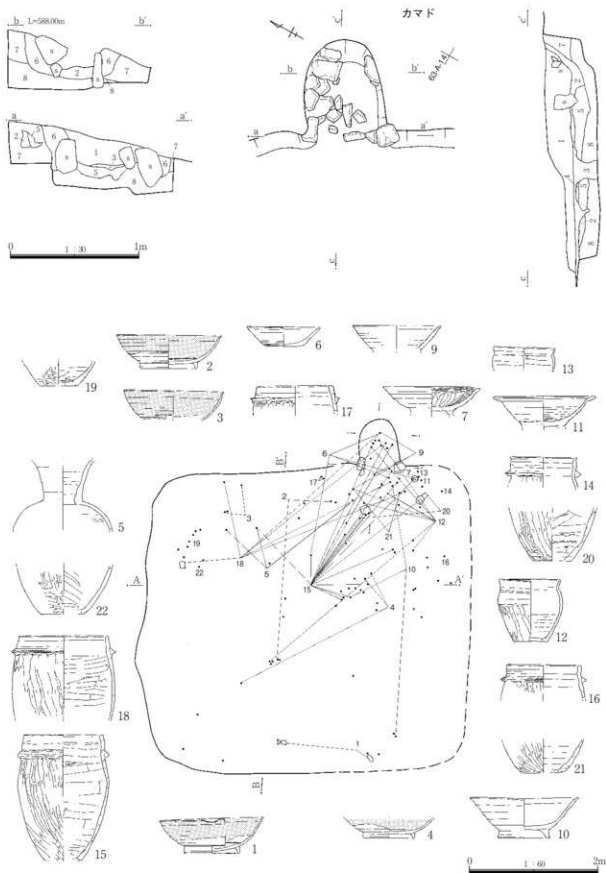
床下土坑

1. 黄褐色土 褐色土との混土、炭化粒をわずかに含む
2. 黒色土 ロームブロックを含む

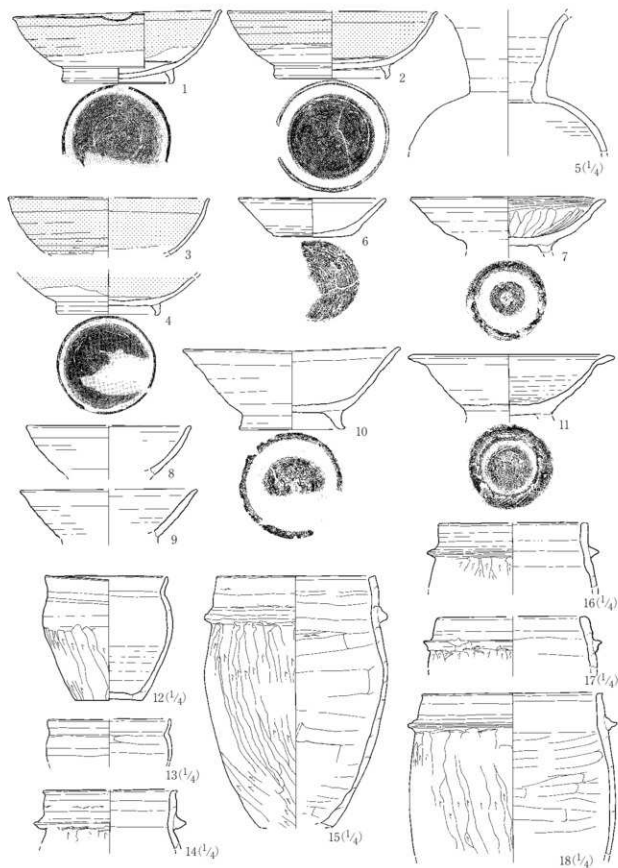
カマド

1. 黒褐色土 わずかな焼土粒を含む
2. 暗褐色土 多くのローム粒と焼土を含む
3. 黒色土 炭を主体とし、焼土粒も含む
4. 黄褐色土 ローム層
5. 赤色土 厚く全体が焼土化している焼土層
6. 暗褐色土 地山を削り、カマド補石を固定する
7. 暗褐色土 IX-X相当
8. 黄褐色土 X相当 (崩落して堆積した層か)

第2章 検出された遺構と遺物

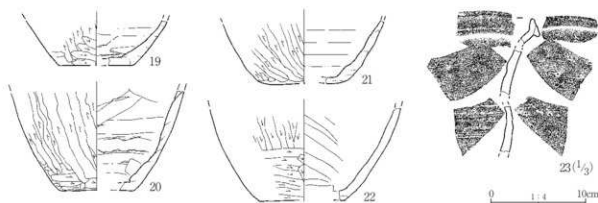


第84図 13号住居跡(3)・遺物出土状態



第85図 13号住居跡出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第86図 13号住居跡出土遺物(2)

14号住居

(図 87・88 PL 15・55)

位置 62区 V・W - 14・15グリッド

重複関係 他の遺構と重複していない。

形状 はほぼ正方形

規模 長径(3.56)m、短径 3.18m、深さ 26cm

面積 10.13mf

主軸方位 N - 61° - E

竈 北壁面中央部付近を掘り込んで造られていた。残存状態は極めてよくないが、竈内から検出された石と焼土から、燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られていたと思われる。

柱穴 掘られていなかった。

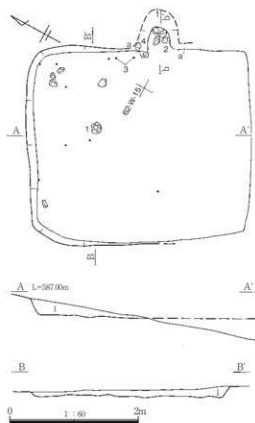
床面・床下施設 硬化した床面はなかった。

貯蔵穴 掘られていなかった。

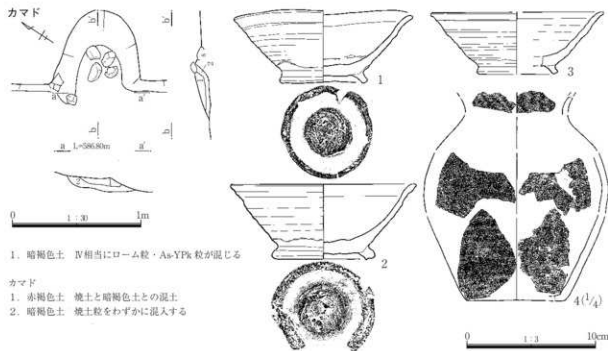
遺物出土状態 遺物の出土量はきわめて少ない。

床面から (No.1) 須恵器の椀と (No.3) 須恵器の椀が出土している。(No.4) 須恵器の甕は竈燃焼部内からの出土である。

所見 住居の残りがよくなく、更に地山と覆土の違いが不明瞭で住居範囲の確認が困難であった。竈内の石と焼土、竈手前の床面等から慎重に調査を進め、住居範囲を確定した。時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。



第87図 14号住居跡(1)



1. 暗褐色土 IV相当にローム較・As-YF% 較が混じる

カマド

1. 赤褐色土 焼土と暗褐色土との混土
2. 暗褐色土 焼土粒をわずかに混入する

第88図 14号住居跡(2)・出土遺物

15号住居

(図 89 PL 15・55)

位置 62区 T・U-13・14グリッド

重複関係 16号住居との重複部分は、16号住居が埋まった上に15号住居の床面が構築されていた。

125・184・189号土坑を切る。

形状 方形であるが、詳細は不明。

規模 長径 3.96m、短径(3.72)m、深さ 42cm

面積 (8.73)㎡

主軸方位 N-64°-E

竈 東壁面の北側を掘り込んで造られていた。他の住居では南側に造られていた竈が、本住居では極端に北側に造られていた。竈の南側を詳しく調査すると、竈を造る際に持ち込まれて埋められるロームが、少量の石とともに埋められていた。当初は、そこに造る予定であったが、何らかの理由で北側にずらして造ったと思われる。当初の子定地点には焼土が検出されなかったので竈の造り替えではない。

竈は、地山を一度掘り取り、そこにロームを持ち込み、袖石や煙道部分の石を据えて造られたようである。

竈手前には多くの石と焼土が散在し、袖石や煙道部の側石などもほとんど動いていた。このことから、竈は住居を放棄するときに廃棄されたと思われる。柱穴 掘られていなかった。

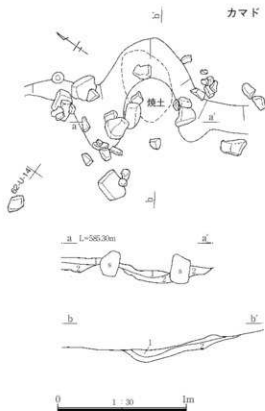
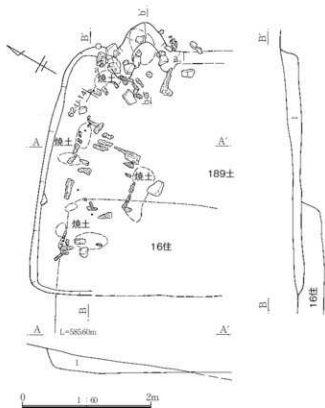
床面・床下施設 竈手前に明瞭な床面を検出した。

貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物出土状態 覆土から出土した (No.1) の須恵器は、判読不可能であるが外面体部に墨書があった。

所見 残存状態のよい北側を中心に床面から約5cmの高さから建築部材の一部と思われる炭化材がまとまって出土した。焼失住居の可能性が考えられる。(No.2) は土師器の土釜で床面から出土した。時期については、出土遺物から10世紀後半代に比定される。

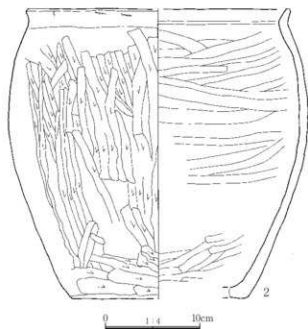
第2章 検出された遺構と遺物



1. 黒色土 IVに炭化粒を多く含む

カマド

1. 赤褐色土 黒褐色土ブロックを多く含む焼土
2. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む(掘り方)



第89図 15号住居跡・出土遺物

16号住居

(図 90・91 PL 15・16・55)

位置 62区 U・V-12・13グリッド

重複関係 竈を含む住居東側部分で15号住居と重複する。本住居の上に15号住居があった。124号土坑に切られていた。

形状 ほぼ正方形

規模 長径 4.68m、短径(4.42)m、深さ 45cm

面積 18.14㎡ 主軸方位 N-65°-E

竈 東壁面やや南側を掘り込んで造られていた。竈を造る前に地山を掘り込み、そこに多くのロームを混入させた黒色土を埋めて基礎部分を構築していた。また、袖部・燃焼部・煙道部の備石の多くは深くしっかりと据えられていた。

天井部は焚き口や煙道部も含めて全く残っておら

ず、支脚石も残っていなかった。このことから、廃棄された竈と考えられる。

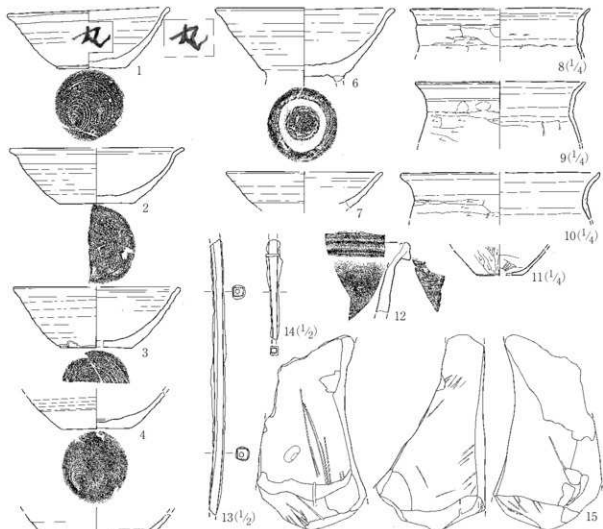
柱穴 東西の壁面外側にピットが2基検出された。位置や深さから柱穴の可能性はある。その規模は、ピット1 (44×30×59)、ピット2 (30×30×56)。

床面・床下施設 床面はほぼ平坦であるが、明瞭な硬化面は検出されなかった。

貯蔵穴 掘られていなかった。

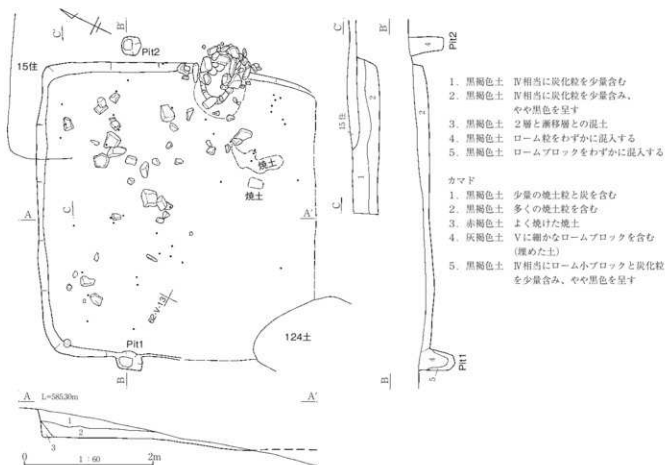
遺物出土状態 竈及びその手前から比較的多くの遺物が出土した。竈内から (NO.15) の砥石、床面付近から鉄滓など鍛冶に関する遺物が出土した PL55 (16住-16) 参照。

所見 時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。



第90図 16号住居跡出土遺物

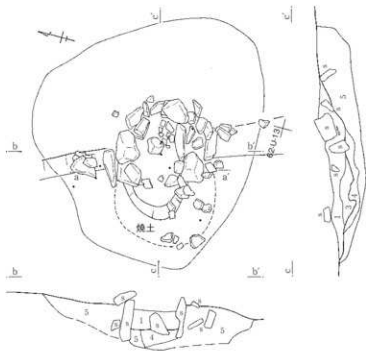
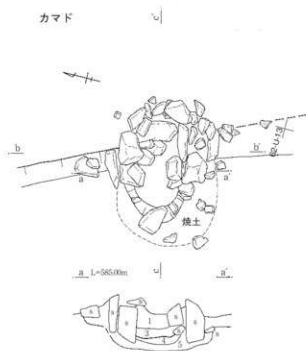
第2章 検出された遺構と遺物



1. 黒褐色土 IV相当に炭化粒を少量含む
2. 黒褐色土 IV相当に炭化粒を少量含む、やや黒色を呈す
3. 黒褐色土 2層と漸移層との混土
4. 黒褐色土 ローム粒をわずかに混入する
5. 黒褐色土 ロームブロックをわずかに混入する

- カマド
1. 黒褐色土 少量の焼土粒と炭を含む
 2. 黒褐色土 多くの焼土粒を含む
 3. 赤褐色土 よく焼けた焼土
 4. 灰褐色土 Vに細かなロームブロックを含む(埋めた土)
 5. 黒褐色土 IV相当にローム小ブロックと炭化粒を少量含む、やや黒色を呈す

カマド



第91図 16号住居跡

22号住居

(図 92-94 PL 16・55・56)

位置 72区 M・N・O-5 グリッド

重複関係 他の遺構と重複していない。

形状 長方形

規模 長径 4.62m、短径(3.59)m、深さ 27cm

面積 (11.16)㎡ 主軸方位 N-26°-W

竈 北壁やや東寄りを掘り込んで造られていた。袖部と燃焼部の一部は床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られていた。竈の残りは良好であり、竈内には炭化した木片が残っていた。袖部から煙道部にかけての備石の大部分と支脚石は残されていたが、天井部に架けられた石は全て外されていた。本住居の竈は、竈を造る部分の壁面を事前に掘り抜いて、粘土質のロームと石を用いて築いていた。また、地山をさらに掘り込んでそこにロームを混入した土を入れながら石を固定しているところもあった。

柱穴 掘られていなかったが、住居のほぼ中央で

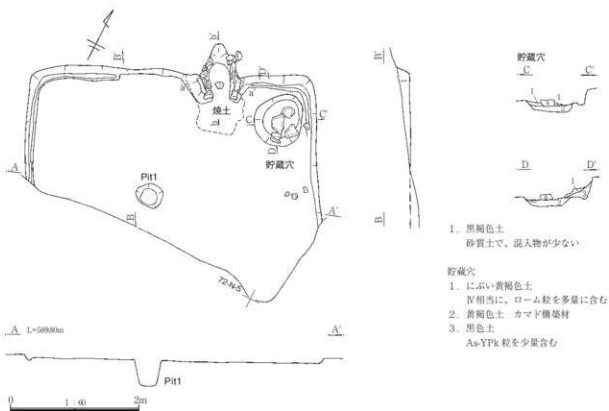
ピットを1基検出した。規模は(43×36×43)。

床面・床下施設 黒色土の地山に黒色土の覆土が埋まっていたため、住居範囲の確認が困難であった。竈周辺以外の南側は、踏み固められた床面の範囲と僅かに違う土質の差から範囲の確認ができた。住居南側の範囲は確認できなかった。また、壁下に周溝が掘られていた。竈右側の床面から貯蔵穴上面にかけて黄褐色粘質土が堆積していた。

貯蔵穴 竈右の北東コーナー付近に掘られていた。

遺物出土状態 竈内及び貯蔵穴付近から須恵器の土器片が出土した。(No.1) 須恵器の柄は、墨書土器で「小」と読み取れる文字が外面に記されていた。

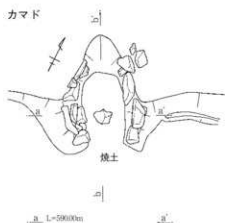
所見 竈及び貯蔵穴付近に多量の黄褐色粘質土を用いた住居は、西に接した4号住居でも同様であった。この多量の黄褐色粘質土は、竈を造るためだけに持ち込まれたのではなく、土器づくりなどに用いるために住居内に貯蔵していたと考えられる。時期については、出土遺物から10世紀初頭に比定される。



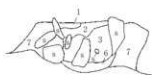
第92図 22号住居跡(1)

第2章 検出された遺構と遺物

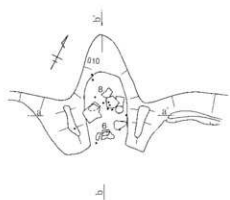
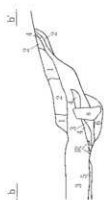
カマド



1/30 L=5000m

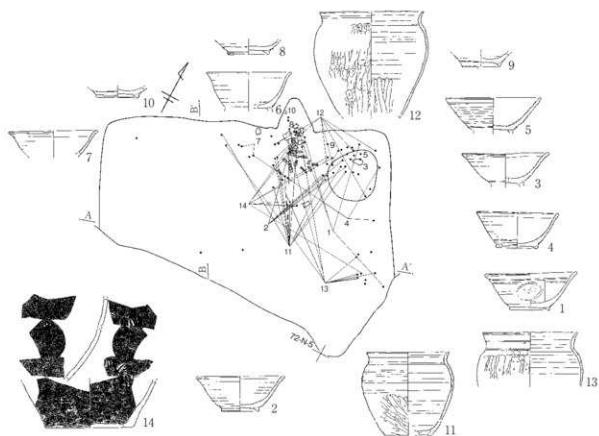


0 1:30 1m

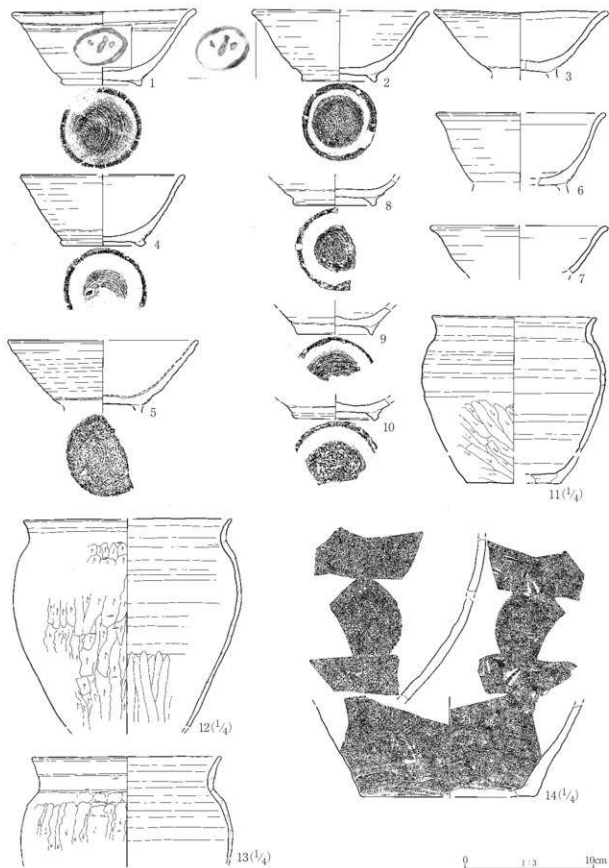


カマド

1. 黒褐色土 IV相当に、ローム粒を含む
2. 明黄褐色土 ロームを主体とし、少量の黒色土を含む
3. 黒褐色土 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む
4. 橙色土 よく焼けた焼土
5. 灰白色土 粘質土
6. 黒褐色土 多くのローム粒を含む
7. 黒褐色土 IV相当でしまりに欠く



第93図 22号住居跡(2)・遺物出土状態



第94図 22号住居跡出遺物

30号住居

(図 95 PL 16・56)

位置 62区 U・V-15・16グリッド

重複関係 131・132号土坑を切る。

形状 方形

規模 長径(4.29)m、短径(4.20)m、深さ 21cm

面積 (16.31)㎡

主軸方位 N-65°-E

竈 調査区域内の東側にあると思われる。

柱穴 調査範囲には掘られていなかった。

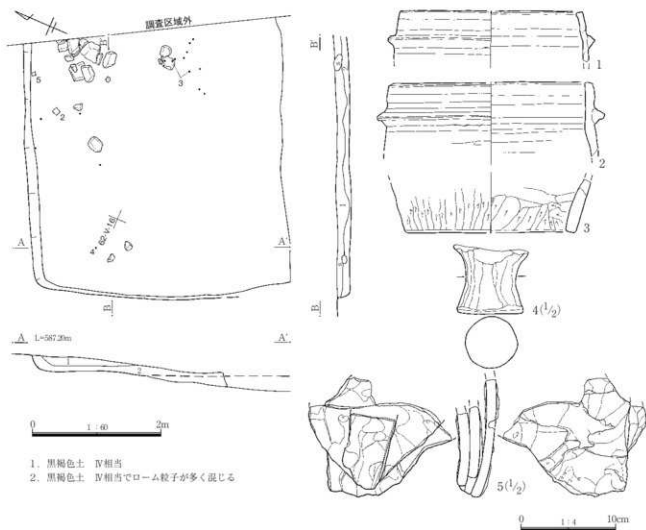
床面・床下施設 床面は明確に検出されなかった。

床下土坑も調査範囲には掘られていなかった。

貯蔵穴 調査範囲には掘られていなかった。

遺物出土状態 床面付近の高さで散見された。

所見 焼土や土器破片が出土していたので住居として調査を進めた。地山と覆土との違いが少なく調査は困難であった。竈は、調査区域外である東側にあると思われる。住居範囲は、北壁と西壁の立ち上がりから北と西の範囲を明らかにした。北壁最高値は23cmであった。しかし、覆土上面の焼土の広がりや土器破片の様相から重複住居の可能性も考えられる。東側部分の調査が行われた段階で住居範囲や重複関係等の再検討を行う必要がある。出土した遺物から、本住居の時期は10世紀前半代に比定される。



- 1. 黒褐色土 IV相当
- 2. 黒褐色土 IV相当でローム粒子が多く混じる

第95図 30号住居跡・出土遺物

第2項 土坑

本遺跡では平安住居跡を検出した面及びその住居下から多数の土坑（陥し穴）を検出した。八ッ場地区では、1108（天仁元）年に浅間山から噴出した浅間Bテフラ（As-B）や、1128（大治3）年の浅間柏川テフラ（As-K）が、埋没土の途中から確認されている。そのことから、陥し穴の設置時期が中世以前の平安時代と考えられる事例が数多く存在する。本来ならば、ここでの時期を古代とすべきとの考えもあろうが、便宜上平安時代の土坑ということで134基を報告する。規模等については、第3表土坑一覧表を参考にさせていただきたい。

分類 形状から以下のように分類した。

- I類・・・上面が楕円形で下面は長方形
- II類・・・上面が隅丸長方形で下面は長方形
- III類・・・上面の詳細は不明で下面は長方形
- IV類・・・上面下面とも楕円

その結果は、I類62基、II類32基、III類32基、IV類8基となった。少なくとも下面の形状は設置時の形状をとどめていると考えられるので、本遺跡での陥し穴の下面の形状は長方形のタイプが最も多いことが分かる。

次に上面の形状についてであるが、I類、つまり上面が楕円形のタイプが優勢であった。次いで溝型と称される上面下面ともほぼ長方形を呈するII類という結果になった。

ところで、設置時の陥し穴上面の形状はどのようなものであったのだろうか。推測の域を出ないがI類は、アリ地獄を想像させるような上面の形状から、追込み気用の陥し穴が想定できる。また、II類は、上面の形状から、上に簡単な覆いをし糞物がかかるのをひたすら待つ、仕掛け用の陥し穴が想定できる。狩猟方法に応じた陥し穴を設置していたのではないだろうか。

埋没状況 自然埋没と思われるものが大多数であったが、24・86・149・194号土坑に限っては、ローム

ブロックが混入するなど、土層観察から人為的に埋められた様子がかがえた。

設置時期 39号土坑は、深さ2.45mを測る非常に残存状態のよい土坑である。埋没状態は自然埋没であり、4層は古代前半に発生したと思われる崩落土層を含んだ層である。この4層の上でAs-Bと思われる赤灰、As-Kと思われる緑灰の堆積が認められた。深さでいうと1.90m～2.30の位置である。どの程度の早さで自然埋没していくのかは一概に算定できないが、2m近くの深さを自然埋没していくにはかなりの年月が必要になると思われる。少なくとも1108年よりかなり古い時期が設置時期であることが分かる。

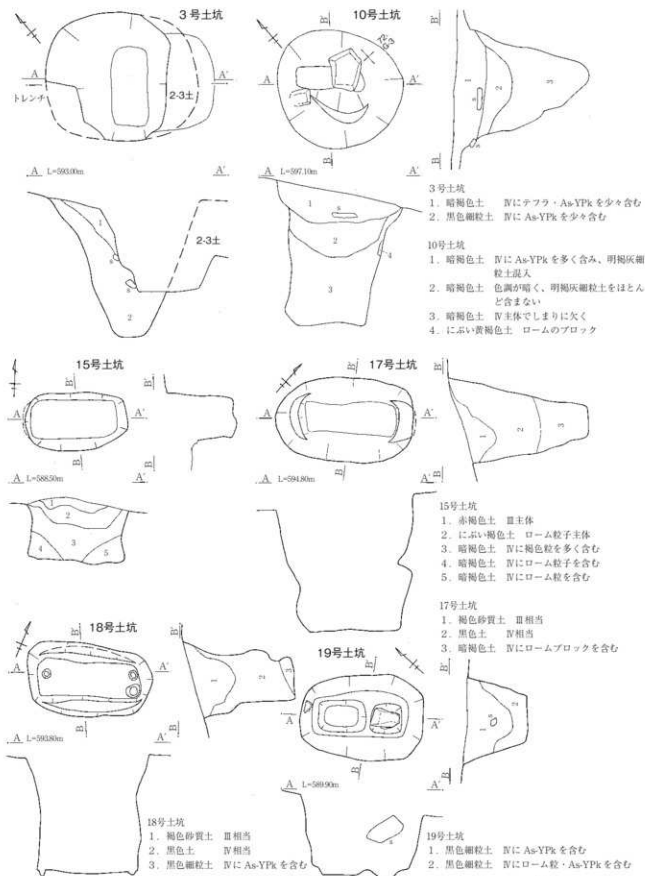
平安住居との重複関係では、10・52号土坑以外は9世紀後半代から10世紀後半代の住居より古いことが確認された。埋没した陥し穴の上に住居が構築されていることを考慮すると、9世紀中頃以前が設置時期ではないかと推測される。

設置した人々 9世紀中頃以前に設置されたと推測される陥し穴群は、どこからやってきた人々が設置したのだろうか。

八ッ場地区からは、設置時期と合致すると思われる集落群は、今のところ検出されていない。9世紀中頃以前のある一時期、本遺跡地は周辺集落で生活していた人々の狩り場とされていたのは明らかである。おそらく、八ッ場地区の周辺集落で生活していた人々の狩り場とされていたのではないだろうか。今後の調査結果を待ちたい。

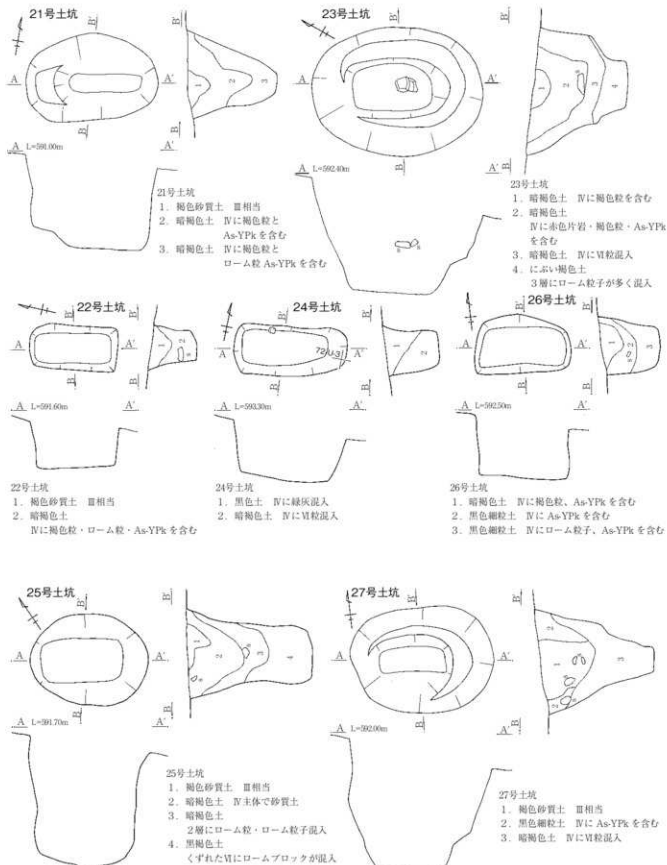
単独の陥し穴や集落内での陥し穴の設置は理に叶わない。住居との重複関係で例外として扱った10・52号土坑については、切り合い関係を確実に判断できたとは言えない。土層を再検討する必要がある。また、設置当初の陥し穴の上面の形状であるが、これについても深さ2m以上の残存状態がよいものを集積し、その土層を検証していくことで解明への糸口がつかめるように感じる。

第2章 検出された遺構と遺物



第96図 平安時代の土坑(1)

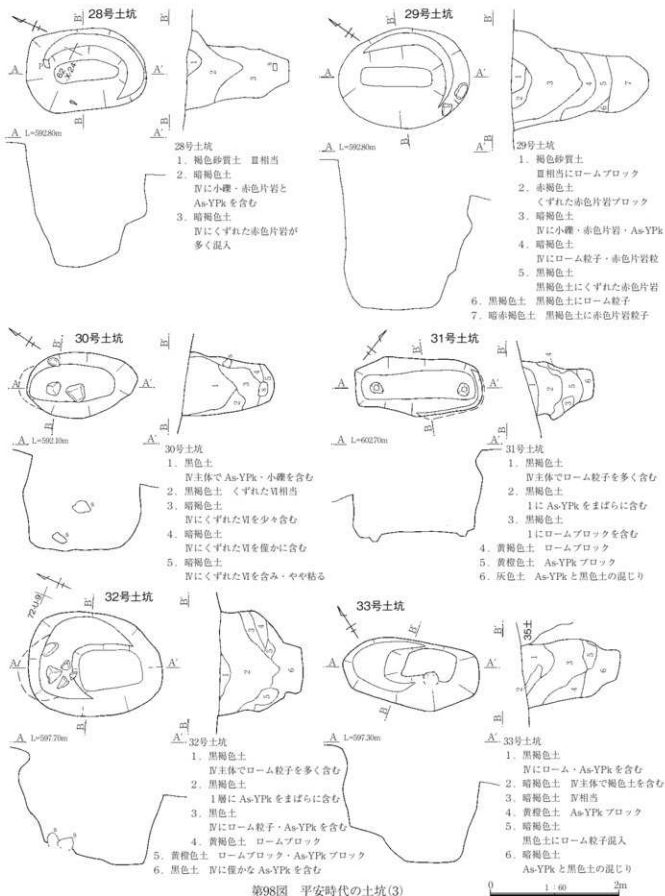
0 1:60 2m



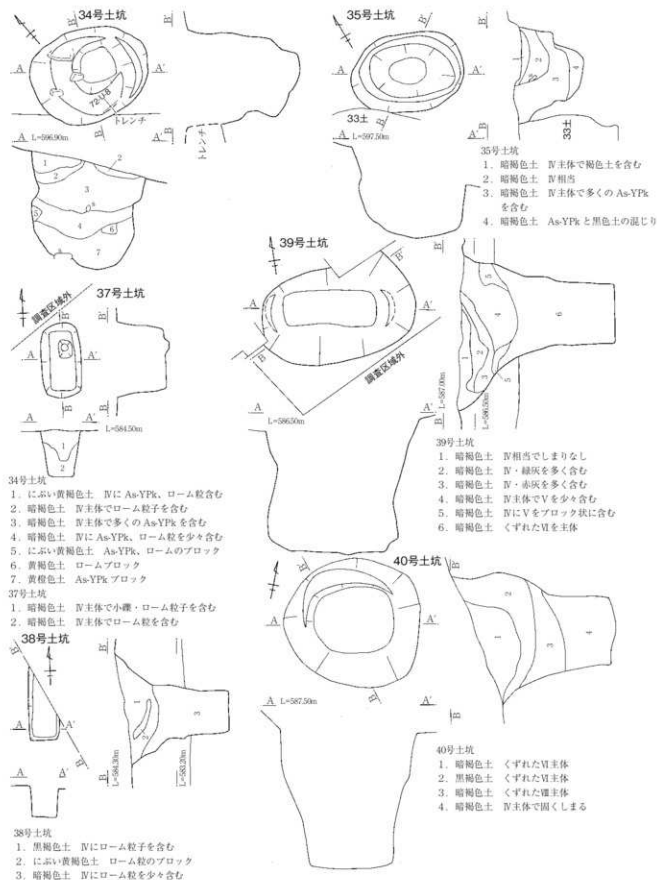
第97図 平安時代の土坑(2)

0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物



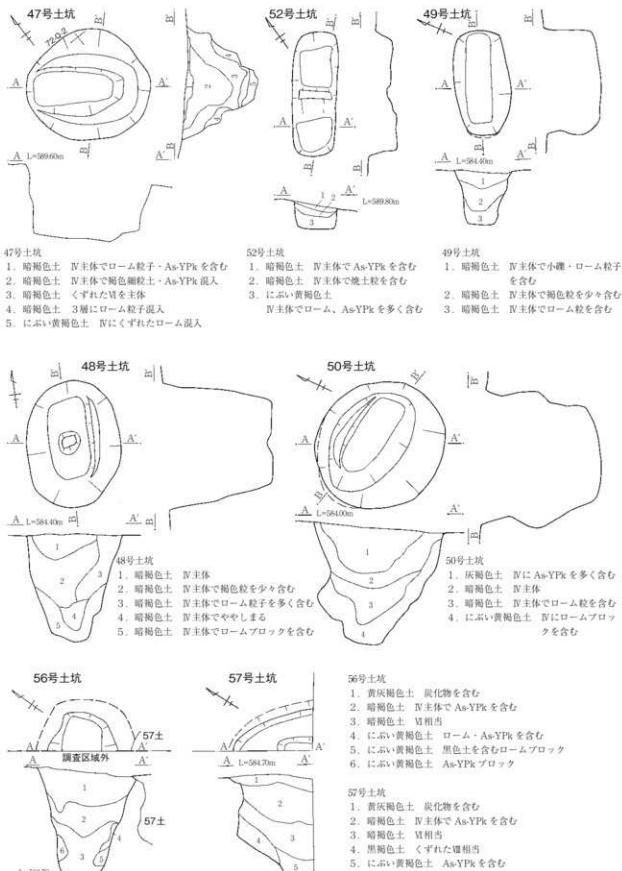
第98図 平安時代の土坑(3)



第99図 平安時代の土坑(4)

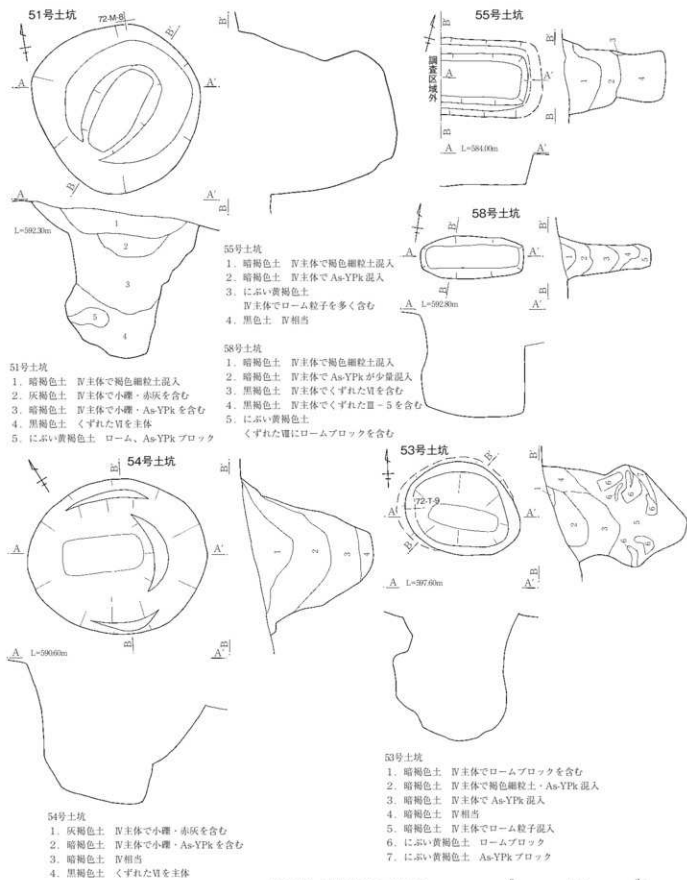
0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物



第100図 平安時代の土坑(5)

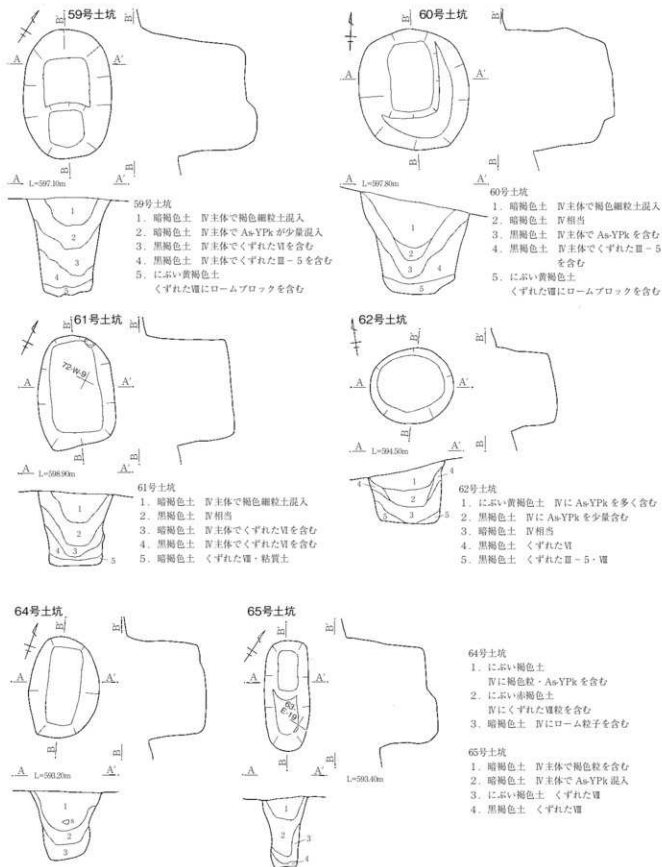
0 1:60 2m



第101図 平安時代の土坑(6)

0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物

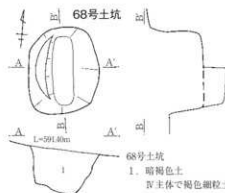


第102図 平安時代の土坑(7)

0 1:60 2m



- 66号土坑
1. にぶい褐色土 固くしまり、瓦粒を含む
 2. 暗褐色土 V相当
 3. にぶい褐色土 ぐずれたV
 4. 黒褐色土 ぐずれたV



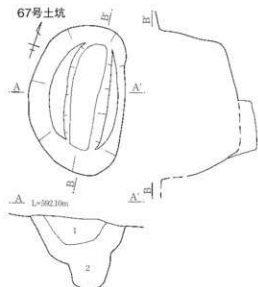
- 68号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土・As-YPk混入



- 69号土坑
1. にぶい褐色土
III相当・褐色砂質土に褐色粒を含む
 2. 暗褐色土
IV主体でローム粒を含む
 3. 暗褐色土
IV主体でロームブロックを含む



- 71号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体で炭化物を含む
 3. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む
 4. 暗褐色土
IV主体で黄褐色土・VI相当を含む



- 67号土坑
1. にぶい褐色土 固くしまり、瓦を杖状に含む
 2. にぶい褐色土 ぐずれたVを主体



- 70号土坑
1. 黒褐色土 As-YPk・褐色粒を含む
 2. にぶい赤褐色土 ぐずれたVを主体
 3. 黒褐色土 VIを主体
 4. 明黄褐色土 ぐずれたVを多く含む
 5. 黒褐色土 ぐずれたVを主体

第2章 検出された遺構と遺物

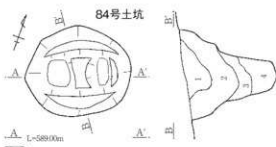


第104図 平安時代の土坑(9)

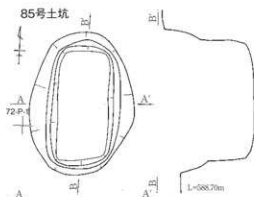
0 1:60 2m



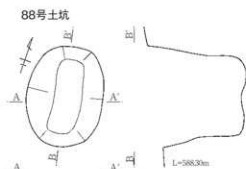
- 80号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む
 3. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む
 4. 暗褐色土
IV主体で黄褐色土・VI相当を含む
 5. 暗褐色土
IV主体でVIの崩れを含む



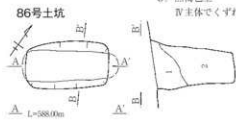
- 84号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体で炭化物を含む
 3. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む
 4. 暗褐色土
IV主体で黄褐色土・VI相当を含む



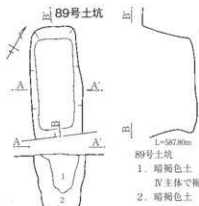
- 85号土坑
1. にぶい黄褐色土
黒ずんだローム粒子
 2. 黄褐色土
ロームブロック
 3. 暗褐色土
IV主体でややしまる
 4. 暗褐色土
IV主体で黄褐色土・VI相当を含む
 5. 黒褐色土
IV主体でくずれた礫を含む



- 88号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む
 3. 暗褐色土
IV主体でややしまる
 4. 暗褐色土
IV主体で黄褐色土のVI相当を含む
 5. 暗褐色土
IV主体でVIの崩れを含む



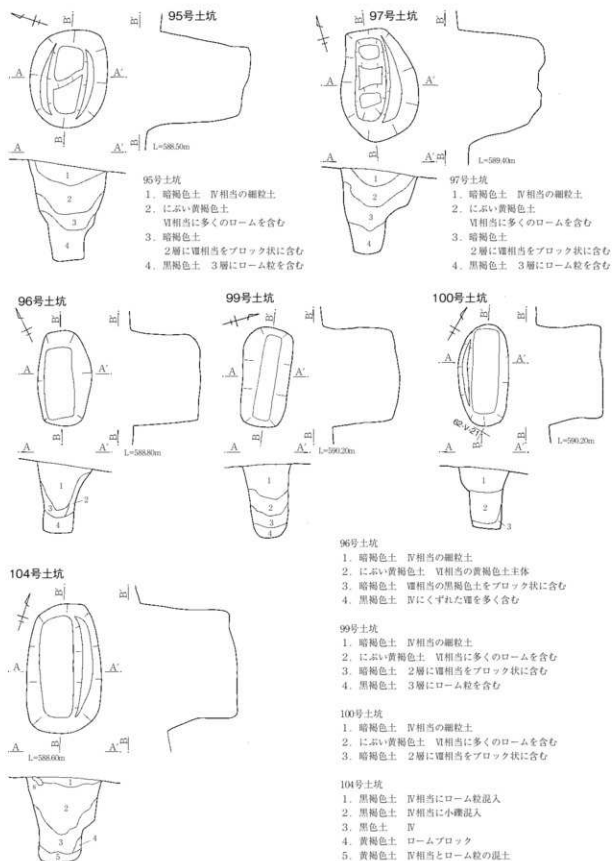
- 86号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む



- 89号土坑
1. 暗褐色土
IV主体で褐色細粒土を含む
 2. 暗褐色土
IV主体でAs-YPk・褐色粒を含む

第105図 平安時代の土坑(10)

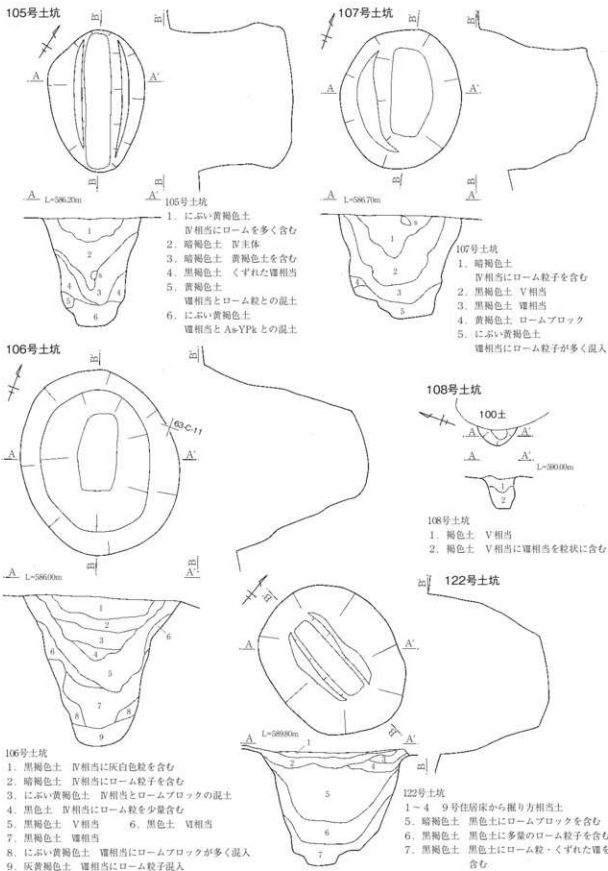




第107図 平安時代の土坑(12)

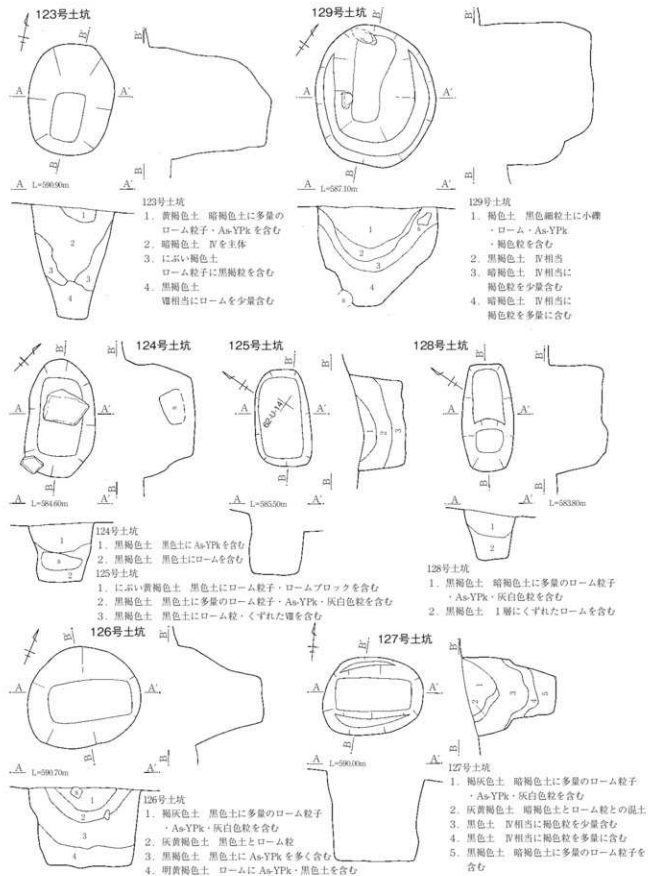
0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物



第108図 平安時代の土坑(13)

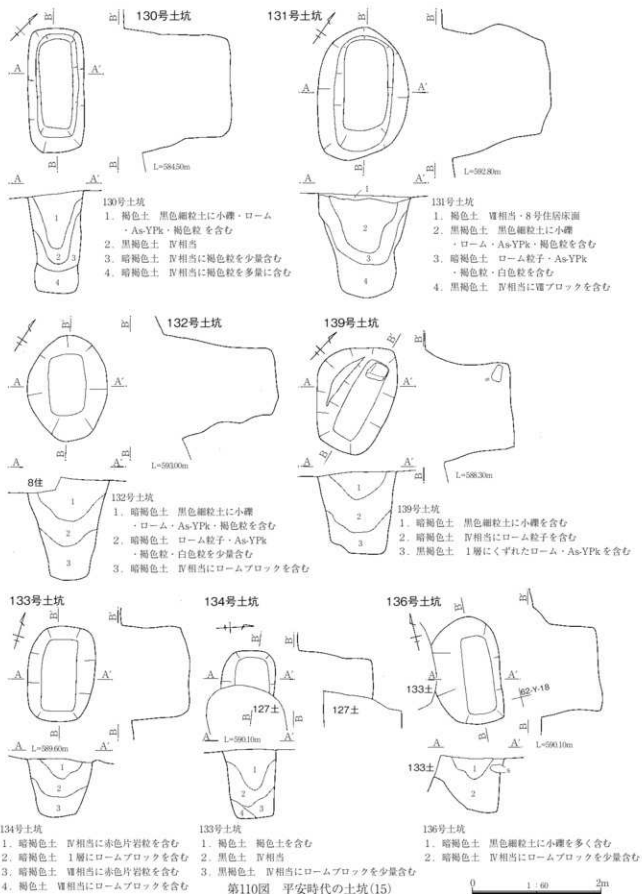
0 1:60 2m

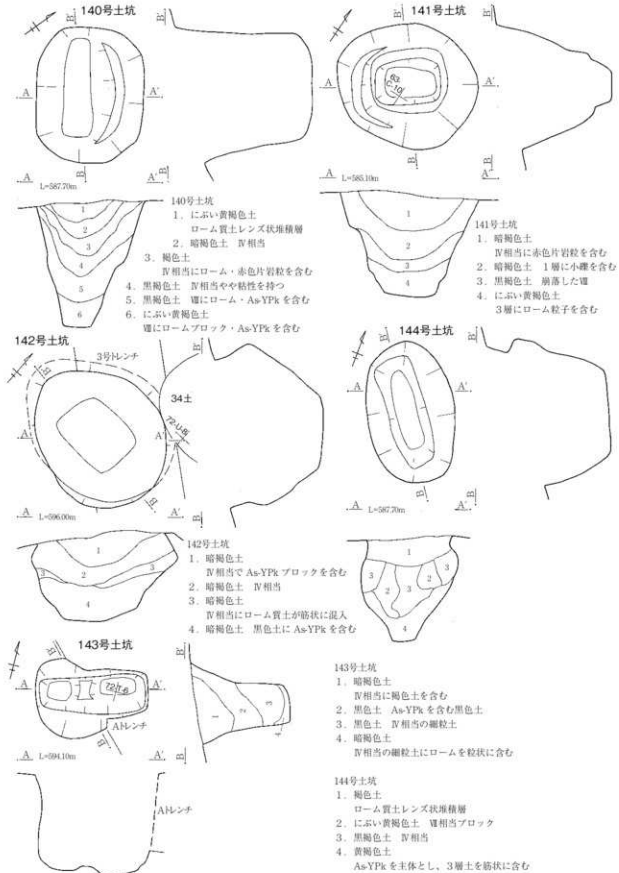


第109図 平安時代の土坑(14)

0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物

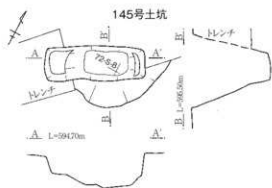




第111図 平安時代の土坑(16)

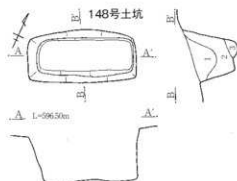


第2章 検出された遺構と遺物



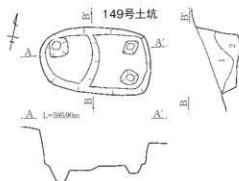
146号土坑

1. 暗褐色土 黒色細粒土にローム粒子・緑灰をブロック状に混入
2. 黒色土 IV相当の細粒土



148号土坑

1. 暗褐色土 ローム質土レンズ状堆積層
2. 黒褐色土 As-YPkを多く含むIV相当の細粒土
3. 3. ぶい黄褐色土 崩落したAs-YPkを粒状に含む



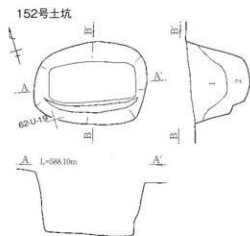
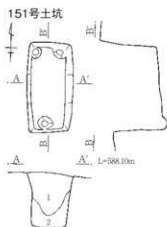
149号土坑

1. 暗褐色土 黒色細粒土にローム粒子・緑灰をブロック状に混入
2. 黒色土 IV相当の細粒土



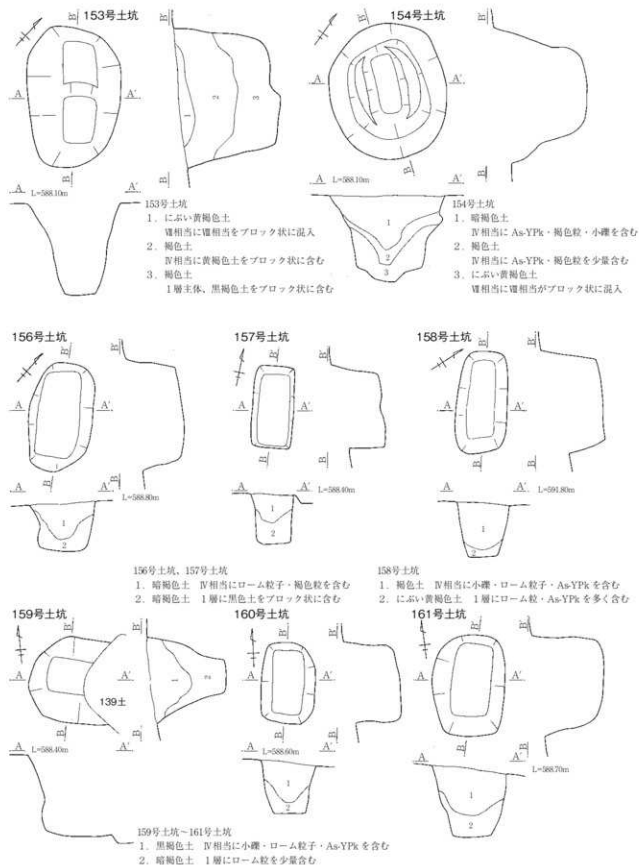
150号土坑～152号土坑

1. 褐色土 黒色細粒土にくずれた黄褐色土をブロック状に含む
2. 褐色土 I層主体・黒褐色土をブロック状に含む



第112図 平安時代の土坑(17)

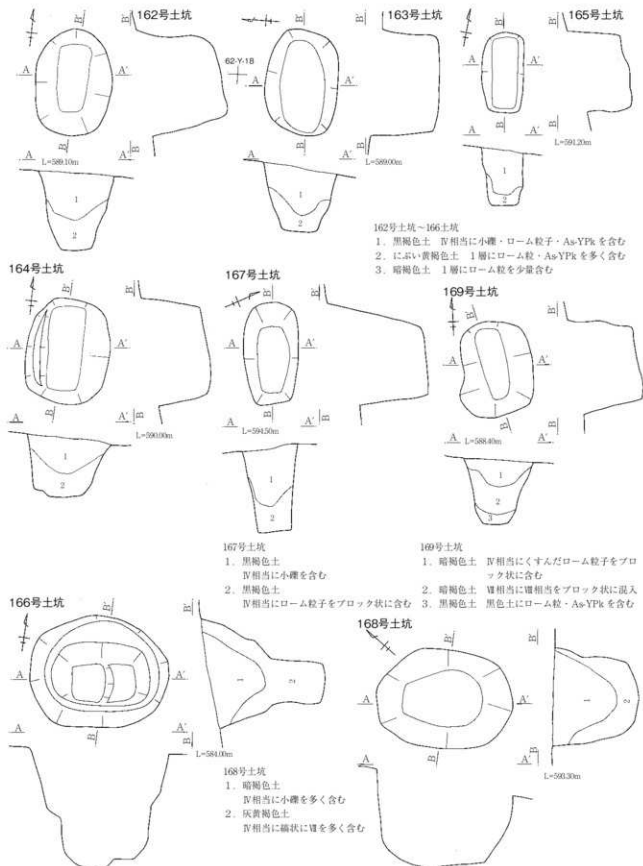
0 1:60 2m



第113図 平安時代の土坑(18)

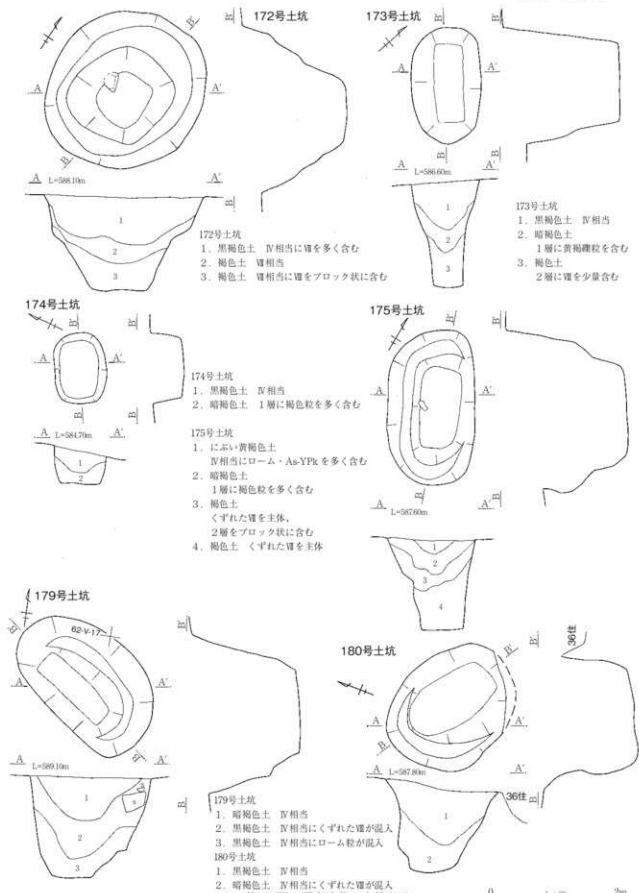
0 1:60 2m

第2章 検出された遺構と遺物



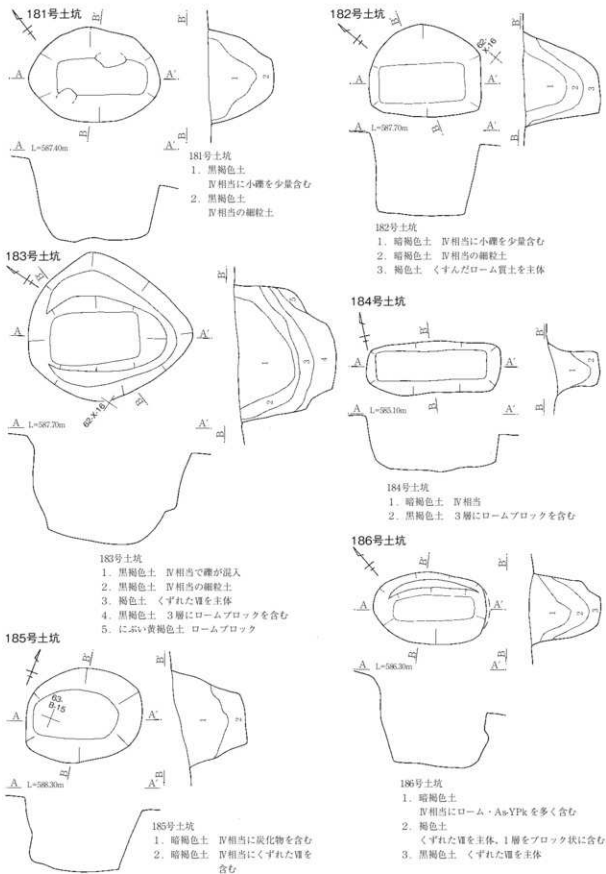
第114図 平安時代の土坑(19)

0 1:60 2m



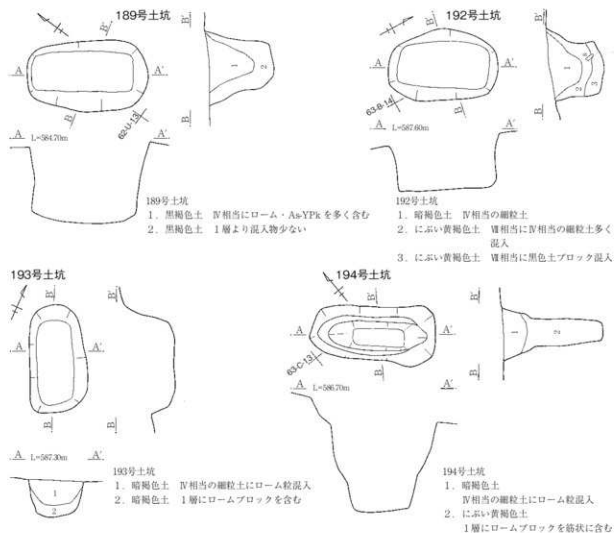
第115図 平安時代の土坑(20)

第2章 検出された遺構と遺物

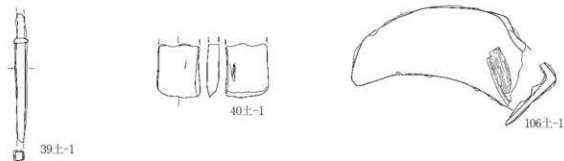


第116図 平安時代の土坑(21)

0 1:60 2m



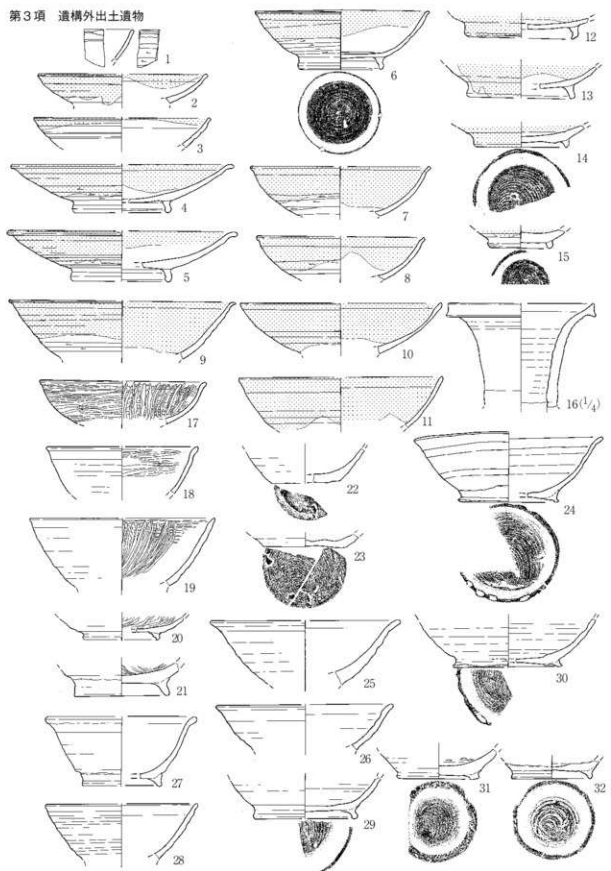
第117図 平安時代の土坑(22)



第118図 平安時代の土坑出土遺物

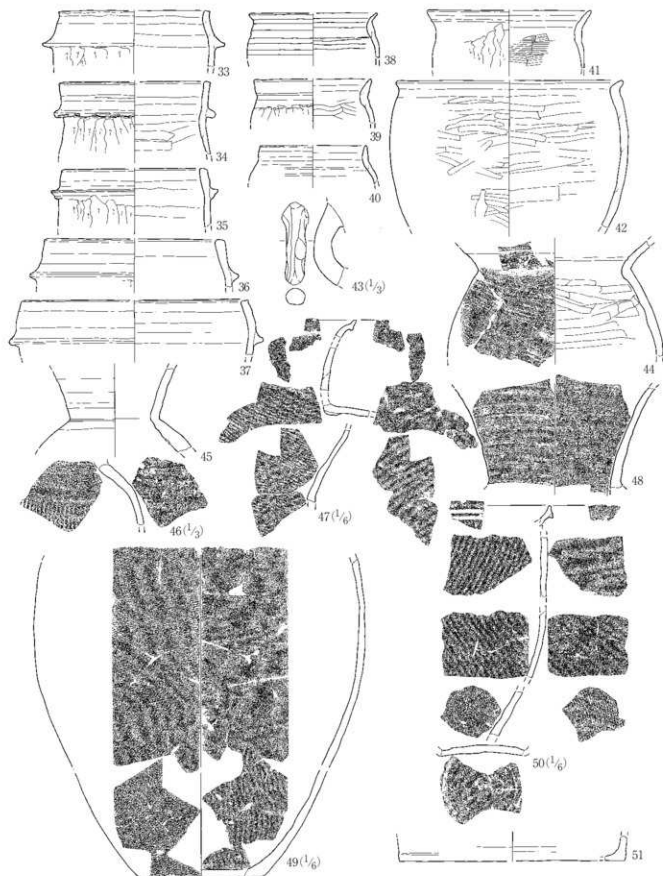


第3項 遺構外出土遺物



第119図 平安時代遺構外出土遺物(1)

0 1:3 10cm



第120図 平安時代遺構外出土遺物(2)

0 1:1 10cm

第6節 中・近世

第1項 土坑（墓坑）

はじめに

上ノ平1遺跡72区及び63区から、中近世の墓坑17基が検出された。これらの内、72区の1号・2-1号・2-3号・4号・5-1号・5-2号・5-3号・6号・7号・8-1号・8-2号・9号・11-1号・11-2号・12号・20号土坑の16基からは、近世人骨が検出され、63区74号土坑からは中世人骨が検出された。なお、72区の2-2号土坑は、現場において分けたが、実際は2-1号土坑と同じであると推定される。

中世土坑の63区74号土坑を除く16基の近世土坑は、調査区の南側斜面に、北東～南西にかけて約17m・北西～南東にかけて約5mという比較的狭い場所に集中して検出されており、集団墓の様相を呈している。これまでに、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による八ッ場ダム地区の調査で、これだけまとまった数の近世墓の検出は初めてである。

1. 1号土坑（72区）[2006年5月29日出土]

- (1)形状：本土坑の形状は、隅丸長方形である。
- (2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約183cm・短軸約65cm・深さ約18cmである。
- (3)副葬品：副葬品は、江戸時代後期の陶器製徳利1点が検出されている。
- (4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北東にした仰臥伸展葬で埋葬されている。
- (5)被葬者：被葬者は、老齢の男性1個体が埋葬されている。

2. 2-1・2号土坑（72区）[2006年6月6日出土]

- (1)形状：本土坑の形状は、隅丸長方形である。残念ながら、本土坑の南西部は、遺構確認トレンチにより削られているため全容は不明である。
- (2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で、長軸約143cm・短軸約53cmである。
- (3)副葬品：副葬品は、煙管1点が検出されている。
- (4)被葬者の埋葬状態：本土坑の南東部から頭蓋骨のみ検出されているため、全容は不明である。

植崎 修一郎

- (5)被葬者：被葬者は、約30歳の男性1個体が埋葬されている。

3. 2-3号土坑（72区）[2006年6月6日出土]

- (1)形状：本土坑の形状は、不整形である。
- (2)大きさ：本土坑の大きさは、直径約130cm～約140cm・深さ約80cmである。
- (3)副葬品：副葬品は、煙管1点及び銭貨の寛永通宝6点が検出されている。この内、5点の寛永通宝は癒合した状態である。
- (4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、顔面部を北西に向けた座葬で埋葬されている。
- (5)被葬者：被葬者は、約30歳代の男性1個体が埋葬されている。

4. 4号土坑（72区）[2006年5月29日出土]

- (1)形状：本土坑の形状は、楕円形である。
- (2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約95cm・短軸約65cm・深さ約30cmである。
- (3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝7点が癒合した状態で検出されている。
- (4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北東にした仰臥屈葬で埋葬されている。
- (5)被葬者：被葬者は、約14歳の女性1個体が埋葬されている。

5. 5-1号土坑（72区）[2006年5月29日出土]

- (1)形状：本土坑の形状は、方形である。但し、北西部で5-2号土坑と重複しているため全容は不明である。
- (2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で長軸約85cm・短軸約75cm・深さ約35cmである。
- (3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝12点が検出されている。これらは、単独の状態1点及び4点と7点が癒合した状態である。
- (4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北西にした座葬で埋葬されている。
- (5)被葬者：被葬者は、老齢の男性1個体が埋葬され

ている。

6. 5-2号土坑 (72区) [2006年5月26日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、不整形である。但し、北西部で5-3号土坑とまた南東部で5-1号土坑と重複しているため全容は不明である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で長軸約113cm・短軸約65cm・深さ約35cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝5点が検出されている。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北東にした仰臥屈葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約40歳の男性1個体が埋葬されている。

7. 5-3号土坑 (72区) [2006年5月26日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、隅丸長方形である。但し、南東部で5-2号土坑と重複しているため、全容は不明である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で長軸約100cm・短軸約47cm・深さ約30cmである。

(3)副葬品：副葬品は、刀子1点・煙管1点・銭貨の寛永通宝8点が検出されている。この内5点は癒合した状態である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北東にした横臥屈葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約40歳の男性1個体が埋葬されている。

8. 6号土坑 (72区) [2006年5月26日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、方形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、1辺約80cmの方形で、深さ約50cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝5点が検出されている。この内4点は癒合した状態である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、顔面部を北にした座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、老齢の女性1個体が埋葬されている。

9. 7号土坑

(1)形状：本土坑の形状は、方形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約108cm・短軸約85cm・深さ約90cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨8点が検出されている。この内、2枚と5枚で癒合した状態であるが、上下は寛永通宝である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、顔面部を北に向けた座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約30歳の男性1個体が埋葬されている。

10. 8-1号土坑 (72区) [2006年5月29日出土]

(1)形状：8-1号及び8-2号土坑は、直径約190cmの大きな円形土坑の中に2基が位置している。本土坑の形状は、方形であると推定される。北部が8-2号土坑と重複しているため、全容は不明である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で長軸約88cm・短軸約70cm・深さ約45cmである。

(3)副葬品：副葬品は、煙管2点と銭貨の寛永通宝1点が検出されている。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北北西にした仰臥伸展葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約17～18歳の男性1個体が埋葬されている。

11. 8-2号土坑 (72区) [2006年5月26日出土]

(1)形状：8-1号及び8-2号土坑は、直径約190cmの大きな円形土坑の中に2基が位置している。本土坑の形状は、不整形であると推定される。南東部が8-2号土坑と重複しているため、全容は不明である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、現状で長軸約110cm・短軸約90cm・深さ約60cmである。

(3)副葬品：副葬品は、検出されていない。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、顔面部を北東に向けた座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、老齢の女性1個体が埋葬されている。

12. 9号土坑 (72区) [2006年5月26日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、不整形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約70cm・短軸約60cm・深さ約45cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝5点が検出されている。この内、2点は癒合した状態である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北北西にした仰臥伸展葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約15歳の女性（女兒）1個体が埋葬されている。

13. 11-1号土坑（72区）[2006年6月5日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、不整形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、直径約65～70cm・深さ約15cmである。

(3)副葬品：副葬品は、検出されていない。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北西にした座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、性別不明の新生児1個体が埋葬されている。

14. 11-2号土坑（72区）[2006年6月5日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、不整形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、直径65～70cm・深さ約70cmである。

(3)副葬品：副葬品は、煙管の吸口1点及び銭貨の寛永通宝が3点検出されている。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北西にした座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、約40歳代の女性1個体が埋葬されている。

15. 12号土坑（72区）[2006年5月26日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、方形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約85cm・短軸約70cm・深さ約55cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨の寛永通宝が9点検出されている。この内、3点は癒合した状態である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、顔面部を北西に向けた座葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、老齢の男性1個体が埋葬されている。

16. 20号土坑（72区）[2006年6月5日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、楕円形である。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約95cm・短軸約55cm・深さ約50cmである。

(3)副葬品：副葬品は、銭貨寛永通宝が7点検出されている。この内、5点は癒合した状態である。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北東にして左側を下にした横臥屈葬で埋葬されている。

(5)被葬者：被葬者は、老齢の男性1個体が埋葬されている。

17. 74号土坑（63区）[2006年7月7日出土]

(1)形状：本土坑の形状は、隅丸長方形である。なお、本土坑は大石及び礫で覆われている。

(2)大きさ：本土坑の大きさは、長軸約145cm・短軸約70cm・深さ約50cmである。

(3)副葬品：副葬品は、検出されていない。

(4)被葬者の埋葬状態：被葬者は、頭位を北にして左側を下にした横臥屈葬で埋葬されている。

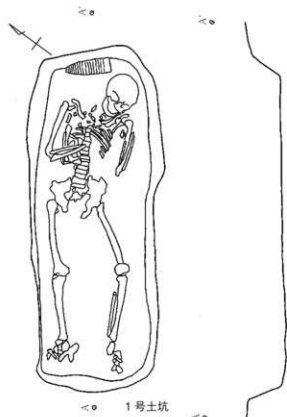
(5)被葬者：被葬者は、約40歳代の女性1個体が埋葬されている。

まとめ

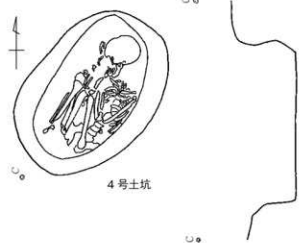
以下に、上ノ平I遺跡の墓坑のまとめを表に示した。

墓坑一覧表

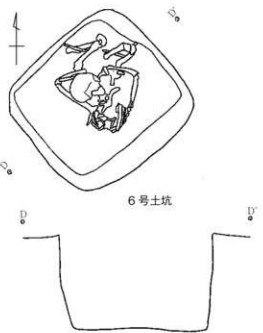
No	土坑番号	土坑			被葬者		
		土坑形態	埋葬形態	副葬品	個体数	性別	死亡年齢
1	1号土坑	隅丸長方形	仰臥伸展葬	徳利	1個体	男性	老齢
2	2号土坑	隅丸長方形	不明	煙管	1個体	男性	約30歳
3	23号土坑	不整形	座葬	煙管・銭貨	1個体	男性	約30歳代
4	4号土坑	楕円形	仰臥屈葬	銭貨	1個体	女性	約14歳
5	5号土坑	方形	座葬	銭貨	1個体	男性	老齢
6	52号土坑	不整形	仰臥屈葬	銭貨	1個体	男性	約40歳代
7	53号土坑	隅丸長方形	横臥屈葬	刀子・煙管・銭貨	1個体	男性	約40歳代
8	6号土坑	方形	座葬	銭貨	1個体	女性	老齢
9	7号土坑	方形	座葬	銭貨	1個体	女性	約30歳
10	8号土坑	方形	座葬	煙管・銭貨	1個体	男性	約17～18歳
11	82号土坑	不整形	座葬	煙管	1個体	女性	老齢
12	9号土坑	不整形	座葬	椀・銭貨	1個体	女性	約15歳
13	11-1号土坑	不整形	不明	無し	1個体	不明	新生児
14	11-2号土坑	不整形	座葬	煙管・銭貨	1個体	女性	約40歳代
15	12号土坑	方形	座葬	銭貨	1個体	男性	老齢
16	20号土坑	楕円形	横臥屈葬	銭貨	1個体	男性	老齢
17	74号土坑	隅丸長方形	横臥屈葬	無し	1個体	女性	約40歳代



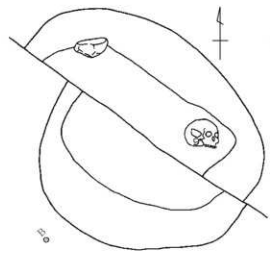
1号土坑



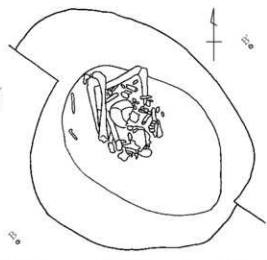
4号土坑



6号土坑



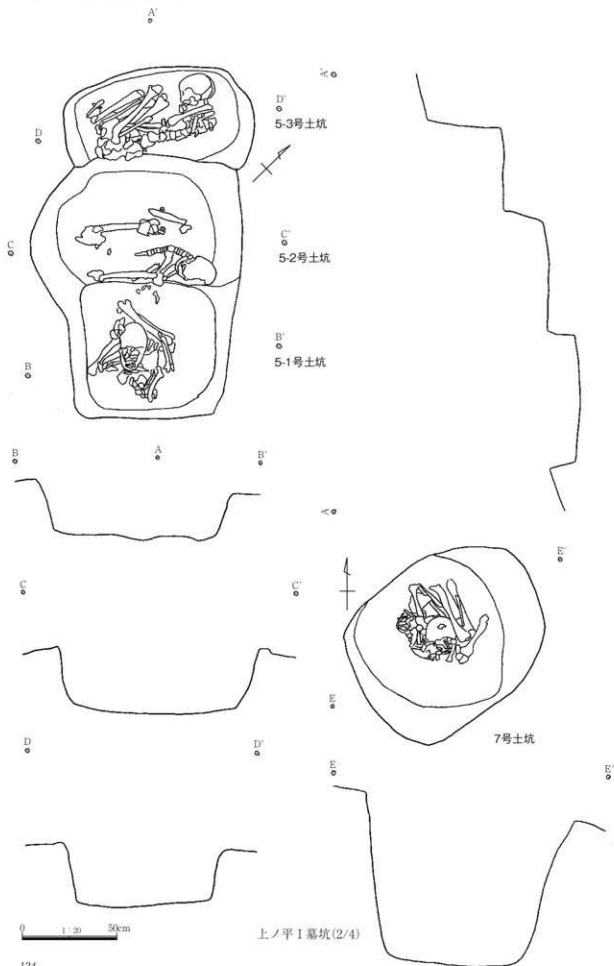
2-1号土坑

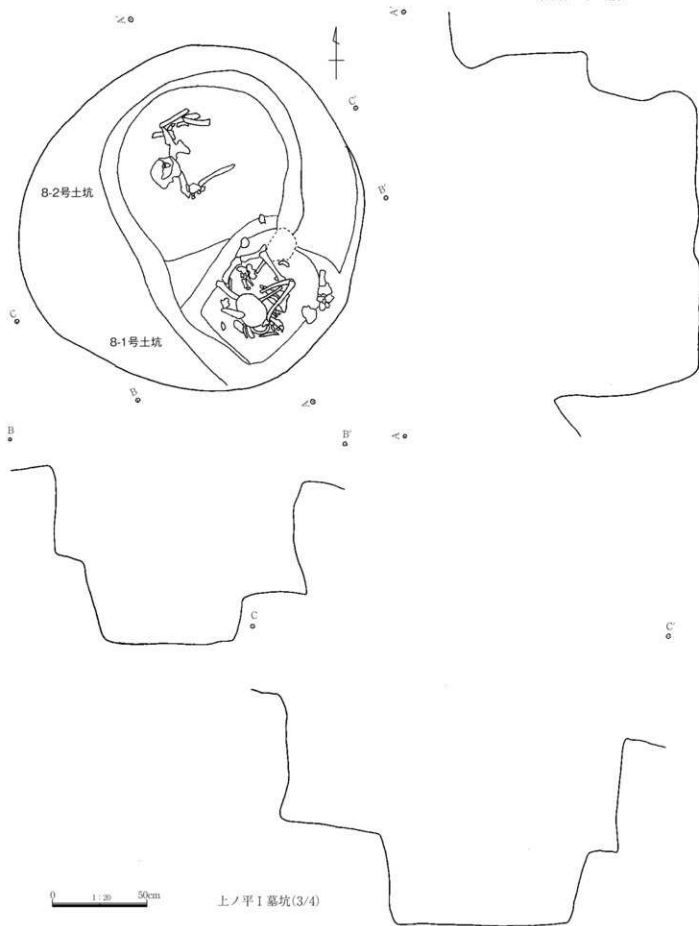


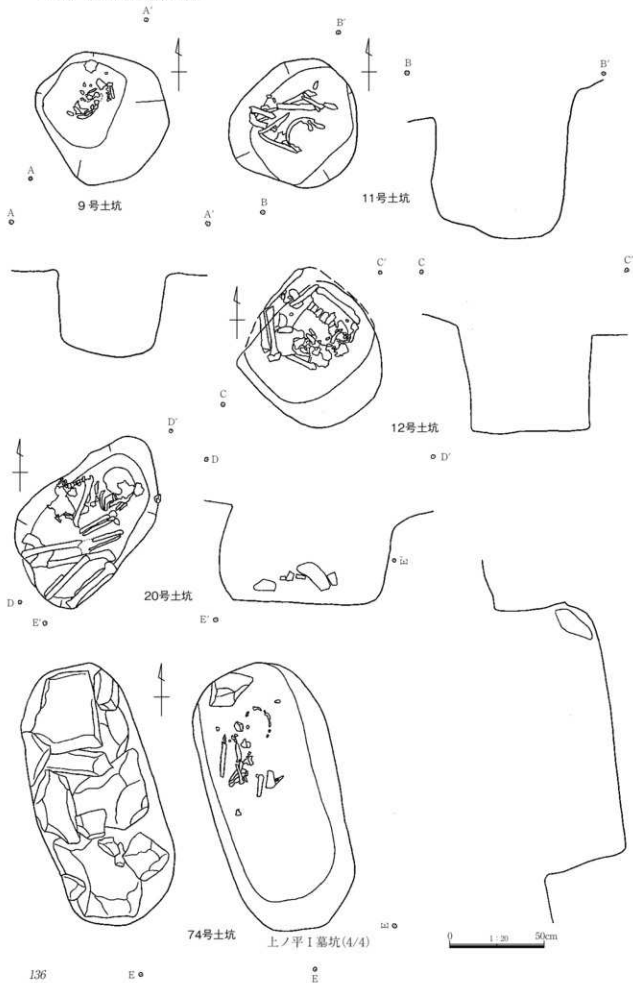
2-3号土坑

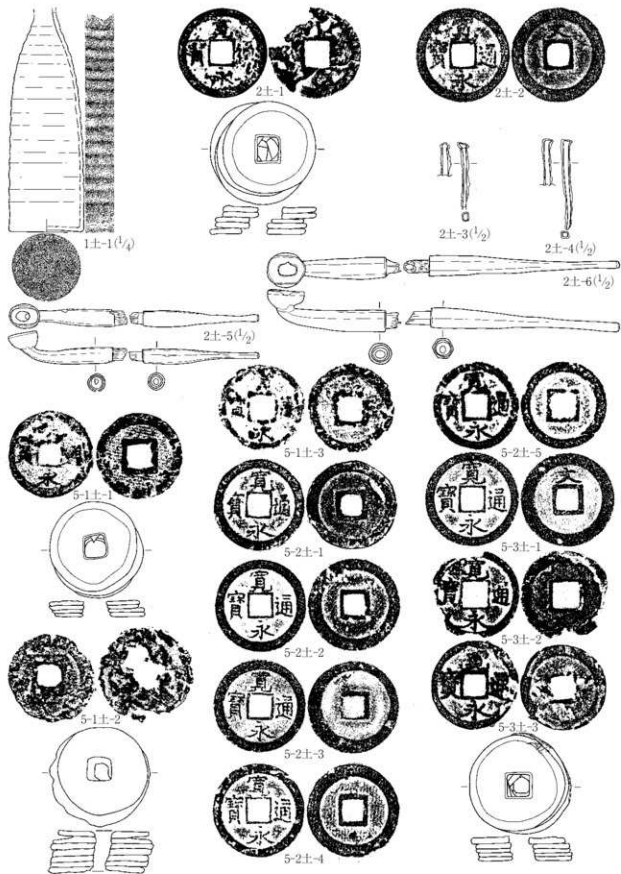
上ノ平I墓坑(1/4)

0 1:20 50cm



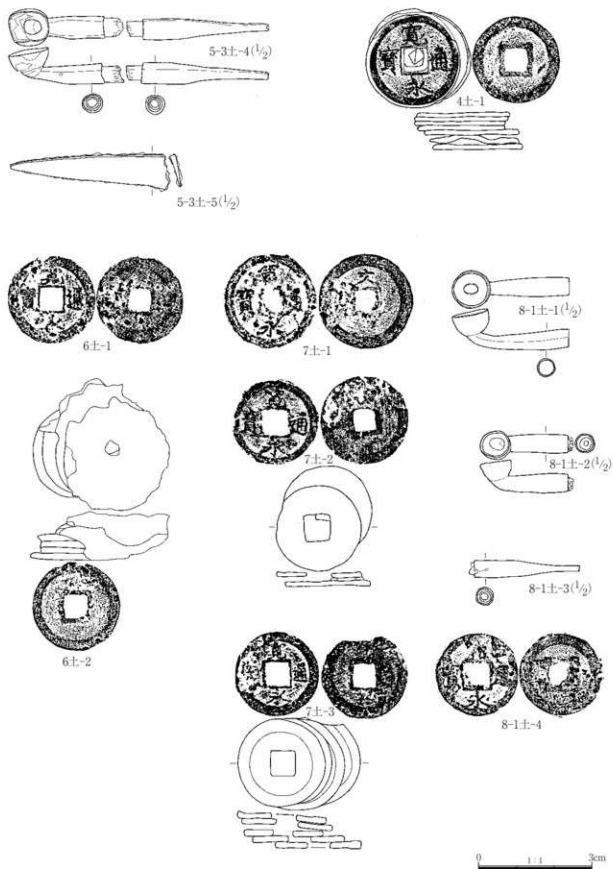




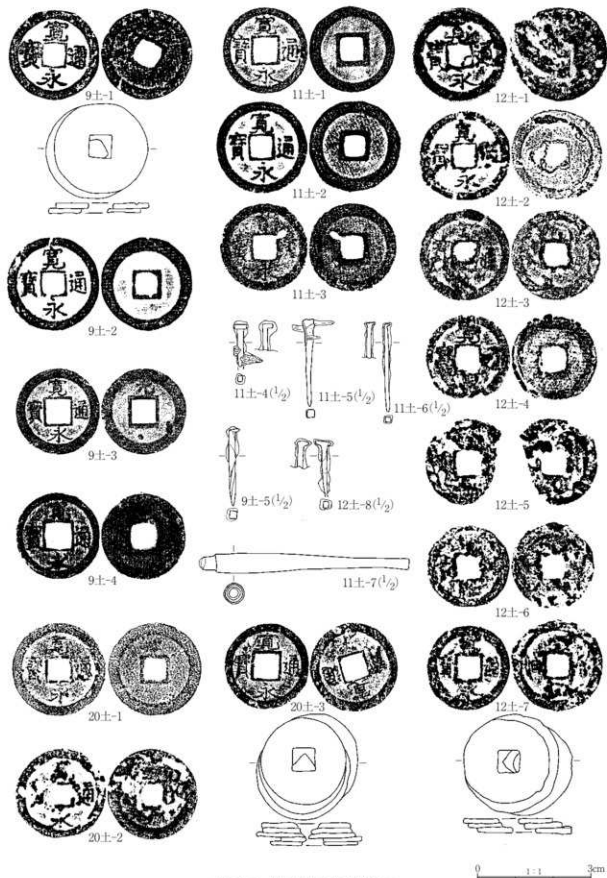


0 1 1 3cm

第2章 検出された遺構と遺物



第126図 土坑(墓坑)出土遺物(2)



第127图 土坑(墓坑)出土遗物(3)

第2項 土坑

(図 128・129 PL 32)

今回報告する中・近世の土坑は、11基である。性格が不明な土坑や近世のいわゆる「芋穴」と呼ばれる類のものも検出された。性格が推察できる土坑は以下の通りである。規模等については、第3表土坑一覧表を参考にいただきたい。

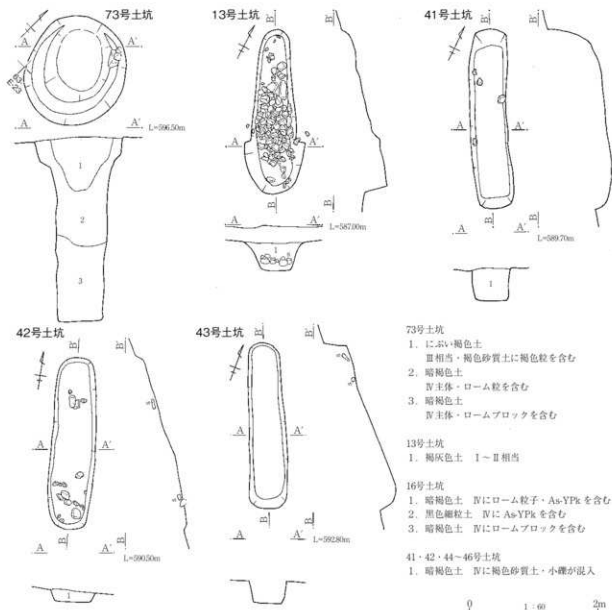
集石土坑

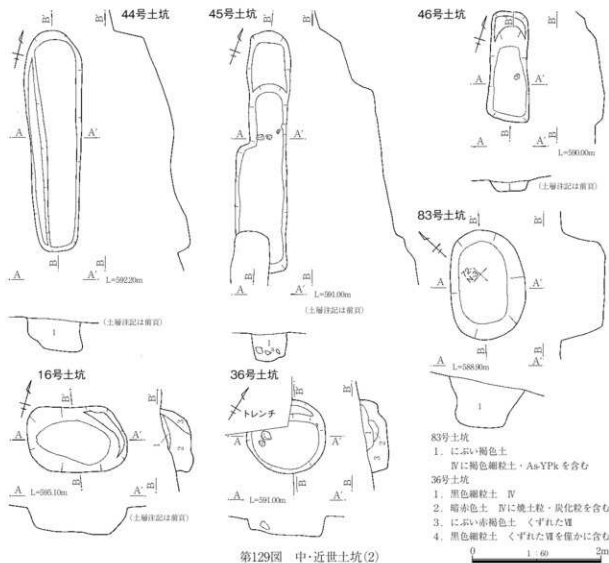
13号土坑は、埋設土の中に多量に石が埋設されている。これは埋め込むことで、耕作の妨げとなる石を始末した穴だと考えられている。面倒な作業に感じるが、これにより耕作面積を減らさずに石を取り除くことが可能である。確認面から近世以前の所産と考えられる。

井戸

73号土坑は、確認面が平安時代の陥し穴とおなじであるが、深くて形状も他とは異なる。PL31-8で示した「畑境列石」は、近世に由来する住居区画を示す石積みが残痕と思われる。本土坑は、その区画内にあることから、その住居に伴う井戸と考えられる。芋穴

長さが3メートル前後で下幅が50cm前後の細長い楕円状平面を呈する土坑がある。これらは、貯蔵穴の一種であるいわゆる「芋穴」、あるいはゴボウや長いように比較的長い根菜類の栽培に由来する耕作痕の下面と考えられる。確認面や埋設土の観察から近世以降の所産と考えられる。41～46号土坑の6基がそれに該当する。





第129図 中・近世土坑(2)

第3項 遺構外出土遺物



第130図 中・近世以降遺構外出土遺物

第3章 調査の成果とまとめ

第1節 上ノ平Ⅰ遺跡出土の灰軸陶器について

神谷 佳明

はじめに 上ノ平Ⅰ遺跡は長野原町大字川原畑の吾妻川左岸、高間山南麓の緩斜面、標高580～604mに立地する縄文時代と平安時代を中心とした集落遺跡である。平安時代には20軒の堅穴住居が山麓の傾斜地に構築されているのが確認されている。堅穴住居からは土師器、須恵器、灰軸陶器などこの時期の堅穴住居としては一般的な出土物の他、32号住居からは吾妻郡では初めての皇朝十二銭である「貞観永寶」が出土し注目を集めた。また、灰軸陶器も101点と榎木Ⅱ遺跡、下原遺跡に次ぐ量が出土している。

吾妻郡西部地域（長野原町、草津町、六合村、碓氷村）で発掘された古代集落は2表のような状況であるので上ノ平Ⅰ遺跡の20軒は榎木Ⅱ遺跡の31軒に次いで多く、この地域での古代集落としては比較的規模の大きな集落と言える。検出された堅穴住居の時期は出土土器から9世紀第3四半期から10世紀後半に比定されるが、10世紀第1四半期が8軒と最大規模になる。こうした様相は吾妻郡西部地域で発掘調査された集落遺跡と比較すると多くの遺跡が半世紀前後しか存続していないのに対して上ノ平Ⅰ遺跡では9世紀第3四半期から10世紀後半と1世紀あまりの間存続している。この傾向は榎木Ⅱ遺跡と同様に吾妻川左岸での生業や居住環境によるものと考えられる。しかし、この地域では古代の遺跡はまだ数少なく、ようやく資料の蓄積が始まったばかりであり、上ノ平Ⅰ遺跡の検討はこの地域の古代史を復元する上では重要なことである。本項ではこうした点から出土した灰軸陶器を中心にこの地域における上ノ平Ⅰ遺跡について若干の考察を行うこととする。

出土した灰軸陶器 出土した灰軸陶器は総数101点である。このうち図化したのは27点で残りは小片のため未掲載となっている。出土した灰軸陶器は椀、

皿類が圧倒的に多いが段皿、長頸壺、手付瓶、瓶類なども確認される。各器種ごとの数量は椀74点、皿7点、段皿1点、椀または皿とみられる破片3点、長頸壺8点、手付瓶1点、瓶類の小片7点である。これら101点のうち窯式期が判別可能なものは78点でその内訳は光ヶ丘1号窯式期1点、大原2号窯式期75点、虎溪山1号窯式期1点と圧倒的に大原2号窯式期のものが多い。この傾向は判別できないとした25点のうち椀や皿などでは大原2号窯式期ではとみられる破片が多くみられた。

灰軸陶器を出土した遺構は堅穴住居、土坑、遺構外からである。各遺構からの出土点数は堅穴住居が8軒から31点、土坑が2基3点、残り67点が遺構外からである。

灰軸陶器を出土した住居の年代と灰軸陶器の年代とは8軒中7軒が10世紀前半に比定され、出土した灰軸陶器は大原2号窯式期であることから産地がない出土状態である。ただし、9世紀第4四半期に比定される25号住居から大原2号窯式期の椀が出土している点に産地がみられる。25号住居から出土した灰軸陶器の椀は出土位置が明確でなく周辺の遺構外からは若干の灰軸陶器が出土していることからこの地で使用または廃棄されたものが混入された可能性が高い。（1表参照）

各住居からの出土量は1点から17点と大きな差が見られる。出土点数の内訳は1点のみの出土が5号住居など3軒、2点か1号住居など3軒、5点か32号住居の1軒、そして17点を出土した13号住居である。また、平安時代に比定される住居で灰軸陶器を伴しなかったものは12軒である。これらの住居の年代は9世紀代が6軒（25号住居の灰軸陶器は混入と考えられることからここでカウントしてある）、10世紀前半代が5軒、時期不明が1軒（29号住居が該当するが、この住居は今回の報告の対象でない）

め詳細が不明のため)である。この傾向は上ノ平1遺跡での集落形成を考察する上で重要な要素と言える。この状態は9世紀代には灰軸陶器を導入できるような階層が存在せず拠点的な集落から派生された小規模な集落によって開発がスタートしたとみられる。そして10世紀代には集落内での主導的地位になる階層などの出現によって住居間で格差が生じたとみられる。灰軸陶器を多く出土した13号住居は10世紀第2四半期に比定される住居であるが、灰軸陶器以外の土器出土量は他の住居と比較しても格段の差があるわけではないが、灰軸陶器の奢侈的性格を考えると集落内での貧富の差が生じたことによると考えるのが妥当である。

また、上ノ平1遺跡での遺構外出土の灰軸陶器をみると調査範囲の南部にまとまりをみることができ。これは灰軸陶器を多く出土した13号住居の周辺とそのやや南側のグリッドである。13号住居周辺は13号住居で使用できなくなったものを廃棄した可能性が高いが、その南側のグリッドは9世紀後半代に比定される25号住居であることから25号住居からの廃棄は想定されにくく別な要因が考えられる。この要因については祭祀や平地建物の存在が想定されるが確認となる資料は得られなかった。

周辺遺跡との比較 吾妻郡西部地域における古代集落の様相は2表のとおりであり、灰軸陶器の出土は報告書に掲載されている量は僅かである。その中でも2007年3月に報告された下原遺跡や現在発掘調査と整理作業が行われている楡木Ⅱ遺跡からは上ノ平1遺跡と同様に多くの灰軸陶器が出土している。

下原遺跡は上ノ平1遺跡の南南西約2.8kmに位置し、吾妻川左岸の下位河岸段丘に立地する。遺跡は縄文時代から中世にかけての遺構が検出され、平安時代の堅穴住居も2軒検出されている。灰軸陶器も光ヶ丘1号窯式期から虎渓山1号窯式期にかけての椀、皿を中心に144点が出土しているが、同時代の遺構に共存するものはなくすべて遺構外からの出土である。また、隣接地には現在でも「下田観音様」

1表 上ノ平1遺跡出土灰軸陶器

遺構	NO	出土位置	器種	残存率	点数	窯式期
1号住居	本図観		椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
	本図観	NO.72	椀	胴部片	1	
2号住居	1	背藏穴	皿	1/6		大塚2号窯式期
	2	竈土	皿	口縁部片		大塚2号窯式期
5号住居	4	9	椀	1/2		大塚2号窯式期
12号住居	2	竈土	皿	1/2		大塚2号窯式期
13号住居	8	2/3	椀	3/4		大塚2号窯式期
	9	7/3	椀	1/2		大塚2号窯式期
	10	61/3	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
	11	8/6,8/8	椀	底底		大塚2号窯式期
	12	3/8,41/42	長形蓋	背板		大塚2号窯式期
13号住居	本図観		椀	口縁部上部片	6	大塚2号窯式期
	本図観		椀	口縁部下片	6	大塚2号窯式期
16号住居	本図観	NO.3	椀	背板小片	1	
	本図観	NO.23	椀	胴部片	1	
25号住居	本図観		椀	口縁部下片	1	大塚2号窯式期
29号住居	本図観		椀	口縁部上部片	3	大塚2号窯式期
	本図観		椀	口縁部下片	2	大塚2号窯式期
32号土坑	本図観		椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
178号土坑	本図観		椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
	本図観		皿	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	153	71-P.5	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-W.6	椀	口縁部下片	1	
遺構外	本図観	62-W.8	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	口縁部下片	1	大塚2号窯式期
遺構外	143	62-X.6	椀	底底片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-X.6	椀	口縁部片	1	栗+61号窯式期
遺構外	本図観	62-X.6	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-Y.7	長形蓋	胴部片	1	
遺構外	152	62-Y.8	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	142	62-Y.8	椀	底底片	1	栗+61号窯式期か
遺構外	本図観	62-Y.9	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	138	62-X.14	椀	底底	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-A.3	椀?	口縁部下片	1	
遺構外	本図観	62-A.4	椀	口縁部片	2	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀 or 皿	底底片	1	
遺構外	本図観		長形蓋	胴部片	3	
遺構外	本図観	62-A.7	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	141	62-A.9	椀	底底	3	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-B.3	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	胴部片	1	
遺構外	本図観	62-B.4	椀	胴部片	1	
遺構外	本図観	62-B.6	皿	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-B.7	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	口縁部下片	1	
遺構外	本図観	62-D.11	椀	口縁部下片	1	
遺構外	本図観	62-D.12	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		段石	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	139	62-B.15	皿	1/3		大塚2号窯式期
遺構外	140	62-B.15	皿	1/3		大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-C.7	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	口縁部下片	2	
遺構外	本図観	62-C.16	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-D.10	椀	口縁部下片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	胴部片	1	
遺構外	本図観	62-D.11	椀	胴部片	1	
遺構外	141	62-E.6	椀	1/4		大塚2号窯式期
遺構外	136	62-E.12	長形蓋	口縁部片	1	
遺構外	137	62-E.12	子付椀	把手	1	
遺構外	145	62-E.12	椀	底底		大塚2号窯式期
遺構外	146	62-E.12	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	148	62-E.12	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	151	62-E.12	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-E.12	椀	口縁部片	7	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		椀	口縁部下片	1	大塚2号窯式期
遺構外	147	62-E.13	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-E.13	椀	口縁部片	2	大塚2号窯式期
遺構外	本図観		高台石		1	成山1号窯式期
遺構外	150	62-F.12	皿	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-F.12	椀	口縁部片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	62-G.4	椀	背板小片	1	
遺構外	149	62-W.6	椀	口縁部片		大塚2号窯式期
遺構外	本図観	72-T.2	椀	口縁部下片	1	大塚2号窯式期
遺構外	本図観	不明	椀 or 皿		2	
遺構外	本図観	不明	長形蓋		2	

第3章 調査の成果とまとめ

として残る23,000～24,000年前の浅間山噴火によって押し流されてきた巨石が存在していることから、この巨石に係わる祭祀に伴うものと考えられた。

榎木Ⅱ遺跡は上ノ平Ⅰ遺跡の西約4kmに位置し、王城山南麓に立地する。遺跡の詳細は今年度刊行する報告書を参照していただきたいが、立地条件や集落規模も上ノ平Ⅰ遺跡と同様で縄文時代と平安時代を主にする集落遺跡である。平安時代の竪穴住居からは「三家」、「長」などの黒書土器が多く出土し注目された。平安時代の竪穴住居は31軒が検出され、灰軸陶器は椀、皿、長頸壺など184点が出土している。出土した遺構は竪穴住居からでその他は遺構外である点など上ノ平Ⅰ遺跡と同様な傾向がうかがえるが、10世紀前半代の住居では特に多く出土している住居が存在している。

吾妻西部地域で灰軸陶器を多く出土した2遺跡と上ノ平Ⅰ遺跡ではいくつかの共通点と相違点を見ることが可能である。

出土した灰軸陶器の器種や窯式期は2遺跡と比較的同様な傾向を見ることができ、上ノ平Ⅰ遺跡では椀以外の器種が少ない点や光ヶ丘Ⅰ窯式期や

虎渓山Ⅰ号窯式期の製品が極端に少ない点が指摘できる。出土した遺構では榎木Ⅱ遺跡と同様な傾向が見られるが、榎木Ⅱ遺跡では9世紀代の住居からも僅かに灰軸陶器を伴っているのに対して上ノ平Ⅰ遺跡では皆無である点が異なる。

こうした点から上ノ平Ⅰ遺跡での灰軸陶器は食膳具全体の比率が少なく日常的な食膳具としての使用ではなく「ハレ」の場で使用されたものとみられる。また、各住居間での保有量の差から榎木Ⅱ遺跡と同様に10世紀前半代には貧富の格差が生じていることがうかがえた。

おわりに 今回、ある程度の灰軸陶器を出土した遺跡が下原遺跡と榎木Ⅱ遺跡の2遺跡だけであるため検討が不十分であるが、この地域における古代の様相を概観すると以下のようであったと想定される。

この地域では六合村熊倉遺跡のように山積み集落と性格付けられるような性格を異にする集落も存在するが、多くの古代集落は律令崩壊期以降による新たな開発を目的とした集落と考えられる。律令制に基づく郷里制によって編成された集落の周辺荒地地

2表 吾妻郡西部地域古代集落の竪穴住居時期

遺跡名	検出住居総数	時 期														文献		
		9世紀						10世紀						11世紀	不明			
		I	II	前半	III	IV	後半	代	I	II	前半	III	IV				後半	代
上ノ平Ⅰ遺跡	30軒				1	5				8	2	2			1			1
立馬Ⅰ遺跡	4軒								2		2							1
花畑遺跡	3軒				2	1												2
林宮原遺跡Ⅱ	5軒				1	2				2								1
下原遺跡	2軒				1						1							5
榎木Ⅱ遺跡	30軒		1	2	3				2	9	5	2			1	4		2
長野原一本松遺跡	3軒														1		1	1
川原湯勝沼遺跡	3軒				1	2												8
向原遺跡	10軒	1	1	5	3													9
坪井遺跡	1軒				1													10
中村横壁遺跡	1軒							1										11
井原遺跡	1軒										1							12
熊倉遺跡	25軒							○										13
泉平遺跡	2軒							1			1							14
千俣前田遺跡	2軒					2												15

※文献の番号は引用・参考文献と一致する。

や未開耕地の開発は高崎市下芝五反田遺跡や沼田市戸神票訪遺跡の例にみられるように多くが8世紀後半代に着手が認められ、9世紀から10世紀にかけて開発に携わる集落規模が大きくなり農地化が進むとみられる。この地域は古代吾妻郡で編成されたと推定される郷里制集落から距離的に離れ、地形的にも隔絶した地域のためか、楡木Ⅱ遺跡、向原遺跡などでみられるように9世紀前半より開発に着手されたようである。その開発の担い手としては地理的要因から吾妻郡域の郡司層や富豪層が想定され、開発に直接関わった人々は吾妻郡内の郷戸から裂かれたと想定される。これは各住居から出土した土器をみると一部に北陸系のもが存在しているが、大多数は上野国南部や古代利根郡の生産地の製品であることから裏付けられる。9世紀後半代には住居軒数も増加するなど開発の手が進むが、この段階では各堅穴住居から出土した遺物は灰軸陶器も1点だけであったりその他の土器においても内容に大きな差をみることができないことから集落内の格差はほとんどない状態であったとみられる。その後、10世紀前半代に吾妻川右岸の集落が再編成され、楡木Ⅱ遺跡や上ノ平1遺跡のようなまとまった規模の集落が形成されるとともに上ノ平1遺跡と楡木Ⅱ遺跡の間では灰軸陶器に保有量に格差が生じていることから集落間での格差も10世紀代に生じるとみられる。しかし、楡木Ⅱ遺跡や上ノ平1遺跡のような比較的標高の高い地区には現在民家は点在するがまとまった集落が存在しないことからこの集落での生産や生業について単純な農耕生産だけでは語れないと考える。この点や地域全体の古代の様相についての資料はまだ少なく十分な検討に至らなかったが、今後ハツ場ダムの建設に伴う発掘調査は数多く予定されていることから資料の増加が予想される。こうした資料の増加や新たな発見によってさらなる解明が期待される。

引用・参考文献

1. 飯森康広他「立馬1遺跡 ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006
2. 松原孝志「花畑遺跡」ハツ場ダム発掘調査集成(1) ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
3. 麻生敏隆他「楡木Ⅱ遺跡(1)(平安時代・中近世編)ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
4. 富田孝彦「林宮原遺跡Ⅱ 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書」長野県教育委員会 2004
5. 麻生敏隆他「下原遺跡Ⅱ ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
6. 諸田康成「長野原一本松遺跡(1) ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
7. 小野和之「長野原一本松遺跡(2) ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007
8. 岡 俊明他「川原湯勝沼遺跡(2) ハツ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005
9. 白石光男「向原遺跡 長野原工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘報告書」長野県教育委員会 1996
10. 富田孝彦「坪井遺跡Ⅱ(仮称)長野原ショッピングセンター建設に伴う発掘調査報告書」長野県教育委員会 2000
11. 「横壁中村遺跡」『年報』25(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
12. 井上唯雄「井瀬遺跡 草津白根山麓における高地性集落の考古学的検討」草津町教育委員会 1974
13. 市村勝美・能登 健他「熊倉遺跡 山樺み集落の研究」六合村教育委員会 1984
14. 松島栄治「東平遺跡調査報告書 農道6号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」嬭志村教育委員会 1999
15. 野平伸一・宮崎誠治「千原前田Ⅲ遺跡」千原前田遺跡・嬭志村教育委員会 1999
16. 大越直樹・宮崎誠治「千原前田Ⅳ遺跡」千原前田遺跡・嬭志村教育委員会 2000

第2節 上ノ平I遺跡出土の墨書土器について

高島 英之

1. 出土状況

上ノ平I遺跡からは7点の墨書土器と1点の刻書土器が出土している。刻書土器2住-3は、土器焼成前に記号が施書きされたものであり、文字が記されたものとは別に考えた方がよい。ここでは文字が記された墨書土器7点のみを取り扱うことにする。

出土状況からみると、1号住居跡から2点の墨書土器が出土している以外、同じ遺構から出土した土器に文字が記されているものはない。記号が刻書された土器をふくめて、全点でわずか8点にすぎないので、現状では、特定の遺構から墨書土器が集中して出土している状況ということは言い切れない。

また、調査対象範囲に限られているとは言え、墨書土器が出土した遺構についても、遺跡内の特定のエリアに集中しているというわけではなく、また各々の資料の、それぞれ出土した各遺構内における出土状況を検討しても、特に共通したり、あるいは際立った特色を指摘できるものはない。

集落遺跡から出土する墨書土器は、集落内における各種集団が、祭祀・儀礼等の行為に際して、集団の標識として特定の文字を記したものと考えられている(平川南・天野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』22 1989、のち同氏著『墨書土器の研究』吉川弘文館 2000に収録、関和彦「古代村落の再検討と村落首長」『歴史学研究』626 1991、のち、同氏著『日本古代社会生活史の研究』校倉書房 1994に収録)、同じ文字が記された複数の土器が、ある程度特定のエリアに集中して出土するような傾向が無いことからみれば、本遺跡においては、墨書された文字から集落内の小集団の動向を窺い知ることは困難である。

2. 文字記入の状況

破片で文字が判読できない15住-1のみ、体部内外面の二箇所にも墨痕が残っているが、文字が判読可

能な6点について言えば、文字が記されているのは、いずれも一箇所のみで、体部外面である。

一般的に、関東地方における集落遺跡出土の墨書土器では、体部に記入される例が多いのに対し、官衙遺跡出土の墨書土器では底部外面に記されるものが多いという傾向があり、本遺跡出土例の傾向と合致する。

3. 器種

器種の点で言えば、本遺跡出土の墨書土器は、すべてが須恵器である。この点も、墨書土器の全般的な傾向としてはやや異例であり、墨書土器の出土が特に顕著な関東地方の奈良・平安時代集落遺跡出土資料の全般的な傾向では、概して土師器の方が多いという特色がある。ただし、文字が記された土器の器種は、その遺跡出土土器全体の傾向と同様なのであり、特に、須恵器ないし土師器のどちらかが選ばれて、文字が記入されたというような事例は全く見受けられない。本遺跡においても、須恵器の流通・消費の頻度が一般に比べて格段に高かったために、文字が記入された土器のほとんどが須恵器で占められたというだけのことであろう。

実際、須恵器窯が多い遠江西部、尾張、美濃、出雲西部などの地域においては、奈良・平安時代集落遺跡出土土器の中での須恵器の占める割合の高さに比例して、墨書土器にも須恵器が多い傾向が指摘できる(藤田憲宏「墨書・刻書土器の出土傾向とその背景」吉村武彦編『古代文字資料のデータベースの構築と地域社会の研究-平成11-13年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』2002、高島英之「墨書・刻書土器からみた古代の出雲地域」『出雲古代史研究』15 2005、のち高島英之「古代東国地域史と出土文字資料」東京堂出版 2006に収録)。

吾妻郡内で出土する墨書土器には、須恵器が圧倒

的に多いという特色があり、本遺跡出土事例も、その傾向に合致している。

4. 記載内容

全7点の墨書土器のうち、「凡」和記されたものが3点あるが、それ以外は、それぞれ異なる文字である。いずれも1文字のみの記載であるので、如何様にも解釈できる場所であり、さしたる特徴を指摘することは出来ない。

3点存在する「凡」のうちの2点は、先述したように、同じ遺構（1号住居跡）から出土したものである。

「凡」という文字は「大」の文字と通じており、古代の史料では、「凡」と「大」は通用されている。墨書土器一般では、「大」と記されたものは非常に

多いので、「凡」の文字も、同様に、墨書土器に多い、吉祥句的な文字として記された可能性もあろう。

おわりに

古代の吾妻郡に関しては、史料も少なく、また『和名抄』にみえる管轄下の郷も、「長田」「伊参」「大田」の三郷に過ぎないので、不明な点が少なくない。

また、当該地域においては天明三年の浅間山噴火時の泥流が厚く堆積しているなどの自然条件や、開発に伴う埋蔵文化財調査件数の問題もあって、奈良・平安時代の遺跡の調査件数や、同時代の文字資料の出土件数もまだ非常に少ないような状況である。そうした中で、地域における古代史像の一端に関わる重要な資料であると位置づけることが出来よう。

番号	器種	種別	部位と方向	釈	文	土器の年代	備考
1住-2	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「凡」		10世紀初頭	
1住-1	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「凡」		*	
2住-3	須恵器・杯	焼成前刻書	体部内面・正位	「×」		10世紀前半	記号
8住-1	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「得」		9世紀末	
9住-3	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「東」		*	
15住-1	須恵器・杯	墨書	体部内外面	「□」(外面)・「□」(内面)		10世紀後半	判読不能
16住-1	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「凡」		10世紀初頭	
22住-1	須恵器・杯	墨書	体部外面・正位	「小」		*	

表 上ノ平1遺跡出土墨書・刻書土器

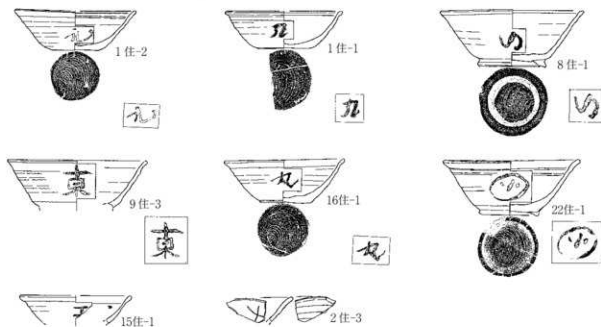


図1 上ノ平1遺跡出土の墨書・刻書土器

第3節 上ノ平Ⅰ遺跡出土の縄文時代石器について

麻生 敏隆

本遺跡からは、打製石鏃、石匙、削器、打製石斧、磨製石斧、くぼみ石、磨石、石皿、砥石等の石器・石製品が竈穴住居等の遺構や遺跡内での表採の形で数多く出土している。今回はそのうちの148点について報告することとし、器種分類の後に実測・写真撮影を実施した。以下にその概要について記述する。

打製石鏃は38点（製品37点、未製品1点）、石匙は3点（縦型1点、横型2点）、削器9点、石鏟2点、打製石斧31点、磨製石斧7点、たたき石23点、磨石9点、くぼみ石12点、台石1点、石皿6点、砥石1点、石核4点、加工剥片2点、剥片1点、その他に多数の剥片・破片が出土している。

まず、打製石鏃の細分については、従来を踏襲する。それによれば、平・凹基無莖7点、凹基無莖30点、凹基有莖1点となる。6つの類を使用した三平Ⅰ遺跡などでは、平基無莖がA類・凹基無莖がB類・凹基有莖がC類、楕形がD類、長脚がE類、不明がF類で、凹基有莖の出土が無いために類型化されておらず、楕形のD類と長脚のE類も基本的には凹基無莖であり、凹基無莖の占める割合が高い事となる。実際の数としては、凹基無莖が圧倒的に多いが、他の遺跡と比較すると、三平Ⅰ遺跡ではA類4点、B類12点とE類2点、F類の未製品4点、三平Ⅱ遺跡では、A類12点とC類3点、B類119点とD類4点とE類10点、それにF類9点となる。立馬Ⅰ遺跡では平・凹基無莖1点、凹基無莖点、凹基有莖1点、立馬Ⅱ遺跡では平・凹基無莖1点、凹基無莖33点、凹基有莖1点が出土している。

打製石鏃の未製品がいくつか出土しているが、製作址遺構そのものが検出された訳ではなく、直接的に結びつける根拠はない。また、三平Ⅰ遺跡の報告の中で篠原正洋氏が指摘しているように、「製作路」や「製作工房」などの名称を用いると、それは専業集団による大量生産をも想起させる事となる。本遺跡においては、未製品や剥片類の出土量から、石鏃

が遺跡内で製作されていたことはおそらく間違いないが、石鏃の製作活動は、集落においてある程度日常的、一般的に行われていたとの説もあり、結論に導くのは困難である。また、そこには日々のメンテナンスによる再生工程も当然含まれていたであろう。いずれにしても、この地域における未製品の多さが、一つの特徴である事は間違いない。

興味深い資料としては、石棒の再利用とみられるすり石が1点出土している。両端を打ち欠いて輪切り状にしている。石材はデイスイトで、同様の資料が横瀬中村遺跡で出土しており、その点数も7点と多く、時期も加曾利E2式～3式に限られている。県内での石棒製作跡としては、安中市（旧碓氷郡松井田町）の西野牧小山平遺跡（旧名称恩賀遺跡）が著名である。この遺跡も加曾利E3式の段階である。これに対して、本遺跡は主体が前期から中期中葉である事から、中期後半の加曾利E2～3式の時期には該当しない。また、石材も異なり、石英斑岩、あるいは流紋岩とされている。だが、デイスイトはかつては石英安山岩とも呼ばれていたが、今は流紋岩に近いとされている。そうであれば、あるいは同じ石材との見方も出来るのではないだろうか。いずれにしろ、生産と流通を含めた議論も可能となろう。

他の石材では、打製石鏃や石匙、削器などの小型の石器に、黒曜石の多用が顕著である。吾妻地区での黒曜石の原産地推定分析は、長野原一本松遺跡や坪井Ⅱ遺跡、それに暮坪遺跡といずれも長野原町だけで、まだまだ数が少なく限られているものの、大部分が信州系統である事が分かっている。つまり、かなりの遠距離であるにもかかわらず、かなりの量が持ち込まれている様相が見えてくる。点数の把握はなされているが、残念ながら重量計測はなされていないために、詳細は不明であるが、かなりの量が持ち込まれているのは間違いない。今後の資料の集積を待ちたい。

また、この地域の特徴の一つとして、珪質変質岩を使用する事例が多く認められる。三平遺跡では、打製石鏃とその未製品の10%程度を占めており、長野原一本松遺跡のこれまでの報告分でも、110点中22点と約20%を占めている。横壁中村遺跡など他の遺跡でも同様に高い割合を示している。特に、打製石鏃や石匙、削器、石錐などの小型の精緻な石器に多く用いられており、まるで貴重な黒曜石の補充を図っているかの様である。この石材については、吾妻川流域の北西側にある凝灰岩質の岩石が変成作用で変質したものであり、色調も赤から灰白まで様々であり、一見、チャートに類似するような剥離を示す。出土地域も長野原町から中之条町にかけてに限られた地域に多く、確認されている範囲で最も距離が遠い資料は、利根川と合流する渋川地区で僅かであるが検出されている。この石については、長野原町の北側の野反湖周辺に広がる「白砂層 Sr」を中心としており、須川（白砂川）等を流下して、吾妻川に流れ込んでいるものと考えられる。あるいは、直接に露頭から採取していた可能性も想定されよう。おそらくは白砂と言う名称自体が、この石の微細剥片等が川の景観を決定付けている可能性が高い。

次に、周辺の遺跡との比較を行うこととする。本遺跡の東に隣接する三平1遺跡では、剥片を含む298点が出土しており、器種では打製石鏃21点（製品17点、未製品4点）、石匙2点（縦型1点、横型1点）、石槍2点、削器4点、石飾1点、石製品1点、打製石斧1点、笥状石器1点、磨製石斧1点、くぼみ石3点、磨石2点、スタンプ形石器1点、石皿1点、砥石3点、剥片254点が出土している。剥片を除いた器種では打製石鏃が47.7%の割合を占める。三平II遺跡では、剥片を含む5861点が出土しており、器種では打製石鏃245点（製品157点、未製品88点）、石匙（縦型5点、横型15点、未製品4点）、石槍1点、石核6点、削器48点（製品45点、未製品3点）、石錐21点（製品11点、未製品10点）、石飾5点、異形石器1点、打製石斧11点、笥状石器17点、

磨製石斧12点、くぼみ石25点、磨石4点、叩き石3点、スタンプ形石器1点、石皿5点、砥石3点、石白8点、剥片5421点が出土している。器種では打製石鏃が56%の割合を占める。縄文時代早期を中心とする立馬1遺跡では、剥片を含む2982点が出土しており、器種では打製石鏃39点、石匙8点（縦型2点、横型6点）、石槍1点、削器18点、石錐3点、異形石器1点、打製石斧15点、磨製石斧2点、くぼみ石5点、磨石103点、スタンプ形石器2点、石皿3点、砥石4点、剥片2500点以上と多数出土している。器種では打製石鏃が91.1%の割合を占める。縄文時代中期初頭から前半を中心とする立馬II遺跡では、剥片を含む4338点が出土しており、器種では打製石鏃151点、石匙6点（縦型2点、横型4点）、削器36点、石錐6点、石製品2点、石棒2点、打製石斧35点、磨製石斧16点、くぼみ石42点、磨石24点、スタンプ形石器3点、石皿6点、石核2点、剥片多数が出土している。器種では打製石鏃が45.9%の割合を占める。こうしてみると、各遺跡共に打製石鏃の割合がほぼ半分を占めており、狩猟への依存度が高いようにみえるが、立馬1遺跡のみは割合が低い。だがこれはこの遺跡での磨石の数が非常に多いためであり、それを除けば66.8%とやはり高い割合になる。

こうした事例との比較の中から、この地域での縄文時代の石器組成と石材組成を検討する事で、様々な様相が垣間見えるものと考えられる。特に、縄文時代の古い段階から各時期の様相を調べる事で、この地域での生業の様子を把握する事が可能かも知れない。

参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 長野原一本松遺跡(1)、2007 立馬1遺跡、2007 立馬II遺跡、2007 横壁中村遺跡(5)、2007 三平I・II遺跡
長野原町教育委員会 2000 坪井II遺跡、2001 碓井遺跡

第4節 まとめと今後の課題

発掘調査が現在も進行しているなかでの今回の報告は、上ノ平Ⅰ遺跡における遺構・遺物の一部の報告に過ぎない。今後の発掘調査や整理作業が進む過程で新たに解明されることもあるだろう。ここでは、途中経過ということで遺跡の性格を示す点を中心にして既述する。

旧石器時代 ハッ場ダム建設に伴う発掘調査で旧石器時代の遺構・遺物は検出されていない。今回の調査もロームの残りのよい部分で地形的にも可能性もてる部分を選択して調査したが、遺構・遺物の検出には至らなかった。

縄文時代 検出された住居の時期は、後期の称名寺期に比定される柄鏡形敷石住居の28号住居を除くと、中期中葉の住居がほとんどであった。

ハッ場地区の吾妻川左岸で本遺跡がどのような位置にあるのかを考える上での資料として、以下のような表を作成したので参考にしていただきたい。

表 吾妻川左岸に位置するおもな遺跡の遺構・遺物一覧

時 期	遺 跡 名					
	三 平 Ⅰ ・ Ⅱ	上 ノ 平 Ⅰ ・ Ⅱ	立 馬 Ⅰ ・ Ⅱ	林 中 原 Ⅰ	楡 木 Ⅱ	長 野 原 一 本 松
草 創 期						
早 期	△		2		○	
前 期	2				4	
中前期半			9			
中期中葉		9				△
中後後半			1			○
後 期	1			2		○
晩 期			1			
弥生時代			1			

注) 数字は報告軒数、○は住居10軒以上。

○は住居あり △は遺物多し。

※ 本事業団発行2007「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」第401集p.238
「周辺の主要遺跡一覧」(藤巻幸男)を改編し、作成した。

縄文時代中期中葉に比定される住居は、ハッ場地区の吾妻川左岸に限ってみると本遺跡でのみ小集落規模で検出されている。この点が本遺跡の縄文時代における性格の一端と言える。土器は、勝坂3式、加曾利E1式とともに焼町土器が多数出土している。焼町土器は、吾妻川対岸の横壁中村遺跡や山根Ⅲ遺跡でも住居に伴い出土しているが、左岸では長野原一本松遺跡や幸神遺跡で少量出土している程度である。また、本遺跡では三原田式土器もかなりの点数が出土している。道調前遺跡などがある赤城山南麓や焼町土器が多数出土している浅間山南麓との密接な交流が想定される。

弥生時代 遺構は検出できなかったが、遺物の出土から包含層の存在が確認された。弥生時代中期前半に比定される鷹の巣岩陰が吾妻川下流方向約6kmに存在する。これらの点から、今後の予定地区において当該時期に比定される遺構・遺物の検出が期待される。

平安時代 検出された住居は、全て9世紀後半代から10世紀前半の範囲に比定された。1号住居では竈の廃棄状態が確認された。9号住居では床面から植物種の検出が確認されている。これについては次回の報告で詳細を明らかにしたい。13号住居では、焼失過程が推測される資料が得られた。陥し穴については、本遺跡地内に集落が形成される以前のものであることが確認された。また、集落が形成される以前は狩り場であったことを想起させた。

中・近世 中世の墓坑1基と、近世の墓坑群が検出された。近世の墓坑群については両墓制に関連する1次墓地(ウメバカ)であったと考えられる。

今後の課題としては、本遺跡の発掘調査が全て終了した段階で土器の総量及び分類を集計し、ハッ場地区内での集落の展開過程を明らかにしていくことがあげられる。その過程で本遺跡の性格がさらに明らかになっていくと思われる。

上ノ平 I 遺跡出土人骨

栢崎 修一郎

はじめに

上ノ平 I 遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町に位置する。ハッ場ダム建設事に伴う発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団〔以下、群埋文〕により、平成18(2006)年4月～同年12月まで実施された。上ノ平 I 遺跡の72区から16基の近世墓が、また63区から1基の中世墓が検出されたので、以下に出土人骨を報告する。

中世土坑の63区74号土坑を除く16基の近世土坑は、調査区の南側斜面に、北東～南西にかけて約17m・北西～南東にかけて約5mという比較的狭い場所に集中して検出されており、集団墓の様相を呈している。当事業団によるハッ場地区調査で、これだけまとまった数の近世墓の検出は初めてである。

なお、出土人骨の計測方法はマルティン〔Martin〕の方法(馬場, 1991)に従い、出土歯の計測方法は藤田の方法(藤田, 1947)に従った。また、頭蓋骨計測値は、近世人は鈴木(1967)を引用し、中世人は鈴木他(1956)を引用した。さらに、出土歯計測値は、中近世人は Matsumura〔松村〕(1995)を引用し、現代人は楢田(1959)を引用した。

1. 1号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約183cm・短径約65cm・深さ約18cmの隅丸長方形土坑から出土している。



写真1. 1号土坑出土人骨出土状況〔左が北東〕

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした仰臥伸展葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、江戸時代後期の徳利1点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓・乳様突起が発達しており計測値も大きく、四肢骨も比較的大きくかつ頑丈である。また、寛骨の大座骨切痕が鋭角であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合は内板及び外板共に癒合してほぼ消失している状態である。また、上下顎骨の歯はほとんどが生前脱落し、歯槽が閉鎖した状態である。総合的に、被葬者の死亡年齢は約50歳以上の老齢であると推定される。

(7) 被葬者の生前の身長

保存状態が良い左上腕骨及び右大腿骨の最大長を計測すると、それぞれ、308mm(右上腕骨)・310mm(左上腕骨)・415mm(右大腿骨)という結果になった。これらの最大長から、藤井(1960)の式を使用して被葬者の生前の身長を推定すると、それぞれ159.2cm(右上腕骨)・160.6cm(左上腕骨)・157.4cm(右大腿骨)という結果になった。したがって、被葬者の生前の身長は、約157cm～160cmであると推定される。

元北里大学の故平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm〔最大167.2cm・最小147.2cm〕・同女性の平均身長は145.6cm〔最大157.1cm・最小137.6cm〕である(平本、

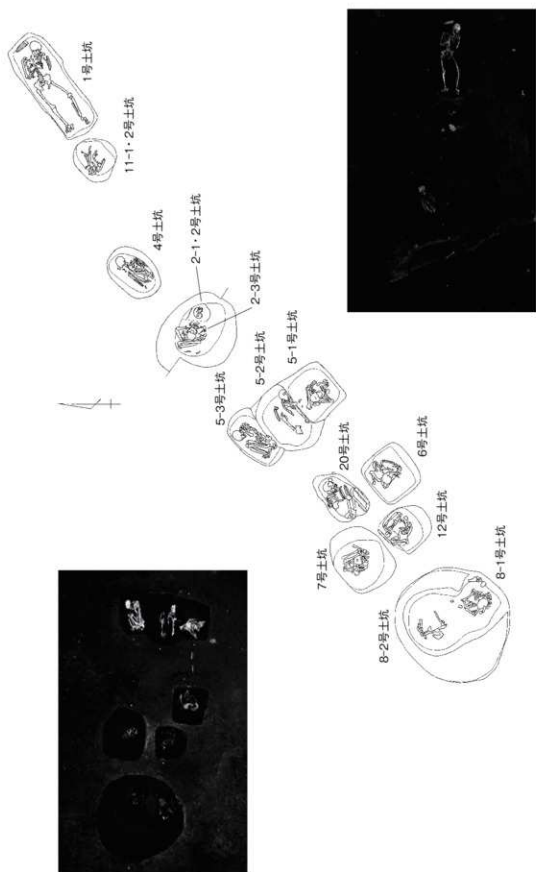


図1. 上ノ平I遺跡土坑墓平面図 (74号土坑を除く)



前面観



後面観



右側面観



左側面観



上面観[左が顔面部]



下面観[左が顔面部]



上肢骨



下肢骨

写真2. 1号土坑出土人骨 [上: 頭蓋骨、下左: 上肢骨、下右: 下肢骨]

1972)。したがって、本被葬者は江戸時代人として、平均的な身長を有していたことになる。

(8) 被葬者の古病理

①歯の古病理：歯石の付着及び齲蝕は、認められなかった。上下顎歯は、前歯を残して、ほとんどの小臼歯及び大臼歯が生前脱落をし、歯槽が閉鎖した状態である。

②頭蓋の古病理：右側頭骨には、径約10mmにわたり、頭骨の溶解が認められた。原因は不明であるが、側頭部での炎症の結果であると推定される。



写真3. 1号土坑出土人骨古病理[右側頭部炎症]

2. 2-1・2号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長軸約143cm・短軸約53cmの隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑の南西部は、遺構確認トレンチにより削られているため全容は不明である。また、調査時には21号土坑と22号土坑とを分けて記載したが、実際には21号土坑と22号土坑とは同じ土坑であると推定される。



写真4. 2-1・2号土坑出土人骨出土状況[上が北]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態：本土坑の南東部から頭蓋骨及び上腕骨のみ検出されているため全容は不明である。但し、頭蓋骨の顔面部は、南東部を向いた状態である。

(3) 副葬品

副葬品は、煙管1点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

頭蓋骨及び上腕骨のみであるが、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨計測値は、破損しているため、ほとんど計測できなかったが、頭蓋骨最大長は前頭骨のグラベラ部が破損していても186mmあり、大きいので被葬者の性別は男性であると推定される。歯冠計測値は、女性としては大きく男性としては小さい。



写真5. 2-1・2号土坑出土人骨頭蓋骨上面観[左が顔面部]

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合は、内板及び外板共に癒合しておらず、開放の状態である。また、切歯縫合は癒合している状態であるので、30歳以上であると推定される。さらに、出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみであるマルティンの1度の状態である。総合的に、被葬者の死亡年齢は、約30歳であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

①歯石：歯石の付着は、認められなかった。

②齲蝕：上顎左右第1小臼歯の遠心歯頸部に齲蝕症第2度(C2)の状態が認められた。



写真6. 2-1・2号土坑出土歯の齧蝕[左:右P1、右:左P1]

③棘突起：上顎右第2切歯の舌側面には、棘突起の発達が認められた。



写真7. 2-1・2号土坑出土右第2切歯(I2)の棘突起

3. 2-3号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、直径約130cm・深さ約80cmの不整形円形土坑から出土している。

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は顔面部を北西に向けた座葬で埋葬されたと推定される。



写真8. 2-3号土坑出土人骨出土状況[上が北]

(3) 副葬品

副葬品は、煙管1点及び銭貨の寛永通宝6点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、乳様突起は比較的小さく、歯冠計測値も比較的小さい。また、四肢骨も華奢で小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、内板及び外板共にはほとんどが癒合して消失している状態である。また、切歯縫合も癒合している。ところが、歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状あるいは点状にわずかに露出する程度のマルティンの2度の状態である。このことは、頭蓋縫合の癒合度からは、被葬者の死亡年齢は約50歳代となるが、歯の咬耗度からは約30歳代となり、両者の間で死亡年齢推定の違いがかなりあることになる。

しかしながら、頭蓋骨の縫合は稀に早期癒合する場合もあり、歯の咬耗度は食物の差異により咬耗の度合いも異なる。総合的に、被葬者の死亡年齢は、約30歳代であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

①歯石：歯石の付着は、認められなかった。

②齧蝕：上顎左第1大臼歯の遠心部は、歯冠が崩壊し残根状の齧蝕症第4度(C4)の状態である。



写真9. 2-3号土坑出土人骨齧蝕[上顎左第1大臼歯]

③生前脱落：下顎左右第1大臼歯及び左第3大臼歯は生前脱落をし、歯槽が閉鎖した状態である。但し、下顎右第1大臼歯の歯槽部は完全に閉鎖した状態であるが、同左第1大臼歯の歯槽部は閉鎖過程にある状態である。したがって、下顎右第1大臼歯が先に生前脱落し、その後で同左第1大臼歯が生前脱落したものと推定される。



写真10. 23号土坑出土土人骨生前脱落[下顎骨]

下顎右第1大臼歯の生前脱落の結果、同左右第2大臼歯は、近心側に傾いた状態である。

④脊椎骨の圧迫骨折

脊椎骨の内、2例に、脊椎骨の椎体が上下に押しつぶされた状態で観察された。これは、恐らく、圧迫による骨折であると推定される。加齢により、骨粗鬆症に罹り、骨折したのであろう。残念ながら、脊椎骨の部位同定はできなかった。しかしながら、通常、脊椎骨の圧迫骨折は、胸椎下部あるいは腰椎に起きることが知られているので、恐らく、これら2例の脊椎骨もこのどれかであると推定される。



写真11. 23号土坑出土土人骨脊椎骨の圧迫骨折



前面観



左側面観



上面観[左が顔面部]



後面観

写真12. 23号土坑出土土人骨頭蓋骨



写真13. 23号土坑出土人骨[左:上肢骨,右:下肢骨]

4. 4号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約95cm・短径約65cm・深さ約30cmの楕円形土坑から出土している。



写真14. 4号土坑出土人骨出土状況[右が北東]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東に向けた仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が7点検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨は、土圧により左右に圧迫されており、正常な観察は困難である。歯の歯冠計測値は比較的大きいが、四肢骨も華著であるため、被葬者の性別は女性(女児)であると推定される。本被葬者の死亡年齢は、約14歳と推定されている。



写真15. 4号土坑出土頭蓋骨[左側面観]

(6) 被葬者の死亡年齢

四肢骨を観察すると、右大腿骨の骨頭及び脛骨の近位端はまだ癒合していない状態である。大腿骨及び脛骨は研究により異なるが、約15歳～16歳で癒合することが知られているため、少なくとも、約15歳～16歳以下である。

次に、歯の萌出状態を観察すると、ほとんどの永久歯が萌出している状態である。特に、上下第1及び第2大臼歯も萌出しているが、第1大臼歯の歯根は完成しているものの第2大臼歯の歯根は先端部がわずかに完成していない状態であり、第3大臼歯は歯冠のみの状態で、歯根が完成していない状態である。

したがって、総合的に被葬者の死亡年齢は約14歳であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

- ①歯石：歯石は、認められなかった。
- ②齲蝕：齲蝕は、認められなかった。



写真16. 4号土坑出土人骨【左右大腿骨】

次の5-1号土坑・5-2号土坑・5-3号土坑の3基の土坑は、南から北に向けて5-1号・5-2号・5-3号の順番に階段状に検出されている。



写真17. 5号土坑出土人骨出土状況【上が北西】
(下から、5-1・5-2・5-3号)

5. 5-1号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、5-2号土坑と北西部が重複している。人骨は、現状で、長径約85cm・短径約75cm・深さ約35cmの方形土坑から出土している。

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は座葬で顔面部を北西に向けた状態で埋葬されたと推定される。



写真18. 5-1号土坑出土人骨出土状況【上が北西】

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が12点検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨及び四肢骨共に、頑丈で大きく計測値も大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。さらに、検出された左右寛骨の大座骨切痕部の角度が鋭角であるため、被葬者の性別は男性である。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨を観察すると、主要縫合の冠状縫合・矢状縫合・人字（ラムダ）縫合のすべてが、内板及び外板共に癒合してほぼ閉鎖した状態である。また、口蓋部の切歯縫合及び横口蓋縫合のどちらも癒合し、消失した状態である。さらに、歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状あるいは面状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。

また、左寛骨恥骨結合部が検出されており、恥骨表面は非常に滑らかな状態である。これは、老年であることを示す。

さらに、脊椎骨全般には骨棘形成が認められ、一部は癒合し、左右寛骨と仙骨も癒合している。これらは、老年性変化を示しており、被葬者の死亡年齢は少なくとも、約50歳以上の老年であると推定される。

(7) 被葬者の生前の身長

保存状態が良い右大腿骨・右脛骨・右腓骨の最大長を計測すると、それぞれ、394mm（右大腿骨）・342mm（右脛骨）・329mm（右腓骨）であった。これらの最大長から、藤井（1960）の式を使用して被葬者の生前の身長を推定すると、それぞれ152.2cm（右大腿骨）・158.5cm（右脛骨）・156.5cm（右腓骨）という結果になった。したがって、被葬者の生前の身長は、約152cm～158cmであると推定される。

元北里大学の故平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm [最大157.1cm・最小137.6cm]である（平本、1972）。したがって、本被葬者は江戸時代人として、平均的な身長を有していたことになる。

(8) 被葬者の古病理

- ①歯石：歯石の付着は、特に下顎歯の切歯～犬歯の唇側面及び舌側面に認められる。
- ②齲蝕：齲蝕は、認められなかった。
- ③寛骨と仙骨の癒合：左右寛骨と仙骨は、癒合した状態である。これは老年性変化であると推定されるが、場合によっては、次の化骨性筋炎あるいは強直性脊椎炎と関連する可能性もある。

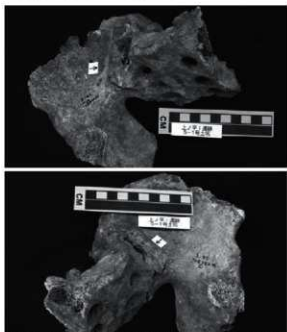


写真19. 左右寛骨と仙骨の癒合[上：右寛骨・下：左寛骨]

- ③化骨性筋炎・強直性脊椎炎：脊椎骨の椎体部には、骨棘が認められた。これは、化骨性筋炎あるいは強直性脊椎炎であると推定される。

この強直性脊椎炎あるいは化骨性筋炎の発症率は、男性が女性に比べて約3倍高いと言われている。このような事例は、群馬県内において、以前、本報告者が報告した元総社若海遺跡群出土中世人骨に同様の事例がある（植崎、2006ab）。しかしながら、これらの古病理は非常に珍しい事例で、国内でも報告事例は少ない。

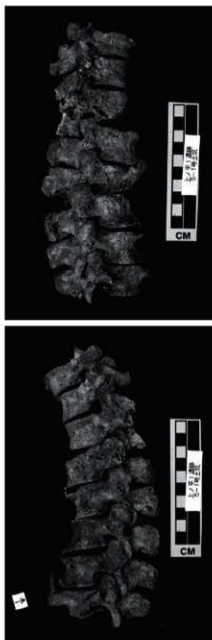


写真20. 脊椎骨の顕著な骨棘 [上：左側面観、下：右側面観]



前面観



写真21. 5-1号土坑出土人骨 [上：頭蓋骨、下左：上肢骨、下右：下肢骨]

6. 5-2号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、5-1号土坑と南西部が、また5-3号土坑と北西部が重複している。人骨は、現状で、長径約113cm・短径約65cm・深さ約35cmの規模である。築造時は、方形土坑であったと推定される。



写真22. 5-2号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にした仰臥屈葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝5点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、骨壁は比較的厚く乳様突起も発達している。四肢骨は、比較的華奢であるが、総合的に被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢



写真23. 5-2号土坑出土人骨[後頭部]

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状あるいは点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。従って、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。ところが、本人骨は歯がかなり生前脱落を起こしている状態であるので、もう少し年齢が進んだ約40歳代であると推定される。

(7) 被葬者の生前の身長

保存状態が良い右大腿骨の最大長を計測すると、384cmであった。この最大長から、藤井(1960)の式を使用して被葬者の生前の身長を推定すると、149.7cmという結果になった。したがって、被葬者の生前の身長は、約150cmであると推定される。

元北里大学の故平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm [最大157.1cm・最小137.6cm]である(平本、1972)。したがって、本被葬者は江戸時代人として、やや小柄な身長を有していたことになる。

(8) 被葬者の古病理

歯石の付着及び齲蝕は、認められなかった。

①歯の生前脱落

下顎骨左を観察すると、第1大臼歯～第3大臼歯部は歯が生前脱落をし、歯槽も閉鎖した状態である。残念ながら、上顎骨及び下顎骨右は破損して観察不能である。



写真24. 5-2号土坑出土人骨下肢骨

7. 5-3号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

本土坑の南東部は、5-2号土坑と重複している。人骨は、現状で長径約100cm・短径約47cm・深さ約30cmの規模の隅丸長方形土坑から出土している。



写真25. 5-3号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東に向け右側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、刀子1点・煙管1点・錢貨の寛永通宝8点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨及び四肢骨は頑丈で大きい。さらに、左右寛骨の大座骨切痕の角度が鋭角であるため、被葬者の性別は男性である。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、内板は冠状縫合及び矢状縫合は癒合して閉鎖している状態であるが、ラムダ縫合はまだ癒合していない状態である。また、外板は、3縫合共に一部癒合しかかっているもののまだ完全には癒合していない状態である。切歯縫合は、癒合している状態である。

歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状・点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。

従って、総合的に被葬者の死亡年齢は、約40歳代であると推定される。

(7) 被葬者の生前の身長

保存状態が良い右上腕骨・左右大腿骨・右腓骨の最大長を計測すると、それぞれ、268mm(右上腕骨)・396mm(右大腿骨)・397mm(左大腿骨)・311mm(右腓骨)という結果になった。これらの最大長から、藤井(1960)の式を使用して被葬者の生前の身長を推定すると、それぞれ148.0cm(右上腕骨)・152.7cm(右大腿骨)・152.8cm(左大腿骨)・151.8cm(右腓骨)という結果になった。したがって、被葬者の生前の身長は、約148cm~153cmであると推定される。

元北里大学の故平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm [最大157.1cm・最小137.6cm]である(平本、1972)。したがって、本被葬者は江戸時代人男性として、やや小柄な身長を有していたことになる。

(8) 被葬者の古病理

①過剰歯：上顎左第2切歯は、2本ある状態の過剰歯である。形状は、栓状歯(円錐歯)を呈している。この過剰歯は、女性よりも男性に多く、部位も上顎切歯に多いと言われ、出現率は約1%と低い。

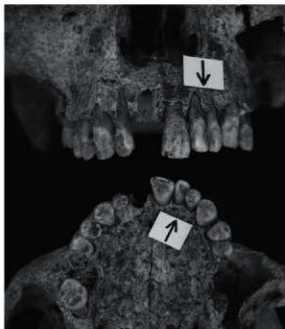


写真26. 過剰歯[上顎左第2切歯](上前面観、下咬合面観)



前面観



後面観



右側面観



左側面観



上面観[左が顔面部]



下面観[左が顔面部]



上肢骨



下肢骨

写真27. 5-3号土坑出土人骨 [上: 頭蓋骨、下左: 上肢骨、下右: 下肢骨]

②膿瘍：右上顎骨の第1大臼歯の唇側面部は、膿瘍により顎骨が溶解した状態である。



写真28. 膿瘍[右上顎骨第1大臼歯部]

②骨棘：脊椎骨の一部及び左寛骨には、椎体の辺縁部及び寛骨の腸骨後部に骨棘の発達が認められた。これは、老年性変化であると推定される。



写真29. 脊椎骨の骨棘

③関節症：右膝蓋骨の後面には、上下に筋が何本か認められた。これは、関節症によるものと推定される。恐らく、生前は膝の痛みをおぼえていたものと推定される。



写真30. 右膝蓋骨後面部[関節症による上下の筋]

8. 6号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、1辺約80cm・深さ約50cmの方形土坑から出土している。



写真31. 6号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は顔面部を北側に向け、膝を立てた状態の座葬で埋葬されたと推定。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が5点検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓及び乳様突起の発達は非常に弱く骨壁も薄い。四肢骨は華者である。さらに、左寛骨の大座骨切痕部の角度は鈍角であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、内板及び外板共に癒合している状態である。歯は検出されなかったが、経験則ではすべての歯が生前脱落した状態である場合が多い。従って、被葬者の死亡年齢は約50歳以上の高齢であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

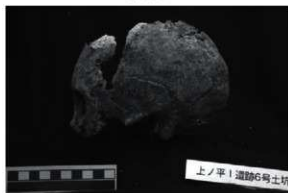
①関節炎：手の指の頭には、関節炎が観察された。これは、関節リウマチの疑いがある。



写真32. 関節夾[手の指]



前面観



左側面観



後面観

写真33. 6号土坑出土人骨頭蓋骨



写真34. 下肢骨

9. 7号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約108cm・短径約85cm・深さ約90cmの方形土坑から出土している。



写真35. 7号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状態から、被葬者は顔面部を北側に向けた座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝8点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓及び乳様突起が発達し

ている。また、歯冠計測値が比較的大きい。さらに、四肢骨も頭丈で大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ（人字）縫合を観察すると、内板及び外板共に癒合していない状態である。また、切歯縫合は癒合している状態である。さらに、歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。従って、総合的に、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

(7) 被葬者の生前の身長

保存状態が良い左上腕骨・左大腿骨の最大長を計測すると、それぞれ、275mm（左上腕骨）・383mm（左大腿骨）という結果になった。これらの最大長から、藤井（1960）の式を使用して被葬者の生前の身長を推定すると、それぞれ149.3cm（左上腕骨）・150.2cm（左大腿骨）という結果になった。したがって、被葬者の生前の身長は、約149cm～150cmであると推定される。

元北里大学の放平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm [最大167.2cm・最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm [最大157.1cm・最小137.6cm]である（平本、1972）。したがって、本被葬者は江戸時代人男性として、小柄な身長を有していたことになる。

(7) 被葬者の古病理

①上腕骨関節異常：右上腕骨遠位端の関節部には異常が認められた。



写真36. 右上腕骨遠位端 [関節異常]



写真37. 頭蓋骨 [上：前面観、下：左側面観]



写真38. 上肢骨



写真39. 下肢骨

以下の8-1号土坑及び8-2号土坑は、直径約190cm・深さ約60cm～65cmの不整形円形土坑内に位置する。8-1号土坑及び8-2号土坑は、2段構造を呈しており、一旦大きな土坑を掘削した後で、8-1号土坑及び8-2号土坑を掘削して同時に埋葬したものと推定される。



写真40. 8-1・2号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

10. 8-1号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、8-2号土坑と重複している。人骨は、長径約88cm・短径約70cm・深さ約45cmの方形土坑から出土している。



写真41. 8-1号土坑出土人骨出土状況[上が東]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東に向けて膝を立てた状態の座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、煙管2点・銭貨の寛永通宝1点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値は比較的大きく、四肢骨も頑丈で大きい。また、左寛骨の大転骨切痕部の角度が鋭角であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、ほとんどの歯はエナメル質のみであり、一部の歯は象牙質が線状あるいは点状に露出する程度のマルティンの1度及び2度の状態である。また、切歯縫合は癒合しておらず、約20歳以下であると推定される。さらに、上下左右のM3(第3大臼歯)は歯根の先端部が一部完成していない状態である。

また、左寛骨腸骨後部は癒合しておらず、左右大腿骨近位端及び右脛骨遠位端も癒合しかかっている状態である。これらが癒合する時期は、腸骨が約18～19歳・大腿骨が15～19歳・脛骨が約16～22歳である。しかしながら、通常、女性の方が早く癒合し男性の方が遅く癒合することが知られている。本個体は、男性であるため、総合的に被葬者の死亡年齢は約17～18歳であると推定される。

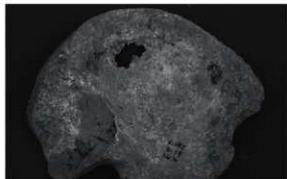


写真42. 左寛骨(上)・左右大腿骨近位端(下)

(7) 被葬者の古病理

①歯石：歯石の付着は全般的に非常に軽度に認められた。しかしながら、特に、下顎石II（第1切歯）の舌側面の歯石の付着が一番発達している。

②齲蝕：齲蝕は、上顎左第2大臼歯及び下顎右第2大臼歯に認められた。この2本共に、歯冠が崩壊しほとんど残根状態になった、齲蝕症第4度（C4）の状態である。



写真43. 上下顎歯咬合面観[上:上顎歯、下:下顎歯]



写真44. 上顎左第2大臼歯 [齲蝕]



写真45. 下顎右第2大臼歯の齲蝕

③エナメル質形成不全：上顎左第1切歯の近心面～舌側面にかけては、歯冠のエナメル質が剥がれた状態のエナメル質形成不全である。



写真46. 上顎左第1切歯[エナメル質形成不全]



写真47. 上肢骨



写真48. 下肢骨

11. 8-2号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

本土坑は、8-1号土坑と重複している。人骨は、長径約110cm・短径約90cm・深さ約60cmの不整形土坑から出土している。



写真49. 8-2号土坑出土人骨出土状況[上が北東]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は顔面部を北東に向けた座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、煙管1点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨の前頭骨には前頭結節が認められ、左側頭骨の乳様突起は小さく華者である。また、四肢骨は華者で小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

破損した下顎骨を観察すると、歯が生前に脱落し歯槽も閉鎖した無歯顎の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は高齢であったと推定される。

(7) 古病理

本被葬者の古病理は、特に認められなかった。

(7) その他

8-1号土坑と8-2号土坑は、恐らく同時に埋葬されたと推定されている。8-1号土坑の被葬者は約17～

18歳の男性であり、8-2号土坑の被葬者は高齢の女性である。想像をたくましくすると、これらは、母親と未成年の息子が何らかの理由でほぼ同時に死亡したために埋葬したと推定される。



写真50. 前頭骨



写真51. 左右側頭骨



写真52. 下肢骨

12. 9号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約70cm・短径約60cm・深さ約45cmの不整円形土坑から出土している。



写真53. 9号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

出土人骨の残存状態は非常に悪い。主に、下顎骨・左の上腕骨・尺骨・腸骨が同定されたにすぎない。被葬者は、歯の萌出状態から約15歳の女性(女児)と推定されたが、15歳児の平均身長は約75~86cmである。本土坑の大きさは長径約70cm・短径約60cmであるため、伸展葬は不可能である。したがって、人骨からは確認できないが、被葬者は座葬あるいは屈葬で埋葬されたと推定されるが座葬の可能性が高い。

(3) 副葬品

副葬品は朱漆塗椀1点及び銭貨の寛永通宝5点が検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

出土永久歯の歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性(女児)であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

歯の萌出状態及び四肢骨から、被葬者の死亡年齢は約15歳であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

歯石の付着及び齲蝕は、認められなかった。



写真54. 左から、下顎骨・上顎右第1大白歯・下顎右第1大白歯



写真55. 左から、左上腕骨・左尺骨・左腸骨

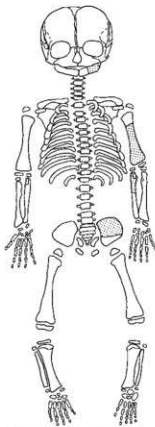


図2. 9号土坑出土人骨出土部位図[Baker他, 2005を改変]

以下の11-1号土坑及び11-2号土坑は、同じ土坑の上下から別個体が1体ずつ検出されている。土坑の上が11-1号土坑であり、下が11-2号土坑である。

13. 11-1号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、直径約65cm・深さ約10cm～15cmの不整形土坑から、出土している。



写真56. 11-1号土坑出土人骨出土状況 [上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

新生児であるため、埋葬状態の詳細は不明である。しかしながら、骨1に頭蓋骨片が含まれているので、頭部は本土坑の東側にあったと推定される。新生児の平均身長は約50cmである。土坑の大きさからは、伸展葬・屈葬・座葬のどれにでもあてはまるが、残念ながら埋葬状態は不明である。

(3) 副葬品

副葬品は、検出されていない。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

性別推定の根拠となる部位が検出されていないため、被葬者の性別は不明である。

(6) 被葬者の死亡年齢

胎児や新生児に関する国内の文献は、ほとんど無い。そこで、欧米のファゼカス&コサ

[Fazekas & Kosa](1978)による『法医胎児骨学』[Forensic Fetal Osteology]、シュウアー & ブラック [Scheuer & Black](2000)による『子供の発達骨学』[Developmental Juvenile Osteology]、ベイカー・デュプラ・トチェリ [Baker・Dupras・Tocheri](2005)による『幼児と子供の骨学』[The Osteology of Infants and Children]の3冊を参考にして、被葬者の死亡年齢推定を試みた。

その結果、頭蓋骨の後頭骨の大きさ及び尺骨の大きさが、新生児の大きさと一致したので、被葬者の死亡年齢は、新生児であると推定される。

(7) 古病理

古病理は、特に認められなかった。

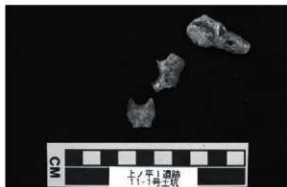


写真57. 頭蓋骨片

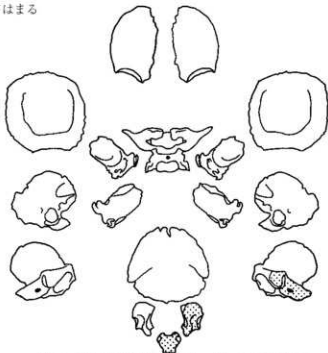


図3. 頭蓋骨出土部位図(Baker 他, 2005を改変)

14. 11-2号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は直径約65cm・深さ約70cmの不整形土坑から、出土している。

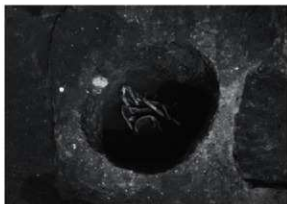


写真58. 11-2号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は座葬で顔面部を北西に向けた状態で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、標管が1点と銭貨の寛永通宝が3点出土している。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨及び四肢骨も華者で、歯冠計測値も小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。また、左寛骨の大座骨切痕の角度が鈍角であるため、被葬者の性別は女性である。しかしながら、耳状面前溝部が破損しているため、経産婦かどうかの確認はできなかった。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合の内、観察可能な冠状縫合及び矢状縫合は内板及び外板共に癒合して閉鎖している状態である。また、切歯縫合も癒合して閉鎖している。歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状・点状・面状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

・歯石：歯石の付着は、下顎歯の舌側面に一部認められた。

・齲蝕：齲蝕は、上顎右第1小臼歯及び同左第1大臼歯・下顎右第1大臼歯の3本が歯冠が崩壊し、残根状態になったC4の状態である。

・歯の生前脱落：歯の生前脱落は、上顎右第2小臼歯及び下顎左第1・2大臼歯の3本に認められた。この内、上顎右第2小臼歯及び下顎左第2大臼歯は、歯槽も閉鎖した状態であるが、下顎左第3大臼歯は歯槽が閉鎖しなかった状態であるため、被葬者の死亡前約1～2年の内に生前脱落したものと推定される。

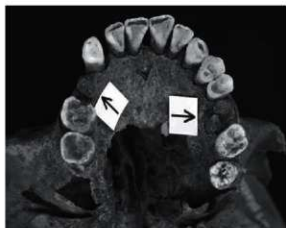


写真59. 齲蝕と生前脱落[上:上顎、下:下顎咬合面観]

・膿瘍：上顎左第1大臼歯の歯根部には、膿瘍が認められた。同歯は、齲蝕により歯冠が崩壊し残根状態になった齲蝕症第4度（C4）の状態であり、その齲蝕による感染であると推定される。



写真60. 齧傷[上顎左第1大臼歯部]

(8) 追記

想像力を働かせることが許されるならば、11-1号土坑及び11-2号土坑から2体の出土人骨が検出されたことは、まず、母親が新生児の出産後すぐに高齢出産等の何らかの理由で死亡し埋葬された。その後、新生児が生後すぐに母乳をもらうことができなかったことによる栄養失調あるいは病気で死亡した。そのため、遺族が新生児の死を悼み、母親の土坑墓の直上に埋葬したのではないかと推定される。



写真61. 頭蓋骨前面観[上]、左側面観[下]



写真62. 下肢骨

15. 12号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約86cm・短径約70cm・深さ約50cmの方形土坑に埋葬されたと推定される。



写真63. 12号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は顔面部を北西に向けた座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が10点検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨全体は比較的小さいが、眉弓は比較的發展している。寛骨の大座骨切痕部は破損しており、確かめることはできなかったが、四肢骨は頑丈で大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合である、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ（入字）縫合を観察すると、内板はすべて癒合し閉鎖した状態であるが、外板は癒合しかかっている状態である。切歯縫合は、癒合して閉鎖している。また、上下歯のほとんどは生前脱落し、歯槽も閉鎖した状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は老齢であると推定される。

(7) 被葬者の古病理

- ①歯石：歯石の付着は、認められなかった。
- ②齶蝕：齶蝕は、上顎左第2小臼歯の歯根部遠心面に、歯髄に達するC3の状態が認められた。

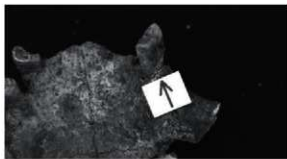


写真64. 齶蝕[上顎左第2小臼歯歯根部遠心面]

- ③歯の生前脱落：本個体には、多くの歯の生前脱落が認められた。

・上顎：左右第1及び第2切歯・左犬歯・右第1小臼歯・左右第1大臼歯・左第2大臼歯が生前脱落しており、歯槽も閉鎖した状態である。

・下顎：下顎では左犬歯以外は、すべて生前脱落をし、歯槽も閉鎖した状態である。

- ④歯の異常磨耗：上顎右犬歯は、歯冠近心面が歯髄まで露出する程度に異常磨耗をした状態である。恐らく、歯が次々と生前脱落を起こし、わずかに残った、右上下の犬歯で咀嚼をしたために起きたものと推定される。

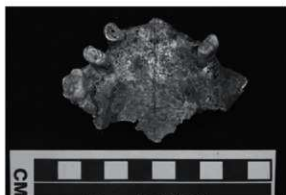


写真65. 上顎咬合面観



写真66. 下顎咬合面観[無顎部に注意]



写真67. 頭蓋骨[上：前面観、下：左側面観]

(8) 非計測的形質

本人骨の後頭骨には、舌下神経管二分が認められた。この形質は、非計測的形質の中でも在来系（縄文系）に多いと言われている。ところが、本人骨の前頭骨には眼窩上孔が認められている。この形質は、非計測的形質の中でも渡来系（弥生系）に多いと言われている。その意味で、本人骨は、在来系と渡来系との両方の形質が混在していることになる。



写真68. 眼窩上孔[前頭骨]



写真69. 舌下神経管二分[後頭骨]



写真70. 下肢骨

16. 20号土坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約95cm・短径約55cm・深さ約50cmの楕円形土坑から、出土している。



写真71. 20号土坑出土人骨出土状況[上が北西]

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北東にし左側を下にした横臥（側臥）屈葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品

副葬品は、銭貨の寛永通宝が7点検出されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓及び乳様突起が発達している。寛骨の大座骨切痕部は破損しており観察できなかったが、四肢骨は頑丈で大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合を観察すると、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ（人字）縫合は内板及び外板共に一部癒合している状態である。また、上顎歯は一部残存しているものの、多くの歯は生前脱落をし歯槽も閉鎖した状態である。さらに、下顎歯は右第3大臼歯以外はすべて生前脱落し、歯槽も閉鎖した状態である。総合的に、被葬者の死亡年齢は高齢であると推定される。

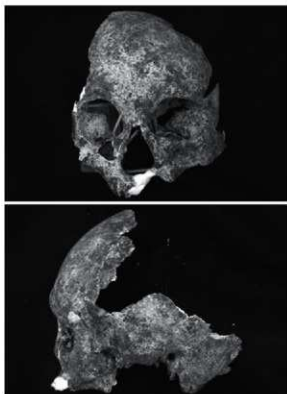


写真72. 頭蓋骨[上:前面観、下:左側面観]

(7) 被葬者の古病理

①生前脱落: 本被葬者の上下歯は多くが生前脱落を
しており、歯槽も閉鎖した状態である。

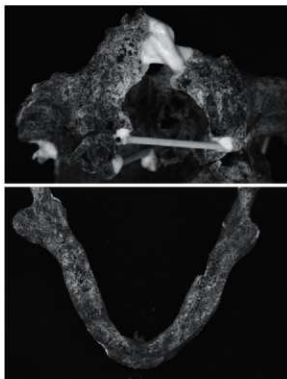


写真73. 上下顎骨[上:上顎骨、下:下顎骨(無歯顎)]



写真74. 下肢骨

17. 74号土坑出土土人骨

今回、報告する土坑の中では、本土坑のみの時代
が中世である。

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長径約145cm・短径約70cm・深さ約50cm
の隅丸長方形土坑から出土している。なお、本土坑
は、大石及び礫で覆われている。

(2) 被葬者の頭位・埋葬状態

人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして左
側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されている。

(3) 副葬品

副葬品は、検出されていない。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被
葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

出土人骨の残存状態は良くないが、出土歯の大き
さが比較的小さく、四肢骨も華奢であるため、被葬
者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状ある
いは面状に露出する程度のマルティンの2度の状態
である。従って、被葬者の死亡年齢は約40歳代であ
ると推定される。



写真75. 74号土坑発出土状況[上が西]



写真76. 74号土坑出土人骨出土状況[上が西]

(7) 被葬者の古病理

①歯石：歯石の付着は、認められなかった。

②齧蝕：齧蝕は、下顎左第2大臼歯の遠心面に、歯髄にまで達する齧蝕症第3度（C3）の状態が認められた。



写真77. 下顎左第2大臼歯の齧蝕

③歯の生前脱落：下顎左第1及び第2切歯4本は、生前脱落をし、歯槽も閉鎖した状態である。



写真78. 下顎歯の生前脱落

謝辞

本遺跡出土人骨を報告する機会を与えていただき本遺跡に関する考古学的情報を与えていただいた、群埋文の瀧川伸男氏に感謝いたします。また、現場において様々な便宜をはかっていただいた、群埋文の中沢 悟氏に感謝いたします。

引用文献

・和文

- 馬場悠男 1991 「人類学講座別巻1. 人体計測法・人骨計測法」、雄山閣出版
- 遠藤萬里・北條輝幸・木村 賢 1967 「Ⅷ. 四肢骨」
「増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体」、東京大学出版会
- 藤井 明 1960 四肢骨長の長さと同身長との関係に就いて、
「順天堂大学体育学部紀要」、3: 49-61.
- 藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について、「人類学雑誌」、
61(1): 1-6.
- 植田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、
67(3): 47-59.
- 平本嘉助 1972 縄文時代から現代に至る関東東地方人身長の
時代的变化、「人類学雑誌」、80(3): 221-236.
- 鈴木 尚 1967 「Ⅳ. 頭骨」『増上寺徳川將軍墓とその遺
品・遺体』、東京大学出版会
- 鈴木 尚・林 都志夫・田邊義一・佐倉 明 1956 「Ⅺ.
頭骨の形質」『鎌倉材木塚発見の中世遺跡とその人骨』、
岩波書店

・英文

- BAKER, B. J., DUPRAS, T. L. & TOCHERI, M. W. 2005
"The Osteology of Infants and Children", Texas A & M
University Press
- FAZEKAS, I. Gy & KOSA, F. 1978 "Forensic Fetal
Osteology", Akademiai Kiado
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 *A microevolutional history of the
Japanese people as viewed from dental morphology*, National
Science Museum Monographs No.9, National Science
Museum.
- SCHEUER, L. & BLACK, S. 2000 "Developmental Juvenile
Osteology", Academic Press

遺物観察表

縄文土器観察表

3号住居出土土器 図16.17 PL33

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	突起片	少量の雲母片・明赤褐	-5	環状突起の集合。三又文、沈線を施す。
2	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	覆土	山形突起。押圧、刺突を施す。縦位・横位の沈線を施し、頂点から隆帯を垂下する。
3	深鉢	口縁部片	石英、雲母片・褐	-38	口縁部下に横位隆帯を配し、区画内には弧状の沈線を配す。
4	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	+28	弧状隆帯が加えられ、横位に施す。区画内には沈線を施す。
5	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	+3	隆帯で区画し、その集合点である隆帯に刺みを施す。区画内は横位や斜位の沈線を配す。
6	浅鉢	口縁部片	細砂粒・橙	覆土	口縁部が「く」の字に屈曲する。器表面では平滑面が形成される。
7	深鉢	口縁部片	細砂粒・にぶい褐	覆土	口縁部内側に刺し状縁とする。口縁部に平行沈線文が施す。
8	浅鉢	口縁部片	白色粒子・明赤褐	覆土	胴部片は深く内湾する。赤筋、凹孔の痕跡あり。
9	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明赤褐	覆土	隆帯が僅かに突出する。口縁部下に沈線を施す。
10	浅鉢	口縁部片	細砂粒・褐	覆土	平たい幅状隆帯で弧状文を構成する。
11	深鉢	突起片	細砂粒・にぶい橙	-10	山形突起。沈線を上面にも施し、口縁部区画内にL Rを横位に施文する。
12	深鉢	胴部片	石英、雲母片・褐	覆土	隆帯が垂下し、沈線により縦走文や弧状文を施す。
13	深鉢	胴部片	少量の白色粒子・暗褐	+22	幅広沈線内に3条の平行沈線を施す。
14	深鉢	胴部片	細砂粒・黄橙(断面黒色)	覆土	3条1単位の弧状文に凹彫文が垂下する。文線間に斜行線文が施される。
15	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐(内面黒色)	+7	平行沈線を縦位、斜位に施す。沈線間に刺突文を配す。
16	深鉢	胴部片	石英、雲母片・明赤褐	覆土	沈線による弧状文。沈線間に横位に刺みを施す。
17	深鉢	胴部片	雲母片 明赤褐(内面黒色)	覆土	隆帯による区画。区画内は三又文、沈線による渦巻文を配す。
18	深鉢	胴部～底部片 口：-底:96高:-	少量の砂粒 赤褐(内面黒色)	-5	R Lを斜位に施文後、丸棒状工具による横位沈線を施す。
19	深鉢	胴部片	少量の砂粒 橙(内面黒色)	+1	環状突起。隆帯上にR L施文後、沈線と連続刺突を施す。
20	深鉢	胴部～底部片 口：-底:(130)高:-	白色粒子 明褐(内面黒色)	+16	隆帯貼付で区画する。その後、隆帯上及び区画内にR Lを横位に施文する。区画内には縦位沈線を施す。
21	深鉢	底部片 口：-底:(90)高:-	白色粒子 赤褐(内面黒色)	+15	R Lを斜位に施文する。内面には煤が付着する。
22	深鉢	胴部～底部片	少量の白色粒子 赤褐(内面黒色)	+4	R Lを縦位に施文する。
23	深鉢	胴部片	輝石・明赤褐(内面黒色)	覆土	残存部に限り無文。

7号住居出土土器 図18 PL33

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部片	細砂粒・暗褐	-10	環状突起。隆帯貼付後、R Lを施文し、沈線を施す。
2	深鉢	口縁部片	白色粒子	+11	口縁部は内湾し、口縁下にアーチ状の隆帯文を配す。
3	深鉢	口縁部片	にぶい橙(断面黒色)	+25	口縁部に隆帯。そこから縦線隆帯が下がる。地文はR Lを横位に施文する。
4	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐(内面黒色)	-10	縦位細密熱赤文Lを施文する。
5	深鉢	胴部片	少量の白色粒子 褐(内面黒色)	+7	R Lを斜位方向に密縦施文する。
6	深鉢	胴部片	砂粒・褐(内面黒色)	+18	横位隆帯下に沈線。さらに刺みを有す連続C字文を施す。
7	深鉢	胴部片	石英、雲母片・褐	+24	隆帯文。沈線による平行沈線を施し、三又文を有す。
8	深鉢	胴部片	少量の石英・橙	+24	斜位集合沈線を施す。
9	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	+25	柵門隆帯内に縦位の沈線文を配す。

10号住居出土土器 図21.22 PL33.34

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部片	白色粒子・暗褐	+24	口縁は無文で胴部に縦位の2本沈線。以下、部分的に矢羽根状の刺みを有す隆帯で曲線文を描く。地文には沈線による渦巻文、T状文、波状文を配す。
2	深鉢	口縁部片	輝石片、白色粒子 赤褐(内面黒色)	+16	口縁内屈。矢羽根刺みを有す隆帯により弧状文、垂下文、渦巻文を配す。
3	深鉢	口縁部片	細砂粒	+8	口縁に沿って刺みを有す浮線で、凹孔を有す。
4	深鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	+29	縦位の熱赤Lを施文する。
5	深鉢	口縁部片	石英、雲母片・褐	+19	口縁に沿って隆帯を施し、以下沈線による曲線文、三又文を配す。
6	深鉢	口縁部片	輝石片・褐(内面黒色)	+8	口縁部に横位沈線、隆帯文を施す。
7	深鉢	口縁部片	砂粒・橙	+14	口縁部に刺みを有す隆帯文。厚体の細い斜位の熱赤Lを施文する。
8	深鉢	胴部片	砂粒・明褐(断面黒色)	+45	R Lを横位に施文後、横位の平行沈線を施す。
9	深鉢	胴部片	編織・明赤褐(断面黒色)	+12	R Lを横位に施文す。
10	深鉢	胴部片	編織・明赤褐(断面黒色)	+19	横文を横位に施文する。
11	深鉢	胴部片	石英・明褐(内面黒色)	+29	横位、斜位の隆帯。半截工具による縦位刺突文を施す。
12	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐(内面黒色)	+19	縦位の熱赤Lを施文する。
13	深鉢	胴部片	少量の輝石 赤褐(内面黒色)	覆土	刺みを有す横位の隆帯下に熱赤Rを施す。
14	深鉢	胴部片	砂粒・明褐(断面黒色)	覆土	C字刺突を有す横位隆帯。縦位沈線にも刺突文。隆帯上に熱赤Rを施文する。
15	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	地文に縦位の集合条線、横位沈線を施す。
16	深鉢	胴部片	少量の輝石 暗赤褐(内面黒色)	+13	横位の刺みを有す隆帯。以下熱赤文か。

17	深鉢	突起部か	輝石、白色粒子・明褐	+40	散面状に中央が突起、先端部に刺突、さらに縁にも2つの円孔が空けられる。模様に対応する小槽凹隆帯が付く。
18	深鉢	口縁部片	輝石、白色粒子 明褐(断面黒色)	+17	厚手の無文口縁部片。口縁端部が平坦である。
19	深鉢	底部片 口:-底:(50)高:-	輝石、白色粒子 明赤褐(内面黒色)	+24	横方向へうへり削りか。
20	深鉢	底部片 口:-底:6.4高:-	砂粒・明褐 (断面黒色)	+27	厚手で無文の底部片。平底である。

18号住居出土土器 図24~26 PL34,35

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	胎形及び文様の特徴
1	深鉢	ほぼ完成 口:134 底:6.9 高:47.3	石英、雲母片 明赤褐(内面黒色)	-4	4単位波状口縁と想定される。口縁部文様帯は波頂部より垂下すると想定される隆帯と横位隆帯で区画され、区内に環状突起を繋ぐ隆帯貼付後手軌竹管状工具による平行沈線後沈線上に連続刺突を施す。胴部文様帯は横位隆帯・弧状に垂下する隆帯により楕円形状に区画され、楕円形状区内に半軌竹管状工具による縦位平行沈線後沈線上に連続刺突・沈線端部に管状工具による縦位刺突を施す。楕円形の区画間の空白部には半軌竹管状工具による斜位平行沈線を施す。底部無文。
2	深鉢	口縁~胴部 口:118 底:- 高:-	輝石片・暗褐	+30	平縁口縁に環状の突起が付されるものと想定される。突起は下方へ延びるものと想定されるが明確は不明。口縁部文様帯には丸棒状工具による横位沈線が施される。胴部文様帯にはR1が斜位に施される。
3	深鉢	口縁~胴部 口:204 底:- 高:-	砂粒・褐	+6	平縁口縁。口縁部文様帯は4単位の高筒状突起を繋ぐ横位隆帯により区画され、区内に半軌竹管状工具による横位平行沈線後沈線間に交互刺突を施す。隆帯には斜角・横位沈線が施される。胴部文様帯はR1を縦位に施した後、口縁部突起下より半軌竹管状工具による縦位平行沈線と丸棒状工具による垂下する波状沈線を施す。
4	深鉢	口縁部片	砂粒・にぶい橙	+5	口縁部に横位・弧状に有部沈線を施す。
5	深鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	覆土	残存部に限り無文。外面研ぎ。口縁部は平坦をなす。
6	深鉢	口縁~胴部片 口:(36.0)底:- 高:-	白色粒子・暗褐	+8	平縁口縁。隆帯貼付後、R1施文、沈線、連続刺突。口部には突起が配されるものと想定される。
7	深鉢	胴部~底部 口:- 底:(14.6) 高:-	細砂粒・にぶい橙	-4	三叉文、円形印跡。隆帯とR1を施文後に沈線を施す。中期中葉北系土器か。
8	深鉢	口縁部片	砂粒・暗褐	+32	無文。口縁部は平坦をなす。
9	深鉢	口縁部片	輝石・暗褐	覆土	無文。口縁部は平坦をなす。
10	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	-4	口縁部無文と横位沈線。
11	深鉢	口縁部片	石英、白色粒子・褐	-8	縦位の隆帯、沈線文、三叉文で口縁部を埋め胴部に横位に隆帯、および沈線、三叉文を施す。
12	深鉢	口縁部片	石英、雲母片・暗褐	+4	口縁部にB字状突起文、横位に隆帯文以下横位、縦位に隆帯を付し、沈線文を施す。
13	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	+34	突起片。上部部に貼付隆帯、横線に沿って隆帯を高くし中央にも垂下隆帯。
14	深鉢	口縁部片	石英・橙(内面黒色)	+19	口縁部に弧状突起文、中に突起文、三叉文。以下曲線文様を描く。弧状突起文には玉拍三叉文。
15	深鉢	突起部	雲母片・明赤褐	+27	環状状突起文。以下縦位沈線文を施す。
16	深鉢	突起部	石英片・褐	+16	三角の口縁部突起。縦位、横位の平行沈線を施す。
17	深鉢	突起部	石英片・にぶい赤褐	覆土	環状状突起。周縁に隆帯、沈線を施す。
18	深鉢	突起部	雲母片・暗褐	+13	口縁部にコイル状文を持つ環状突起。口縁下には沈線文を施す。
19	深鉢	口縁部片	雲母片・明褐	覆土	縦位の集合沈線、円形文を施す。
20	深鉢	口縁部片	石英、雲母片・暗褐	-8	環状状突起、円形文、隆帯文および沈線による曲線文様を描出する。
21	深鉢	胴部片	石英片・明赤褐	+9	楕円状および環状状突起文、沈線文を施す。
22	深鉢	胴部片	石英片・橙(内面黒色)	+25	縦位の連続楕円文で連結部は陥落する。区内に沈線文で充填する。
23	深鉢	胴部片	雲母片・褐(内面黒色)	+11	隆帯文に三叉文、曲線文、縦位の沈線文を施す。
24	深鉢	胴部片	多量の白色粒子・暗褐	-8	両側に沈線を伴う隆帯で弧状文を描き、連結C字刺突文を付す隆帯が通る。途中に三叉文を配す。
25	深鉢	胴部片	石英片 明赤褐(内面黒色)	+9	平行隆帯。沈線文を配す。
26	深鉢	胴部片	細砂粒・褐(内面黒色)	+1	横位・縦位の隆帯での区画文を縦位・斜位の沈線で充填する。
27	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐(内面黒色)	+15	隆帯による渦巻文、縦位・斜位の沈線文を施す。
28	深鉢	胴部片	雲母片・褐	覆土	弧状の隆帯。沈線を施す。
29	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	+2	押圧隆帯文。地文にはR1を施す。
30	深鉢	胴部片	砂粒・褐	+14	口縁部に無文文。以下R1を縦位に施す。
31	深鉢	胴部片	砂粒・明褐(内面黒色)	+4	縦位の環状隆帯。地文にはR1を縦位に施す。
32	深鉢	胴部片	石英、雲母片・褐	+22	陥落隆帯。地文に横文を施す。
33	深鉢	胴部片	細砂粒・橙(断面黒色)	+12	施文不明。無文か。
34	深鉢	胴部~底部 口:-底:7.0 高:-	雲母片・赤褐(内面黒色)	+11	残存部に限り無文。
35	深鉢	底部片 口:-底:(8.0) 高:-	石英片・赤褐(内面黒色)	+16	残存部に限り無文。
36	深鉢	底部片 口:-底:(7.4) 高:-	輝石・明赤褐(内面黒色)	覆土	残存部に限り無文。
37	深鉢	底部片 口:-底:10.0 高:-	雲母片、石英・明褐	+4	僅かに上げ底を呈す。網代底。
38	深鉢	底部片 口:-底:(20.0) 高:-	白色粒子・明褐	-8	残存部に限り無文。
39	台付鉢	口:-台:(15.6) 高:-	石英片・明赤褐	+27	円蓋を有す。

24号住居出土土器 図28 PL35,36

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	器形及び文様の特徴
1	浅鉢	口縁部片	白色砂粒・にぶい褐	覆土	強く内屈する口縁部、隆帯による環状意匠と指状意匠が配される。環状意匠には沈線による三叉文を施す。胴部下はL Rを斜位に施文し地文とする。環状意匠下端より隆帯が垂下する。
2	深鉢	口縁部片 口:(15.2)底:-高:-	細砂粒・橙(内面黒色)	覆土	口縁部は内湾し、膨らみ部に縦位別沈線を施した小突起を付す。横位平行沈線を3条流らし、割みを沈線間に加える。頸部はR Lを縦位に施文する。内面には縁が付する。
3	深鉢	胴部片	雲母片・明褐(内面黒色)	覆土	縦位R L施文が覆う。
4	深鉢	胴部片	雲母片 明赤褐(内面黒色)	覆土	胴部部に横位隆帯を付す。上位は燃赤し、下位はR Lを縦位に施文し、沈線による小指状意匠を配す。
5	浅鉢	口縁部片	雲母片・暗褐	覆土	強く内湾し、内面は強く突出する。内面に縦線を施す。
6	浅鉢	口縁部片	白色砂粒・にぶい黄褐	覆土	内湾する口縁部下に横位沈線が配する。
7	深鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	覆土	口縁部頸部にR Lを縦位に施文し、下端に割みを加える。
8	深鉢	口縁部片	砂粒・明褐	覆土	口唇部に隆帯を流らす。以下横位沈線群を口縁部文様帯に充填する。沈線間を交互刺突文で「コ」の字状効果としている。
9	深鉢	胴部片	白色砂粒・褐	覆土	上半か、胴部部による分帯。上位は2条隆帯による円形あるいは渦巻意匠か。下位は同隆帯による方形区画文構成。隆帯には沈線が沿い、区画内は無文。
10	浅鉢	胴部片	細粒・褐	覆土	隆帯による区画文構成。縦位隆帯には横位刺突意匠、横位隆帯には短沈線が施される。区画内は縦位沈線が充填される。
11	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	所謂樽状深鉢部。強く内湾し口縁部に2条の垂下隆帯を付し、頸部隆帯と接す。接点には沈線による「J」字状意匠を配す。頸部隆帯は斜位割みが施され、中に沈線が加わる。垂下隆帯には矢羽状の割みが施される。
12	深鉢	胴部片	輝石・褐	覆土	割みを付す小突起を中核に沈線を加える隆帯が分岐派生する。沈線を縦位とし、三角錐形刺突文を斜位に充填する。
13	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	覆土	横位隆帯以下に隆帯による縦位指状区画が配される。区画内は刺突文を充填する。頸部は1条流しの沈線を施す。
14	深鉢	胴部片	雲母片・暗褐	覆土	胴部片上半か、小型の環状突起と柱状突起を中核として隆帯が分岐派生する。突起には別沈線が加飾され、2条の沈線を縦位とする。R Lが縦位に施される。
15	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐(内面黒色)	覆土	横位平行沈線間を交互刺突文による連続「コ」の字文とする。R Lを縦位に施文する。
16	深鉢	頸部～胴部片	細砂粒・明赤褐	覆土	頸部無文部以下横位隆帯と斜位隆帯による区画文構成か。区画内は平行沈線を縦位とし、L Rを横位に施文する。
17	深鉢	胴部片	雲母片・明赤褐	覆土	下半か、横位隆帯に弧状垂下隆帯が加わる。隆帯にR Lが重なる。
18	深鉢	胴部片	雲母片・褐(内面黒色)	覆土	弧状隆帯に平行沈線を縦位とする。R Lを縦位に施文し、地文とする。
19	深鉢	胴部片	雲母片・明赤褐	覆土	上半か、横位隆帯に平行沈線が加わる。R Lを縦位に充填する。
20	深鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	覆土	成器部突起。別沈線を加え、以下沈線による平行区画が配される。区画内は縦位沈線が充填される。
21	深鉢	胴部片	雲母片・明褐	覆土	内皮使用の横位平行沈線間を斜位割み目が施される。
22	深鉢	胴部片	雲母片 にぶい赤褐(内面黒色)	覆土	横位平行沈線による分帯。縦位隆帯と縦位連続刺突文が配される。
23	深鉢	口縁部片	細砂粒 明黄褐(断面黒色)	覆土	口縁部は内湾し、細かな平行沈線を横位・弧状に施す。地文はR Lを横位に施文する。
24	深鉢	胴部片	細砂粒・橙(内面黒色)	覆土	内皮使用の横位平行沈線による分帯。地文は縦位の燃赤しを施文する。
25	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	横位隆帯に頸部の燃赤し加わる。
26	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	押厚を加えた頸部隆帯が強く突出し、弧状突起を付す。突起内は連続刺突文を2条施す。
27	深鉢	底部片	輝石・赤褐	覆土	残存部に限り無文で、内面は丁寧撫でにより平滑となる。
28	深鉢	台部片	雲母片・明黄褐	覆土	器沿いあるいは台付き深鉢破片か。無文で、透かし孔などは看取されない。

26号住居出土土器 図30 PL36

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	器形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁～胴部片 口:38.4底:-高:-	白色粒状・明褐	+10	口縁部把手下位に横位の隆帯で胴部文様帯を区画。割みを有すV字状文、沈線による横位。縦位沈線さらには三叉文等を充填する。口縁部からの垂下隆帯は文様帯下の弧状隆帯と繋がる。
2	深鉢	口縁部片	繊維・灰褐(断面黒色)	0	0段多条R LとL Rによる縦位羽状網文を構成する。
3	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	+12	縦位L RとR Lによる結束羽状網文を構成する。
4	深鉢	胴部片	繊維・明黄褐(断面黒色)	+12	胴部片下半か。L Rが看取される。
5	深鉢	胴部片	繊維・明褐(断面黒色)	+19	縦位R Lが看取される。おきく羽状文を構成か。
6	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	+11	縦位L RとR Lによる結束羽状網文を構成する。
7	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐(内面黒色)	覆土	地文は燃赤を施し、横位平行沈線が流る。
8	深鉢	胴部片	小礫・赤褐	覆土	割みを付す横位隆帯で上下の文様帯を画す。上位は2条の隆帯が垂下し区画文を画す。横位隆帯下段に沈線が沿い、区画内は縦位沈線を充填する。
9	深鉢	胴部片	細砂粒・にぶい赤褐	+10	地文は横位R Lを施し、平行沈線による弧状意匠が配される。渦巻文か。
10	深鉢	胴部～底部片 口:-底:10.2高:-	砂粒・橙	+10	残存部に限り無文。

28号住居出土土器 図33.34 PL36.37

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	器形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁～胴部片 口:(31.6)底:-高:-	砂粒・黄褐	+3	口縁下に横位の隆帯と円形文を8箇所付し、そこから隆帯を垂下させ胴部を区画する。区画内には輪状工具による集合縦線を帯状に2単位垂下させる。
2	深鉢	口縁～胴部片 口:(29.0)底:-高:-	砂粒・褐	+4	口縁部は直立し、以下に横位隆帯を流らす。口縁部・胴部片ともに残存部に限り無文。
3	深鉢	口縁部片	細砂粒・にぶい黄褐	+6	残存部に限り無文で直立意味の口縁部下に横位隆帯が流る。

4	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	+5	口唇部は尖る。口縁部下に沈線や割線とした区画直文が配される。区画内は横文を充填するが、器面増減のため自然としない。
5	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	+25	口唇部は内屈し、口縁部は緩やかに外反する。残存部に限り無文。
6	深鉢	口縁・胴部片	輝石片・ぶい褐	-1	口縁部下は横位隆線、胴部は横位弧状隆線が配される。口縁部は別個体の可能性もある。
7	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	+1	沈線施文後の無筋横文の充填施文。
8	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	+14	横位隆線と斜位隆線による区画文か。区画内はLRを横位に施文して充填する。
9	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	+1	口縁部は外傾し、残存部に限り無文。頸部屈曲部に横位沈線が走り、以下に沈線による直文や斜文を配する。
10	深鉢	口縁部片	砂粒・暗褐	+9	口縁部に無文帯。R上横位斜位を施し、頸部に沈線が認められる。
11	深鉢	口縁部片	細砂粒・明赤褐	-12	残存部に限り無文。非対称の小波状突起を付す。弧状口縁か。
12	鉢?	口縁部片	多量の砂粒・黄橙	-3	口縁部下に、沈線と横文施文部による意味状の区画を連続する。横文はLRを充填施文する。鉢か。
13	深鉢	胴部片	細砂粒・黄褐	+20	強く屈曲する胴部。沈線による過密直文帯が横位に配される。
14	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	+5	沈線施文後の無筋横文R充填施文。磨消部を持たない。
15	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	+10	円形貼付文を中核に横位弧状沈線が派生する。
16	深鉢	胴部片	細砂粒・暗褐	+6	口縁部突起下に横位弧状沈線を施す。内面は8字状貼付文を配し、隆線で線取る。隆線には沈線が沿う。
17	深鉢	胴部片	石英片・明黄褐	+1	円形貼付文周を横位弧状隆線が整齊し、不整形区画文を画する。
18	深鉢	胴部片	薄砂粒・明赤褐	+1	薄砂粒の器厚で、深い割文が全面を覆う。
19	深鉢	口縁部片	石英片・暗褐	+1	8字状貼付文を配した口縁部突起は貫孔し、上端も円文より口唇部沈線が派生する。頸部には横位沈線が施される。
20	深鉢	口縁部片	雲母片・明赤褐	+11	口縁部突起下の懸垂隆線でコイル状突起を付す。口縁部より斜位隆線が派生し、沈線を充填する。
21	深鉢	口縁部片	細砂粒・ぶい黄橙	+9	口縁部と胴部片横位隆線を小横位把手が穿く。8字状直文か。
22	深鉢	口縁部片	細砂粒・黄褐	+1	強く外反する波状口縁。波頂部下に円孔を貫孔し、口縁部沈線は隆線と沈線で画される。区画内は円形割文を充填する。内面は円孔外縁と沈線が施される。
23	深鉢	胴部片	砂粒・褐	+1	口縁部突起下の懸垂隆線。小反環状突起下端より弧状隆線が横位派生し、指円状区画を画する。頸部は1本揃きの沈線が充てられる。
24	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	+15	横位隆線と縦位隆線による方形区画か。区画内は縦位沈線を充填する。
25	深鉢	底部片 口:-底:(70)高:-	細砂粒・明褐	+13	直立気味の底部で胴部片下は強く開く。
26	深鉢	底部片 口:-底:(80)高:-	細砂粒・ぶい黄褐	+3	底面の器厚は薄く、胴部片は僅かに外反する。外面は無文だが、底面に割代痕あり。

31号住居出土器 図37~44 PL37~44

番号	器種名	残存及び計測値	粘土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	3/4 口:(35.8)底:150 高:513	白色砂子、少砂・明褐	+5	平縁口縁に突起が4単位付されるものと想定される。突起の先端は環状突起の集合で作られ、胴部中位までコイル状に纏れながら巻状に帯する。文様は口縁部から底部まで一連の文様で描き、上半は環状突起を繋ぎ行ける隆線に沿って半円管状工具による平行沈線を施し、空白部を三又文・円形の印線により飾る。下半は8単位の突起より帯する横位把手下に「9」の字状の空帯を配付し、空白部を三又文・割文・半鼠首管状工具による平行沈線を「9」の字状・横位・縦位・磨消に沿って施す。
2	深鉢	口縁-胴部 口:34.5底:-高:-	石英・明褐	+15	平縁口縁に孔が穿られた突起が付される。突起の内・外面は九株状工具による沈線により飾られる。口縁部と胴部は九株状工具による横位沈線、柄が穿れた低い隆帯より飾られる。横位沈線は隆帯頂部とその脇に施される。口縁部沈線帯には九株状工具による縦位沈線が施される。胴部文様帯にはLRが横位に施される。
3	深鉢	口縁部	石英、雲母片・褐	+8	4単位の波状口縁。波頂部に環状突起を付す。口縁部に縦位沈線、結節沈線を施す指円状区画文。胴部は三角状区画内に縦文を充填する。胴上半部に横位隆線を加え、沈線を施す。
4	深鉢	口縁部	石英、雲母片・赤褐	+8	4単位の波状口縁。口縁部指円状区画内に沈線を充填し、区画内面に突起を付す。胴部に隆帯による区画文を加え、区画内に短横線、割文文を施す。
5	台付鉢	ほぼ定形 口:19.5底:-高:- (部分欠損)	細砂粒・明赤褐	+26	水平口縁環状突起を付す。口縁部に無紋帯。波状隆帯文により文様を構成する。隆帯文状に斜目及び交互割文が施され、隆帯文周に三又状印線文を加える。台部に円状の透かしが認められる。
6	台付鉢	底部	砂粒・明褐(内面黒色)	-9	台付深鉢か。脚部破片。器面磨消。
7	台付鉢	底部	砂粒・明褐(内面黒色)	+22	台付深鉢か。孔は不明。胴部下には縦位、脚部には弧状の沈線が施される。
8	台付鉢	台部片 口:-台:(10.4)高:-	少量の白色砂子・橙	+1	台付き深鉢か。孔は円形で4単位か。残存部に限り無文。
9	深鉢	口縁部片 口:(20.8)底:-高:-	石英、白色砂子 明赤褐(内面黒色)	+12	平縁で内湾する。口縁部文様帯は小突起より派生した隆線による過密直文を配する。胴部は隆線による指円状区画と三角状区画の横位区画文で構成される。隆線環線には沈線を施し、口縁部・胴部区画内は短横線・割文文を充填する。
10	深鉢	口縁部片 口:(12.3)底:-高:-	石英・明褐	+16	口縁部文様帯を横位隆帯で画す。区画内には隆帯による波状文、間には横位、斜位の沈線文。胴部は無文。
11	深鉢	胴部-底部	石英・明赤褐	+13	隆帯による5単位の横位区画文を施し、中は沈線、割文、ペン先状割文等を充填する。
12	深鉢	胴部-底部	砂粒・明褐(内面黒色)	+17	隆帯による曲線文、横位・縦位の沈線文を配す。
13	深鉢	口縁部片 口:(16.4)底:-高:-	細砂粒・明赤	+43	口縁突起、沈線を有す隆帯が付される。横位の短小隆帯で口縁部文様帯を画し、隆帯による曲線文、沈線による過密直文、三又文を施する。
14	深鉢	口縁部片 口:(12.3)底:-高:-	砂粒・明赤褐	+41	胴部突起の組みを有する隆帯を貼付する。胴部に断糸Rを施すか。
15	深鉢	口縁-胴・底部片 口:10.7底:-高:-	細砂粒 ぶい橙(内面黒色)	+18	口縁部と胴部は横位工具により押圧が施された横位隆帯より飾られる。口縁部文様帯には九株状工具による横位沈線が多量に施される。胴部文様帯には九株状工具による2列1組の縦位波状沈線が4単位施される。胴部と胴部は九株状工具による多量の横位沈線により飾られる。胴部文様帯は単層直線施文後九株状工具による縦位・横位・過密直文の沈線を施す。胴部には横文が施文される可能性があるものの器面の風化により詳細は不明。台付か。

16	深鉢 ほぼ定形 口:136底:(58) 高:221	細砂粒・深い褐色	+20	平縁口縁に正副2単位の突起が付される。正の突起は波状に口縁を突き抜け、頂部に反環状突起が付されるものと想定される。副の突起は「M」字状を呈し一部横状となる。口縁部文様帯は正副の突起より垂下する隆帯・横位隆帯により区画され、区内内には半載竹管状工具背面による幅広沈線が施される。胴部文様帯には単筋Rし施した後、半載竹管状工具背面による縦位・横位・弧状沈線及び連続刺突が施される。
17	深鉢 ほぼ定形 口100底:49高:111	砂粒・褐	+20	残存部に限り無文。胴部腹方へ向う削り、底部サテ調整を施す。
18	浅鉢 口縁部片～底部 口:(150)底:70高:90	細砂粒・橙	+16	口唇部は肥厚し胴部片は強く内湾する。赤彩が残るが意匠は不明。底部は平底で内面に赤彩が残る。同様に意匠は不明。
19	浅鉢 口縁部～底部片 口:160底:130高:100	細砂粒・明赤褐	+19	口縁部には内屈し端部が肥厚する。外面研削。以下は、残存部に限り無文。
20	浅鉢 口縁部片 口:(140)底:-高:-	細砂粒・明褐	+14	口縁端部が肥厚し、ほぼ平底をなし浅い沈線が巡る。
21	深鉢 口縁部片・底部 口:(106)底:56高:148	細砂粒・赤褐(内面黒色)	+58	口縁下に沈線で無文帯を画し、以下燃赤しを施文する。
22	深鉢 胴部～底部 口:-底:70高:-	砂粒・橙	+16	胴下部。円筒状で燃赤しを縦位に施文する。条はやや傾きを持つ。
23	深鉢 胴部 口:-底:96高:-	細砂粒・明褐	+33	胴み文有す横位隆帯。以下燃赤しを縦位に施文する。
24	深鉢 口:-底:96高:-	細砂粒・明褐	+35	胴下部。燃赤しを縦位施文。
25	深鉢 口:(206)底:-高:-	細砂粒・深い褐色	+26	口縁下に2本の押圧支線帯を遠く施らし、これを繋ぐ2本単位の削みを有す隆帯。施文には縦位のRしを遠く施文する。
26	深鉢 口縁部～胴部 口:(205)底:-高:-	細砂粒・赤褐(内面黒色)	+8	口縁部に粘土土層を貼り付けた斜格子状文帯。以下弧状隆帯、沈線及びRしを横位に施文する。
27	深鉢 口縁部～胴部 口:167底:-高:-	細砂粒・明赤褐(内面黒色)	+22	波状口縁と想定される。口縁部と胴部を横位隆帯で隔す。口縁部文様帯には単筋Rしが施された隆帯を楕円形に4単位配し、空白部を半載竹管状工具による縦位平行沈線・単筋Rしで隔す。楕円形隆帯には半載竹管状工具による平行沈線が施される。胴部文様帯には単筋Rしが施される。
28	深鉢 3/4 口:168底:102高:348	砂粒・褐	+62	平縁口縁に2対の突起が付されるものと想定される。突起は中空状を呈し、丸棒状工具による沈線・削みにより飾られる。口縁部文様帯には中空状の突起を繋ぐ突起が付され、突起はコイル状・渦巻状に飾られる。胴部から胴部文様帯は単筋Rしを斜位に施した後、丸棒状工具による2条1組の沈線により矢方形状の区画を多段に設ける。胴部と底部は横位隆帯により隔され、底部文様帯には単筋Rしが斜位に施される。
29	深鉢 口縁部 口:195底:-高:-	砂粒・褐	+19	内湾する口唇部。口唇部は無文で短く外傾する。胴部も無文で強く内湾し、口唇部の内面に中空状突起として、横位S字状意匠と楕円形意匠を交互に配する。4単位か。
30	深鉢 胴部～底部 口:117底:115高:-	砂粒・褐(内面黒色)	+2	胴部欠損。胴部・胴部は横位隆帯により隔される。胴部・胴部文様帯とも単筋Rし横文が斜位に施される。
31	深鉢 ほぼ定形 口:205底:84高:242	砂粒・橙(内面黒色)	+7	4単位波状口縁。口縁部と胴部は指頭押圧が施された横位隆帯により隔される。口縁部文様帯には連続する横位把手が4単位付され、把手は環状突起・丸棒状工具による深い沈線により飾られる。胴部文様帯には波面下部で垂下する指頭押圧が施された隆帯により区画され、区内内にはRしが斜位に施される。
32	深鉢 胴部～底部 口:-底:109高:-	砂粒・明褐	+5	胴部文様帯には、指頭押圧が施される横位隆帯を横位隆帯より垂下する4単位の波状に垂下する隆帯貼付後、単筋Rしを縦位に施す。
33	深鉢 口:(314)底:87 高:250	細砂粒・橙	+23	平縁口縁と想定される。口縁部と胴部は横位隆帯により隔される。口縁部文様帯には丸棒状工具により飾られた突起が付されるが、意匠が顕著なため詳細は不明。胴部文様帯にはRしが縦位に施される。
34	深鉢 口縁部～胴部片 口:(220)底:-高:-	多量の砂粒・暗褐	+16	円孔をもつ突起を付す。突起には円孔に沿って沈線文を施す。口縁部は突起下に縦位沈線文、胴部に隆帯が巡る。胴部にはRしを縦位に施す。
35	深鉢 口縁部片 石英、雲母片・暗褐		+7	口縁部に3個の円形文を組み合わせた大型環状突起。以下隆帯による円形文、コイル状突起文を付す。文様内は沈線で充填されている。
36	深鉢 突起片 白色粒子、石英片 明赤褐		+23	大型の環状突起となり貫孔する。突起上端に短沈線を施す。
37	深鉢 突起片 細砂粒・褐		+38	反環状突起と縦位に接続するコイル状突起。上位には環状の突起が付され、貫孔することによって中空状の裝飾となる。突起側面は深い内皮沈線が縦位に施される。
38	深鉢 胴部片 細砂粒・褐		+55	縦位連続突起。円形突起とコイル状突起を上下に接続する。コイル状突起下層より斜位隆帯横位沈線が突出する。
39	深鉢 突起片 雲母片・深い褐色		+6	口縁部に交互配される丸棒状突起。両面は接合部で滑差している。
40	深鉢 突起片 砂粒・橙		+28	尖鋭性強い突起。非対称ながら環状突起と楕円状突起による正面観が、突起以下に隆帯による弧線あるいは渦巻状意匠が配される。隆帯には半載竹管状工具による連続刺突が沿う。突起内面も大柄の円形文が配され、貫孔する。
41	深鉢 突起片 砂粒・褐		覆土	小波状突起。側面は非対称の環状を意匠する。突起下には横位隆帯が付され、内径も突出する。
42	深鉢 口縁部片 細砂粒・褐		+25	中空状の縦位突起。上位に貫孔する円形突起も接続される。内面には三叉文が割まれる。
43	浅鉢 口縁部片 少量の石英 明褐(断面黒色)		+15	滑差する別部平か。中位と下位の隆帯で画された文様帯内を弧状沈線帯が配される。
44	深鉢 胴部片 細砂粒 明赤褐(内面黒色)		+3	小突起を中核にした弧状隆帯による三角状区画が配される。区内内は円形刺突文や三叉文、弧状沈線帯を突置する。
45	深鉢 胴部片 雲母片・褐		+4	隆帯によるレンズ状区画を主幹意匠とする。区内内及び隆帯側帯として内皮平行沈線が施される。
46	深鉢 胴部片 雲母片・赤褐		+7	外見する別部平か。中位と下位の隆帯で画された文様帯内を弧状沈線帯が配される。
47	深鉢 胴部片 細砂粒・褐		+61	隆帯による三角形状区画か。隆帯の一部は交互刺突を施す。区内内には3条の沈線が沿い、中位は三叉文と幅狭の斜位沈線で突置される。
48	深鉢 口縁部・胴部片 白色砂粒・暗褐		+50	口縁下に隆帯による重積円形文を複数描く。胴部は、貼付横位隆帯上位に隆帯による重積円形文。

49	深鉢	口縁部片	砂粒・ふい揚	+13	隆帯による円形文、曲線文様を横に連結する。横位沈線文、三叉文を横文、口縁部に環状突起。線を通る隆帯は口縁部に接し、口縁に横位沈線を施す。
50	深鉢	口縁部片	石英、雲母片・褐	覆土	小型の波状突起。非対称で反波状突起の可能性もある。突起は底部の小突起となり、横位平行沈線が重なる。小突起下から隆帯が分岐線を描く。
51	深鉢	口縁部片	少量の雲母片・明赤褐	+10	口縁部に付された一対の環状隆帯から隆帯による曲線文が長く伸びる。
52	深鉢	口縁部片	少量の雲母片・明褐	+34	口縁部は内湾し無文。以下に小型の反波状突起を付し、下端より隆帯を垂下する。隆帯側縁は沈線、また斜位沈線が施される。
53	深鉢	口縁部・胴部片	細砂粒・明褐(内面黒色)	+12	口縁部突起は喙状か、横位隆帯には羽目を施す。胴部上半には瘤状突起を付し以下に渦巻状あるいは円状の意匠文を配す。隆帯には羽目を施し、側縁には沈線が沿う。帯白帯には三叉文が埋められる。下半は横位隆帯で囲われ、上位の胴部文様帯は弧状あるいは渦巻状の意匠が配される。
54	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	+50	小型の波状突起に斜位反波状突起とコイル状突起が配される。突起下端より隆帯が派生し、取っ沈線が施される。
55	深鉢	突起片	砂粒・明褐	+43	口縁部反波状突起、波頂部より隆帯が派生し、口縁部下の突出する横位隆帯に繋がる。波底部下には縦位別沈線が施される。内面は突起外縁を隆帯が縁取り、内縁が突出する。
56	深鉢	突起片	細砂粒・褐	+31	大型の尖状突起。突起下位は横位に湾し、立体的な裝飾をなす。突起側面は楕円状で中位を貫刺する。沈線が沿いR Lが重なる。突起下位は沈線が楕円状に沿い内縁に環状小突起が配される。内面突起下位は半円状突起が施される。
57	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	覆土	波状口縁部を呈し内湾する口縁部形態。口唇部内縁は強く突出する。口唇部隆帯より細線が垂下し、内皮平行沈線が側縁として重複施文される。
58	深鉢	胴部片	砂粒・褐(断面黒色)	+8	波状口縁か。胴部は屈曲し、横位隆帯と口縁部隆帯を円環状突起が繋ぐ。胴部隆帯上はR Lが施される。
59	深鉢	口縁部片	少量の白色粒子 明赤褐	+38	内湾する口縁部。口唇部下に3本の横位沈線を設け、影らみ部に平行沈線による渦巻文を配す。L Rを縦位に施す。
60	深鉢	口縁部片	砂粒・明褐	+49	渦巻状小突起を口縁部文様下端に付し、沈線間を交互刺突し「コ」の字文とする横位沈線帯を充填する。
61	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	+10	強く内湾する口縁部形態。頂状口縁下で環状突起を配する。突起外縁に浅い縦位沈線が施され、内縁より隆帯が派生する。突起内側も環状となる。
62	深鉢	口縁部片	砂粒・橙(断面黒色)	+45	強く内湾する口縁部。羽目を付す波状隆帯が口唇部から派生し、帯系Lが縦位に施される。
63	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明褐(一部黒色)	+17	強く内湾する口縁部形態。口唇部端部は幅状の平面を持つ。内湾部には補修孔を穿つ。
64	深鉢	口縁部片	細砂粒・橙(断面黒色)	+13	器面明流。口縁部は内湾し弧状隆帯が付される。
65	浅鉢	口縁部片	砂粒 けい・橙(断面黒色)	+26	強く内湾する器形。薄手で残存部に限り無文。
66	深鉢	口縁部片	細砂粒・暗褐	+23	波状突起を設け、口縁部下に幅状の横位沈線を配する。
67	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明赤褐	+52	外面無文で、内縁が重しく突出する。付着きの器種か。
68	深鉢	口縁・胴・底部片	細砂粒・明赤褐	+1	丸みを帯びる口唇部。口縁一部は強く筒きバケツ状を呈す。横位Lが器面全面を覆う。
69	深鉢	胴部片	砂粒・褐	+18	やや円筒状の胴部下半。縦位R Lが器面全面を覆う。
70	深鉢	口縁部片	砂粒・橙(内面黒色)	+21	上部に沈線を有す突起状隆帯文。地文はR Lを施す。
71	深鉢	胴部片	砂粒・暗褐	+56	縄文地に縦位山形沈線を施す。
72	深鉢	胴部片	砂粒・ふい揚	+43	0段3条R Lを施す。
73	深鉢	胴部片	細砂粒・褐(内面黒色)	+27	付着し深鉢か。横位隆帯で下位を画し、上位を2本の縦位沈線と斜位沈線が施される。地文はL Rを縦位に施す。
74	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	+36	胴部上半か。横位隆帯に交互刺突を上下に加える。以下数条の沈線が重なり、無筋しを縦位に施す。
75	深鉢	胴部片	石英、雲母片 褐(内面黒色)	+62	深い内皮平行沈線による三角形区画内を三叉文が連続し、中位に円形刺突が施される。上を横位に充填施文する。
76	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	覆土	日本施す横位沈線による弧線と小三角区画。区画内には三叉文が埋められる。
77	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	+50	羽目を施す横位隆帯と幅状の横位平行沈線間を縦位平行沈線が充填する。横位沈線下に羽目と半円状刺突による「華重文」が施される。
78	深鉢	胴部片	細砂粒・橙(内面黒色)	+32	羽目を施す横位隆帯下に隆帯による楕円文を構成。楕円文内には羽目を有す。
79	深鉢	胴部片	石英、雲母片 明赤褐(内面黒色)	覆土	幅状の平行沈線と内皮刺突文を充填する。部分的に斜位沈線も施される。
80	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	隆帯による円形区画文か。区画内は棒状工具による刺突文を充填する。区画外縁には沈線が施される。
81	深鉢	胴部片	石英・橙	覆土	隆帯による三角形区画端部。複数の結節沈線が施される。
82	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	+13	剥落するが垂下隆帯が付される。横位平行沈線間に小型の羽目が施される。以下縦位平行沈線が隆帯に沿う。
83	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	+30	放射状の縦位平行沈線と横位沈線による方形区画。地文にL Rを横位に施す。
84	深鉢	胴部片	石英片・明褐	+15	口を縦位に施す。
85	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	+17	直立気味の胴部下半。縦位R Lが覆う。
86	深鉢	胴部片	砂粒・橙	+33	胴部上位は縦やかに内湾する。横位平行沈線以下3・4条の縦位沈線による華重文を構成する。無筋しを縦位に施す。
87	器台	胴部片	細砂粒・橙	覆土	端部は面を持ち、裾部は開く。脚部はやや直立気味で大型の孔を4単位設ける。
88	深鉢	底部 口:-底6.4高:-	石英片 明赤褐(内面黒色)	+10	残存部に限り無文。
89	深鉢	底部 口:-底9.0高:-	砂粒・明赤褐(内面黒色)	+9	若干内傾気味に直立する胴部下半。残存部に限り無文。内面に環が付着する。
90	深鉢	胴部片	石英、雲母片・褐	+9	胴部下端。底部剥落。垂下隆帯下縁が取残れ、横位羽目列が施される。
91	深鉢	底部片 口:-底:(11.0)高:-	砂粒・橙(内面黒色)	+32	底部外面を削りて調整する。弧状沈線が見取れる。

92	深鉢	底部片 口:-底:(140)高:-	砂粒・褐	+7	厚手の底部破片。縦やかに開く胴部下半形態か。内面に煤が付着する。
93	浅鉢	定形 口244底:320高:93	細砂粒・橙	-1	大型品。無文で内外面に赤彩あり。深鉢底部の再利用品か。

34号住居出土土器 図45 PL41

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	浅鉢	口縁部片	雲母片・明赤褐	+18	波状口縁部。口唇部の隆帯は強く突出し、中に沈線を描く。口縁部には平行沈線による渦巻文が配される。胎土及び隆帯上に横位にR.Lが施される。
2	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明赤褐	+23	強く開く口縁部。口唇部は僅かに彫形する。内外面とも丁寧な磨削を施す。
3	深鉢	胴部片	雲母片 明赤褐 (内面黒色)	+17	胴部下半か。縦位燃赤Rが磨面を覆う。

36号住居出土土器 図46.49 PL42.43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部-胴部片 口:(100)底:-高:-	砂粒・褐	-3	口縁部と胴部を丸棒状工具による横位沈線で隔す。口縁部は無文。胴部片文様部にはR.Lを斜位に施文後、丸棒状工具による横位・弧状沈線が施される。
2	台付甕	台部片 口:-底:(90)高:-	雲母片・明	+13	R.Lを縦位に施文する。
3	深鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐 (内面黒色)	+14	円錐状の突起より派生する横位隆帯により分ける。平行沈線、胴部にR.Lを縦位に施文し、刺突文を施す。
4	深鉢	胴部片	雲母片・褐	覆土	コイル状突起に繋がる隆帯、R.Lを斜位に施文し、隆帯に沿った沈線が2条施される。
5	深鉢	口縁部片	輝石・橙	+8	口縁より派生する隆帯、横位幅広隆帯貼付後、R.Lを縦位に施文する。口縁より派生する隆帯端部に粘土粒をかぶせる。
6	深鉢	胴部片	片岩粒・褐	覆土	隆帯貼付後、R.Lを斜位に施文する。
7	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐 (内面黒色)	覆土	R.Lを縦位に施文する。
8	深鉢	胴部片	石英・褐	+18	R.Lを斜位に施文し、半截竹管状工具による横位平行沈線が施される。
9	深鉢	胴部片	片岩粒・褐	覆土	R.Lを縦位に施文後、横位平行沈線を施す。
10	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	0	糸織文を施す、沈線を施す。
11	深鉢	胴部片	砂粒・褐 (内面黒色)	覆土	連続刺突文が施される箱筒形の隆帯貼付後、縦位糸織、沈線を施す。
12	深鉢	胴部片	砂粒・暗褐 (内面黒色)	+15	燃赤文R.Lを施す。
13	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	+4	弧状に垂下する隆帯を突起で繋ぎ、隆帯貼付後、平行沈線が施される。
14	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	+3	燃赤文を施す。器面の風化が著しい。
15	深鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	+18	隆帯貼付後に平行沈線を施し、沈線間に交互刺突文を施す。
16	深鉢	口縁部片	雲母片・砂粒・黄褐	+15	単列の結節沈線を施す。
17	深鉢	口縁部片	多量の雲母片、砂粒・褐	0	口唇部に刻み、隆帯端に単列の結節沈線を施す。
18	深鉢	口縁部・胴部片	雲母片 に赤い赤褐 (内面黒色)	0	口唇部に刻みを有す。突起、隆帯貼付後、半截竹管状工具による平行沈線を施す。
19	深鉢	口縁部片	細砂粒・赤褐	+13	隆帯に沿って半隆帯状の平行沈線を施す。
20	深鉢	口縁部片	細砂粒・暗褐	覆土	深い沈線を施す。
21	深鉢	胴部片	雲母片・赤褐	+10	隆帯貼付後、多状の沈線を施す。
22	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐	覆土	コイル状の突起から刻みを有する隆帯を派生させ、沈線で飾る。
23	深鉢	胴部片	砂粒・褐	+8	連続刺突文が施される横位隆帯。沈線により渦巻文を派生する。
24	深鉢	突起部	細砂粒・明褐	+2	円錐状の突起で渦巻状の沈線を施す。端部を刻み・沈線で飾る。内面は中空状を呈し、周囲に三叉文を配す。
25	深鉢	口縁部片	多量の砂粒・暗褐	+1	糸織施文後、沈線を施す。
26	深鉢	胴部片	雲母片・橙	+14	横位隆帯貼付後、連続弧形文を施す。
27	深鉢	胴部片	小塊・紅赤い黄褐	+24	コイル状の突起が施される。
28	浅鉢	口縁部片	細砂粒・褐	+11	頂部に丸棒状工具による幅広沈線が施され、隆帯が貼付される。
29	浅鉢	口縁部片	細砂粒・暗褐	+3	残存部に限り無文。
30	浅鉢か	口縁部片	細砂粒・橙	+1	口縁と胴部を横位隆帯で隔す。平行沈線隆帯をコンパス状にまとめる。
31	浅鉢	胴部片	少量の白色粒子 橙 (断面黒色)	+8	口唇部欠損。端部に幅広の隆帯を貼付し、渦巻文を派生する。
32	台付甕	台部片 口:-底:(90)高:-	石英片・橙	+2	残存部に限り無文。孔が穿たれる。
33	深鉢	底部片 口:-底:(80)高:-	細砂粒・褐 (内面黒色)	+10	器面やや摩滅。残存部に限り無文か。
34	深鉢	底部片 口:-底:(80)高:-	石英・明赤褐	覆土	残存部に限り無文。
35	深鉢	底部片 口:-底:(70)高:-	細砂粒・明褐 (内面黒色)	+17	R.Lを縦位に施文する。器面の風化が著しい。
36	深鉢	底部片 口:-底:(166)高:-	石英・褐 (内面黒色)	-3	大型の深鉢底部。やや直立気味に開く胴部下半形態をし、内外面とも器壁の厚れが著しい。
37	深鉢	底部片 口:-底:(108)高:-	砂粒・褐 (内面黒色)	-2	大型の深鉢底部。比較的強く開く胴部下半形態。内外面とも器壁は縦熟により荒れている。残存部に限り無文。

1号埋設土器 図50 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部	石英・赤褐	覆土	口縁部と胴部は横位隆帯により隔される。口縁部は4単位反環状突起より派生する隆帯により区画され、区内には弧状突起より縦位「へび」の字状の隆帯、単断R.L織文後半截竹管状工具による縦位・横位、弧状の平行沈線施文後半截竹管状工具による連続刺突文を施す。反環状突起は「C」の字状・コイル状の粘土粒・半截竹管状工具による平行沈線により飾られる。
2	深鉢	突起部	片岩粒・明赤褐	+7	頂部端部、口唇部に連続弧形文を施す。隆帯により口縁部を区画し、隆帯端に平行沈線・連続弧形文を施す。
3	深鉢	胴部片	白色粒子、輝石片 明赤褐	+13	斜目をもつ隆帯文、弧状沈線を施す。

4	深鉢	胴部片	雲母片・褐	+18	波直部より指頭押圧が施される隆帯が垂下する。隆帯脇に結節沈澱を施す。
5	深鉢	胴部片	細砂粒・褐(内面黒色)	+8	R.Lを横位に施す。
6	深鉢	底部片	輝石・褐粉	覆土	残存部に限り無文。
7	深鉢	底部片	細砂粒・明赤褐(内面黒色)	覆土	R.Lを横位に施す。
8	深鉢	底部片	片岩粒・ふいふ粉(内面黒色)	+18	残存部に限り無文。表面の風化が著しい。

2号埋設土器 図50 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部・胴部 口:-底:96高:-	細砂粒・明褐	覆土	口縁部に連続斜突文、その下方に平行沈澱を施し、隆帯で楕円区画をつくり出す。胴部には横位平行沈澱を施す。

3号埋設土器 図50 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部・底部片 口:-底:96高:-	砂粒・橙	覆土	隆帯貼付後、三叉文・沈澱・連続爪形文を施す。内面に煤が付着する。

81号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	底部片 口:-底:(90)高:-	白色粒子・褐(内面黒色)	+23	熱赤文(単軸絡条体第1類)を施す。
2	深鉢	底部片 口:-底:92高:-	細砂粒・橙(断面黒色)	+10	平底。残存部に限り無文。

82号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐(内面黒色)	+15	斜みある隆帯で区画し、R.Lを横位に施す。

98号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部・胴部片	砂粒・褐	+13	胴部に沈澱が盛り、胴部にL.Rが施される。施文方向は不規則で、素直向は一貫しない。

109号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部片	白色粒子・褐(内面黒色)	覆土	R.Lを斜位に施す。

170号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部片	砂粒・橙	覆土	隆帯が貼り付けられ、頂部に沈澱、沈澱脇に斜みを有する。
2	深鉢	胴部片	雲母片・明赤褐	覆土	R.Lを横位に施す。
3	深鉢	胴部片	雲母片・褐(内面黒色)	覆土	段状突起より垂下する。隆帯貼付後、手織竹管状工具による平行沈澱を施す。平行沈澱は浅い沈澱を施文とし、その後、隆帯に沿った深い沈澱を施文する。

188号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部片	砂粒・褐	覆土	頂部に沈澱・斜みが施される。隆帯貼付後、平行沈澱が施される。沈澱間には交互斜突文が施される。

190号土坑出土土器 図52 PL43

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	胴部・底部片 口:-底:82高:-	砂粒・褐	+30	熱赤Lを斜位に施す。

遺構外出土土器 図53～63 PL44～50

番号	器種名	残存及び計測値	胎土・色調	位置	彫形及び文様の特徴
1	深鉢	口縁部片	繊維・褐(断面黒色)	62-P-23	口縁部に斜目。結束第1種(L.R, R.L)の結節調文が施される。
2	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	72-S-3	L.R, R.L横位による羽状調文が施される。
3	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	92-P-12	L.R, R.Lによるループ文の交互施文が施される。
4	深鉢	胴部片	繊維・黄褐(断面黒色)	72-A-9	R.L。前出状体第1種(L.R+R)横位による羽状調文が施される。
5	深鉢	胴部片	繊維・ふいふ粉(内面黒色)	62-I-12	連続爪形文が施される。
6	深鉢	胴部片	繊維・橙	72-A-4	L.R, R.Lによるループ文の交互施文が施される。
7	深鉢	胴部片	繊維・橙(内面黒色)	72-V-6	R.Lのループ・結節が施される。
8	深鉢	胴部片	繊維・ふいふ粉(断面黒色)	72-Q-4	R.Lを横位に施文する。
9	深鉢	胴部片	繊維・明褐(内面黒色)	62-P-20	結束第1種(L.R, R.L)が施される。
10	深鉢	胴部片	繊維・橙	62-V-13	織文が施されているが、種類は不明。
11	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	8号土坑	L, R横位による羽状調文が施される。
12	深鉢	胴部片	繊維・褐(断面黒色)	62-R-20	L.R, R.Lのループが施される。
13	深鉢	胴部片	繊維・明褐(内面黒色)	108号土坑	R.L, L.R横位による羽状調文が施される。
14	深鉢	胴部片	繊維・明褐(内面黒色)	76号土坑	R.L, L.Rが施される。垂が縦走し、底部付付と認められる。
15	深鉢	胴部片	繊維・橙(断面黒色)	63-I-15	ループが施される。
16	深鉢	胴部片	繊維・明褐(断面黒色)	73-V-7	丸底か、R.L, L.Rが施される。施文方向は不規則。
17	深鉢	胴部片	繊維・黄褐・橙(断面黒色)	63-I-15	R.Lを横位に施文する。
18	深鉢	胴部片	繊維・明褐(断面黒色)	72-I-5	L.Rを施文する。
19	深鉢	胴部片	繊維・橙(内面黒色)	72-R-2	織文が施されているが、種類は不明。
20	深鉢	胴部片	繊維・橙(内面黒色)	62-I-12	織文が施されているが、種類は不明。
21	深鉢	胴部片	繊維・ふいふ粉(断面黒色)	63-E-12	R.Lを横位に施文する。
22	深鉢	底部片	繊維・橙(断面黒色)	62-T-12	上付底。底面にL.Rを施文する。
23	深鉢	胴部片	砂粒・橙(内面黒色)	166号土坑	R.Lを横位に施文する。
24	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐(断面黒色)	62-R-21	R.Lを横位に施文後、平行沈澱文が施される。

25	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐(内面黒色)	72-C-5	R Lを縦位に施文する。
26	深鉢	胴部片	細砂粒・褐(内面黒色)	72-C-5	R Lを施文する。
27	深鉢	胴部片	細砂粒 にぶい黄橙(断面黒色)	62-S-21	R Lを横位に施文後、浮線文を施し、刻み目を加える。
28	深鉢	胴部片	横線・橙(断面黒色)	62-Q-21	L Rを施文する。
29	深鉢	口縁部・胴部片	砂粒 にぶい橙(断面黒色)	62-O-23	液状口縁、横文面に刻目をもつ浮線文を施す。
30	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	72-R-6	断面突起、口唇部に浮線文、R Lを横位に施文後、浮線文を貼付し、横文を施す。
31	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐(断面黒色)	62-O-23 R-27	L Rを横位に施文後、浮線文を施し、刻み目を加える。増幅孔あり。
32	深鉢	口縁部片	細砂粒 にぶい黄橙(断面黒色)	62-O-23	R Lを横位に施文後、浮線文を施す。
33	深鉢	口縁部・胴部片	細砂粒・褐	72-C-3	口縁部は、浮線文に矢羽状刻目を施す。胴部片は、浮線文上に斜位刻目を施す。同一個体と思われる。
34	深鉢	口縁部片	砂粒・褐(断面黒色)	62-R-21	口縁部が「く」の字状に屈曲する。平行線により大組弧状文が施される。
35	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐(断面黒色)	62-Q-22	液状口縁、L Rを横位に施文後、浮線文を施し、刻み目を加える。
36	深鉢	胴部片	砂粒 にぶい橙(断面黒色)	62-R-21	R Lを横位に施文後、浮線文を施し、刻み目を加える。
37	深鉢	胴部片	砂粒・褐	62-P-23	連続弧形文により弧状文が構成される。連続弧形文間の隆帯上には刻み目を加える。
38	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	72-P-4	L Rを横位に施文する。連続弧形文が横走する。
39	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐	63-C-8	L R、R L横位による液状横文を施す。
40	深鉢	胴部片	砂粒・褐	62-R-23	連続弧形文間に刻目帯を施す。
41	深鉢	胴部片	砂粒・褐	62-O-23	R Lを横位に施文後、平行線により横走後、山形文が施される。
42	深鉢	底部片	砂粒・浅黄橙(内面黒色)	62-W-14	浮線文上に横文を施す。
43	深鉢	胴部片・底部片 口一底(17.0)高:-	砂粒・褐(断面黒色)	62-Q-22	へう状工具により、木葉状大組文が施される。
44	深鉢	口縁部片 口(23.2)底:-高:-	雲母片・にぶい黄橙	16号土坑	口縁部は隆帯で区画し、扇状把手を付す。区画内は結束沈線を横閉に配し、頸部は液状の横位沈線を施す。
45	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	63-A-17	口唇部に断面状の沈線を施し、文様を描き出す。
46	深鉢	口縁部片	雲母片・明褐	72-P-4	隆帯により横閉区画文を構成する。区画内は斜交文を充填する。
47	深鉢	胴部片	砂粒・褐	16号土坑	横位隆帯で区画し、横位の筋状沈線を充填する。
48	深鉢	底部片 口一底(13.4)高:-	雲母片・褐	10号土坑	残存部に限り無文。
49	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	63-A-16	沈線で区画し、区画内を円形刺突で充填する。
50	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	72-R-7	隆帯で区画文を構成し、区画内に沈線を配す。
51	台付鉢	唇部大穴 口10.8底:-高:-	輝石・明赤褐(内面黒色)	63-B-16	突起を削みある弧状の隆帯で繋ぐ。突起からは刻みある隆帯が垂下する。隆帯貼付後、沈線、刻みを施す。胴部大穴短。
52	深鉢	胴部・底部片 口一底9.7高:-	輝石・明褐(断面黒色)	72-Q-7	横位隆帯により3段の文様帯を構成する。4個の横閉(バネ)文を横位に配し、区画内は幅広連続斜交文を配す。中には連続斜交列による横閉文・山形文あるいは横閉文を配す。中段の区画内には隆帯に沿って幅広連続斜交文および4条の連続斜交列が巡らされる。
53	深鉢	口縁部片	白色粒・明黄褐	72-R-8	口縁部に横位の沈線を施す。半軟竹管状工具による平行沈線で区画し、区画内に三叉文を配す。
54	深鉢	突起片	雲母片・明褐	72-N-6	扇状突起。突起端部に弧状浮線文が施される。
55	深鉢	口縁部片	雲母片・にぶい橙	63-B-9	液状口縁。幅広の隆帯により半円形文が配られ、背が削まれた横位の隆帯と交わる。内面には横を有す。
56	深鉢	口縁部片	白色粒・明褐	72-S-6	口縁部が肥厚し、唇部に横位液状の隆帯文を付す。隆帯上には沈線を施す。
57	深鉢	口縁部片 口(25.0)底:-高:-	砂粒・褐	62-V-12	扇状突起・コイル状突起・隆帯を貼付する。隆帯の一部には刻みを有す。
58	深鉢	口縁部片	細砂粒・にぶい橙	48号土坑	液状口縁、沈線で円形文を派生させる。
59	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	63-A-16	残存部に限り無文。
60	深鉢	口縁部片	雲母片・白色粒・褐	88号土坑	口縁部に連続弧形文を施し、隆帯で画した文様部には連続筋状による横閉文を構成する。
61	深鉢	口縁部片	輝石・明褐	72-O-9	口縁が外転する。隆帯により円形文を派生させる。口縁・隆帯に沿って沈線を巡らし、三叉文が付きされる。
62	深鉢	口縁部・底部片	砂粒・明赤褐(内面黒色)	62-V-10	擦返しを施文とする。頸部に横位隆帯を配し、隆帯の背には沈線が施される。口縁部から頸部にかけて沈線によりS字文、円形文を配す。
63	浅鉢	口縁部片	雲母片・褐	175号土坑	隆帯により沈線を持つ弧状文を配し、赤彩が見られる。
64	浅鉢	口縁部片	雲母片・褐	169号土坑	口縁部に横位の隆帯・沈線を施し、さらに交互斜交文を配す。
65	浅鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	72-D-7	口唇部より2条の隆帯が垂下する。
66	浅鉢	口縁部片	石英・明赤褐	63-B-9	口唇部に貼付文を施す。以下に幅広連続斜交文・沈線を配す。
67	浅鉢	口縁部片	細砂粒・褐	72-S-7	口縁内外面が肥厚する。隆帯により口縁部区画文を施す。
68	浅鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐(断面黒色)	62-V-8	液状口縁、内面に横を有し、口唇部は肥厚する。
69	浅鉢	口縁部片	雲母片・暗褐	62-V-12	扇状口縁。半軟竹管状工具による横位の平行沈線を配し、その間には押し引き文を施す。内面には横を有し、半軟竹管状工具による平行沈線を施す。
70	浅鉢	口縁部片	石英・明赤褐	62-U-12	口縁が短く外転する。口唇部に刻目を加える。横走線文4条あり。縦位沈線を充填する横閉区画文を施す。
71	浅鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	175号土坑	斜位隆帯を貼付し、沈線を配す。赤彩あり。
72	浅鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	63-B-10	口唇部より2条の隆帯が垂下する。
73	浅鉢	口縁部片	雲母片・にぶい赤褐	72-P-0-6	隆帯により横閉区画文を構成する。隆帯上および区画内に連続筋状文を重層させる。
74	浅鉢	口縁部片	砂粒・暗褐	62-U-16	口縁に隆帯が巡り、円形文が加えられる。頸部に横文、状横文が施される。
75	浅鉢	口縁部片	砂粒・褐	62-R-21	口縁部に刻みを施した隆帯により区画文を構成する。区画内には沈線が施される。
76	浅鉢	口縁部片	細砂粒・褐	62-V-13	口縁部に隆帯による横閉区画文。区画内は押し引き文を施文する。
77	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	181号土坑	刻みを施した隆帯。
78	浅鉢	口縁部片	細砂粒・褐	63-A-10	横位隆帯、沈線、交互斜交文を配す。
79	浅鉢	口縁部片	砂粒・暗褐	165号土坑	円形孔を隆帯で巡らす。隆帯に沿って押し引き文を施す。口唇部把手。
80	浅鉢	口縁部片	輝石片・褐	63-B-16	口縁から連続削みを有す隆帯による増幅系下支。

81	深鉢	胴部片	小確・明赤褐	62-V-10	円形文及び弧状沈線文を施す。
82	深鉢	胴部片	砂粒・明褐 (内面黒色)	129号土塊	隆帯による円形区画文を構成。区画文からは2条の隆帯が伸びる。区画内は沈線文を施す。
83	深鉢	突起部	細砂粒・明赤褐	72-D-7	拠点しを縦位施文。
84	深鉢	胴部片	細砂粒輝石・明赤褐	72-R-4	頸部に横位隆帯を巡らす。横位隆帯から垂下する隆帯が派生し、区画文を構成する。区画内は半載竹管状工具による平行沈線と蓮華文が施される。
85	深鉢	胴部片	石英片・明赤褐	72-P-4	平行沈線、弧状沈線文を施す。
86	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐 (内面黒色)	63-A-14	口縁部に隆帯、交互斜突による円形文を配す。
87	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐 (内面黒色)	62-Y-12	背に沈線が施された隆帯を配す。施文はRし。
88	深鉢	胴部片	石英片・輝石	72-Q-7	隆帯貼付後、半載竹管状工具による平行沈線、連続爪形文、三角押文、三叉文。
89	深鉢	胴部片	黄緑、石英片・輝石 (内面黒色)	62-W-15	隆帯の隆帯と横円区画文が交わる部分に半載竹管状工具による平行沈線を施す。半載竹管状工具による平行沈線が隆帯に沿う。表面の風化が著しい。
90	深鉢	胴部片	雲母片・褐	30号土塊	平行沈線より半厚隆帯が派生。横位の短沈線文を付す。
91	深鉢	胴部片	輝石片・褐	62-X-20	隆帯により区画文を構成する。隆帯に沿って円形斜突が施される。
92	深鉢	胴部片	砂粒・暗褐	62-I-16	ヒザ状断面が認められる。
93	深鉢	胴部片	細砂粒・橙 (内面黒色)	63-A-16	背に沈線が施された隆帯縁面から派生した縦位隆帯によって区画文が構成される。
94	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	39号土塊	横位隆帯貼付後に縦位の沈線、押し引き文。
95	深鉢	胴部片	石英片・明赤褐	72-D-7	Rしを地文とし、半載竹管状工具による平行沈線を縦位、縦位に施す。
96	深鉢	胴部片	輝石片・黄褐	63-E-12	隆帯による三角の区画を作り中に沈線文を充填。
97	深鉢	胴部片	雲母片 にぶい褐 (内面黒色)	72-S-7	横位の隆帯を施した後、縦位、横位沈線を配す。
98	深鉢	胴部片	砂粒・褐 (内面黒色)	63-C-9	隆帯により区画文が構成される。区画内には斜突文が充填。隆帯間は沈線が施され、文様を描き出す。
99	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	63-D-10	頸部に背が剛まれた2条の隆帯と半円形文が配され、下端で横位の隆帯と交わる。
100	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	63-D-10	バツ先状斜突文を施す。
101	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐 (内面黒色)	72-R-4	L Rを横位に施した後、弧状沈線文を施す。
102	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	72-R-9	半載竹管状工具による隆帯上に刻目を施す。
103	深鉢	胴部片	石英片・明褐	129号土塊	垂下隆帯に伴行する沈線文。中央部に縦位斜突文。
104	深鉢	胴部片	石英片・橙	40号土塊	沈線により区画文を構成。区画内に斜位沈線を充填する。
105	深鉢	胴部片	砂粒 にぶい橙 (内面黒色)	78号土塊	半載竹管状工具による平行沈線。
106	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	39号土塊	縄文施文、沈線。
107	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	30号土塊	隆帯、沈線により区画。区画内は三叉文を施す。
108	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐 (内面黒色)	63-C-8	沈線間に連続斜突文。
109	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	63-C-8	平行線による弧状文、間に三叉文が加えられる。
110	深鉢	胴部片	細砂粒・にぶい橙	30号土塊	垂下隆帯に伴行する沈線文。
111	深鉢	胴部片	雲母片 明赤褐 (内面黒色)	63-C-10	Rしを地文とし、半載竹管状工具による平行沈線を縦位、縦位に施す。
112	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐 (内面黒色)	62-U-14	半載竹管状工具による平行沈線を施す。
113	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐 (内面黒色)	62-U-14	隆帯を渦巻状に配し、交点に沈線を施す。
114	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	50号土塊	半載竹管状工具による平行沈線。
115	深鉢	胴部片	細砂粒・暗褐	62-U-16	隆帯文下に平行線文が垂下する。
116	深鉢	胴部片	輝石片・橙	48号土塊	地文に横文Rし施文、3方向からの隆帯交点が突起状を呈す。下方へ延びる隆帯上に2本の沈線。
117	深鉢	胴部片	細砂粒 明赤褐 (内面黒色)	36号土塊	括れ部に横位沈線、隆帯文が垂下し、内側には交互斜突文が。
118	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	62-U-14	横位隆帯が派生、半載竹管状工具による縦位の平行沈線が施される。
119	深鉢	胴部片	雲母片 にぶい黄褐 (内面黒色)	62-Y-23	結節沈線文、弧状沈線文が施される。
120	深鉢	胴部片	雲母片 明赤褐 (内面黒色)	72-C-5	縦位、横位の沈線文を施す。
121	深鉢	胴部片	石英・明赤褐	89号土塊	上部に刻目をもつ隆帯が派生、胴部に拠点文(単輪縁帯)を施す。
122	深鉢	胴部片	砂粒・暗褐	129号土塊	半載竹管状工具による平行沈線、縄文は横文。
123	深鉢	胴部片	石英片、雲母片 明赤褐 (内面黒色)	62-U-16	横位の隆帯が垂下し、半載竹管状工具による平行沈線に沿って区画文を構成する。区画内は縄文施文。
124	深鉢	胴部片	輝石片 明赤褐 (内面黒色)	62-R-21	刻目を施した隆帯により区画文を構成する。区画内は沈線が施される。
125	深鉢	胴部片	砂粒・赤褐	62-U-16	隆帯上に短沈線を縦位に施す。
126	深鉢	胴部片	石英・にぶい褐	7号土塊	屈曲する胴部片、縄文L R施文。
127	深鉢	胴部片	砂粒・にぶい褐	129号土塊	地文に横文Rし施文、縦位隆帯上に斜突文。
128	深鉢	胴部片	砂粒・にぶい黄橙	62-R-20	横位の隆帯をもち出す。
129	深鉢	胴部片	砂粒・褐	129号土塊	横位の隆帯と交互斜突。縦位の沈線。
130	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	62-R-21	刻目を有した隆帯を配す。
131	深鉢	胴部片	砂粒・褐	62-Y-18	刻みある縦位隆帯を施した後、沈線で横円区画し縄文を充填する。
132	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	72-Q-5	Rしを地文とし、横位の沈線を施す。
133	深鉢	胴部片	砂粒・褐	129号土塊	横位隆帯、半載竹管状工具による平行沈線、押し引き文。
134	深鉢	胴部片	細砂粒・赤褐	129号土塊	L Rを縦位、横位沈線文が施される。
135	深鉢	胴部片	細砂粒・橙 (内面黒色)	63-C-6	縦位の隆帯、沈線、押し引き文。
136	深鉢	胴部片	輝石片・暗赤褐	72-T-6	横位隆帯文下に半載竹管状工具による半厚縦線文を施し、端部に連続爪形文を加える。
137	深鉢	胴部片	細砂粒・橙 (内面黒色)	72-P-4	沈線間に蓮華文を配す。
138	深鉢	口縁部片	雲母片・暗赤褐	62-Y-8	口縁に環状突起を有す。隆帯による円状垂下文を配し隆帯に沿って2から3本の沈線が通る。さらにその間には横位文、三叉文が沈線によって描かれる。
139	深鉢	胴部片	雲母片・褐	63-B-10	円形の隆帯文から放射状に隆帯が伸びる間に沈線文を交互斜突文が見られる。
140	深鉢	口縁部片	輝石片・褐	72-R-7	口縁部に突起文。表には3本の沈線、内面には縦位の隆帯が見られる。

141	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	63-A-9	隆帯による横S字文。
142	深鉢	口縁部・胴部片	雲母片・褐	62-Y9-10	口縁部に環状沈線。以下隆帯による円形文様を描き器面を沈線で埋める。
143	深鉢	口縁部片	砂粒・にぶい橙	62-Q-20	口縁下に柳袋のV字隆帯文。交点部は彫理。隆帯上交り方向の沈線を配し、口縁から隆帯に沿って三角に沈線。
144	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	72-S-4	口縁に沿うように走る隆帯間に複数の沈線が付けられる。
145	深鉢	胴部片	細砂粒・橙(内面黒色)	72-R-6	沈線文による文様構成。
146	深鉢	口縁部片	雲母片・にぶい褐	72-S-6	小波状口縁を呈す。波頂部に沈線による渦巻文。そこから延びた隆帯は口縁部区画文に繋がる。区画内に横位の沈線。
147	深鉢	口縁部片	雲母片・明褐	63-C-13	口縁下に付く突起上および下に沈線。
148	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	16号土坑	隆帯による曲線文。施文には沈線を施す。
149	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	62-U-13	口縁部表裏に円形の突起文。さらに斜めに延びた隆帯上にも円形文を持つ。施文は沈線で埋める。
150	深鉢	胴部片	雲母片・褐	63-C-9	隆帯隆帯および施文には沈線。
151	深鉢	胴部片	細砂粒・褐	62-U-12	曲線状突起を有す曲線文。施文沈線。
152	深鉢	口縁部片	雲母片・褐	63-U-15	口縁下に突起文。隆帯による垂す文様を描き施しには沈線文。突起文下位には刺突文が見られる。
153	深鉢	胴部片	細砂粒 にぶい褐(内面黒色)	72-R-7	横位隆帯下に渦巻状の隆帯文を配し、これに沿って沈線文様。
154	浅鉢	口縁部片	石英片・黄橙	63-B-14	口縁部は隆帯。沈線による区画。区画内は横文を充填する。
155	深鉢	口縁部片	輝石片・褐	62-W-13	外面は丁字窓文を施す。
156	深鉢	口縁部片	砂粒・褐	62-V-15	横位。縦位の沈線を配す。
157	深鉢	口縁部片	細砂粒・にぶい黄橙	63-B-8	口縁部に沈線。隆帯貼付後に沈線を施す。
158	深鉢	口縁部片	砂粒・明赤褐	62-X-8	横位に沈線を施す。
159	深鉢	胴部片	石英片・明褐	48号土坑	L R 横文施文。
160	台付鉢	台部片	輝石片・橙	63-A-9	横文施文後に不明瞭な横位沈線を施す。
161	深鉢	胴部片	細砂粒・明黄橙	63-B-14	横文施文後、前みを施した横位の隆帯を配す。
162	深鉢	胴部片	砂粒	62-U-14	横文施文後に沈線を垂下。
163	深鉢	胴部片	砂粒・暗褐	63-A-16	眉目をもつ隆帯文。沈線文を施す。
164	深鉢	口縁部片	白色小輝・明褐	16号土坑	口縁部に横位隆帯を貼付し、内面は半軟竹管状工具の背面による横位の押し引き沈線を施す。横位隆帯下に補修孔あり。
165	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	72-C-5	横文施文後に沈線を配す。
166	深鉢	胴部片	輝石片・暗赤褐	72-D-4	L R を施文する。
167	深鉢	胴部片	雲母片・にぶい褐	72-R-4	刺突を有す隆帯を貼付し、施文は横文。
168	深鉢	胴部片	雲母片・暗褐	72-T-7	L R を施文する。
169	深鉢	胴部片	雲母片・褐	72-T-7	隆帯および横文施文。
170	深鉢	胴部片	輝石片・褐	90号土坑	L R を横位に施文する。
171	深鉢	胴部片	少量の繊維・明赤褐	72-T-5	L R を縦位に施文する。
172	深鉢	底部 口一底(2.0)高--	雲母片・明褐	72-S-7	断面把手。口縁部に浮線文。L R を横位に施文後、浮線文を貼付し、横文を施す。
173	深鉢	底部片 口一底(10.0)高--	雲母片・石英片 にぶい褐	72-S-7	L R を縦位に施文する。
174	台付鉢	台部片	雲母片・橙	62-S-21	L R を縦位に施文する。円窓あり。
175	深鉢	胴部片	細砂粒・にぶい褐	62-U-12	縦位沈線および懸糸Lを施文する。
176	深鉢	胴部片	雲母片・明褐	72-R-7	L R を施文する。
177	深鉢	胴部・底部 口一底(102)高--	砂粒・にぶい黄橙	62-U-16	L R を縦位に施文する。
178	深鉢	胴部片	雲母片・赤褐	13号土坑	横位沈線多段施文下に縦位の懸糸Lを施文する。
179	深鉢	底部片	僅かな雲母片・橙	62-X-16	懸糸Rか。下部は無文。
180	深鉢	胴部片	輝石片・褐	62-W-15	胴部に横位の隆帯。以下懸糸Lを全面に施文する。
181	深鉢	胴部片	砂粒・褐	14号土坑	懸糸Lを縦位に施文する。
182	深鉢	胴部片	雲母片・褐	63-C-10	懸糸Lを縦位に施文する。
183	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	62-T-18	懸糸Rの縦位施文および横位の沈線を施す。
184	浅鉢	口縁部片	細砂粒・にぶい赤褐	63-B-8	口縁部僅かに段をもって彫理する。残存部に限り無文。
185	浅鉢	口縁部・底部片 口(17.0)底(8.2)高:(9.0)	砂粒・明褐(断面黒色)	62-W-12	器面に研磨を施す。残存部に限り無文。
186	浅鉢	口縁部片	砂粒・明褐	62-V-12	口縁部内側に頸状の平坦をなす。残存部に限り無文。
187	浅鉢	口縁部片	僅かな細砂粒・明赤褐	62-X-22	口縁部は凹面で見られ、やや彫理される。内面に赤影斑痕。
188	浅鉢	口縁部片	少量の細砂粒・明褐	62-R-21	口縁部は内湾し、内外面は研磨される。
189	浅鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	63-A-9	内面は有段で彫理。外面無文研磨される。
190	浅鉢	口縁部片	細砂粒・橙	62-X-17	無文口縁部。
191	浅鉢	口縁・肩部片 口(30.0)底--高--	多量の細砂粒・褐	62-U-15 V-15-16	口縁部がS字に屈曲する。無文で研磨される。
192	浅鉢	口縁部片 口(31.0)底--高--	細砂粒・赤褐	72-L-6	口縁部角面状を呈す。無文で研磨される。
193	浅鉢	口縁部片 口(26.0)底--高--	細砂粒・明赤褐	63-A-9	「く」の字に内湾する。器面は研磨される。
194	浅鉢	口縁部片 口(25.6)底--高--	砂粒・明赤褐	72-N-56	「く」の字に強く内湾する。口縁部に紡錘状文・鹿手状文を描く。器面は良く研磨されており、赤影斑が見られる。
195	浅鉢	口縁部片	砂粒・にぶい赤褐	72-C-5	口縁下に浅い凹面がある。丸みを持ち外面が研磨されている。
196	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	62-W-22	沈線による大小の鹿手文が交互に描かれる。上下2段階構成。また所々に斜めの沈線がある。
197	深鉢	口縁部片	細砂粒・明褐	63-A-11	やや湾す残存部に限り無文。器面はやや風化する。
198	深鉢	胴部片	僅かな砂粒 黄橙(断面黒色)	72-Y-4	8字文から左右に平行沈線が延び、その間を連続短沈線で埋める。
199	深鉢	胴部片	砂粒・明褐	63-B-17	沈線による曲線文様を描く。
200	深鉢	胴部片	多量の砂粒・明褐	62-X-7	器面の彫理が著しいが、浅い沈線が認められる。

201	深鉢	胴部片	細砂粒・橙	62-X-8	沈線による結線文。
202	深鉢	胴部片	細砂粒・にぶい黄橙	5691土豆	磨り滑し縄文。
203	深鉢	胴部片	砂粒・橙	72-E-5	L.Rを帯状に施し、弧状沈線文により区画される。
204	深鉢	胴部片	細砂粒・明褐	72-E-3	条線文上に浅い沈線による曲線文様を描く。
205	器台	胴部片	細砂粒・橙	62-X-10	断面弧状を呈す。
206	深鉢	胴部片	細砂粒・明黄褐	73-A-6	横位平行沈線による区画内にL.Rを施す。
207	深鉢	口縁部片	細砂粒・橙	629土豆	口縁下に3または4段の連続爪形文。以下に斜格子状の平行沈線、円形貼付文を配す。
208	深鉢	口縁部片	細砂粒・褐	73-A-6	口縁下に3または4段の連続爪形文。以下に斜格子状の平行沈線、円形貼付文を配す。
209	深鉢	胴部片	細砂粒・明赤褐	63-B-14	L.Rを横位に施す。
210	深鉢	胴部片	砂粒・明赤褐(内面黒色)	62-R-21	明赤文(単軸筋条体第1類)を施す。
211	深鉢	底部片	砂粒・小礫 赤褐(内面黒色)	62-V-14	厚手の底部片。器面の風化が著しい。
212	深鉢	底部片	口一底(120)高一	63-A-17	条線文を縦位に施す。
213	深鉢	底部片	口一底(60)高一	62-V-8	残存部に限り無文。器面の風化が著しい。
214	深鉢	底部片	口一底:7.0高一	62-V-10	縦位の条線か。
215	深鉢	底部片	白色粒 明赤褐(断面黒色)	62-T-13	接合面での剥離あり。
216	深鉢	底部片	細砂粒・橙 砂粒・明赤褐	72-Q-5	外面に磨きあり。
217	深鉢	底部片	口一底:140高一	63-B-9	大型底部片。残存部に限り無文。
218	台付鉢	台部片	石英片・明赤褐	72-C-5	底縁部に割り直しあり。
219	深鉢	口縁部・胴部片	砂粒・黄橙	63-A-17	口縁は横位筋条帯が回り以下は無文。口縁部は外反し、口縁端部は歯く(凹凸)を呈す。
220	深鉢	口縁部片	細砂粒・橙	62-N-25	浮線網状文を施す。

弥生土器観察表

弥生土器観察表 図 64 PL50

番号	器種名	残存	胎土	位置	器形及び文様の特徴	備考
1	壺	胴部片	石英の粗細砂多い	表採	2条の横沈線と上下を画し、横位の細密条線を地文とした上と下に3条沈線による斜線文を描く。上位の横沈線と無文部の境は小さな段状をなす。外面無文部は粗い磨き、内面は微小口による横位ナデ。	水式
2	浅鉢	口縁部片	チャート、白岩片等の粗細砂多い	72-A-2	口縁は丸く、直下に浅い二条凹線を廻らす。条線の粗い板状工具によるナデ。	
3	小型壺	ほぼ完形 口7.2底4.8 高11.7	赤色粒、白色岩片の粗細多い	72-M-5	磨面状具による縦位条線施文、胴部全体に磨面状具(4歯)で対称位二対の縦位波状文(磨れた陥没状文)を描く。無文部はナデ後研磨。内面は上位微ナデ、下平はへラ先ナデ。底面研磨。口縁に對面する一対の磨孔。	片面にまだらな黒痕。保付着無し。
4	壺	口縁部片	石英、白岩片の粗砂多い	62-R-21	口縁に小突起を付し、縄文帯(L.R)の下位に4条以上の横沈線を廻らす。突起部に向けて縦位短沈線を描く。内面は横研磨。	
5	壺	口縁部片	石英、白岩片、チャートの粗砂多い	72-D-4	口縁外面に浅い横位条線を施した後、一条沈線(幅4mm)を廻らす。頸部無文部と体部文様帯を画す一条の横沈線を廻らす。無文部研磨、内面は磨り後、口縁部ナデ→粗い研磨。	
6	壺	口縁部・胴部片	石英の粗細砂多い	72-D-4	口唇→口縁上端及び肩部に縄文(L.R)。これを地文として、肩に上下を横線で区画した三角連繫文を描く。頸部は短線による刻み。体部下平は浅い斜条線を施す。内面は横一斜位のへラナデ。	内面にオコグ痕がみられる。
7	壺	胴部片	石英粗細多い	62-U-20	口縁に一条沈線で区画した縄文帯を廻らす。頸部に縄文(L.R)を充填した方形文を横位に並列して描く。方形文中央に一条の横沈線。	
8	壺	胴部片	白岩片の粗砂多い	63-B-14	縄文(L.R)地文に、やや幅狭い横位沈線で文字状文や連繫文を描くと思われる。	
9	壺か壺	底部片 口一底: (14.2)高一	石英、白岩片、輝石の粗砂多い	73-A-6	端部が張り出す。底面に網代板(一越え一滑り)。内外面ナデ。	
10	深鉢	口縁部片	輝石含む粗細砂	62-N-25	口縁押圧による折痕し。外面に細か〜細密条線。内面ナデか。	

平安土器観察表

1号住居出土土器

図 06.67

PL51

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	須恵器 杯	1/3	口:(126) 底:5.8 高:4.0	甌	灰白 還元焰	墨書「凡」。底部右方向回転糸切り。
2	須恵器 杯	1/2	口:(130) 底:5.1 高:4.3	+21	甌 灰白 還元焰	墨書「凡」。底部右方向回転糸切り。
3	須恵器 杯	1/3	口:136 底:7.0 高:4.6	0	甌 浅黄橙 還元焰	口辺部横位ナデ。外面の広範囲が黒色。体部に重ね焼き痕あり。底部右回転糸切り。
4	須恵器 椀	1/3	口:(144) 底:(5.1) 高:5.3	+8	甌 灰白 還元焰	高台部横位ナデ。底部右回転糸切り。口縁部に歪みあり。
5	須恵器 椀	1/4	口:(142) 底:(6.6) 高:5.3	+21	甌 灰白 還元焰	高台部横位ナデ。底部右回転糸切り。
6	須恵器 杯	口縁部片	口:(120) 底:- 高:-	カマド	甌 浅黄橙 還元焰	内面の厚縁が著しい。
7	須恵器 椀	1/4	口:(140) 底:- 高:-	甌	土 におい黄橙 還元焰	口辺部横位ナデ。回転糸切り後、付け高台。高台部割れ口が確耗する。外面一部横位黒色ナ。
8	須恵器 杯	口縁部片	口:(170) 底:- 高:-	甌	土 黄灰 還元焰	口辺部横位ナデ。内面に自然輪が点状にかかる。
9	須恵器 鉢	完形	口:231 底:104 高:11.1	+5	甌 灰白 酸化焰	ロクロ整形。回転右回り。底部回転糸切り。高台貼付。体部下位は回転糸切り。
10	須恵器 椀	1/4	口:(208) 底:(5.0) 高:8.3	+3	甌 灰白 還元焰	口辺部薄く横位黒色あり。底部右回転糸切り痕。
11	土師器 甕	口縁部片	口:(124) 底:- 高:-	甌	土 におい赤褐 酸化焰	口縁部横位ナデ。頸部ナデ。胴部上位横位方向へのへり削り。コの字状。
12	土師器 甕	口縁部片	口:(180) 底:- 高:-	-4	甌 明赤褐 酸化焰	口縁部横位ナデ。頸部ナデ。胴部上位横位方向へのへり削り。コの字状。
13	土師器 甕	1/2	口:198 底:- 高:(24.0)	カマド	粗 橙 酸化焰	口縁部横位ナデ。頸部ナデ。胴部は下位から頸部へのへり削り。胴部上位1単位の横位方向へのへり削り。
14	土師器 甕	口縁部片	口:(21.0) 底:- 高:-	甌	土 浅黄橙 還元焰	口縁部横位ナデ。頸部ナデ。コの字状。
15	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(190) 底:- 高:-	+20	粗 灰白 還元焰	蹄は貼付。胴部は下位から蹄へ向けてのへり削り。
16	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(180) 底:- 高:-	甌	土 灰白 還元焰	蹄は貼付。胴部は下位から蹄へ向けてのへり削り。
17	須恵器 羽釜	口縁-胴部片	口:(21.0) 底:- 高:-	+28	粗 灰白 酸化焰	蹄は貼付。胴部は下位から蹄へ向けてのへり削り。
18	須恵器 羽釜	口胴底1/3	口:(21.4) 底:(7.8) 高:(31.0)	+28	粗 橙 酸化焰	蹄は貼付。胴部は下位から蹄へ向けてのへり削り。底部付近は横位方向へのへり削り。
19	須恵器 羽釜?	底部片	口:- 底:(7.6) 高:-	埋没土	粗 橙 還元焰	外面一部横位黒色。体部へのへり削り。底部へのへり調整。
20	須恵器 甕	口縁-胴部片	口:- 底:- 高:-	-1	甌 浅黄橙 還元焰	胴部は下位は横位方向へのへり削り。内面にアテ具痕が残る。

2号住居出土土器

図 08

PL52

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	灰輪陶器 皿	1/6	口:(130) 底:(7.8) 高:1.9	野蔵穴	甌 灰白 還元焰	体部下平回転へのへり削り。大塚2号須式期
2	灰輪陶器 椀	口縁部片	口:(130) 底:- 高:-	甌	土 におい黄橙 酸化焰	体部下平回転へのへり削り。大塚2号須式期
3	須恵器 椀	口縁部片	口:- 底:- 高:-	甌	土 におい黄橙 酸化焰	内面に「x」の細書。
4	土師器 甕	口縁部片	口:(180) 底:- 高:-	-2	粗 橙 酸化焰	口辺部横位ナデ。内外面一部横位黒色。内面にヘラナデ。

4号住居出土土器

図 70

PL52

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	須恵器 羽釜	1/2	口:(188) 底:7.0 高:(29.3)	+2	粗 灰白 還元焰	蹄は貼付。胴部は底部から蹄方向への縦方向へのへり削り。
2	須恵器 羽釜	1/2	口:174 底:7.3 高:30.1	-2	粗 灰白 還元焰	蹄は貼付。胴部は底部から蹄方向への縦方向へのへり削り。
3	須恵器 羽釜	1/2	口:(190) 底:(5.5) 高:23.5	0	粗 におい黄橙 酸化焰	蹄は貼付。胴部下半に底部へ向けてのへり削り。

5号住居出土土器

図 71

PL52

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	灰輪陶器 椀	1/2	口:(160) 底:8.2 高:4.7	+1	甌 におい黄	高台貼付。施釉方法は漬け掛け。大塚2号須式期。
2	須恵器 杯	1/4	口:(116) 底:5.4 高:4.1	-6	甌 におい黄橙 酸化焰	内外面一部黒色。口辺部に歪みあり。底部回転糸切り。
3	須恵器 杯	1/8	口:(120) 底:(6.0) 高:3.8	-3	甌 灰白 還元焰	底部右回転糸切り。一部横位黒色。
4	須恵器 椀	1/2	口:(144) 底:6.0 高:5.9	-2	粗 灰白 還元焰	底部右回転糸切り。一部横位黒色。
5	須恵器 椀	1/2	口:(146) 底:- 高:-	+1	甌 におい橙 酸化焰	外面一部黒色。内面黒色処理。高台剥落。内面はヘラ磨き。底面にx
6	須恵器 羽釜	底部片	口:- 底:(8.0) 高:-	-2	粗 灰白 還元焰	胴部は底部から蹄方向への縦方向へのへり削り。

6号住居出土土器

図 72

PL52

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	須恵器 杯	2/3	口:(142) 底:6.5 高:4.9	-2	甌 におい黄橙 酸化焰	底部右回転糸切り。
2	土師器 椀	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	+1	甌 におい黄橙 酸化焰	内面黒色処理。内面へラ磨き。

8号住居出土土器

図 75

PL52.53

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴
1	須恵器 椀	ほぼ完形	口:154 底:7.3 高:6.1	+1	粗 黄橙 酸化焰	墨書「長」。底部右方向回転糸切り。
2	須恵器 椀	口縁-底部	口:(140) 底:8.0 高:(5.6)	+3	粗 におい黄橙 酸化焰	下平半横位黒色状。底部右回転糸切り。

3	土師器 甕	1/2	口:108 底:- 高:-	-5	細	にぶい褐	酸化焙	口縁部・頸部は横ナデ、胴部は上半が横、下半が縦方向のへう割り、コの字状。
4	土師器 甕	上半部	口:(108) 底:- 高:-	+4	細	明褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部は上位が横、中位が縦方向のへう割り、コの字状。
5	土師器 甕	下半部	口:- 底:83 高:-	+2	粗	明褐	酸化焙	胴部は横ナデ、胴部下半は縦方向のへう割り。
6	土師器 甕	上半部	口:142 底:- 高:-	+9	細	明赤褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、頸部に指頸痕、胴部は上位が横、中位が縦方向のへう割り、コの字状。
7	土師器 甕	上半部	口:(150) 底:- 高:-	+1	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、頸部に指頸痕、胴部は上位が横、中位が縦方向のへう割り、コの字状。
8	土師器 甕	口縁部片	口:(184) 底:- 高:-	+1	細	明赤褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り、コの字状。
9	土師器 甕	口縁部片	口:(190) 底:- 高:-	+11	細	明赤褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り、コの字状。
10	土師器 甕	口縁部片	口:(210) 底:- 高:-	+11	細	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り、コの字状。
11	土師器 甕	口縁部片	口:(210) 底:- 高:-	-5	細	明褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り、コの字状。
12	土師器 甕	底部片	口:- 底:60 高:-	+17	粗	にぶい橙	酸化焙	胴部下半は底部に向けての縦方向へう割り。

9号住居出土土器

図 78

PL53

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴		
1	須恵器 杯	完形	口:137 底:70 高:40	+9	細 灰	還元焙	口辺部横位ナデ、補修跡あり。内外面にひたす模様。底部右回転糸切り。	
2	須恵器 碗	1/4	口:(140) 底:60 高:47	+39	細 灰白	還元焙	摩滅著しい。底部は回転糸切りか。	
3	須恵器 碗	口縁部片	口:(150) 底:- 高:-	+21	細	にぶい黄褐	酸化焙	口クロ整形、磨面下束。
4	須恵器 杯	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	+19	細	にぶい黄褐	酸化焙	口クロ整形、内外面磨し状黒色。
5	須恵器 碗	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	+5	細	浅黄	酸化焙	底部右回転糸切り。一部厚塗。
6	須恵器 碗	下半部	口:- 底:70 高:-	-9	粗	にぶい黄褐	酸化焙	底部右回転糸切り高台は貼付。
7	須恵器 壺	底部片	口:- 底:92 高:-	+36	細	褐灰	還元焙	口クロ整形、高台は貼付。胴部下位に回転へう割り。
8	土師器 甕	上半部	口:210 底:- 高:-	+8	細	にぶい黄褐	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部は上位が横、中位が縦方向のへう割り。
9	土師器 甕	口縁部片	口:(200) 底:- 高:-	+13	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、頸部に指頸痕、胴部は上位が横方向のへう割り。
10	土師器 甕	口縁部片	口:(200) 底:- 高:-	+22	細	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。
11	土師器 甕	口縁部片	口:(200) 底:- 高:-	+3	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、頸部に指頸痕、胴部は上位が横方向のへう割り。
12	土師器 甕	口縁部片	口:(210) 底:- 高:-	+1	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、頸部に指頸痕、胴部は上位が横方向のへう割り。
13	土師器 甕	口縁部片	口:(200) 底:- 高:-	+13	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。
14	土師器 甕	口縁部片	口:(120) 底:- 高:-	+4	粗	にぶい橙	酸化焙	口クロ整形。
15	土師器 甕	1/2	口:140 底:7.6 高:14.6	-1	細	灰黄褐	酸化焙	口縁部横ナデ。胴部上・下位は横方向へう割り、中位は縦方向へう割り。内面黒色。
16	土師器 甕	底部片	口:- 底:1.9 高:-	+7	細	にぶい橙	酸化焙	胴部下半は底部に向けての縦方向へう割り。
17	土師器 甕	底部片	口:- 底:3.6 高:-	+14	粗	橙	酸化焙	胴部下半は底部に向けての縦方向へう割り。
18	土師器 甕	下半部	口:- 底:3.6 高:-	+2	粗	橙	酸化焙	胴部下半は底部に向けての縦方向へう割り。外面に保付着。

11号住居出土土器

図 79

PL53

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴		
1	土師器 甕	口縁部片	口:(190) 底:- 高:-	+5	細	明赤褐	酸化焙	口縁部に輪轆み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。
2	土師器 甕	口縁部片	口:(200) 底:- 高:-	カマド	粗	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。
3	土師器 甕	口縁部片	口:(190) 底:- 高:-	+8	細	橙	酸化焙	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。
4	土師器 甕	底部片	口:- 底:4.1 高:-	覆土	粗	橙	酸化焙	胴部下位は底部に向けての縦方向へう割り。
5	土師器 甕	底部片	口:- 底:3.5 高:-	カマド	細	明黄褐	酸化焙	胴部下位は底部に向けての縦方向へう割り。

12号住居出土土器

図 81

PL54

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴		
1	灰輪陶器 皿	1/3	口:(150) 底:7.4 高:3.3	覆土 書	灰黄	還元焙	体部下位は回転へう割り。大原2号室式。	
2	須恵器 杯	底部片	口:- 底:(7.2) 高:-	+2	細	灰白	還元焙	底部右回転糸切り。
3	須恵器 碗	口縁部片	口:13.5 底:7.5 高:5.3	+2	細	浅黄	酸化焙	底部右回転糸切り。高台部に凹みあり。
4	須恵器 羽蓋	上半部片	口:(16.4) 底:- 高:-	+4	粗	灰黄	還元焙	踵は貼付。胴部は底部から踵方向への縦方向へう割り。
5	須恵器 甕	口縁・胴部片	口:(17.0) 底:- 高:-	覆土	細	灰	還元焙	口クロ整形、外面に保付着。

13号住居出土土器 図 85.86

PL54

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴	
1	灰輪陶器 椀	1/2	口: (16.5) 底: 8.9 高: 5.8	-6	赤灰	還元焰	施釉方法は直け掛け、大塚2号窯式期。
2	灰輪陶器 椀	3/4	口: (16.6) 底: 9.2 高: 5.3	-8	粗 灰白	還元焰	施釉方法は直け掛け、大塚2号窯式期。
3	灰輪陶器 椀	口縁部片	口: (16.0) 底: - 高: -	+1	赤灰	還元焰	施釉方法は直け掛け、大塚2号窯式期。
4	灰輪陶器 椀	胴部	口: - 底: 8.2 高: -	-1	粗 灰白	還元焰	施釉方法は直け掛け、大塚2号窯式期。
5	灰輪陶器 長頸壺	胴部	口: - 底: - 高: -	0	赤灰	還元焰	大塚2号窯式期。
6	須恵器 杯	3/4	口: (11.7) 底: 6.1 高: 3.2	-1	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。内外面黒く拭き黒色。
7	須恵器 杯	3/4 (台部分)	口: (15.4) 底: - 高: -	-9	粗 灰白	還元焰	内外面黒色処理、口縁部整形。口縁部から体部は放射状へつなぎ。
8	須恵器 杯?	口縁部片	口: (13.0) 底: - 高: -	カマド	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。
9	須恵器 椀	口縁部片	口: (14.0) 底: - 高: -	+5	粗 灰白	還元焰	体部に粘土埋めあり。
10	須恵器 椀	1/2	口: (17.2) 底: 8.3 高: 6.5	+1	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
11	須恵器 椀	1/2 (台部分)	口: (16.3) 底: - 高: -	-3	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
12	須恵器 杯	1/2	口: (14.8) 底: 7.0 高: 3.2	-6	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。口縁部から体部に向けてのへつ削り調整、広口。
13	須恵器 杯	口縁部片	口: (13.0) 底: - 高: -	-5	粗 灰白	還元焰	口縁部整形、広口。
14	須恵器 羽釜	口縁部片	口: (14.2) 底: - 高: -	-13	粗 灰白	還元焰	脚は貼付、胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り。
15	須恵器 羽釜	2/3	口: (16.8) 底: (8.0) 高: (26.5)	カマド	粗 灰白	還元焰	脚は貼付、胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り。
16	須恵器 羽釜	口縁部片	口: (15.8) 底: - 高: -	-8	粗 灰白	還元焰	脚は貼付、胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り。
17	須恵器 羽釜	口縁部片	口: (16.0) 底: - 高: -	-12	粗 灰白	還元焰	脚は貼付、胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り。
18	須恵器 羽釜	上半部	口: (16.0) 底: - 高: -	-6	粗 灰白	還元焰	脚は貼付、胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り。
19	須恵器 羽釜?	底部片	口: - 底: - 高: -	-4	粗 灰白	還元焰	胴部は底部から上方への縦方向へつ削り、底部付近は横方向へつ削り。
20	須恵器 羽釜	下半部	口: - 底: 7.8 高: -	+1	粗 灰白	還元焰	胴部は底部から脚方向への縦方向へつ削り、底部付近は横方向へつ削り。
21	須恵器 羽釜?	底部片	口: - 底: (7.0) 高: -	-6	粗 灰白	還元焰	胴部は底部から上方への縦方向へつ削り。
22	須恵器 羽釜?	底部片	口: - 底: (9.0) 高: -	+4	粗 灰白	還元焰	胴部中位は底部から上方への縦方向へつ削り、下位は横方向へつ削り。
23	須恵器 壺	口縁部片	口: - 底: - 高: -	覆土	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。

14号住居出土土器 図 88

PL55

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴	
1	須恵器 椀	ほぼ完整	口: (14.1) 底: 7.0 高: 5.8	0	粗 灰白	還元焰	内面に重ね焼き痕、底部は回転糸切り、高台は貼付。
2	須恵器 椀	1/2	口: (14.6) 底: 8.2 高: 5.9	カマド	粗 灰白	還元焰	口縁部整形、回転糸切り。底部は回転糸切り、高台は貼付。
3	須恵器 椀	1/4	口: (13.6) 底: (6.4) 高: 4.9	-1	粗 灰白	還元焰	内外面一部黒く拭き黒色。
4	須恵器 壺	胴部-底部片	口: - 底: (15.6) 高: -	カマド	粗 灰白	還元焰	胴部下位はへつ削り。

15号住居出土土器 図 89

PL55

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴	
1	須恵器 杯?	口縁部片	口: (12.0) 底: - 高: -	覆土	粗 灰白	還元焰	外面体部に黒着、片説不可。
2	土師器 土釜	1/6	口: (28.0) 底: (19.0) 高: 30.6	+5	粗 明赤褐	還元焰	口縁部横ナデ、胴部上・中位は縦、下位は横方向へのへつ削り。

16号住居出土土器 図 90

PL55

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴	
1	須恵器 杯	3/4	口: (12.8) 底: 5.8 高: 4.8	+10	粗 灰白	還元焰	黒着「丸」。底部右回転糸切り。
2	須恵器 杯	1/4	口: (13.8) 底: 5.8 高: 4.4	+4	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
3	須恵器 杯	1/4	口: (13.0) 底: 5.6 高: 4.8	+9	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
4	須恵器 杯	下半部	口: - 底: 5.5 高: -	+16	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
5	須恵器 杯	底部片	口: - 底: (4.7) 高: -	+13	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。
6	須恵器 椀	ほぼ完整	口: (14.1) 底: - 高: -	0	粗 灰白	還元焰	口縁部整形、回転糸切り。底部は回転糸切り、高台は貼付、欠損後磨り削いて高さを調整か。
7	須恵器 杯	口縁部片	口: (12.3) 底: - 高: -	+13	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。
8	土師器 壺	口縁部片	口: (19.0) 底: - 高: -	+12	粗 明赤褐	還元焰	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向へのへつ削り、コの字状。
9	土師器 壺	口縁部片	口: (18.0) 底: - 高: -	+12	粗 明赤褐	還元焰	口縁部は横ナデ、胴部は指頭直、胴部は上位が横方向へのへつ削り、コの字状。
10	土師器 壺	口縁部片	口: (21.0) 底: - 高: -	+12	粗 明赤褐	還元焰	口縁部は横ナデ、胴部上位は横方向へのへつ削り、コの字状。
11	土師器 壺	底部片	口: - 底: (4.8) 高: -	-5	粗 灰白	還元焰	胴部下位は底部に向けての縦方向へのへつ削り、コの字状。
12	須恵器 壺	口縁部片	口: - 底: - 高: -	+18	粗 灰白	還元焰	口縁部整形。

22号住居出土土器 図 94

PL55.56

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・焼成	整形の特徴	
1	須恵器 椀	完整	口: (14.6) 底: 6.4 高: 6.0	+3	粗 灰白	還元焰	黒着「小」。底部右回転糸切り。
2	須恵器 椀	1/2	口: (14.0) 底: 6.0 高: 5.6	-10	粗 灰白	還元焰	内外面一部黒く拭き黒色。
3	須恵器 椀	1/2	口: (13.8) 底: - 高: -	+1	粗 灰白	還元焰	内外面一部黒く拭き黒色。
4	須恵器 椀	1/4	口: (13.0) 底: 6.6 高: 5.6	+2	粗 灰白	還元焰	底部右回転糸切り。
5	須恵器 椀	1/3	口: (15.0) 底: - 高: -	+18	粗 灰白	還元焰	内外面黒く拭き黒色、底部右回転糸切り。

6	須恵器 椀	1/6	口:(134) 底:- 高:-	-10	細	浅黄	酸化窑	底部回転糸切り。
7	須恵器 杯?	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	+3	細	灰黄	還元窑	口クロ整形。
8	須恵器 椀 底部	口:- 底:6.6 高:-	+2	細	灰黄	還元窑	底部右回転糸切り。	
9	須恵器 椀 底部部	口:- 底:(6.0) 高:-	-6	細	灰白	還元窑	底部回転糸切り。	
10	須恵器 椀 底部部片	口:- 底:(6.8) 高:-	-3	細	にぶい黄橙	酸化窑	底部回転糸切り。	
11	土師器 甕	口縁・底部片	口:174 底:100 高:17.5		粗	粗	酸化窑	口クロ整形、胴部下半は斜め方向へのヘラ削り。
12	土師器 甕	口縁・胴部片	口:(220) 底:- 高:-		カマド	粗	酸化窑	口縁部横ナデ、胴部は下位から胴部への2-3段の縦方向へのヘラ削り、広口。
13	土師器 甕	口縁部片	口:200 底:- 高:-	+2	細	粗	酸化窑	口縁部横ナデ、胴部は下位から胴部へ縦方向へのヘラ削り。
14	須恵器 甕 胴部・底部片	口:- 底:(18.6) 高:-		カマド	細	灰白	還元窑	外面に格子目状の叩き痕。

30号住居出土土器

図 95

PL56

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・装束	整形の特徴		
1	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(19.2) 底:- 高:-		粗	灰土	還元窑	口クロ整形、跗は貼付。
2	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(21.4) 底:- 高:-	+22	粗	浅黄橙	酸化窑	口クロ整形、跗は貼付。
3	甕	底縁部片	口:- 底:(18.0) 高:-	+26	粗	浅黄橙	酸化窑	胴部下位は縦方向へのヘラ削り。
4	須恵器 羽釜 胴部	外径:3.5 内径:2.7 高:3.4		+6	細	灰黄	還元窑	胴部ヘラナデ。

遺構外出土土器

図 119,120

PL56,57

番号	器種名	残存	計測値 (cm)	位置	胎土・色調・装束	整形の特徴			
1	杯?	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	表採	赤	暗灰黄	酸化窑	緑釉。	
2	灰輪陶器 甕	口縁部片	口:(134) 底:- 高:-	63-F-12	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。	
3	灰輪陶器 椀	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	72-P.5 72-X.6	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。	
4	灰輪陶器 甕 1/4	口:(17.6) 底:(7.8) 高:3.8	63-B-15	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
5	灰輪陶器 甕 1/10	口:(18.2) 底:(8.0) 高:4.0	63-B-15	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
6	灰輪陶器 椀 残形	口:13.8 底:6.8 高:4.7	63-E-12	赤	灰黄	還元窑	大塚2号窯式期。		
7	灰輪陶器 椀 口縁部片	口:(14.4) 底:- 高:-	63-E-13	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
8	灰輪陶器 椀 口縁部片	口:(13.3) 底:- 高:-	63-E-12	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
9	灰輪陶器 椀 口縁部片	口:(18.0) 底:- 高:-	62-Y.8	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
10	灰輪陶器 椀 口縁部片	口:(16.0) 底:- 高:-	63-E-12	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
11	灰輪陶器 椀 口縁部片	口:(16.0) 底:- 高:-	63-E-12	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
12	灰輪陶器 椀 底部片	口:- 底:(9.0) 高:-	62-Y.8	赤	灰黄	還元窑	光ヶ丘1号窯式期か。		
13	灰輪陶器 椀 底部片	口:- 底:(8.6) 高:-	63-X.9	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
14	灰輪陶器 椀 底部	口:- 底:(7.6 高:-)	62-X-14	赤	にぶい黄	還元窑	大塚2号窯式期。		
15	灰輪陶器 椀 底部片	口:- 底:(6.2) 高:-	63-A.9	赤	灰白	還元窑	大塚2号窯式期。		
16	灰輪陶器 長頸甕	口縁部片	口:(118) 底:- 高:-	63-E-12	赤	灰白	還元窑	窯式期不明。	
17	須恵器 杯?	口縁部片	口:130 底:- 高:-	63-E-12 63-B-7	細	にぶい黄橙	酸化窑	内外面黒色処理。外里平行へラ磨き、内里平行後放射状の磨き。	
18	須恵器 椀?	口縁部片	口:(120) 底:- 高:-	63-A-21	細	粗	酸化窑	内面黒色処理。横方向凹状へラ磨き。	
19	須恵器 椀?	口縁部片	口:14.6 底:- 高:-	62-Y.9	細	にぶい黄	酸化窑	内面黒色、へラ磨き。	
20	須恵器 椀 底部部	口:- 底:6.0 高:-	63-F-12	細	にぶい黄橙	酸化窑	内面黒色処理。放射状へラ磨き。		
21	須恵器 椀 1/3	口:- 底:7.2 高:-	62-S-22	細	粗	酸化窑	内里放射状へラ磨き。回転糸切り。		
22	須恵器 杯 底部片	口:- 底:(5.6) 高:-	62-Y.9	細	灰白	還元窑	底部右回転糸切り。		
23	須恵器 杯 底部	口:- 底:6.6 高:-	63-B-11	細	灰白	還元窑	底部右回転糸切り。		
24	須恵器 椀 3/4	口:14.8 底:8.0 高:5.5	63-A-21	細	にぶい黄橙	酸化窑	底部右回転糸切り。		
25	須恵器 杯?	口縁部片	口:(15.0) 底:- 高:-	72-D.4	細	灰白	還元窑	口クロ整形。	
26	須恵器 杯?	口縁部片	口:(140) 底:- 高:-	63-F-12	細	にぶい黄橙	酸化窑	口クロ整形。	
27	須恵器 椀?	1/4	口:(120) 底:(6.3) 高:5.5	63-E-12	粗	灰	還元窑	口クロ整形、高台貼付。	
28	須恵器 椀?	口縁部片	口:(120) 底:- 高:-	62-U-16	細	黄灰	還元窑	口クロ整形。	
29	須恵器 椀 底部片	口:- 底:(8.0) 高:-	62-Y.9	細	黄灰	還元窑	底部右回転糸切り、内面底部平滑。		
30	須恵器 椀 底部部	口:- 底:(8.6) 高:-	62-Y-21	細	にぶい黄	酸化窑	底部右回転糸切り。		
31	須恵器 椀 底部	口:- 底:6.5 高:-	63-E-12	細	灰黄橙	還元窑	底部右回転糸切り、内面に重ね磨き。		
32	須恵器 椀 底部	口:- 底:6.4 高:-	63-F-12	細	灰黄橙	還元窑	底部回転糸切り、高台は貼付。		
33	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(16.0) 底:- 高:-	63-E-12	粗	にぶい黄橙	酸化窑	跗は貼付、胴部は底部から踵方向への縦方向へのヘラ削り。	
34	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(16.0) 底:- 高:-	63-E-12	粗	にぶい黄橙	酸化窑	跗は貼付、胴部は底部から踵方向への縦方向へのヘラ削り。	
35	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(15.4) 底:- 高:-	62-W.8	粗	にぶい黄橙	酸化窑	跗は貼付、胴部は底部から踵方向への縦方向へのヘラ削り。	
36	須恵器 羽釜	口縁部片	口:(190) 底:- 高:-	62-R-23	粗	浅黄	酸化窑	跗は貼付、胴部は底部から踵方向への縦方向へのヘラ削り。	
37	須恵器 羽釜?	口縁部片	口:(240) 底:- 高:-		表採	粗	明赤褐	酸化窑	口クロ整形、跗は貼付。
38	甕	口縁部片	口:(13.5) 底:- 高:-	63-E-12 63-B-7	細	浅黄橙	還元窑	口クロ整形、広口。	
39	甕	口縁部片	口:(12.4) 底:- 高:-	63-E-12	細	灰白	酸化窑	口縁部横ナデ、胴部縦方向へのヘラ削り。	
40	土師器 甕	口縁部片	口:(11.3) 底:- 高:-	63-E-12	細	にぶい黄橙	酸化窑	口クロ整形。	
41	土師器 甕	口縁部片	口:(17.4) 底:- 高:-	63-E-12	細	にぶい黄	酸化窑	口縁部横ナデ、胴部縦方向へのヘラ削り。	
42	土師器 甕	上半部片	口:(240) 底:- 高:-	62-U-16 62-V-16	粗	粗	酸化窑	口縁部横ナデ、胴部はへラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
43	灰輪陶器 子付椀	把手	口:- 底:- 高:-	63-E-12	赤	灰黄褐	還元窑	窯式期不明。	
44	須恵器 甕	胴部片	口:- 底:- 高:-	63-F-12	細	にぶい黄橙	酸化窑	胴部平行叩き痕、内面ヘラナデ。	

45	須恵器 甕?	胴部片	口:- 底:- 高:-	63-F-12	瀬 灰陽	還元焼	口口修整。
46	須恵器 甕?	胴部片	口:- 底:- 高:-	72-M-3	瀬 灰陽	還元焼	胴部に平行明き痕。
47	須恵器 甕	口縁-胴部片	口:- 底:- 高:-	63-E-13	瀬 灰	還元焼	胴部外面は平行明き痕。
48	須恵器 甕	胴部片	口:- 底:- 高:-	62-Y-8	瀬 黄灰	還元焼	口口修整。
49	63-E器 甕	胴部-底部片	口:- 底:(204) 高:-	62-F-12	瀬 灰白	還元焼	胴部外面は格子目状明き痕。
50	須恵器 甕	口縁-底部片	口:- 底:- 高:-	63-F-12	瀬 灰白	還元焼	胴部外面に平行明き痕。
51	内耳	底部片	口:- 底:(240) 高:-	63-B-25	瀬 橙	酸化焼	底部砂痕。

陶器観察表

1号土坑出土陶器

図 125

PL58

器種	残存	計測値	出土位置	生産地帯	備考
陶器 徳利	3/4 (口縁欠)	口:- 底: 80 高:-	1号墓坑 胴部上辺	制作地不詳	青釉、外面口口目で「イフ〇ヤ」釘書き。底部外面にも層号の黒書「5内に不明な揮毫、その下に川嶋屋」とある。底部付近はうるし継ぎ。19世紀中～後、胎土は密で、断面色調は灰白。

金属器観察表

金属器-羽口 観察表 図 67,71,78,90,95,118,125 ~ 127,130 PL52 ~ 60

遺構名-番号	器種名	残存	計測値 (長さ・厚さ・幅 cm)	重さ (g)	出土位置	備考
1号住居-21	刀子	完形	長:126 厚:- 幅:17	126	覆土	錆化著しい。鋒幅が0.5cm。研ぎ減りしているが、鋒まで残る。茎との境で折れる。茎には木目が付着する。
1号住居-22	釘か	完形	長:3.8 厚:- 幅:2.3	6.3	覆土	錆化著しい。頂部に方形を呈した角釘か。先端部は胴部からの加圧による曲がりか。
1号住居-23	不明	破片	長:4.3 厚:- 幅:1.4	6.4	覆土	錆化著しい。径0.6cmの孔が穿たれる。その部分の厚さは0.2cmで、中央部0.6cmを測り、先端部に向かい再び薄くなる。
1号住居-24	塞	—	長:13.2 厚:0.5 幅:1.2	29.2	覆土	錆化著しい。縦やかに反り、先端は尖る。断面は長方形を呈す。割れには歪れ折れた痕跡を示す。
5号住居-7	刀子	ほぼ完形	長:131 厚:- 幅:17	135	覆土	錆化著しい。鋒幅が0.4cmを測る。研ぎ減りしているが、鋒まで残る。刃部末縁を折れる。
9号住居-19	羽口	1/3	孔径:2.3 長:9.9 幅:8.2	400.0	覆土	8点接合。孔径2.3cmを測る。9号住居-20との接合点は見いだせないが、同一個体の可能性が高い。
9号住居-20	羽口	2/3	孔径:2.1 長:17.0 幅:8.4	900.0	覆土	2点接合。孔径2.1cmを測る。端部に鋒跡が付く。
9号住居-21	不明	1/2	長:2.8 厚:- 幅:0.5	1.2	覆土	錆化著しい。端部を上げ0.5×0.3cmの楕円孔をつくる。穴担断面では円形の空洞が認められる。
9号住居-22	鎌	ほぼ完形	長:19.5 厚:- 幅:5.1	222.9	覆土	錆化著しい。鋒の厚さ0.8cmを測る。刃の末縁部を折り曲げる。
16号住居-13	釘	3/4	長:14.6 厚:- 幅:0.8	12.8	覆土	3点接合。錆化著しい。角釘で断面に不定形の空洞が認められる。
16号住居-14	不明	破片	長:5.3 厚:- 幅:0.8	2.5	覆土	2点接合。錆化著しい。0.2×0.3cmの方形の空洞が認められる。
30号住居-5	不明	破片	長:6.2 厚:1.85 幅:7.1	114.4	覆土	3点が付着する。錆化著しい。
39号土坑-1	鉄皿か	—	長:6.8 厚:0.5 幅:0.6	9.0	覆土	錆化著しい。
106号土坑-1	鎌	ほぼ完形	長:9.5 厚:0.5 幅:4.0	34.9	覆土	錆化著しい。鋒の厚さ0.2cmを測る。刃の末縁部を折り曲げる。
2号土坑-3	釘	1/2	長:3.4 厚:0.5 幅:0.6	1.4	覆土	角釘。錆化著しい。
2号土坑-4	釘	完形	長:4.8 厚:0.4 幅:0.6	2.1	覆土	角釘。錆化著しい。
2号土坑-5	煙管雁首	完形	長:5.4 吸口寄り径:0.8	5.0	覆土	火置は若干潰れ、その長径は1.4cmを測る。羅字が残存する。銅製。
2号土坑-5	煙管吸口	完形	長:1.1 雁首寄り径:0.9	4.0	覆土	吸い口部における径は0.4cmを測る。羅字が残存する。銅製。
2号土坑-6	煙管雁首	完形	長:1.3 吸口寄り径:1.1	8.8	覆土	火置は若干潰れ、その長径は2.0cmを測る。羅字が残り残存する。銅製。
2号土坑-6	煙管吸口	完形	長:1.1 雁首寄り径:1.1	11.2	覆土	雁首よりの形状は六角形を呈す。吸い口部における径は0.5cmを測る。羅字が残存する。銅製。
53土坑-4	煙管雁首	完形	長:1.5 吸口寄り径:1.1	6.6	覆土	火置は一部破損、その長径は2.2cmを測る。羅字が残存する。銅製。
53土坑-4	煙管吸口	完形	長:1.1 雁首寄り径:1.1	8.7	覆土	吸い口部における径は0.3cmを測る。羅字が残存する。銅製。
53土坑-5	刀子か	1/2	長:8.5 厚:- 幅:1.7	12.0	覆土	錆化著しい。鋒幅が0.2cm。鋒先端が欠損し、刃部は端部で折れる。
8号土坑-1	煙管雁首	完形	長:1.2 吸口寄り径:0.9	6.9	覆土	火置はほぼ円形で、その径は1.9cmを測る。銅製。
8号土坑-2	煙管雁首	完形	長:1.2 吸口寄り径:0.9	6.9	覆土	火置は若干潰れ、その長径は1.9cmを測る。羅字が残存する。銅製。
8号土坑-3	煙管吸口	完形	長:1.6 雁首寄り径:0.9	3.4	覆土	雁首よりの接合部が一部剥離する。吸い口部における径は0.3cmを測る。羅字が残存する。銅製。
9号土坑-5	釘	破片	長:4.1 厚:0.8 幅:0.5	1.4	覆土	角釘。錆化著しい。
11号土坑-4	釘	完形	長:2.4 厚:0.9 幅:1.6	1.7	覆土	角釘。木片付着。
11号土坑-5	釘	完形	長:4.6 厚:0.7 幅:2.2	2.4	覆土	角釘。木片付着。
11号土坑-6	釘	完形	長:4.7 厚:0.5 幅:0.6	1.8	覆土	角釘。錆化著しい。
11号土坑-7	煙管吸口	完形	長:1.3 雁首寄り径:0.9	10.9	覆土	吸い口部における径は0.5cmを測る。羅字が残存する。銅製。
12号土坑-8	釘	3/4	長:2.9 厚:0.6 幅:0.5	1.3	覆土	角釘。錆化著しい。

遺構外-3	煙管雁首	定形	長:49	吸口寄り径:09	130	表採	火置はほぼ円形で、その径は1.1cmを測る。跡字が残存する。曲製。
遺構外-4	不明	ほぼ定形	長:40	厚:0.6	幅:3.8	153	72-X-4 段具か。
遺構外-5	不明	—	長:4.6	厚:0.3	幅:2.9	40	72-N-4 鉄燗部か。
遺構外-6	不明	—	長:4.5	厚:1.0	幅:1.0	193	10号トレンチ 鉄先燗部か。
遺構外-7	不明	ほぼ定形	長:6.8	厚:0.5	幅:4.5	69	9.5号トレンチ 燗か。
遺構外-8	不明	—	長:120	厚:1.5	幅:2.1	77.5	表採 段具か。
遺構外-9	釘	3/4	長:11.3	厚:0.7	幅:1.3	56.4	10号トレンチ 先燗部欠損。燗部を折り曲げる。錆化著しい。

銭計測値表

銭 観察表 図 125～127 PL58～60

遺構名-番号	銭径		銭厚	孔径		目目	備考
	(縦×横)	内径 (縦×横)		(縦×横)	裏 (縦×横)		
22号土坑-1	2.4×2.4	1.95×1.95	0.12	表 0.6×0.6 裏 0.7×0.65	14.7	寛永通宝、一部欠損。5枚重なり。	
22号土坑-2	2.5×2.5	2×2	0.10	0.6×0.6	3.2	寛永通宝、定形。	
51号土坑-1	2.3×2.3	1.8×1.8	0.10	0.6×0.6	9.9	寛永通宝、定形。4枚重なり。	
51号土坑-2	2.35×2.4	1.8×1.7	0.10	0.6×0.65	19.8	不明、一部欠損。7枚重なり。	
51号土坑-3	2.3×2.3	1.9×1.9	0.10	0.65×0.65	2.0	寛永通宝、ほぼ定形。	
52号土坑-1	2.4×2.4	2×1.9	0.10	0.6×0.6	2.1	寛永通宝、定形。	
52号土坑-2	2.45×2.45	1.95×1.95	0.10	0.6×0.6	2.4	寛永通宝、定形。	
52号土坑-3	2.45×2.45	1.95×1.95	0.12	0.6×0.6	3.7	寛永通宝、定形。	
52号土坑-4	2.45×2.45	1.95×1.95	0.10	0.6×0.6	2.2	寛永通宝、ほぼ定形。	
52号土坑-5	2.3×2.3	1.9×1.9	0.10	0.6×0.65	1.6	寛永通宝、ほぼ定形。	
53号土坑-1	2.3×2.3	2.0×2.0	0.10	0.7×0.7	1.6	寛永通宝、定形。	
53号土坑-2	2.5×2.5	2.0×2.0	0.10	0.6×0.6	3.2	寛永通宝、ほぼ定形。背面に「文」。	
53号土坑-3	2.4×2.4	2.0×2.0	0.12	0.6×0.6	17.2	寛永通宝、定形。5枚重なり、鋼鐵付着。	
4号土坑-1	2.3×2.3	2.0×2.0	0.10	表 0.7×0.7 裏 0.6×0.6	20.8	寛永通宝、定形。7枚重なり。	
6号土坑-1	2.3×2.3	1.8×1.8	0.10	0.6×0.6	2.5	寛永通宝、ほぼ定形。	
6号土坑-2	2.3×2.3	1.8×1.8	0.10	0.6×0.6	20.1	不明、一部欠損。7または8枚重なり。	
7号土坑-1	2.5×2.5	2.0×2.0	0.10	0.6×0.6	3.5	寛永通宝、ほぼ定形。背面に「文」。	
7号土坑-2	2.3×2.3	1.9×1.9	0.10	表 0.65×0.65 裏 0.6×0.55	4.3	寛永通宝、ほぼ定形。2枚重なり。	
7号土坑-3	2.25×2.25	1.7×1.7	0.10	0.6×0.6	11.6	寛永通宝、定形。5枚重なり。	
81号土坑-4	2.15×2.15	1.8×1.8	0.10	0.65×0.65	1.9	寛永通宝、定形。	
9号土坑-1	2.4×2.4	1.85×1.9	0.10	0.6×0.6	5.5	寛永通宝、定形。2枚重なり。	
9号土坑-2	2.45×2.45	1.95×1.95	0.10	0.6×0.6	3.2	寛永通宝、定形。	
9号土坑-3	2.25×2.25	1.75×1.75	0.08	0.65×0.65	1.7	寛永通宝、定形。背面に「元」「・」。	
9号土坑-4	2.25×2.25	1.85×1.85	0.05	0.7×0.7	1.6	寛永通宝、定形。	
11号土坑-1	2.3×2.3	1.9×1.85	0.08	0.65×0.6	2.6	寛永通宝、定形。	
11号土坑-2	2.4×2.4	1.95×1.95	0.08	0.6×0.6	2.8	寛永通宝、ほぼ定形。	
11号土坑-3	2.3×2.3	1.85×1.85	0.08	0.6×0.6	2.4	寛永通宝、定形。	
12号土坑-1	2.4×2.4	1.90×1.90	0.10	0.6×0.6	3.6	寛永通宝、定形。別個体の一部重なり。	
12号土坑-2	2.4×2.4	1.9×1.9	0.10	0.6×0.6	3.3	寛永通宝、ほぼ定形。	
12号土坑-3	2.3×2.35	1.9×1.9	0.10	0.6×0.6	2.5	寛永通宝か、ほぼ定形。布付着。	
12号土坑-4	2.3×2.3	1.8×1.85	0.05	0.65×0.65	1.4	寛永通宝、ほぼ定形。	
12号土坑-5	2.3×-	1.8×-	0.08	0.65×0.65	1.3	不明、3/4。	
12号土坑-6	2.2×2.2	1.7×1.7	0.08	0.6×0.6	2.3	寛永通宝か、ほぼ定形。	
12号土坑-7	2.25×2.25	1.75×1.75	0.10	0.6×0.6	9.3	寛永通宝、定形。3枚重なり。	
20号土坑-1	2.45×2.45	1.95×1.95	0.10	0.6×0.6	3.0	寛永通宝、定形。	
20号土坑-2	2.4×2.4	1.9×1.9	0.10	0.6×0.6	3.1	寛永通宝、ほぼ定形。	
20号土坑-3	2.3×2.3	1.85×1.85	0.10	0.65×0.65	13.3	寛永通宝、定形。5枚重なり。	
遺構外-1	2.45×2.45	2×1.95	0.10	0.6×0.6	3.1	寛永通宝、定形。	
遺構外-2	2.3×2.3	1.8×2.3	0.08	0.6×-	1.1	寛永通宝、3/4。	

石器観察表

3号住居出土石器 図 17 PL33

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
24	石核	完形	長:5.3 厚:3.7 幅:8.2	154.3	+3	黒曜石	片面作業面、割片素材。
25	打製石斧	完形	長:8.3 厚:1.1 幅:4.4	49.5	0	黒色頁岩	磨研。頭部欠損。

7号住居出土石器 図 18 PL33

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
10	打製石斧	刃部片	長:3.1 厚:1.2 幅:3.7	26.1	+20	紫雲玄武岩	刃部のみ。磨製跡。
11	たたく石	1/2	長:(6.9) 厚:3.1 幅:3.2	89.0	+14	粗粒輝石安山岩	棒状、1頭敲打。

10号住居出土石器 図 22 PL34

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
21	石皿	1/4	長:18.9 厚:7.7 幅:16.0	2500.0	0	粗粒輝石安山岩	表・裏面側多孔石再利用。
22	石皿	完形	長:36.0 厚:10.4 幅:21.2	14900.0	+7	粗粒輝石安山岩	磨製無し、浅く広い擦り面。
23	割片	完形	長:2.6 厚:0.6 幅:2.1	2.1	+21	黒曜石	

18号住居出土石器 図 26 PL35

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
40	打製石核	完形	長:1.7 厚:0.3 幅:1.2	0.5	+20	黒色安山岩	B類。
41	打製石核	片脚部欠	長:1.7 厚:0.35 幅:(1.0)	0.5	覆土	黒曜石	B類。
42	打製石核	片脚部欠	長:(3.0) 厚:0.3 幅:1.95	1.2	覆土	チャート	B類。
43	石腕	完形	長:3.9 厚:0.7 幅:4.9	10.7	+2	黒色安山岩	横長割片素材、横型、精製。
44	打製石斧	ほぼ完形	長:10.5 厚:1.1 幅:4.3	94.5	覆土	紫雲玄武岩	短冊形。
45	打製石斧	頭部片	長:3.3 厚:1.6 幅:4.4	35.6	+2	紫雲玄武岩	短冊形。頭部のみ。
46	打製石斧	完形	長:12.0 厚:1.0 幅:3.9	73.3	覆土	砂岩	短冊形。1頭欠損。
47	すり石	完形	長:14.7 厚:5.0 幅:9.0	1007.0	+3	石英閃緑岩	2面、1頭敲打。
48	たたく石	完形	長:8.1 厚:3.0 幅:4.7	161.0	覆土	粗粒輝石安山岩	1頭敲打。
49	たたく石	完形	長:11.9 厚:4.3 幅:6.1	520.0	+12	粗粒輝石安山岩	2面1縁、磨痕あり。
50	くぼみ石	完形	長:11.7 厚:4.5 幅:7.0	500.0	+9	粗粒輝石安山岩	1穴2面。

24号住居出土石器 図 28 PL36

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
29	くぼみ石	完形	長:10.2 厚:4.5 幅:7.8	471.2	覆土	粗粒輝石安山岩	1穴2面。
30	加工	完形	長:2.2 厚:0.5 幅:1.9	1.5	覆土	赤碧玉	一側加工。

26号住居出土石器 図 30 PL36

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
11	打製石核	完形	長:1.90 厚:0.40 幅:1.60	0.9	+12	珩質頁岩	A類。

28号住居出土石器 図 34 PL37

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
27	打製石核	片脚部欠	長:2.20 厚:0.30 幅:(1.10)	0.6	一括	黒色安山岩	B類。
28	打製石核	先端部欠	長:1.90 厚:0.35 幅:1.60	1.1	覆土	黒色頁岩	B類。
29	石核	完形	長:5.8 厚:3.05 幅:6.8	89.7	覆土	黒色安山岩	両面周縁。
30	すり石	完形	長:10.5 厚:6.3 幅:8.2	785.0	ピット8	紫雲安山岩	円縁扁平、1面。
31	すり石	完形	長:13.7 厚:5.2 幅:11.4	1083.0	+15	粗粒輝石安山岩	円縁、1面。
32	くぼみ石	完形	長:12.0 厚:3.9 幅:7.4	315.4	+11	粗粒輝石安山岩	2穴2面。
33	磨製石斧	完形	長:5.5 厚:0.9 幅:1.9	16.3	+17	紫雲玄武岩	小型。
34	すり石	完形	長:8.5 厚:9.2 幅:10.0	308.7	+10	デイスサイト	両端欠損?石核の再利用?。

31号住居出土石器 図 43 PL41

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
94	打製石核	完形	長:2.45 厚:0.30 幅:1.40	0.9	覆土	黒曜石	1類。
95	打製石核	完形	長:1.65 厚:1.30 幅:0.35	0.6	埋蔵+34	黒曜石	1類。
96	打製石核	先端部欠	長:(1.55) 厚:(0.40) 幅:1.50	0.6	覆土	黒曜石	1類。
97	前部	完形	長:5.2 厚:1.15 幅:3.6	15.8	+5	黒色安山岩	磨研、2辺。
98	前部	完形	長:2.45 厚:0.8 幅:3.4	5.3	覆土	珩質頁岩	磨研、?2辺。
99	石核	完形	長:5.6 厚:3.3 幅:7.2	110.7	覆土	紫雲安山岩	両面周縁。
100	石腕	完形	長:5.2 厚:0.7 幅:5.25	19.7	+14	黒色頁岩	横長割片素材、横型、精製。
101	打製石斧	ほぼ完形	長:9.3 厚:2.1 幅:4.1	95.3	+36	紫雲玄武岩	短冊形。再調整。
102	打製石斧	1/2	長:(8.8) 厚:2.2 幅:5.4	125.4	+17	紫雲玄武岩	短冊形。刃部欠損。
103	打製石斧	1/2	長:(7.3) 厚:1.8 幅:4.8	82.6	土器内	粗粒輝石安山岩	磨研。刃部欠損。
104	打製石斧	ほぼ完形	長:9.6 厚:1.4 幅:4.6	105.0	+20	紫雲玄武岩	短冊形。刃部磨耗。
105	打製石斧	1/2	長:7.50 厚:1.6 幅:5.5	96.6	+32	紫雲玄武岩	短冊形。刃部欠損。
106	打製石斧	完形	長:18.0 厚:1.6 幅:6.8	233.0	0	粗粒輝石安山岩	磨研。
107	打製石斧	刃部のみ	長:(5.5) 厚:1.9 幅:7.0	86.2	覆土	紫雲玄武岩	刃部のみ。増長跡。
108	打製石斧	刃部のみ	長:18.0 厚:1.6 幅:6.8	233.0	+36	紫雲玄武岩	短冊形。刃部磨耗。
109	打製石斧	完形	長:26.0 厚:2.5 幅:10.0	941.7	0	紫雲玄武岩	大型。磨研。石腕?。
110	すり石	完形	長:7.7 厚:3.2 幅:5.7	213.0	+14	粗粒輝石安山岩	2面すり。
111	たたく石	完形	長:11.6 厚:2.9 幅:7.4	280.0	+40	デイスサイト質緑閃岩	1頭。
112	くぼみ石	完形	長:10.9 厚:5.1 幅:8.7	678.3	+28	粗粒輝石安山岩	2面くぼみすり。
113	くぼみ石	完形	長:12.1 厚:5.0 幅:8.7	756.8	覆土	粗粒輝石安山岩	2面1縁。

34号住居出土石器 図 45 PL41

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
4	打製石斧	完形	長:14.0 厚:1.8 幅:6.7	229.5	+7	粗粒輝石安山岩	磨研。

36号住居出土石器 図49 PL42-43

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
38	打製石鏃	完形	長:1.85 厚:0.35 幅:1.40	0.6		黒曜石	B類。
39	打製石斧	完形	長:10.3 厚:1.5 幅:4.4	99.6		粗粒輝石安山岩	粗面形。刃部磨耗。
40	磨製石斧	1/2	長:8.2 厚:1.2 幅:6.1	78.4		黒色頁岩	砥状。
41	たたく石	完形	長:18.0 厚:3.6 幅:7.1	550.0	+16	粗粒輝石安山岩	1面。
42	石皿	1/2	長:20.6 厚:4.1 幅:25.3	3750.0	床直上	粗粒輝石安山岩	欠損後、多孔石転用。

1号埋設出土石器 図50 PL43

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
1	打製石鏃	片断欠損	長:1.65 厚:0.3 幅:1.10	0.4	周辺	黒曜石	B類。

98号土坑出土石器 図52 PL43

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
2	石皿	1/3	長:23.7 厚:1.1 幅:14.5	2400.0	0	緑色片岩	磨り面磨耗。

187号土坑出土石器 図52 PL43

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
1	石皿	完形	長:29.0 厚:4.6 幅:14.5	3050.0		黒曜石	表面個多孔石再利用。

遺構外出土石器 図60～63 PL48～50

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
221	打製石鏃	片断部欠	長:2.15 厚:0.4 幅:1.35	0.8	62X-10	黒曜石	B類。
222	打製石鏃	完形	長:2.15 厚:0.55 幅:1.50	1.1	72S-5	黒曜石	B類。
223	打製石鏃	完形	長:2.15 厚:0.45 幅:1.3	0.9	63A-8	黒曜石	B類。
224	打製石鏃	完形	長:2.2 厚:0.5 幅:1.2	0.9	72S-7	黒曜石	B類。
225	打製石鏃	片断部欠	長:2.10 厚:0.40 幅:1.35	1.1	72A-5	黒曜石	B類。
226	打製石鏃	片断部欠	長:1.75 厚:0.3 幅:1.40	0.6	72A-4	黒曜石	B類。
227	打製石鏃	完形	長:1.6 厚:0.2 幅:1.4	0.3	62W-8	黒曜石	B類。
228	石鏃?	完形	長:2.25 厚:0.4 幅:1.15	1.1	72R-5	黒曜石	打製石鏃の未製品?
229	打製石鏃	ほぼ完形	長:1.55 厚:0.25 幅:1.05	0.5	9号住居	黒曜石	B類。
230	打製石鏃	先端部欠	長:1.7 厚:0.4 幅:1.35	0.8	72D-5	黒曜石	B類。
231	打製石鏃	4/5	長:1.7 厚:0.5 幅:1.65	1.7	62U-14	黒曜石	B類。先端・片断欠損。
232	打製石鏃	完形	長:1.45 厚:0.35 幅:1.6	0.6	表様	黒曜石	A類。
233	打製石鏃	完形	長:3.1 厚:0.35 幅:1.15	1.0	62X-19	珪化凝灰岩	有孔(有蓋)。
234	打製石鏃	完形	長:3.25 厚:0.45 幅:1.55	1.6	63A-23	チャート	B類。
235	打製石鏃	完形	長:2.7 厚:0.35 幅:2.05	1.2	63A-24	チャート	B類。
236	打製石鏃	完形	長:1.3 厚:0.2 幅:1.0	0.2	63B-13	黒曜石	B類。
237	打製石鏃	先端部欠	長:1.9 厚:0.3 幅:1.65	0.3	1号住居	黒曜石	B類。
238	打製石鏃	完形	長:2.0 厚:0.45 幅:1.25	0.8	62S-21	黑色安山岩	A類。
239	打製石鏃	完形	長:2.1 厚:0.55 幅:1.25	1.7	63A-9	黒曜石	B類。未製品?
240	打製石鏃	先端部欠	長:1.7 厚:0.4 幅:1.6	0.9	72B-4	チャート	B類。
241	打製石鏃	完形	長:1.85 厚:0.4 幅:1.4	0.8	63A-9	珪質頁岩	A類。
242	打製石鏃	片断部欠	長:2.35 厚:0.3 幅:1.65	0.8	62Q-22	黒曜石	B類。
243	打製石鏃	片断部欠	長:2.9 厚:0.3 幅:0.9	0.6	62X-10	黒曜石	B類。割片面残存。
244	打製石鏃	完形	長:2.5 厚:0.45 幅:1.35	1.4	72R-5	赤曜石	B類。
245	打製石鏃	完形	長:2.7 厚:0.45 幅:1.40	0.9	4号住居	珪化凝灰岩	A類。
246	打製石鏃	先端部欠	長:1.6 厚:1.5 幅:0.4	0.9	62V-11	黒曜石	B類。
247	打製石鏃	完形	長:1.7 厚:0.35 幅:1.3	0.6	72D-7	チャート	A類。
248	打製石鏃	完形	長:1.55 厚:0.4 幅:1.3	0.7	62W-8	チャート	A類。
249	磨製石斧	1/2	長:7.6 厚:2.7 幅:4.5	111.0	21号土坑	家玄武岩	完形?。刃部欠損。
250	前鋸	完形	長:5.0 厚:0.8 幅:1.8	12.3	62X-8	珪質頁岩	細長。刃部磨耗。
251	磨製石斧	1/4	長:7.7 厚:2.5 幅:4.7	145.7	62X-10	家玄武岩	完形?。刃部欠損。
252	磨製石斧	1/3	長:16.0 厚:3.0 幅:5.6	368.3	62R-19	家玄武岩	完形?。刃部欠損。
253	前鋸	完形	長:4.6 厚:5.0 幅:0.9	25.7	62Y-9	珪質頁岩	石尻状。細長。粗製。
254	前鋸	完形	長:4.2 厚:1.3 幅:6.4	32.0	63A-12	珪質頁岩	B類。
255	前鋸	完形	長:13.9 厚:4.0 幅:7.7	464.0	140号土坑	粗粒輝石安山岩	大欠。細長。粗製。
256	前鋸	完形	長:4.7 厚:1.35 幅:7.4	46.2	72A-2	黒色頁岩	細長。1面。
257	前鋸	完形	長:5.0 厚:0.8 幅:1.8	12.3	62U-15	乾砂岩	小形。
258	前鋸	完形	長:2.6 厚:0.95 幅:2.5	5.2	63A-9	珪質凝灰岩	細粒石鏃。
259	打製石斧	1/2	長:(3.3) 厚:1.5 幅:4.8	30.4	63A-9	家玄武岩	細粒。刃部磨耗。頭部欠損。
260	磨製石斧	破片	長:8.0 厚:0.8 幅:2.2	192.9	93号土坑	家玄武岩	小破片につき詳細不明。
261	磨製石斧	2/3	長:11.1 厚:3.3 幅:5.4	294.9	72A-2	家玄武岩	孔棒状?。刃部欠損。
262	打製石斧	1/2	長:7.8 厚:1.6 幅:4.7	75.6	93号土坑	粗粒輝石安山岩	粗面形。刃部欠損。
263	打製石斧	完形	長:11.1 厚:2.1 幅:7.7	182.6	28号土坑	黒色頁岩	細粒。刃部磨耗顕著。
264	打製石斧	4/5	長:9.2 厚:0.8 幅:3.7	40.6	63C-8	粗粒輝石安山岩	細粒。刃部・頭部欠損。
265	打製石斧	2/3	長:8.1 厚:1.6 幅:6.8	137.0	63B-8	家玄武岩	細粒。頭部欠損。
266	打製石斧	完形	長:9.3 厚:1.6 幅:4.7	94.8	62U-16	家玄武岩	細粒。表面残存。
267	打製石斧	3/4	長:9.2 厚:1.0 幅:6.4	57.8	141号土坑	家玄武岩	細粒。頭部欠損。
268	打製石斧	完形	長:12.0 厚:2.3 幅:5.4	150.0	62U-13	粗粒輝石安山岩	粗面形。刃部磨耗。
269	打製石斧	完形	長:11.6 厚:1.5 幅:4.1	104.9	62V-10	黒色頁岩	粗面形。刃部磨耗顕著。
270	たたく石	完形	長:13.3 厚:4.7 幅:9.1	855.0	63C-A-8	凝灰質砂岩	2面1縁。
271	たたく石	完形	長:10.9 厚:6.2 幅:13.0	1195.6	13号住居	粗粒輝石安山岩	2面1縁。
272	くぼみ石	完形	長:11.2 厚:4.2 幅:8.7	64.3	16号住居	粗粒輝石安山岩	2面1縁。
273	たたく石	完形	長:11.9 厚:2.8 幅:11.4	578.0	63B-16	粗粒輝石安山岩	円筒扁平。2面。
274	くぼみ石	完形	長:9.2 厚:4.0 幅:4.9	288.4	62Q-22	家玄武岩	2面。
275	たたく石	完形	長:16.0 厚:4.4 幅:4.8	475.0	51号土坑	粗粒輝石安山岩	1面1縁。
276	たたく石	完形	長:10.5 厚:6.2 幅:9.4	836.0	93号土坑	粗粒輝石安山岩	1面1縁。

277	たたき石	完形	長:6.8 厚:4.4 幅:6.6	245.0	63-A-7	粗粒輝石安山岩	2面周縁。
278	くほみ石	1/2	長:(7.5) 厚:3.2 幅:6.3	222.3	63-G-3	粗粒輝石安山岩	2面, 2欠損。
279	たたき石	完形	長:13.7 厚:4.4 幅:4.4	318.0	72-R-6	実質安山岩	1面1縁。
280	たたき石	完形	長:14.5 厚:3.2 幅:7.5	448.0	72-S-7	実質安山岩	棒状, 2面。
281	くほみ石	完形	長:11.5 厚:7.2 幅:4.0	507.8	88号土塊	粗粒輝石安山岩	2欠, 2面。
282	たたき石	ほぼ完形	長:10.3 厚:4.3 幅:6.9	435.0	59号土塊	石英閃緑岩	1面。
283	たたき石	完形	長:10.7 厚:3.6 幅:7.2	435.0	4号住居	粗粒輝石安山岩	1面2端縁打。
284	たたき石	完形	長:9.3 厚:3.85 幅:6.4	293.0	4号住居	粗粒輝石安山岩	2端縁打。
285	すり石	2/3	長:(10.9) 厚:4.55 幅:8.6	685.0	72-S-6	粗粒輝石安山岩	2面, 一端欠損。
286	たたき石	完形	長:12.6 厚:6.8 幅:8.5	568.0	62-R-22	粗粒輝石安山岩	周縁。
287	たたき石	完形	長:8.4 厚:2.5 幅:5.1	162.0	72-D-4	粗粒輝石安山岩	1面。
288	くほみ石	完形	長:10.4 厚:3.2 幅:7.0	272.3	63-T-15	粗粒輝石安山岩	2面, 2欠。
289	すり石	ほぼ完形	長:9.4 厚:3.6 幅:4.1	242.0	61号土塊	粗粒輝石安山岩	2面。
290	くほみ石	1/2	長:(7.6) 厚:3.7 幅:8.3	333.6	63-A-9	粗粒輝石安山岩	2面2孔, 欠損。
291	たたき石	ほぼ完形	長:9.3 厚:3.7 幅:7.0	298.0	4号住居	粗粒輝石安山岩	1面2端縁打。
292	すり石	完形	長:11.3 厚:8.0 幅:10.5	1350.0	134号土塊	実質安山岩	2面。
293	すり石	完形	長:4.7 厚:1.7 幅:3.0	37.6	9号住居	粗粒輝石安山岩	磨き石。
294	たたき石	1/2	長:6.4 厚:3.3 幅:7.0	200.0	15号住居	粗粒輝石安山岩	1面?
295	たたき石	3/4	長:(10.0) 厚:4.3 幅:5.45	388.0	122号土塊	粗粒輝石安山岩	1面。
296	たたき石	完形	長:10.0 厚:2.9 幅:4.7	157.0	72-Q-5	粗粒輝石安山岩	2面周縁。
297	たたき石	完形	長:(8.0) 厚:4.7 幅:(4.8)	235.0	62-W-20	粗粒輝石安山岩	2面。
298	砥石	1/2	長:(4.0) 厚:1.3 幅:4.4	30.2	186号土塊	砂岩	扁平, 2ホと3ホ, 欠損。
299	砥石	1/2	長:(18.6) 厚:4.0 幅:17.0	2300.0	11号住居	粗粒輝石安山岩	欠損, 摩滅顕著。

1号住居出土石器 図67 PL51

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
25	紡錘車	1/2	外径:5.1 内径:1.0 厚:2.1	41.9	+96	珪質頁岩	上下面に擦り痕。
26	たたき石	完形	長:15.8 厚:5.6 幅:6.5	798.0	+3	粗粒輝石安山岩	1面2端。
27	台石	完形	長:32.9 厚:9.8 幅:33.1	17500.0		覆土	粗粒輝石安山岩

11号住居出土石器 図79 PL53

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
6	砥石	1/2	長:7.1 厚:1.8 幅:4.5	94.9	+6	砥沢石	4面。

16号住居出土石器 図90 PL55

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
15	砥石	1/2	長:14.6 厚:8.1 幅:8.3	995.0		カマド	粗粒輝石安山岩

40号土坑出土石器 図118 PL56

番号	器種名	残存	計測値(長さ・厚さ・幅)(cm)	重さ(g)	位置	石材名	特徴
1	砥石	1/2	長:4.1 厚:0.9 幅:3.2	23.5		覆土	砥沢石

写 真 图 版



1. 道路遠望(対岸から)



2. 調査区全景(南西から)



3. 調査区全景(北東から)



4. A区全景(北西から)



5. B区全景(南西から)



6. C区全景(南から)



7. 旧石器試掘トレンチ(南から)



8. 2次調査部分(西から)



1. 3号住居遺物出土状態(南から)



2. 3号住居床炭化範囲(東から)



3. 3号住居炉全景(南から)



4. 3号住居炉掘り方断面(南から)



5. 7号住居遺物出土状態(南から)



6. 7号住居全景(南から)



7. 10号住居断面(北西から)



8. 10号住居北側全景(北東から)



1. 10号住居南側遺物出土状態



2. 10号住居全景(南東から)



3. 10号住居炉全景(南東から)



4. 10号住居掘り方全景(北西から)



5. 18号住居断面(北東から)



6. 18号住居遺物出土状態



7. 18号住居全景(南東から)



8. 18号住居炉全景(南東から)



1. 24号住居遺物出土状態



2. 24号住居断面(北東から)



3. 26号住居遺物出土状態



4. 26号住居全景(南東から)



5. 26号住居掘り方断面



6. 28号住居断面(南西から)



7. 28号住居遺物出土状態



8. 28号住居作業風景



1. 28号住居ピット7断面



2. 28号住居全景(南東から)



3. 28号住居石囲い施設



4. 28号住居炉全景



5. 28号住居掘り方全景(南東から)



6. 28号住居の玉石



7. 31号住居断面(南西から)



8. 31号住居遺物出土状態(1)



1. 31号住居遺物近接(1)



2. 31号住居遺物近接(2)



3. 31号住居遺物出土状態(2)



4. 31号住居全景(南東から)



5. 31号住居炉全景(南東から)



6. 34号住居遺物出土状態



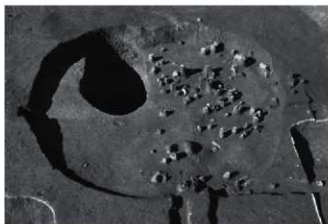
7. 34号住居全景(南東から)



8. 34号住居炉断面(北東から)



1. 34号住居炉全景(南東から)



2. 36号住居上面遺物出土状態



3. 36号住居遺物出土状態(南東から)



4. 36号住居全景(南東から)



5. 36号住居炉全景(南東から)



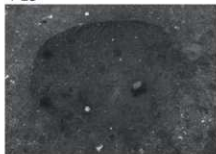
6. 1号埋設土器No.1断面(南から)



7. 2号埋設土器No.1全景(南から)



8. 3号埋設土器No.1断面(南から)



1. 82号土坑遺物出土状態



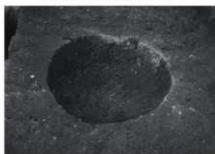
2. 81号土坑遺物出土状態



3. 98号土坑遺物出土状態



4. 101号土坑全景(南から)



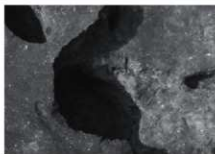
5. 176号土坑全景(南東から)



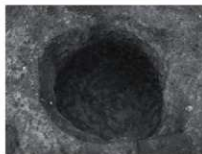
6. 187号土坑全景(南東から)



7. 102号土坑全景・断面



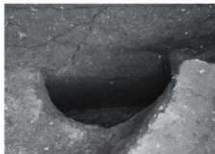
8. 109号土坑全景・断面



9. 170号土坑全景・断面



10. 188号土坑全景・断面



11. 190号土坑全景・断面



12. 191号土坑全景・断面





1. 1号住居遺物出土状態(西から)



2. 1号住居陥廃棄状態



3. 1号住居遺物出土状態



4. 1号住居全景(西から)



5. 1号住居カマド全景



6. 1号住居カマド掘り方断面



7. 2号住居、10号土坑断面(南から)



8. 2号住居遺物出土状態(南から)



1. 2号住居全景(南から)



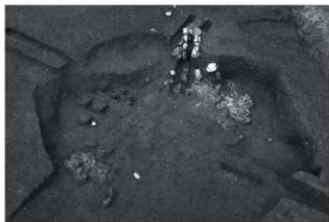
2. 2号住居カマド断面(南から)



3. 4号住居断面(南東から)



4. 4号住居遺物出土状態(南から)



5. 4号住居全景(南から)



6. 4号住居カマド(南から)



7. 5号住居検出状態(南東から)



8. 5号住居カマド全景



1. 5号住居カマドと52号土坑断面



2. 5号住居と47号土坑の新旧関係



3. 5号住居カマド遺物出土状態



4. 5号住居掘り方全景(南東から)



5. 6号住居断面(東から)



6. 6号住居全景(南から)



7. 6号住居と40号土坑の新旧関係



8. 6号住居貯蔵穴断面



1. 6号住居カマド全景(西から)



2. 8号住居全景(南西から)



3. 8号住居カマド遺物出土状態



4. 8号住居カマド全景(南西から)



5. 8号住居貯蔵穴全景(南西から)



6. 8号住居掘り方全景(南西から)



7. 9号住居遺物出土状態



8. 9号住居遺物出土状態(No19・20羽口)



1. 9号住居遺物出土状態(№22録)



2. 9号住居カマド部材崩落状態



3. 9号住居カマド全景(南西から)



4. 9号住居貯蔵穴遺物出土状態



5. 11号住居遺物出土状態



6. 11号住居カマド遺物出土状態



7. 11号住居カマド前遺物出土状態



8. 11号住居床断面



1. 11号住居掘り方全景(北西から)



2. 12号住居遺物出土状態



3. 12号住居全景(南西から)



4. 12号住居カマド遺物出土状態



5. 12号住居カマド全景(南西から)



6. 13号住居遺物出土状態



7. 13号住居炭化材出土状態



8. 13号住居全景(南西から)



1. 13号住居ピット1断面



2. 13号住居カマド遺物出土状態



3. 13号住居カマド掘り方全景



4. 14号住居全景(南西から)



5. 14号住居カマド断面



6. 15号住居遺物出土状態



7. 15号住居カマド全景(南西から)



8. 16号住居遺物出土状態



1. 16号住居全景(南東から)



2. 16号住居カマド全景(南東から)



3. 22号住居全景(南東から)



4. 22号住居カマド遺物出土状態



5. 22号住居貯蔵穴全景(南から)



6. 22号住居カマド全景(南東から)



7. 30号住居遺物出土状態



8. 30号住居全景(南西から)



1. 10号土坑全景·断面



2. 15号土坑全景·断面



3. 17号土坑全景·断面



4. 18号土坑全景·断面



5. 19号土坑全景·断面



6. 21号土坑全景·断面



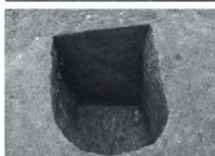
7. 22号土坑全景·断面



8. 23号土坑全景·断面



9. 24号土坑全景·断面





1. 25号土坑全景·断面



2. 26号土坑全景·断面



3. 27号土坑全景·断面



4. 28号土坑全景·断面



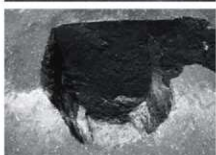
5. 29号土坑全景·断面



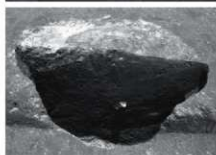
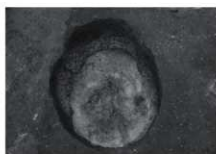
6. 30号土坑全景·断面



7. 32号土坑全景·断面



8. 33号土坑全景·断面



9. 34号土坑全景·断面



1. 35号土坑全景·断面

2. 37号土坑全景·断面

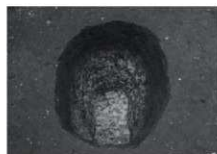
3. 38号土坑全景·断面



4. 39号土坑全景·断面

5. 40号土坑全景·断面

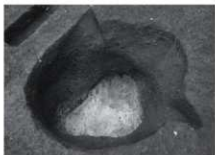
6. 47号土坑全景·断面



7. 48号土坑全景·断面

8. 49号土坑全景·断面

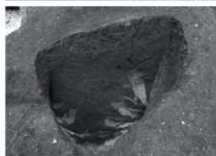
9. 50号土坑全景·断面



1. 51号土坑全景·断面



2. 52号土坑全景·断面



3. 53号土坑全景·断面



4. 54号土坑全景·断面



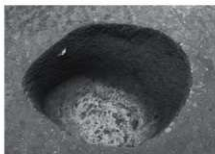
5. 55号土坑全景·断面



6. 58号土坑全景·断面



7. 59号土坑全景·断面



8. 60号土坑全景·断面



9. 62号土坑全景·断面



1. 64号土坑全景·断面



2. 65号土坑全景·断面



3. 66号土坑全景·断面



4. 67号土坑全景·断面



5. 68号土坑全景·断面



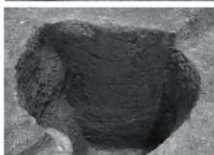
6. 69号土坑全景·断面



7. 70号土坑全景·断面



8. 71号土坑全景·断面



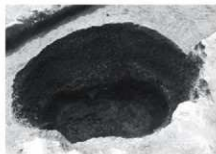
9. 75号土坑全景·断面



1. 76号土坑全景·断面



2. 78号土坑全景·断面



3. 79号土坑全景·断面



4. 80号土坑全景·断面



5. 84号土坑全景·断面



6. 85号土坑全景·断面



7. 86号土坑全景·断面



8. 88号土坑全景·断面



9. 89号土坑全景·断面



1. 90号土坑全景·断面



2. 91号土坑全景·断面



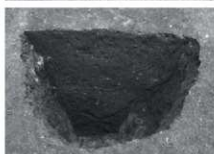
3. 94号土坑全景·断面



4. 95号土坑全景·断面



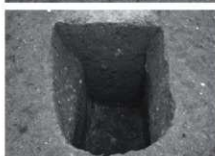
5. 96号土坑全景·断面



6. 97号土坑全景·断面



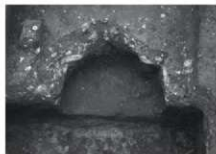
7. 99号土坑全景·断面



8. 100号土坑全景·断面



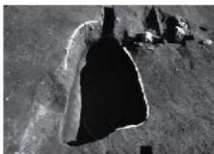
9. 105号土坑全景·断面



1. 106号土坑全景·断面

2. 107号土坑全景·断面

3. 108号土坑全景·断面



4. 122号土坑遗物·断面

5. 125号土坑全景·断面

6. 129号土坑全景·断面



7. 130号土坑全景·断面

8. 131号土坑全景·断面

9. 132号土坑全景·断面



1. 133号土坑全景·断面



2. 134号土坑全景·断面



3. 136号土坑全景·断面



4. 139号土坑全景·断面



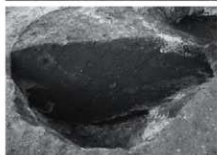
5. 140号土坑全景·断面



6. 141号土坑全景·断面



7. 142号土坑全景·断面



8. 143号土坑全景·断面



9. 144号土坑全景·断面





1. 145号土坑全景·断面



2. 146号土坑全景·断面



3. 148号土坑全景·断面



4. 149号土坑全景·断面



5. 150号土坑全景·断面



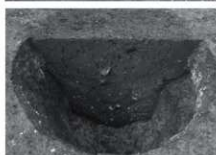
6. 151号土坑全景·断面



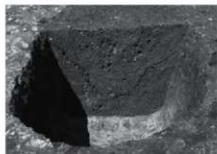
7. 152号土坑全景·断面



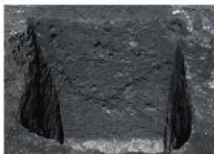
8. 153号土坑全景·断面



9. 154号土坑全景·断面



1. 156号土坑全景·断面



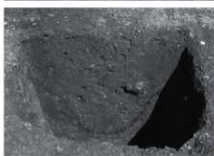
2. 157号土坑全景·断面



3. 158号土坑全景·断面



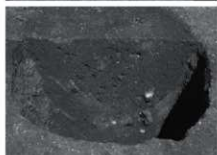
4. 159号土坑全景·断面



5. 160号土坑全景·断面



6. 161号土坑全景·断面



7. 162号土坑全景·断面



8. 163号土坑全景·断面



9. 164号土坑全景·断面



1. 165号土坑全景·断面



2. 166号土坑全景·断面



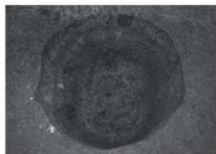
3. 167号土坑全景·断面



4. 168号土坑全景·断面



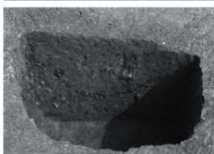
5. 169号土坑全景·断面



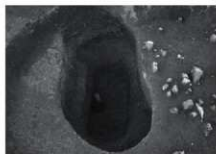
6. 172号土坑全景·断面



7. 173号土坑全景·断面



8. 174号土坑全景·断面



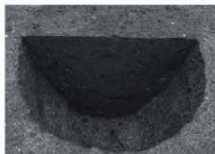
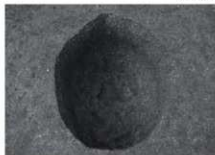
9. 175号土坑全景·断面



1. 179号土坑全景·断面



2. 180号土坑全景·断面



3. 181号土坑全景·断面



4. 182号土坑全景·断面



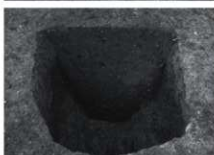
5. 183号土坑全景·断面



6. 184号土坑全景·断面



7. 185号土坑全景·断面



8. 186号土坑全景·断面



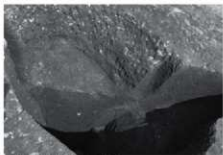
9. 189号土坑全景·断面



1. 61号土坑全景·断面



2. 77号土坑全景·断面



3. 92号土坑全景·断面



4. 93号土坑全景·断面



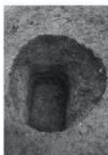
5. 104号土坑全景·断面



6. 123号土坑全景·断面



7. 124号土坑全景·断面



8. 126号土坑全景·断面



9. 127号土坑全景·断面



10. 128号土坑全景·断面



11. 31号土坑断面



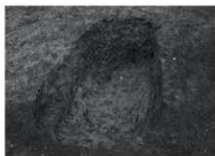
12. 57号土坑断面



13. 56号土坑断面



1. 192号土坑全景・断面



2. 193号土坑全景・断面



3. 194号土坑全景・断面



1. 192号土坑全景・断面



2. 193号土坑全景・断面



3. 194号土坑全景・断面



4. 3号土坑全景



5. 2号土坑・3号土坑断面



6. 73号土坑断面



7. 調査風景(南西から)



8. C区燻境列石



9. A区土坑(墓坑)群



10. C区陥し穴群



1. 13号土坑全景·断面



2. 16号土坑全景·断面



3. 36号土坑全景·断面



4. 41号土坑全景·断面



5. 42号土坑全景·断面



6. 83号土坑全景·断面



7. 43号土坑全景·断面



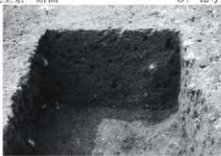
8. 44号土坑全景·断面



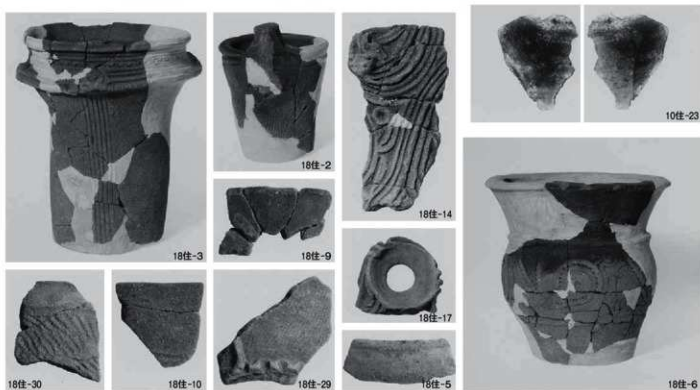
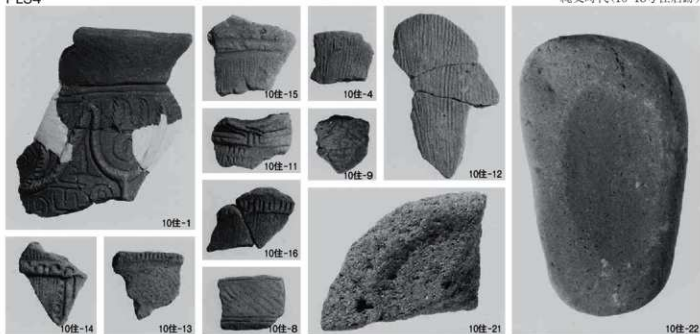
9. 45号土坑全景·断面

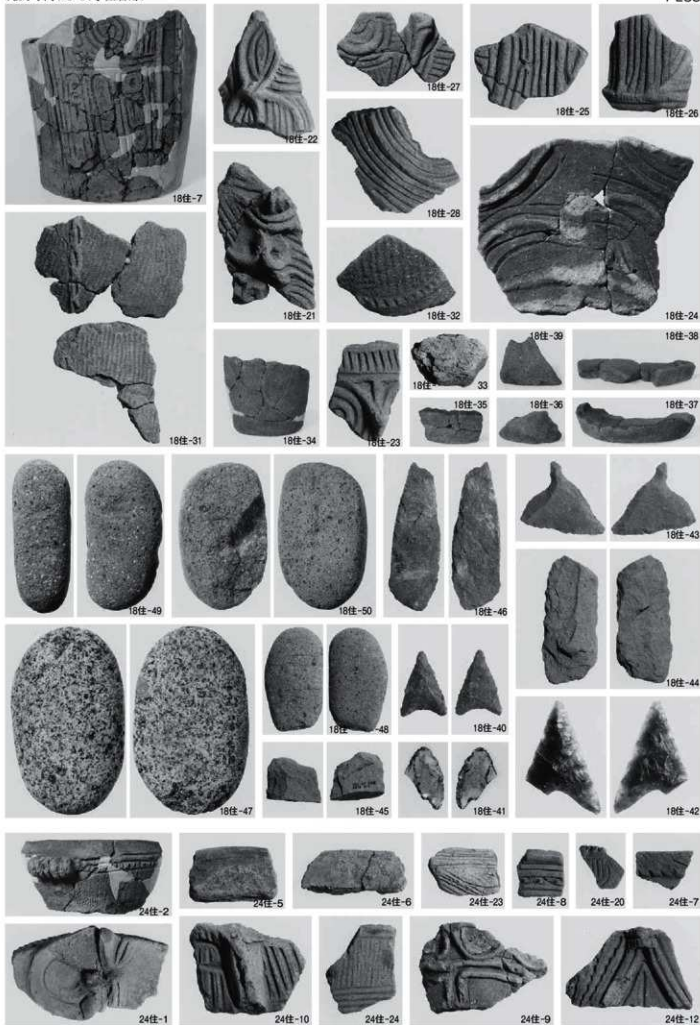


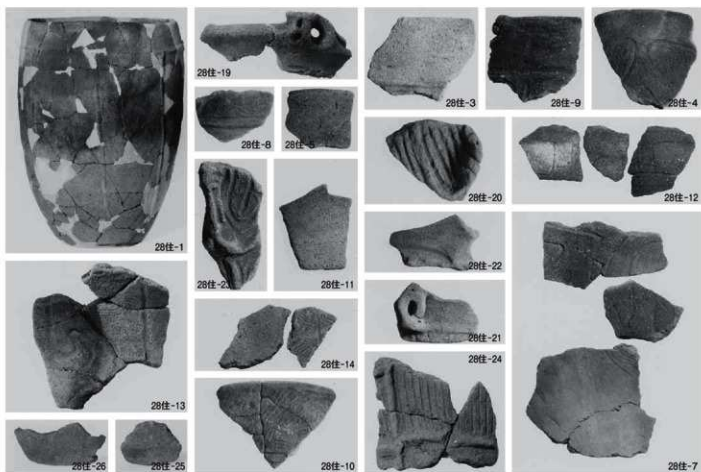
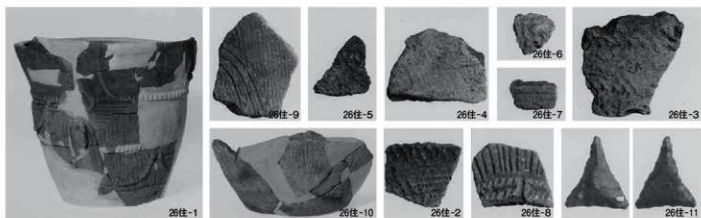
10. 46号土坑全景·断面

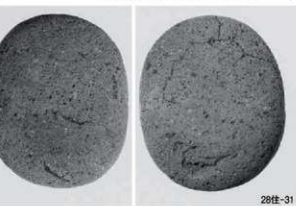
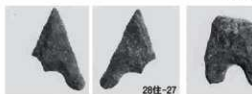
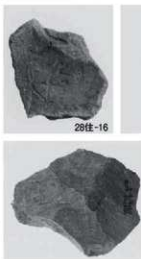
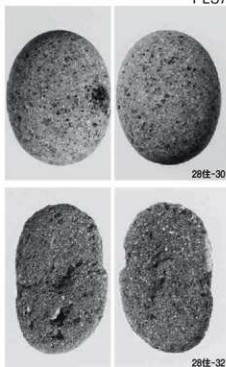














31住-1



31住-27



31住-13



31住-5



31住-3



31住-17



31住-10



31住-37



31住-50



31住-40



31住-53



31住-4



31住-26



31住-9



31住-53



31住-51



31住-45



31住-54



31住-44



31住-46



31住-11

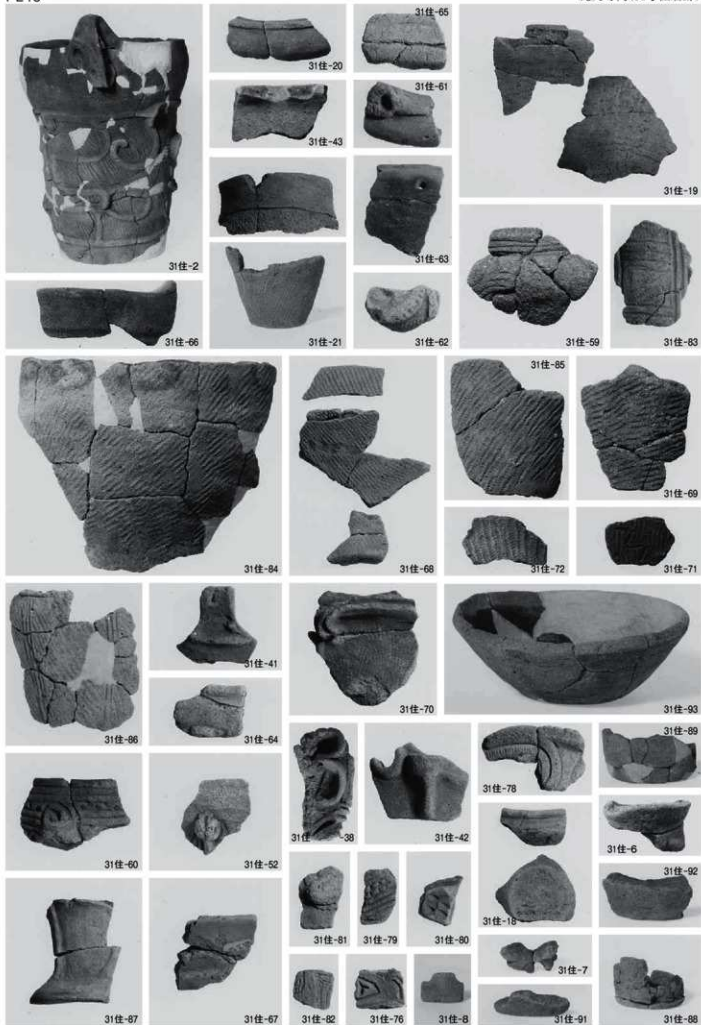


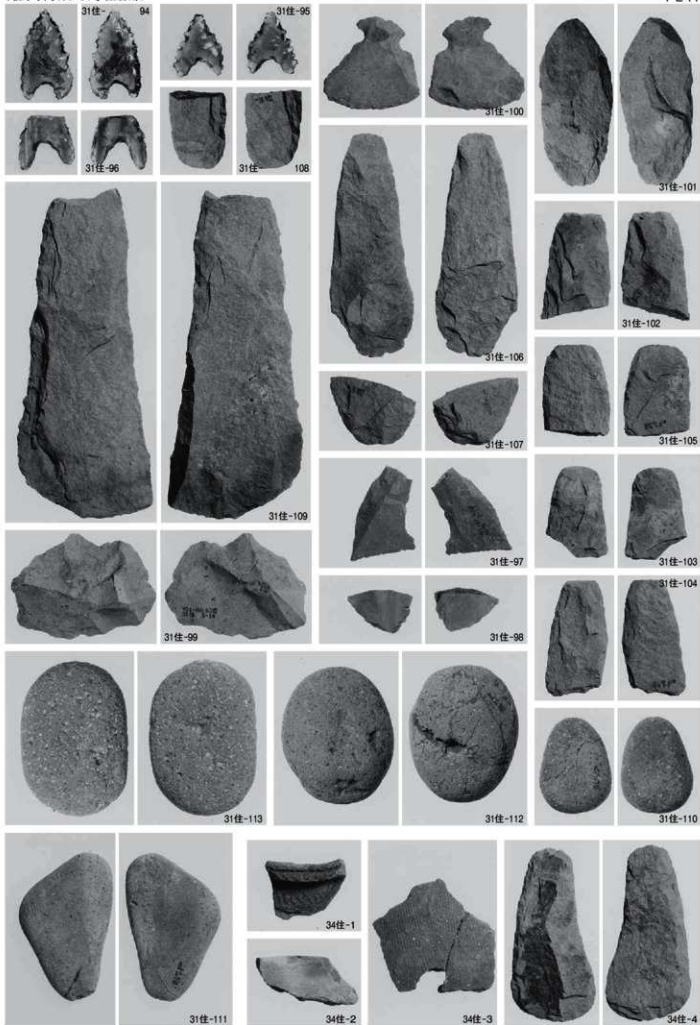
31住-49

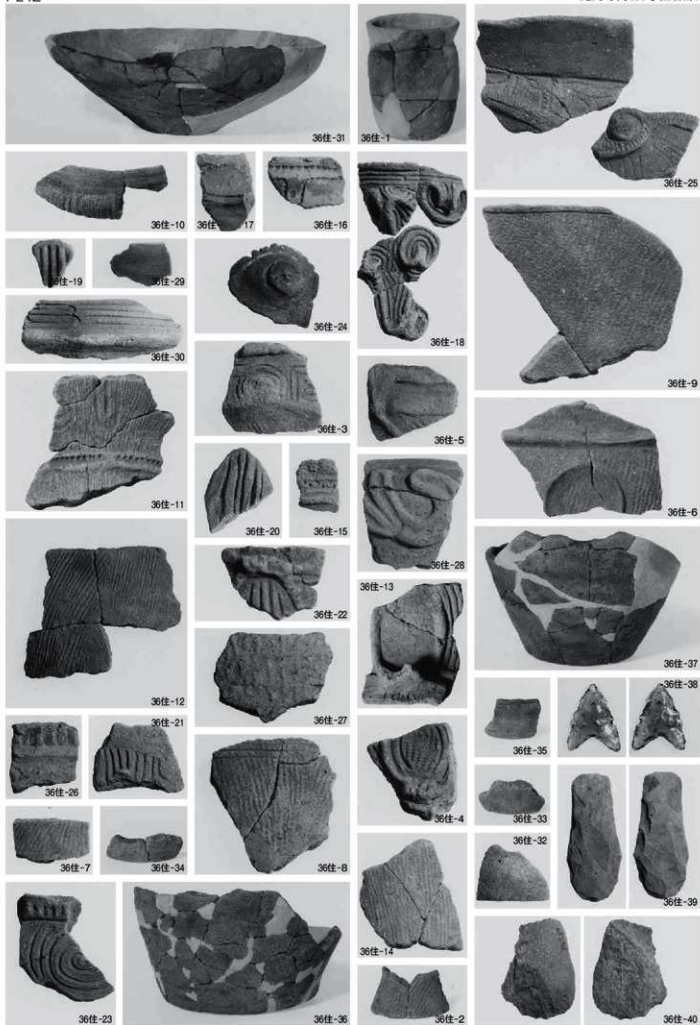


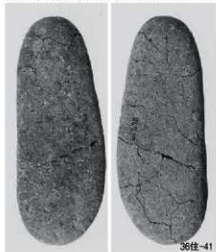
31住-47



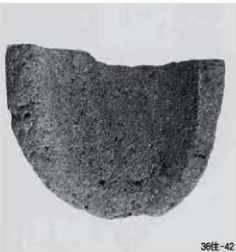








36住-41



36住-42



2埋設-1



1埋設-1



1埋設-2



3埋設-1



1埋設-3



1埋設-5



1埋設-8



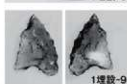
1埋設-7



1埋設-4



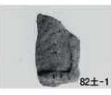
1埋設-6



1埋設-9



81土-2



82土-1



170土-2



170土-1



96土-1



81土-1



109土-1



170土-3



188土-1



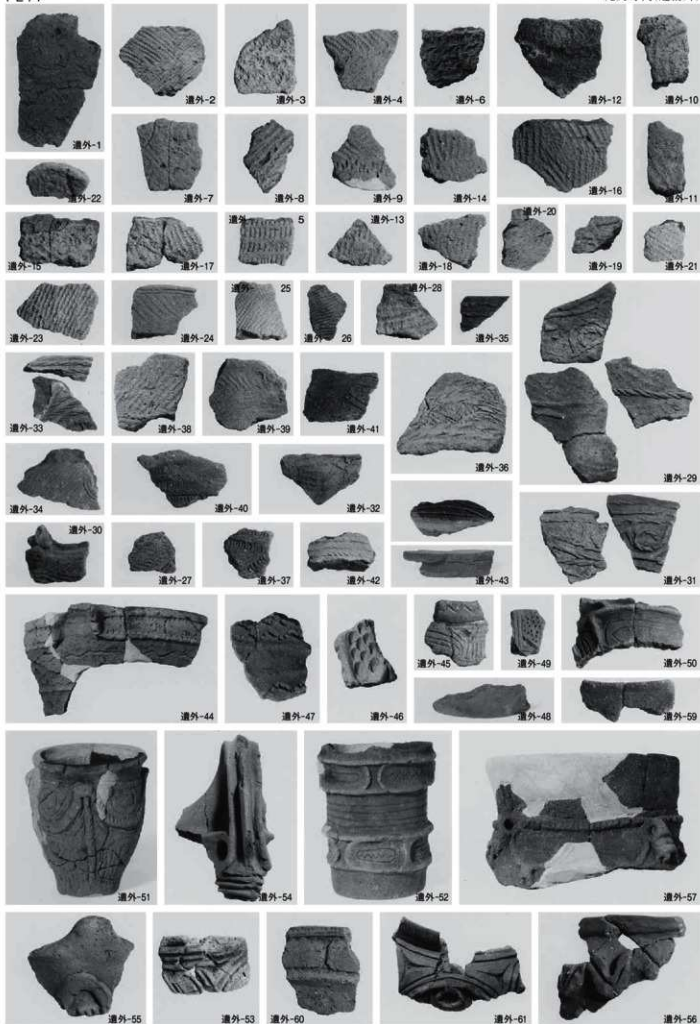
190土-1



187土-1



96土-2





遺外-62



遺外-73



遺外-63



遺外-79



遺外-64



遺外-65



遺外-67



遺外-70



遺外-68



遺外-66



遺外-69



遺外-71



遺外-76



遺外-77



遺外-84



遺外-78



遺外-72



遺外-82



遺外-85



遺外-58



遺外-87



遺外-88



遺外-89



遺外-75



遺外-80



遺外-86



遺外-90



遺外-92



遺外-91



遺外-93



遺外-94



遺外-100



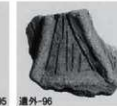
遺外-74



遺外-83



遺外-95



遺外-96



遺外-97



遺外-98



遺外-99



遺外-81



遺外-101



遺外-102



遺外-109



遺外-108



遺外-104



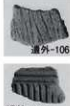
遺外-105



遺外-103



遺外-113



遺外-106



遺外-110



遺外-111



遺外-112



遺外-107



遺外-120





遺外-180



遺外-183



遺外-176



遺外-181



遺外-179



遺外-185



遺外-184



遺外-186



遺外-191



遺外-192



遺外-187



遺外-189



遺外-188



遺外-194



遺外-195



遺外-193



遺外-190



遺外-196



遺外-199



遺外-197



遺外-203



遺外-204



遺外-200



遺外-198



遺外-201



遺外-202



遺外-208



遺外-207



遺外-209



遺外-206



遺外-218

遺外-212



遺外-213



遺外-211



遺外-214



遺外-205



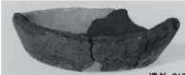
遺外-216



遺外-215



遺外-210



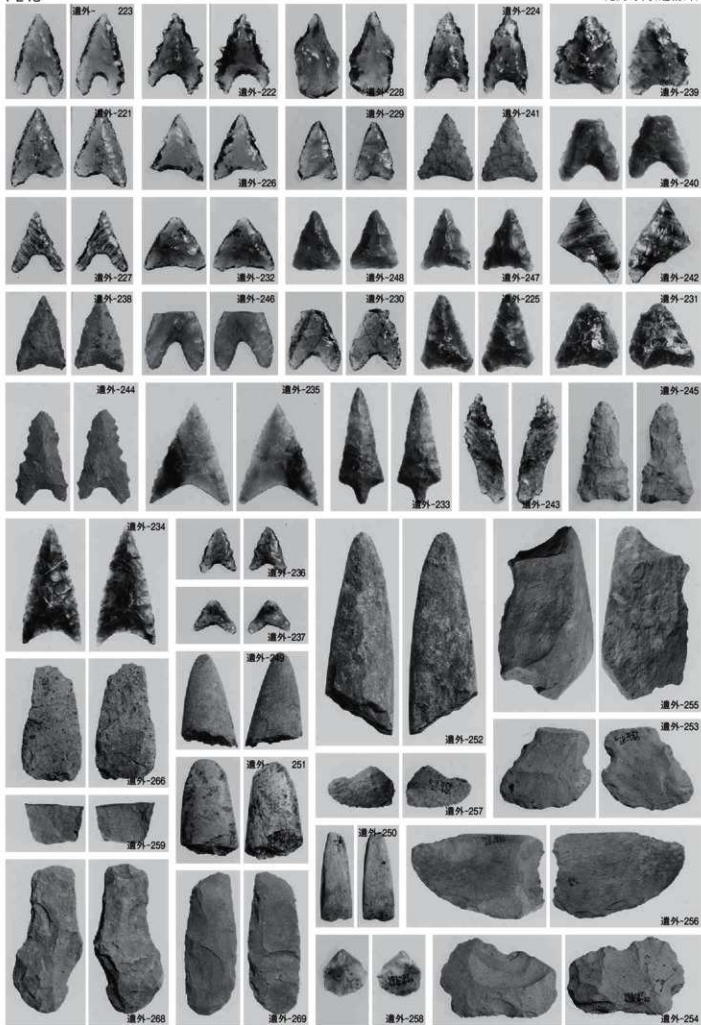
遺外-217

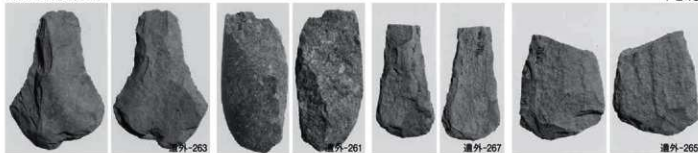


遺外-219



遺外-220



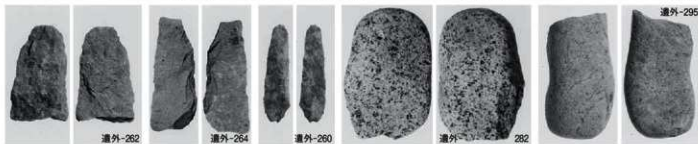


遺外-263

遺外-261

遺外-267

遺外-265



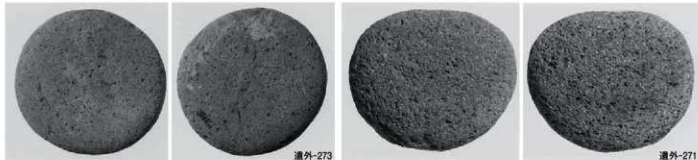
遺外-282

遺外-264

遺外-260

遺外-282

遺外-295



遺外-273

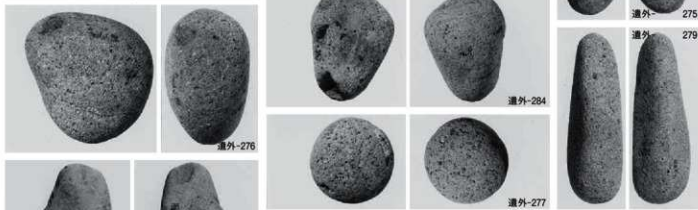
遺外-271



遺外-270

遺外-272

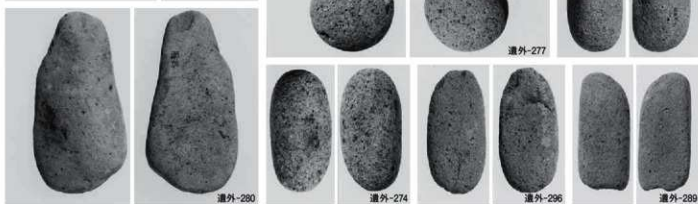
遺外-275



遺外-276

遺外-284

遺外-279



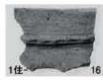
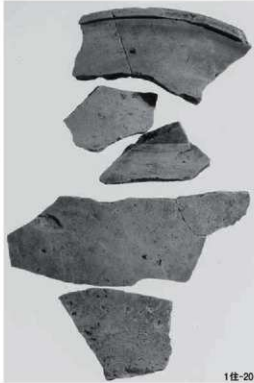
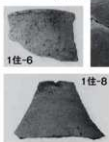
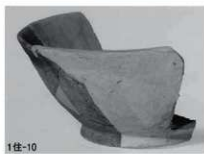
遺外-280

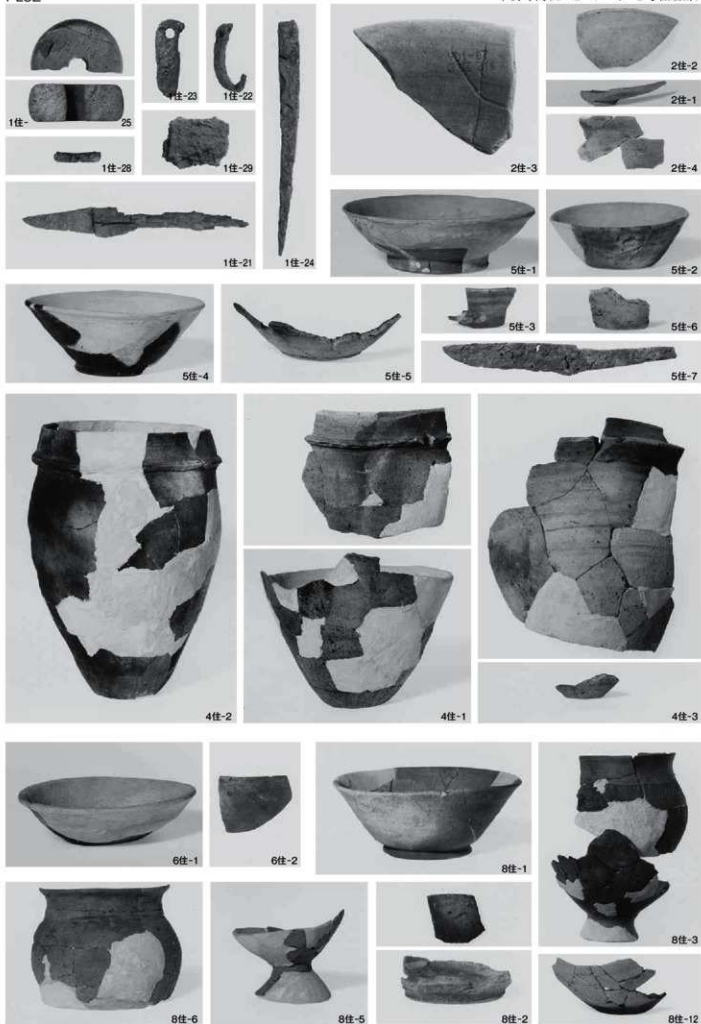
遺外-274

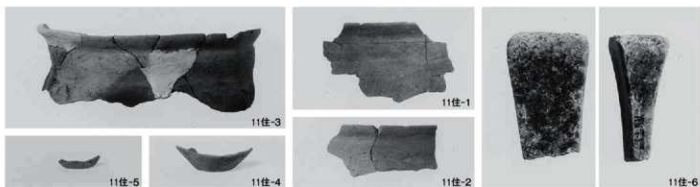
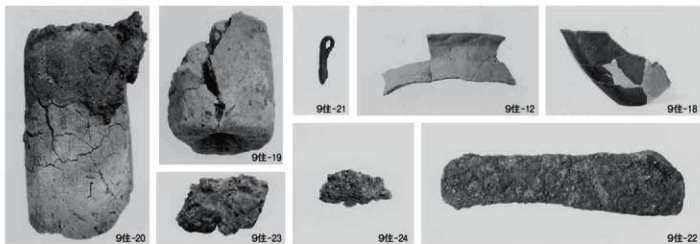
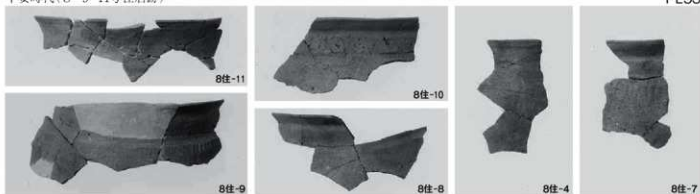
遺外-296

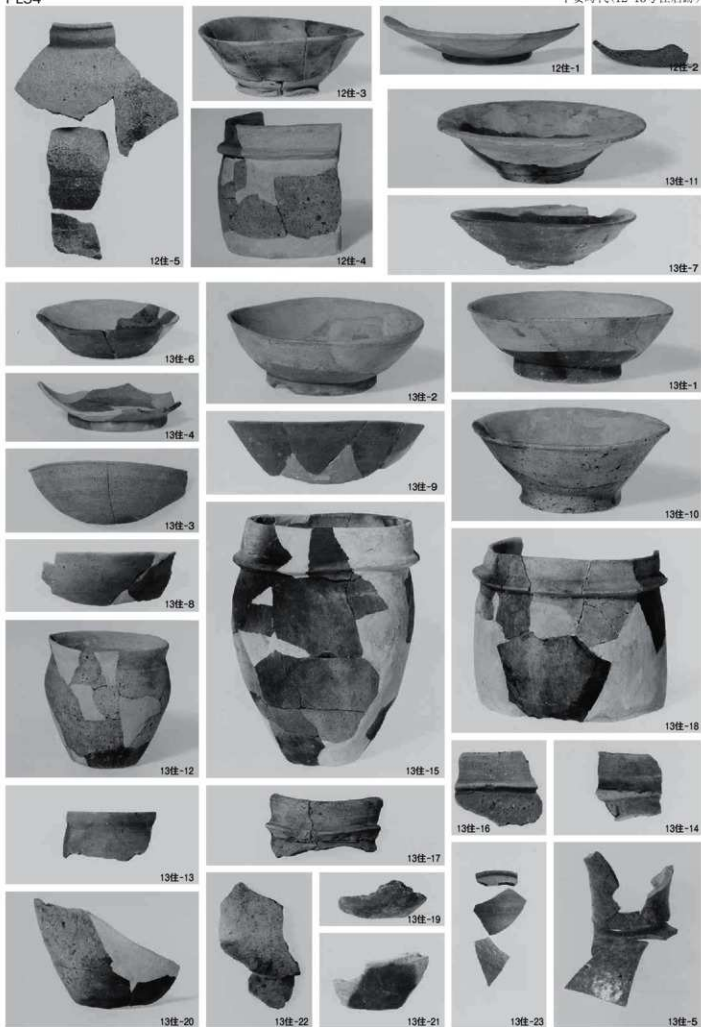
遺外-289













14住-1



14住-3



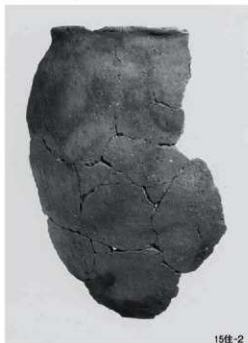
14住-2



14住-4



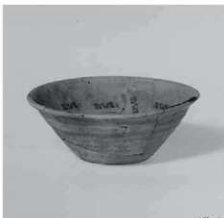
15住-1



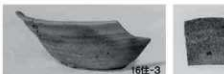
15住-2



16住-1



16住-6



16住-3



16住-7



16住-12



16住-4



16住-11



16住-2



16住-8



16住-5



16住-16



16住-14



16住-9



16住-10



16住-16



16住-14



16住-13



16住-15



22住-3



22住-5



22住-6



22住-7



22住-10



22住-8



22住-9

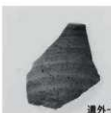




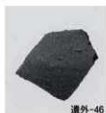
遺外-24



遺外-19



遺外-25



遺外-46



遺外-26



遺外-17



遺外-28



遺外-30



遺外-29



遺外-18



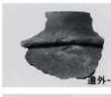
遺外-32



遺外-23



遺外-27



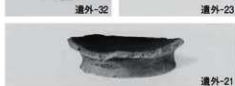
遺外-34



遺外-35



遺外-33



遺外-21



遺外-37



遺外-38



遺外-39



遺外-40



遺外-20



遺外-22



遺外-41



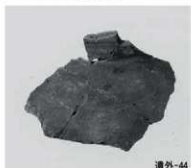
遺外-36



遺外-31



遺外-51



遺外-44



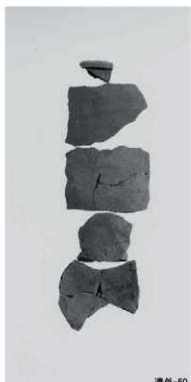
遺外-45



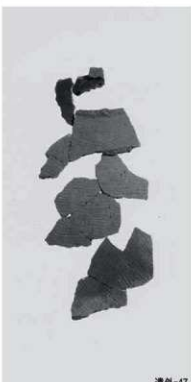
遺外-48



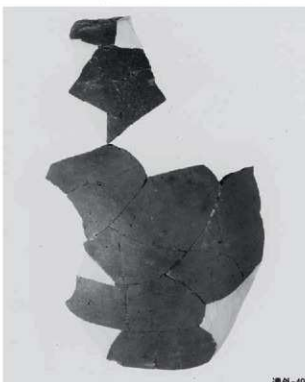
遺外-42



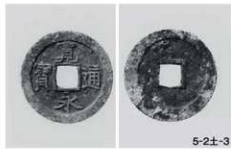
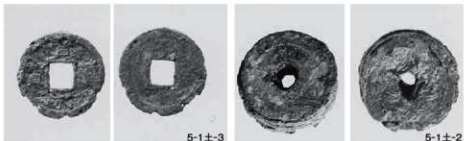
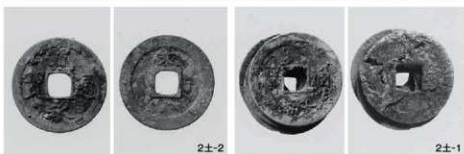
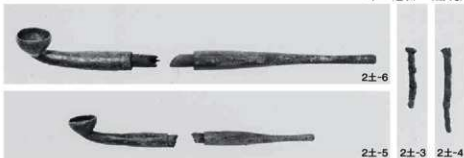
遺外-50

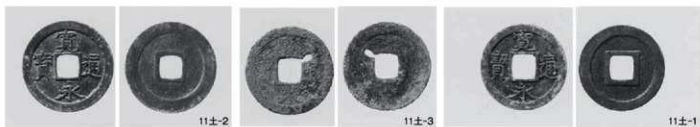
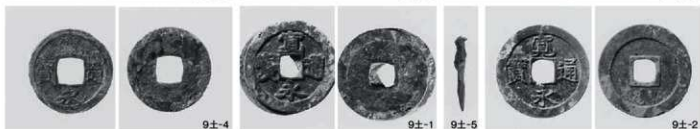
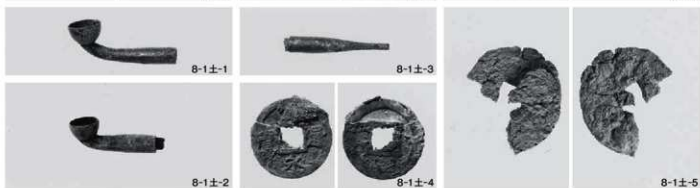
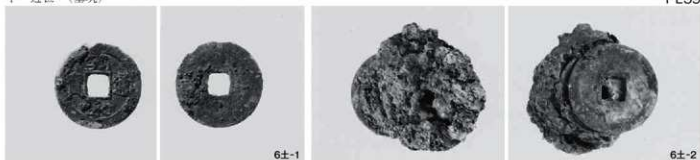


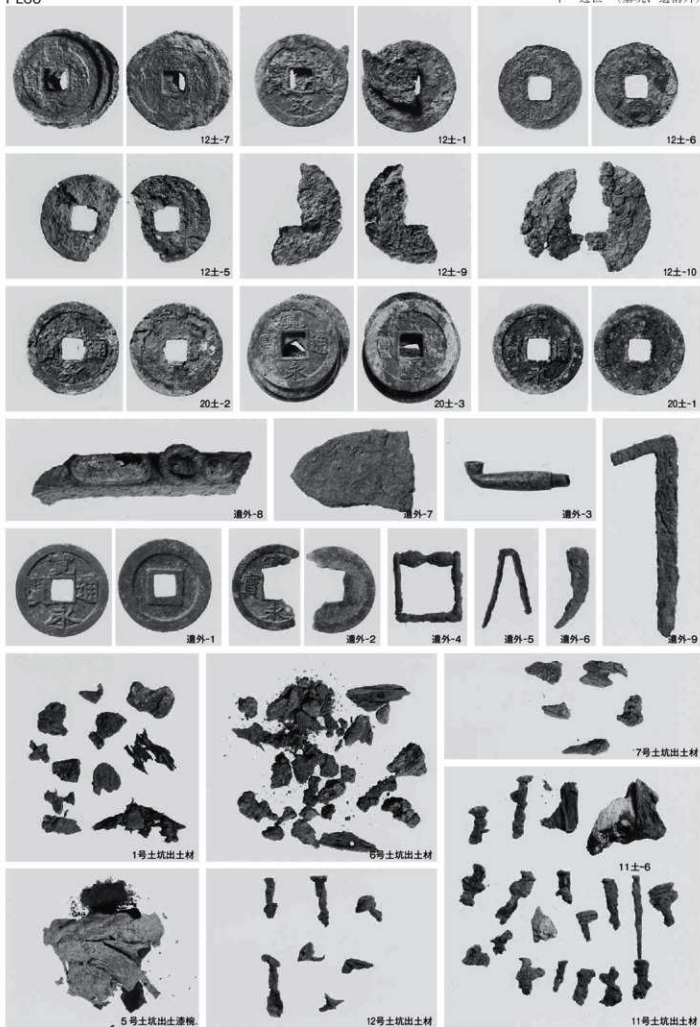
遺外-47



遺外-49







財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第440集

上ノ平 I 遺跡(1)

ハッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第23集

平成20年3月17日 印刷

平成20年3月25日 発行

編集・発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北桶町下箱田784 番地2

電話 0279 (52) 2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/杉浦印刷株式会社
